

風俗奇譚

8月号

変態娼家秘話
ハンブルグの
女体に魅入られ下着を狂崇する男たち
血に狂うインデボルク



〈男女性風俗の粒より話題の探究〉

風俗奇譚

風俗奇譚 8月号・通巻22号(毎月1回1日発行)昭和35年11月15日第3種郵便物認可
昭和36年8月1日発行

昭和35年8月30日国鉄東局特別換承認証第882号

風俗奇譚 8月号・通巻22号(毎月1回1日発行)昭和35年11月15日第3種郵便物認可
昭和36年8月1日発行

昭和35年8月30日国鉄東局特別換承認証第882号

昭和36年8月号



定価 150 円

繩は生きている

繩は 奇妙な生きものだ

女体にからじと

いつのまにか

乳房をあえがせ 肌を痺かせる

そして

女体の すーっと奥がッ

不思議な官能をよびさまし

えもいわれぬ陶醉を わきたたせる

とにかく繩は

まったく 奇妙な生きものだ



女のからだの不思議さ

女のからだは 不思議微妙

繩でゆわかれ 吊りあげられても

そこから 興奮をよぶことができる

そこから 歡喜の泉をわきあがらせる

女からだは 不可思議微妙

いじめられれば それだけに

法悦境に ひたれるものだから





表紙…田上恵子
さしえ…江馬美久
小田利美
田上恵子
古正英生



グラビア
女の緊縛・男の緊縛

裸身痛まし……………	(二二)	狭い場所……………	(二四)
海辺のふたり緊縛……………	(二四)	ロツジの中で……………	(二六)
片すみで……………	(二六)	緊縛の表情……………	(二八)
椅子の残虐……………	(二八)	どうとでもしろ……………	(三〇)
林の中で……………	(三〇)	あるポーズ……………	(三二)
床の間も責め場……………	(三三)	足を責める……………	(三四)
〈モデル〉 西牧えり子・なぎさ純子・真咲みどり・牧アンナ 村上ユキ・島崎ユカ・児玉幹也・霧島茂樹			

(色刷)白い肌をよごしてやるんだ……………古正英生(折込)
田上恵子女体責め絵画集……………ベッドで・お尻にムチ・階段で・
流腸の陶酔図・水責め・火責め……………(三五)
中世紀の拷問諸刑具のいろいろ……………(四六)

特集 フェチシズムの人たち

珍奇収集館主人……………	獅々村裕(五二)
レザー・フェチの女たち……………	一ノ瀬悦子(六三)
わが愛するお尻ばかりのママン……………	野中紀美也(六八)
私は今日も女の尻を追う……………	久我良平(八〇)
ふんどしマニアの女……………	分部久(七六)
フェチシズムの犯罪性を避けよ……………	奥村世紀男(五二)
ネクタール願望の男……………	谷貫太(八六)

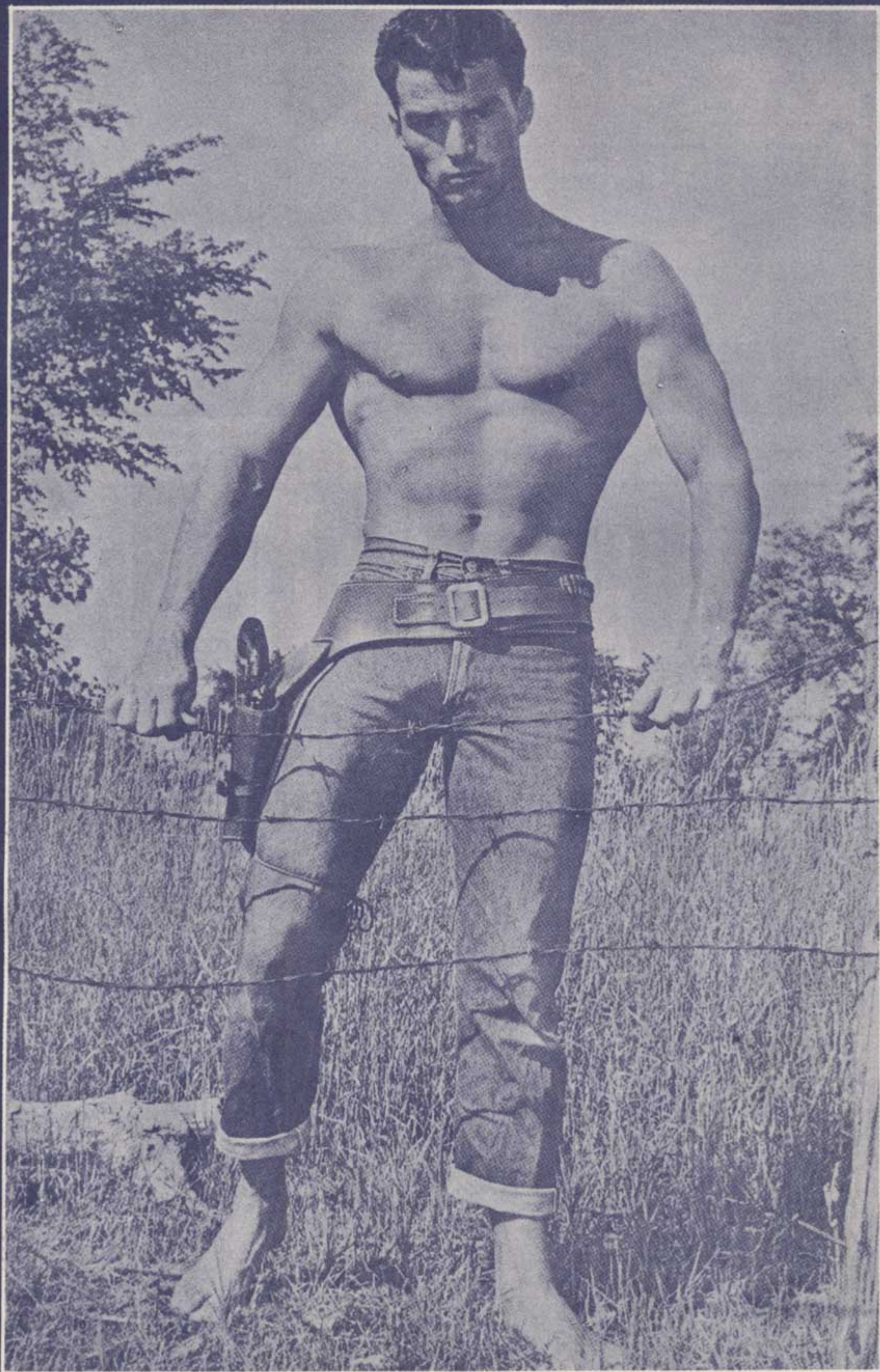
あたしはレスボスに人生を賭ける……………芦田奈貴(三)
秘帖⑩男色者における異性関係……………かびや・かずひこ(四七)
(写真集)残虐なるサディستن……………コロン・プロ(四三)
ハンブの血に狂うインゲボルク……………J・E(九)

ムチに生きる令嬢……………番場多計夫(二九)

サロン・マソキスチカ……………	(二六)
ホモの窓……………	(二六)
女装愛好の部屋……………	(二七)
(女装のための美容講座)目を美しく……………	大熊早苗(九)
女義者の「婚約者」の一日……………	江崎恭子(二四)
告白手記	
浣腸とお灸と縛り……………	夏川絹子(二七)
全裸美女の凄艶切腹図絵……………	及川滉(二五)
☆読者サロン……………	(一八)
☆編集室より……………	(二五)
☆旧号在庫・代理部案内……………	(一八)

好評連載

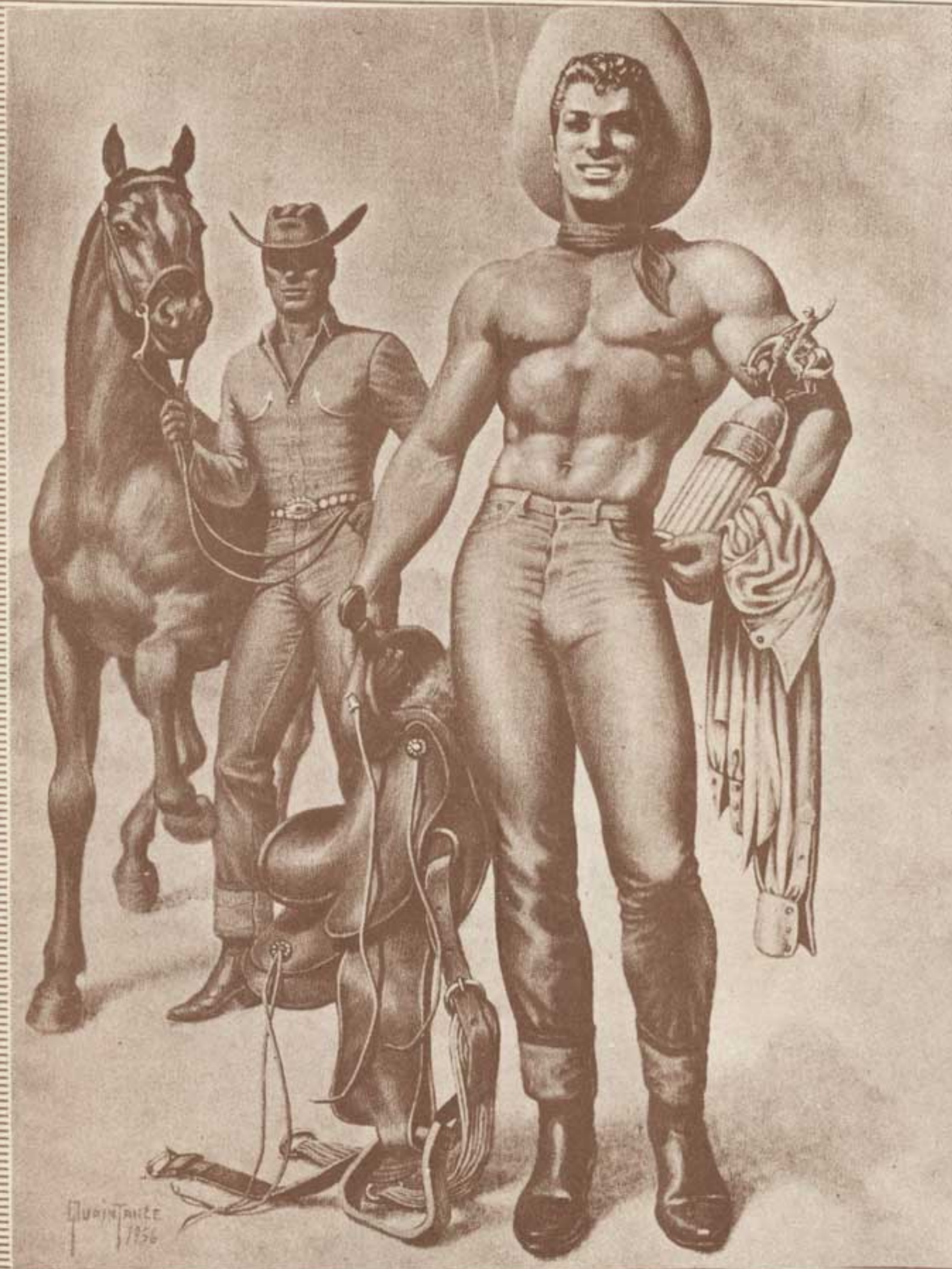
炎帝廟④青竜章……………	芦立鋭吉(二六)
虐殺指令③大量殺戮の状況……………	真野麗(二八)
悦虐の彷徨④髪責めの部屋……………	青山三枝吉(二七)



白い肌をよごしてやるんだ

手首を吊られて 女はぐったりしている
その白網の柔肌に いま グロテスクな
へビが 全身を巻いて 刻々に入れ墨さ
れていく
〔古正英生・え〕





右はフイフタス描く「ロデオの騎
 者」上はトム描く「計測をとる

女の緊縛 男の緊縛

女の緊縛も 男の緊縛も サド・マゾの世界のテーマだ
そこに女がいて 男がいて しかも縄があるからである



裸身痛まし

柔肌に食いこむ縄 乳房をかむ緊縛 この苦痛に加えて 全裸の恥ずかしさ 二重の責め苦に女はあえぎ せつなく身もだえする 女の業の深さへモデル・西牧えり子へ



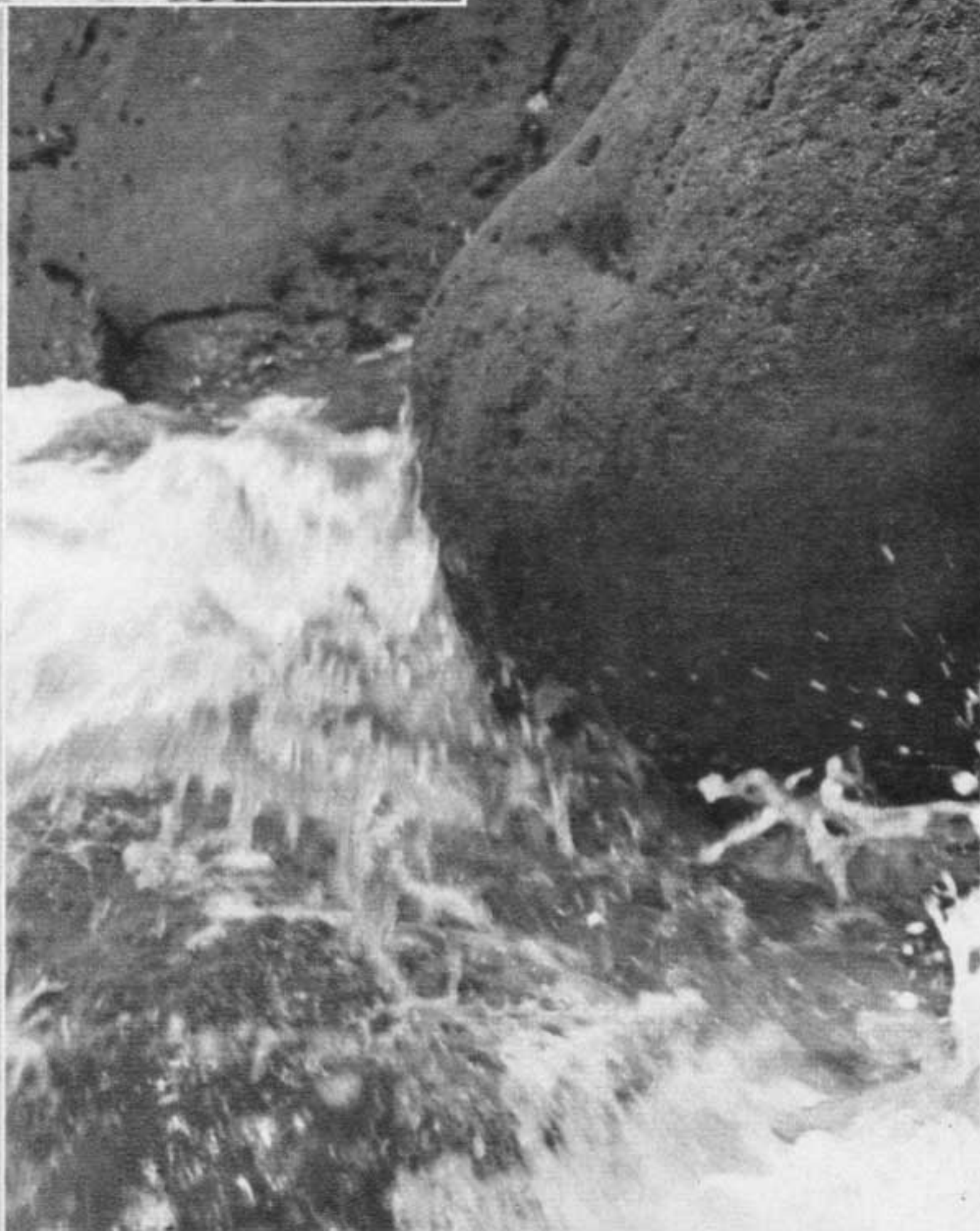






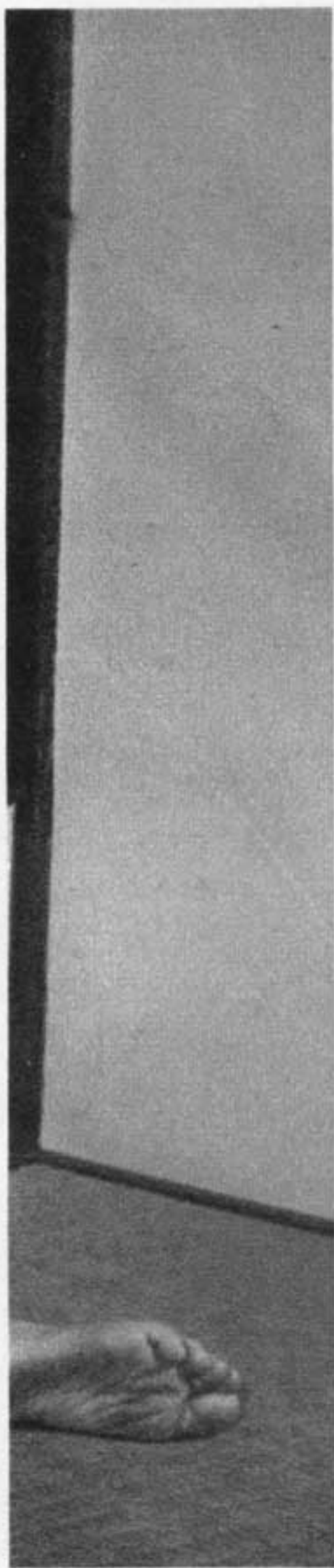
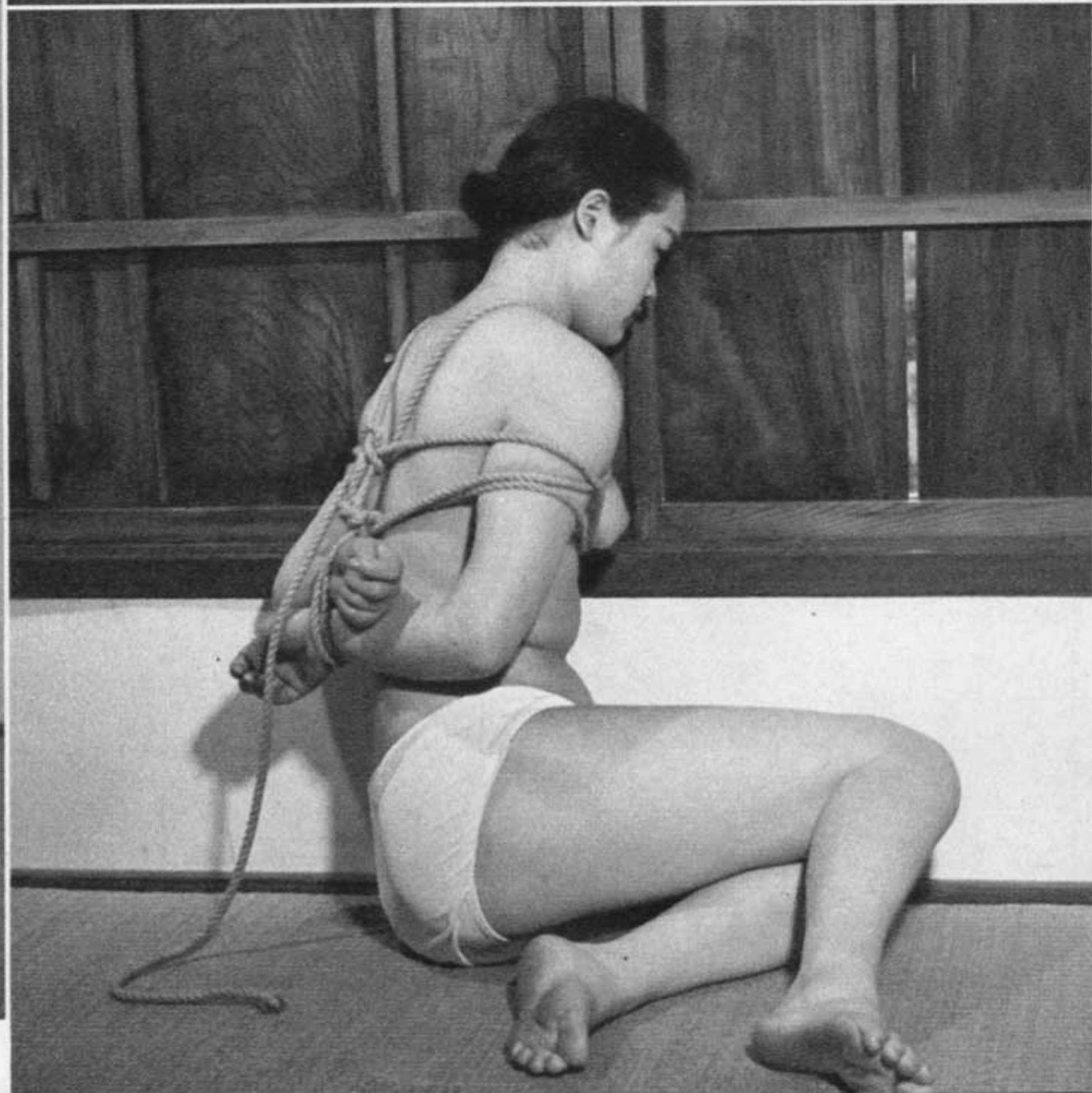
海辺のふたり緊縛

真夏の太陽の下、全裸の女体をさらし、結かれた女がふたり。岩により、波に洗われて、陶然としている。これは、太古に通じるサディスチックな風景ではなからうか。へモデル・なぎさ純子 真咲みどり

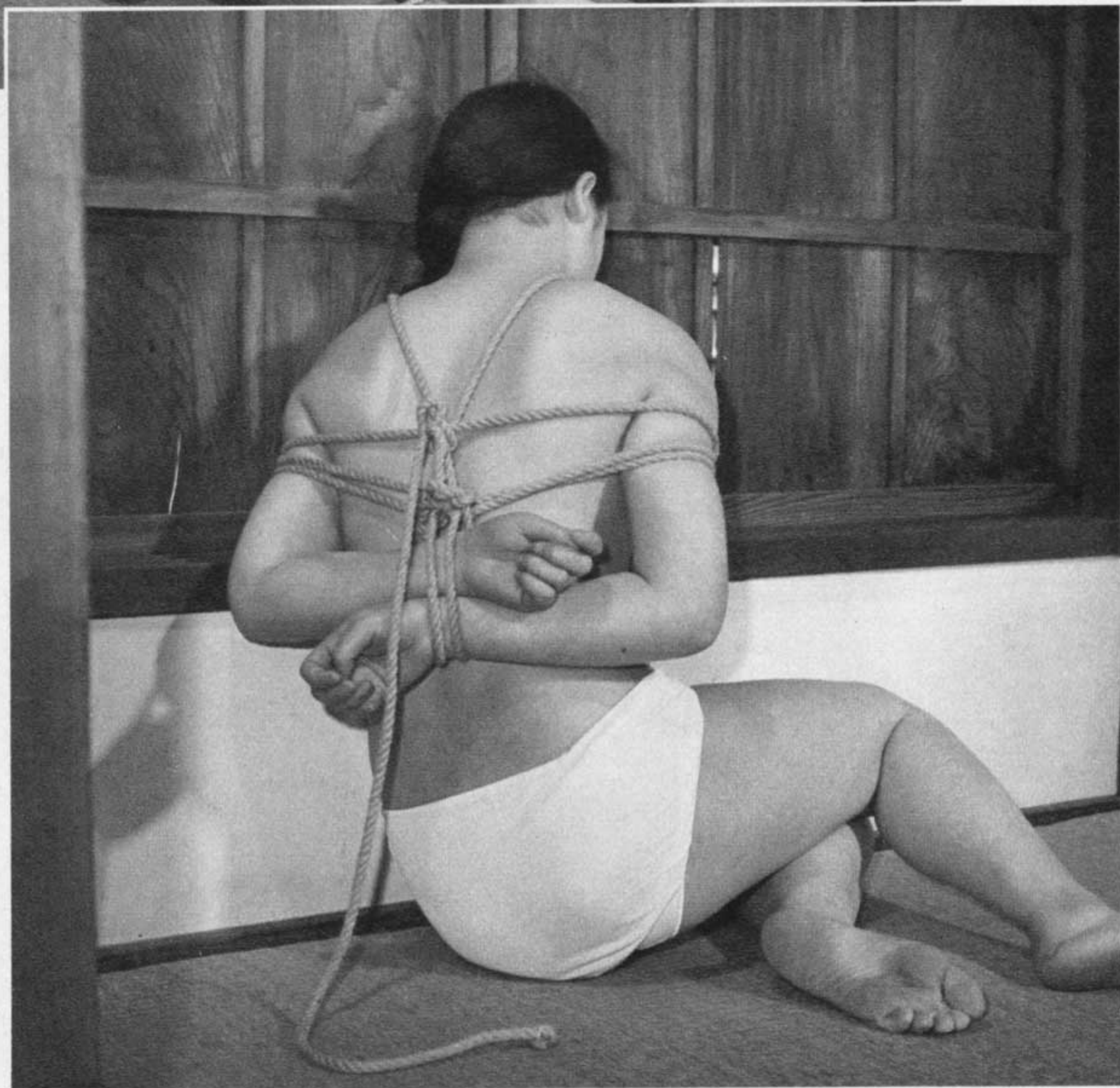


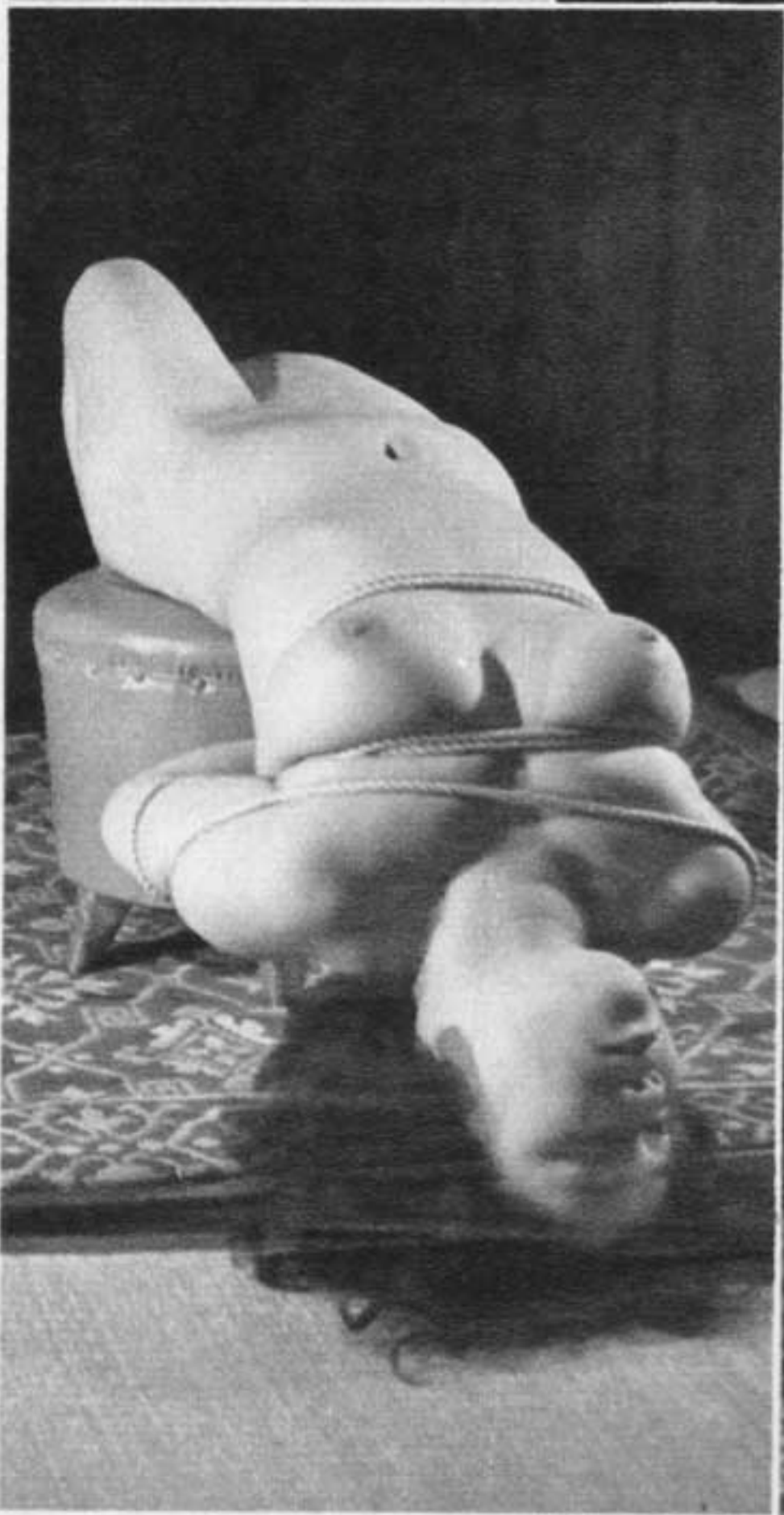
片すみで

人けのないあき家の
これはひっ



そりしたお仕置きだ いつ果てる
とも知れぬへモデル・牧アンナ

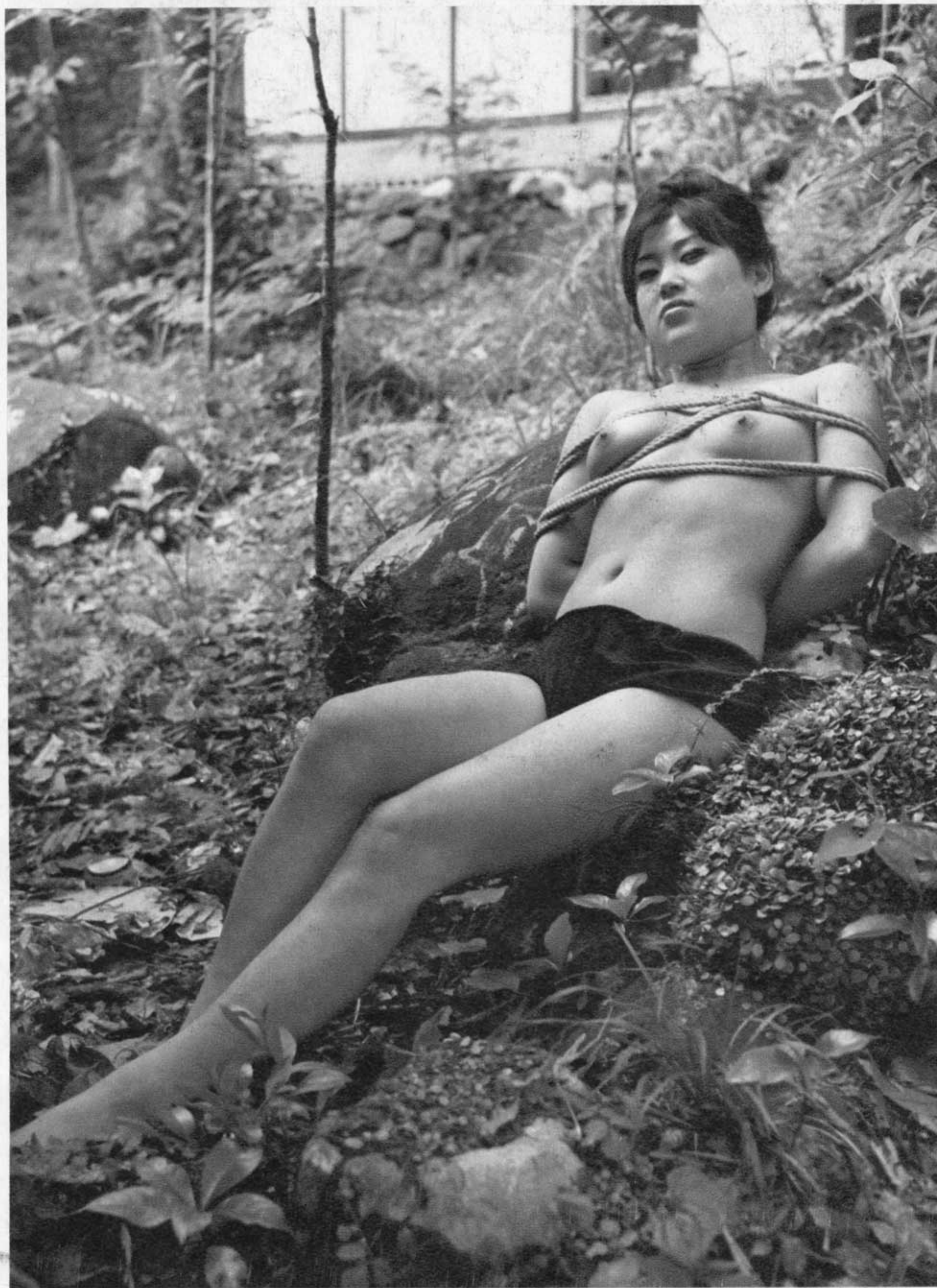






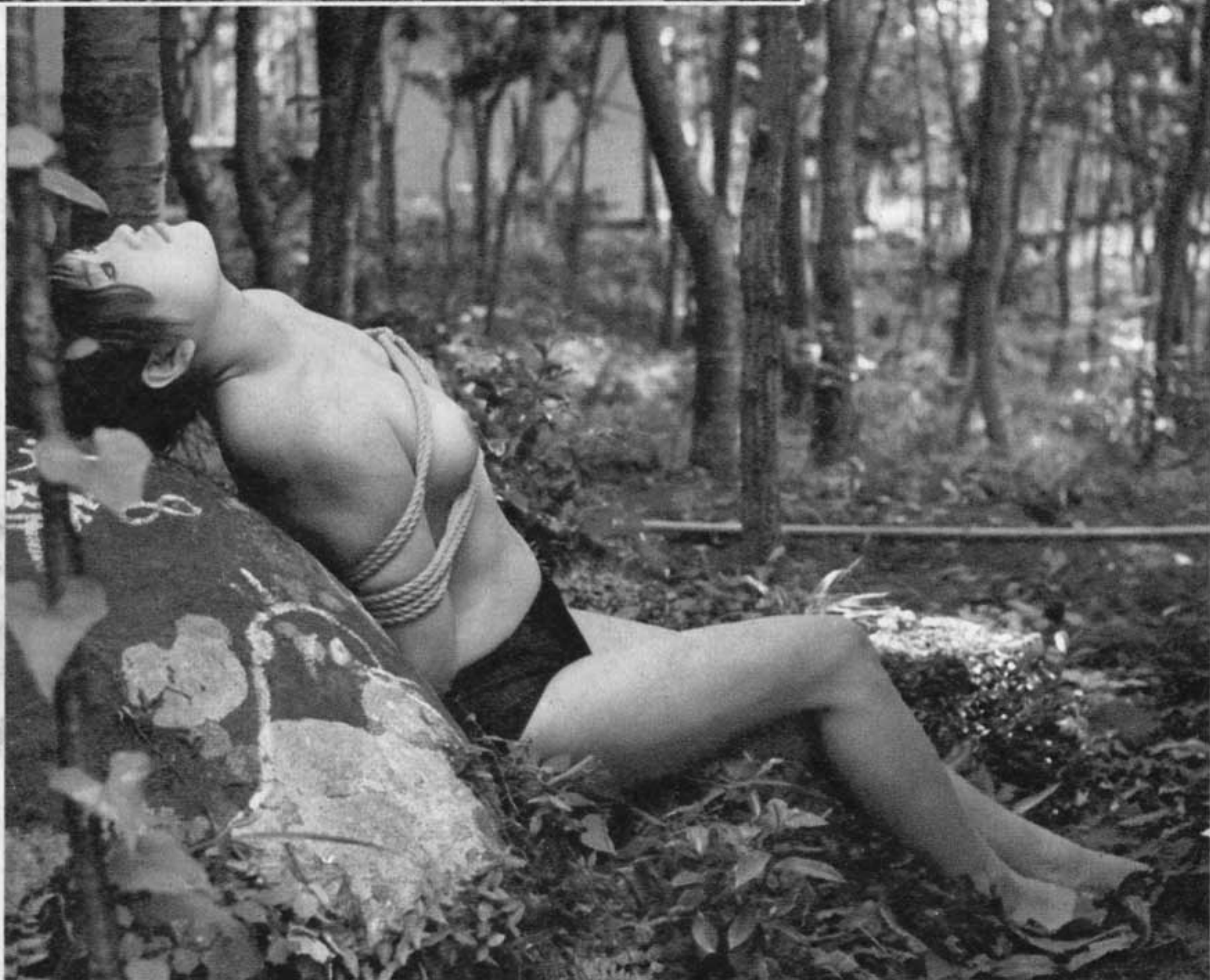
椅子の残虐

椅子は 腰かけるだけでなく 責めの道具にも使われる 女をそりかえらせ しいたげる



林 の 中 で

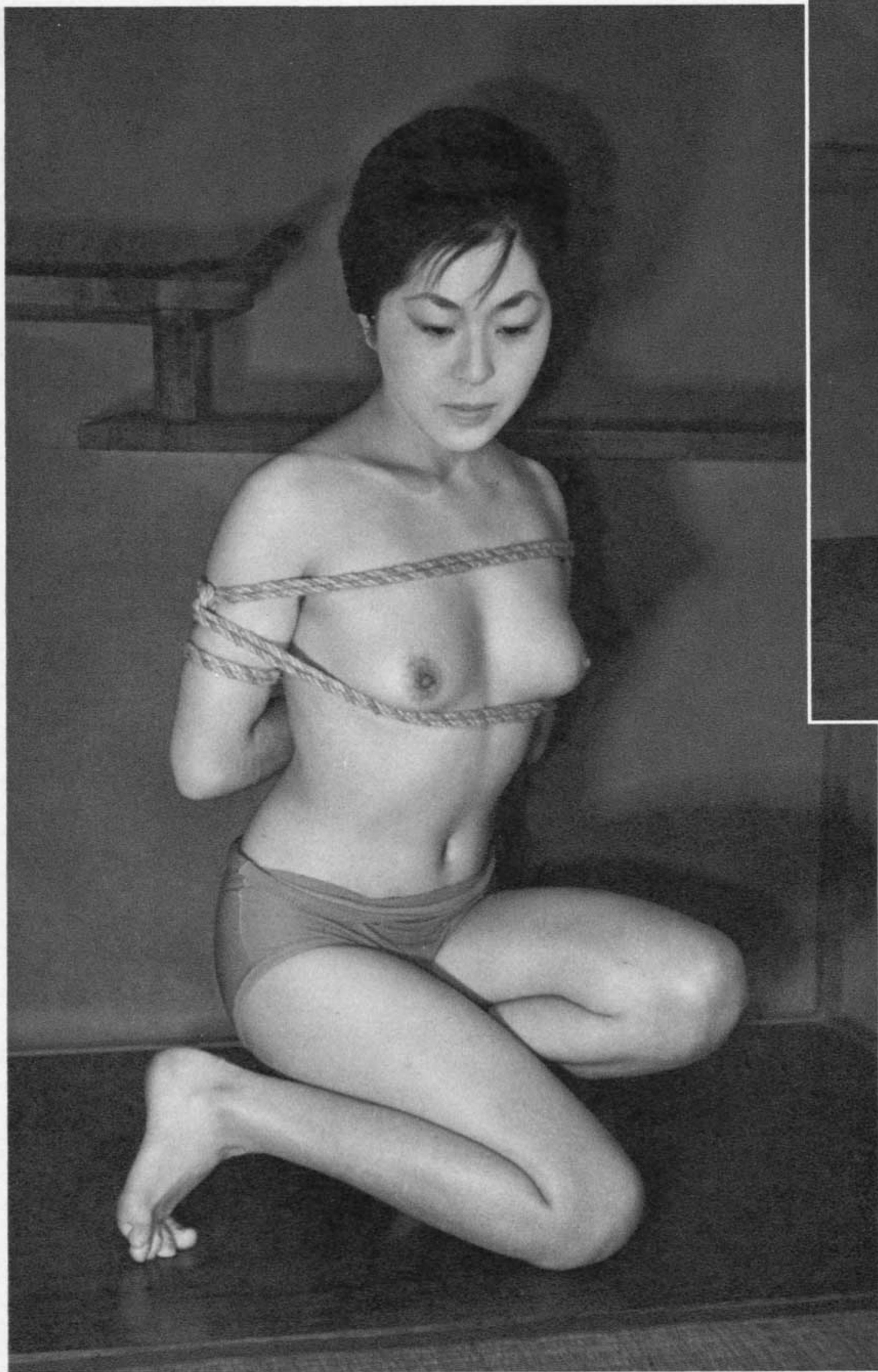
ここは地獄の一丁目にある林へモデル・真咲みどり





床の間も責め場

床の間に冷たい空気が張りつめて 縛られた女がひとり
拘束の身をひっそりと置いているへモデル・村上ユキ







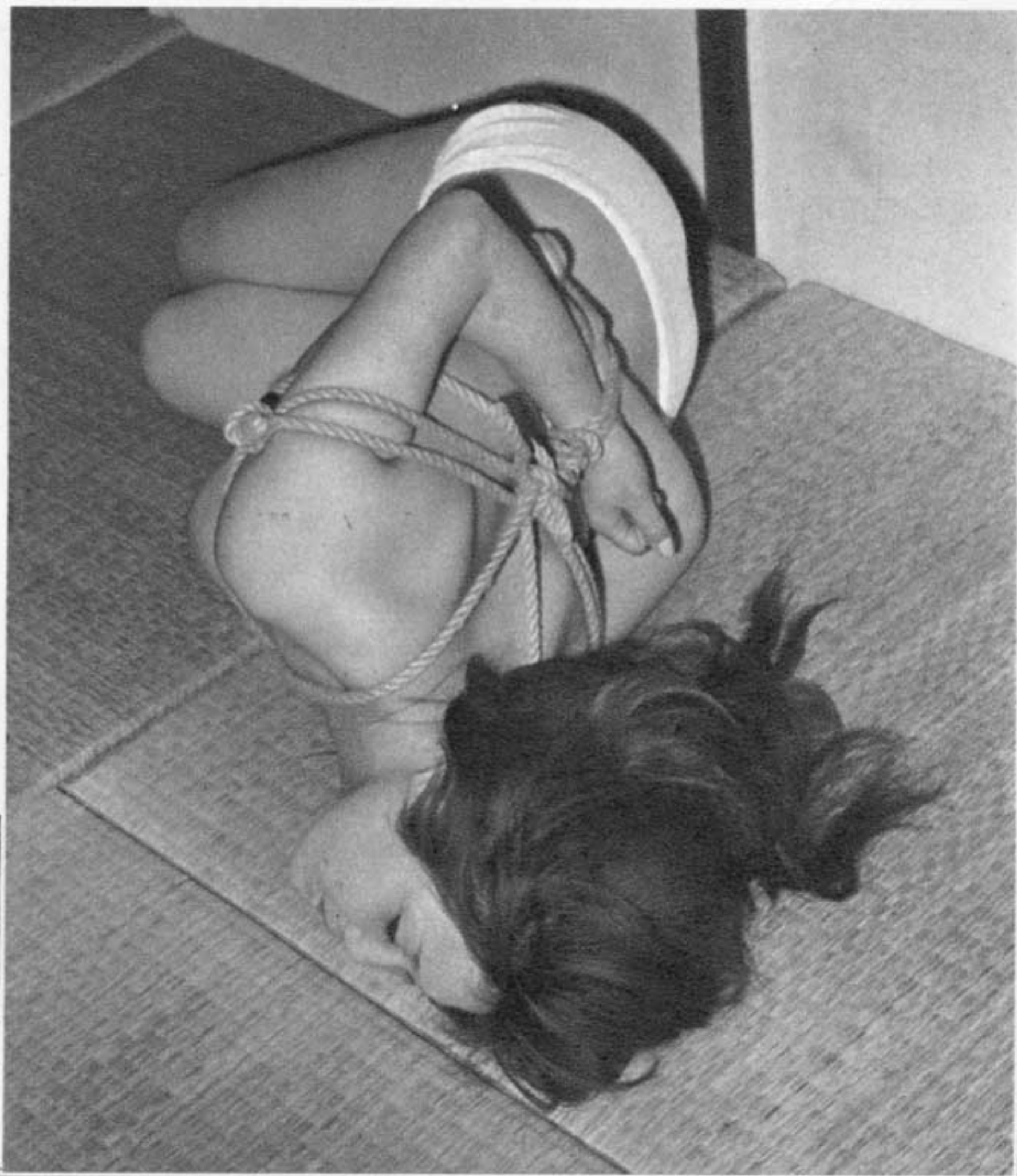
狭い場所で

ネコの額のように狭い違いだなの上にのせられて縛りつけられた女は ちよつと身動きしてさえもお尻がずれて不安定な姿勢になる 緊縛だけでなく そうした不自然が加わって彼女は 身内にしんしんとしみとおる責め苦を味わい 苦痛に身を置くことにあきらめているへモデル・島崎ユカ



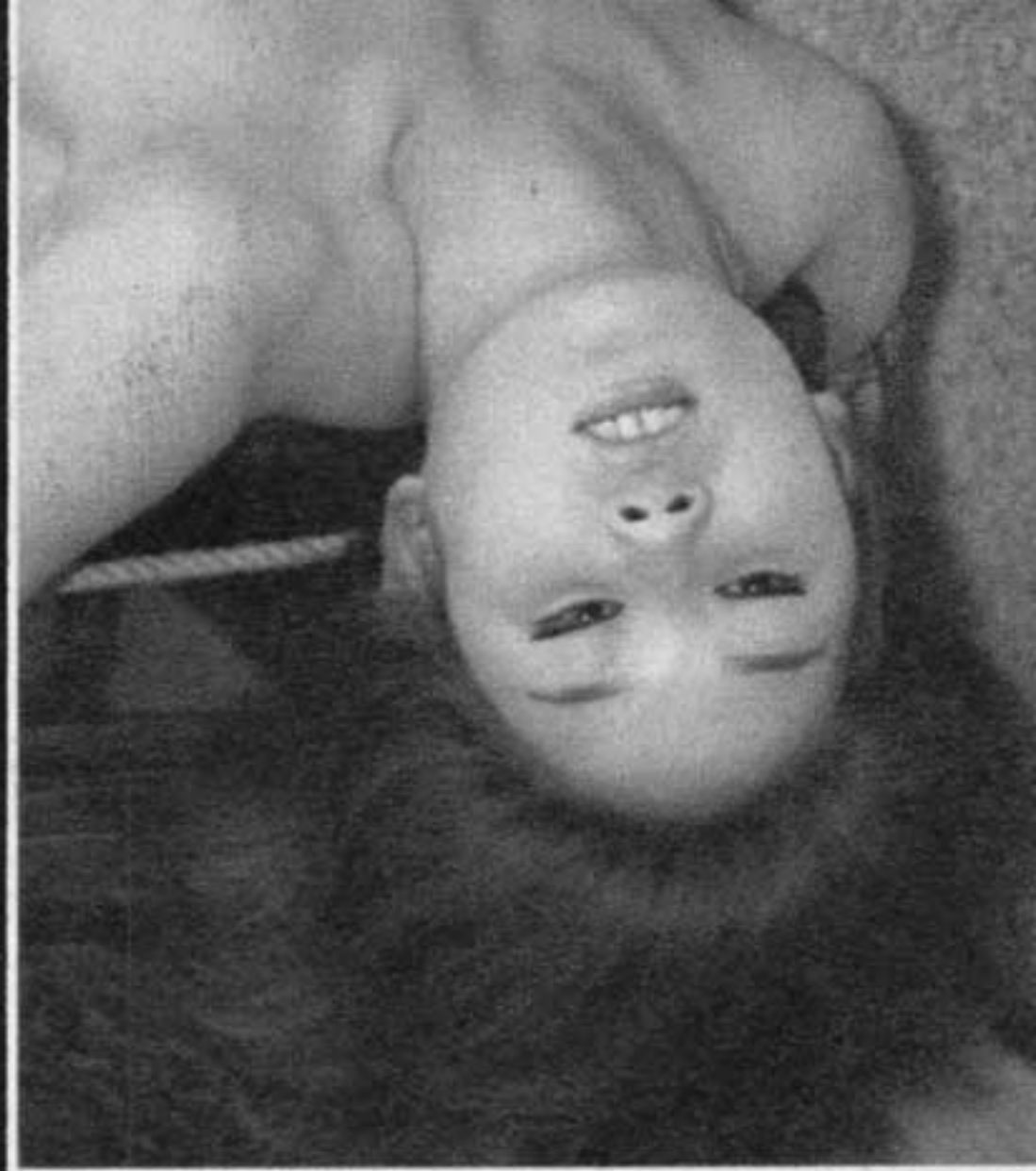
ロ ッ ジ の 中 で

山の中のロッジでは 助けをよんでも人は
こない だから加虐者にとっては 思いの
ままに責められるヘモデル・なぎさ純子





緊縛の表情——顔・胴・足





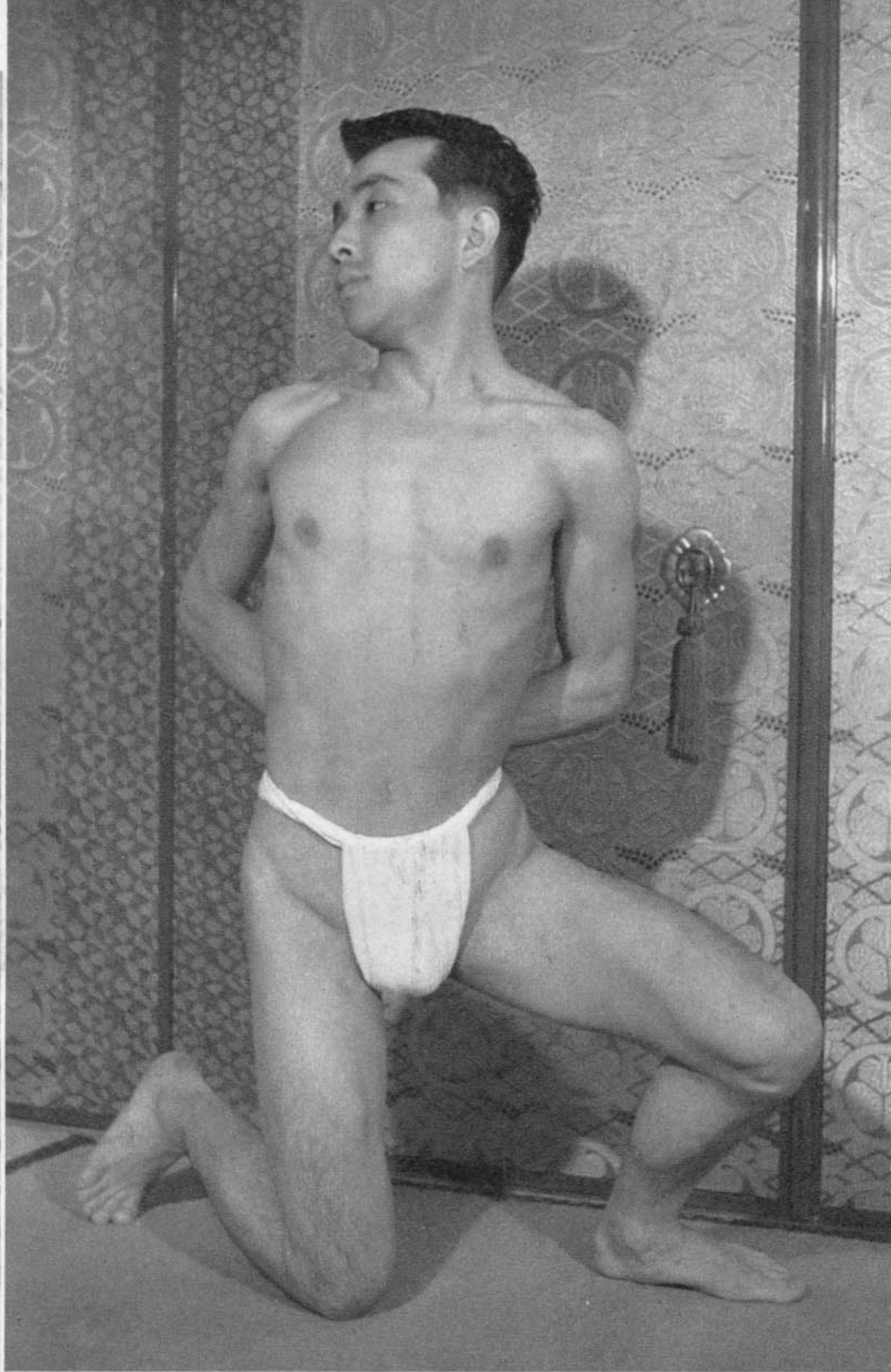
緊縛されたとき 女は苦痛の表情を示す そしてやがて陶醉に変わる それが顔にあらわれ 足にあらわれ からだじゅうににじみでる その法悦境から 女の幸福が 芽を出す





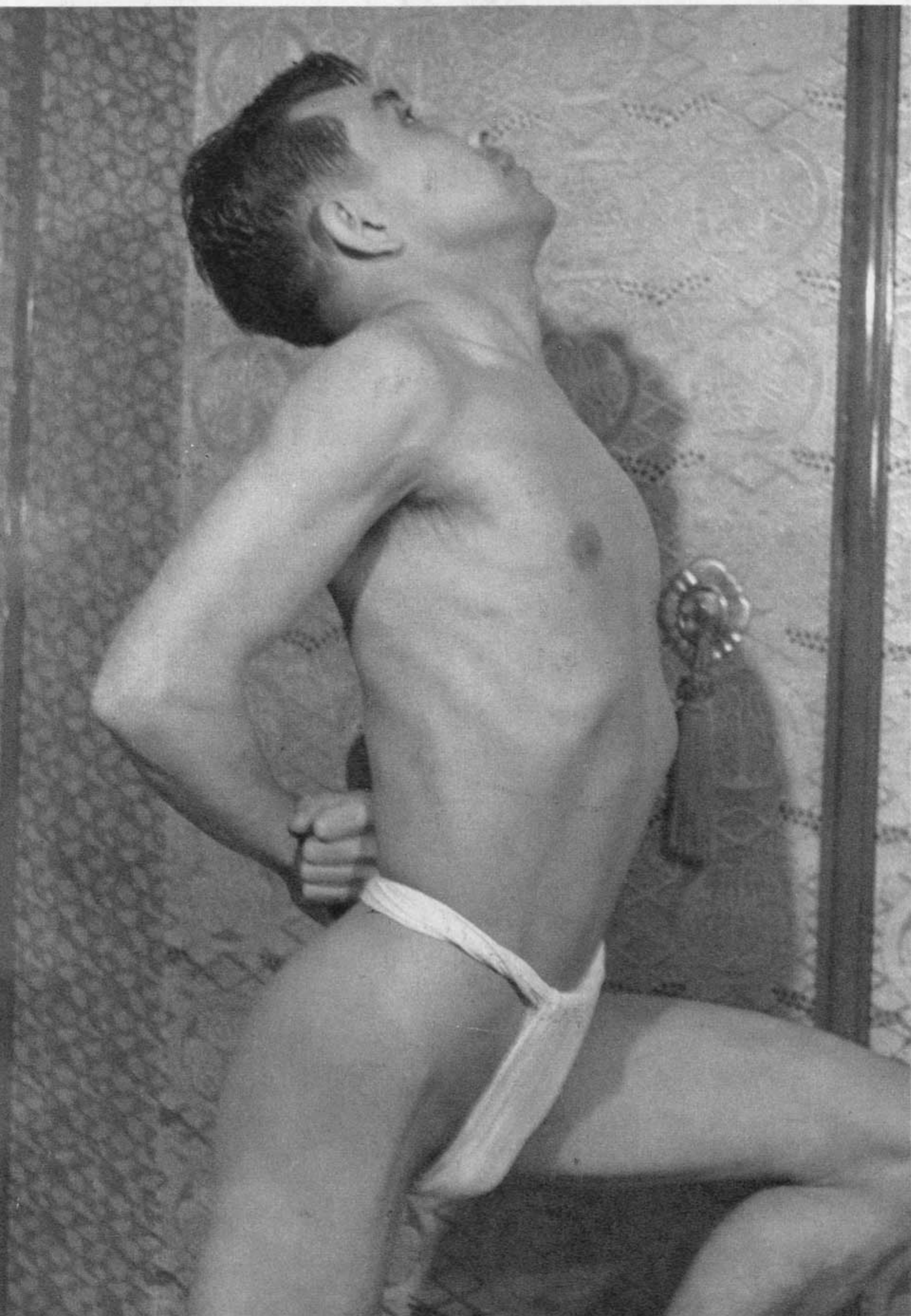
どうとでもしろ

禪一貫で縛られたからには マナイタに
 のったコイなんだへモデル・児玉幹也



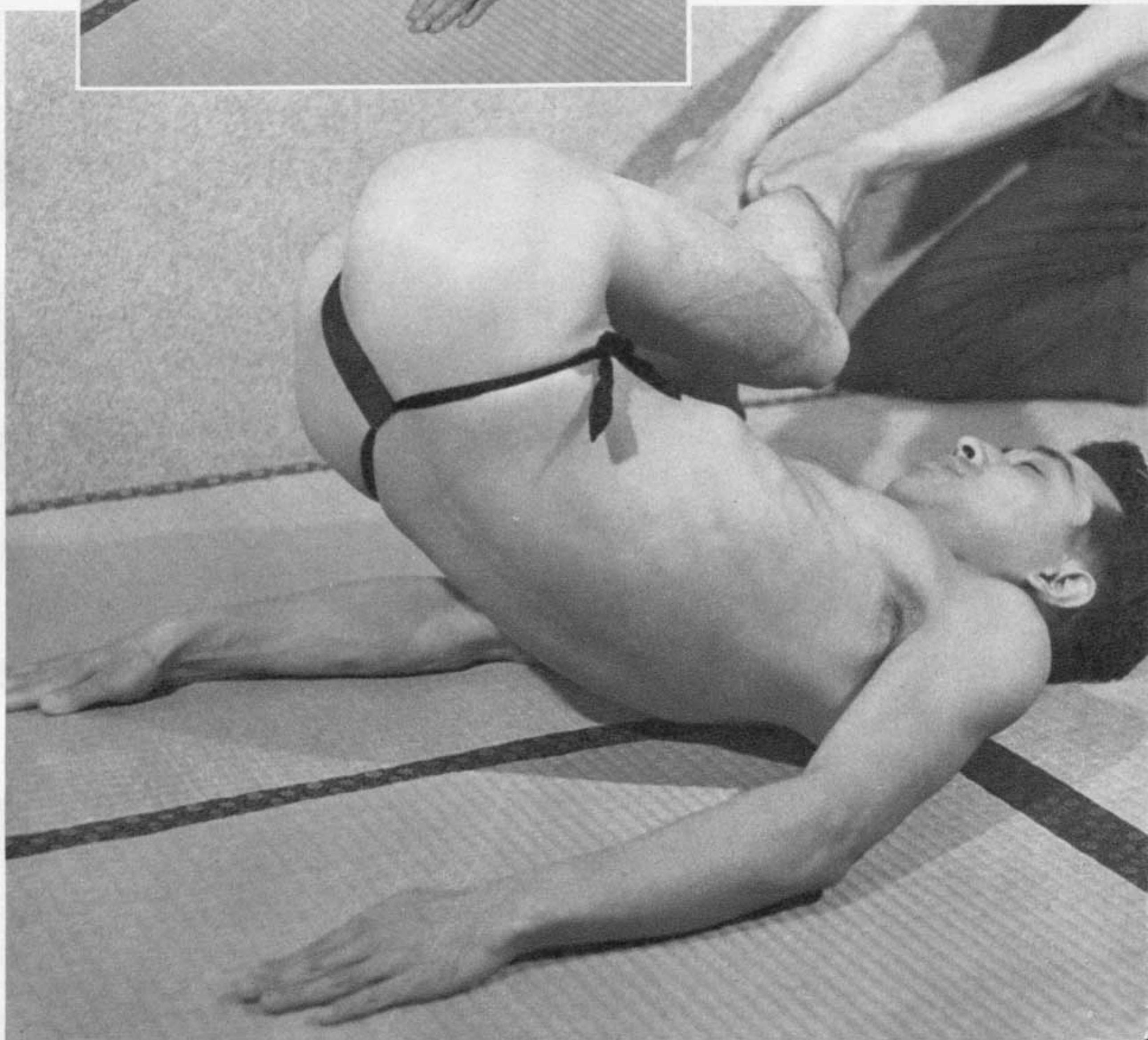
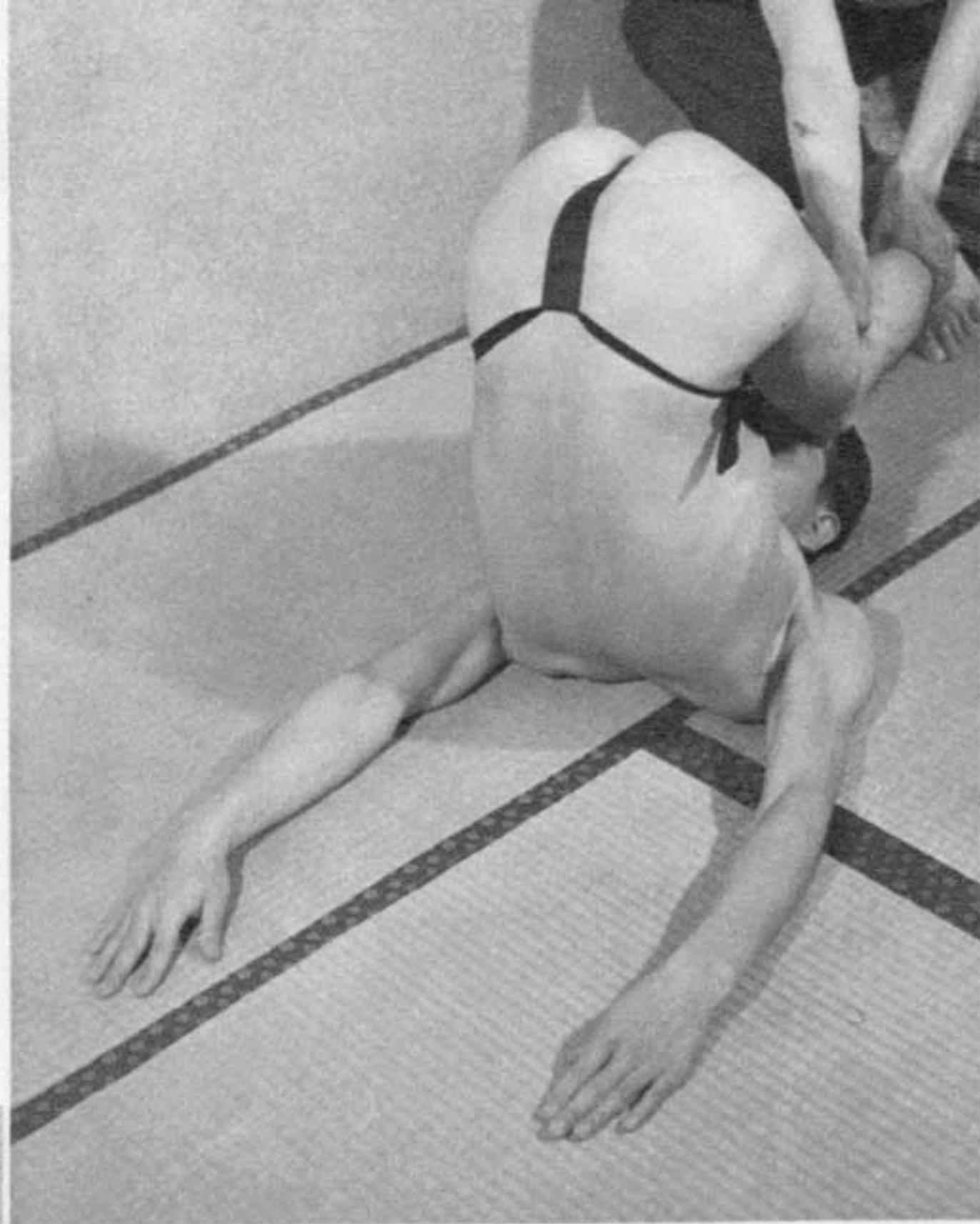
あるポーズ

男の魅力は禪一本の姿にある とい
う人がある そんな人がこの写真を見たら……？ 〈モデル・霧島茂樹〉



足を責める

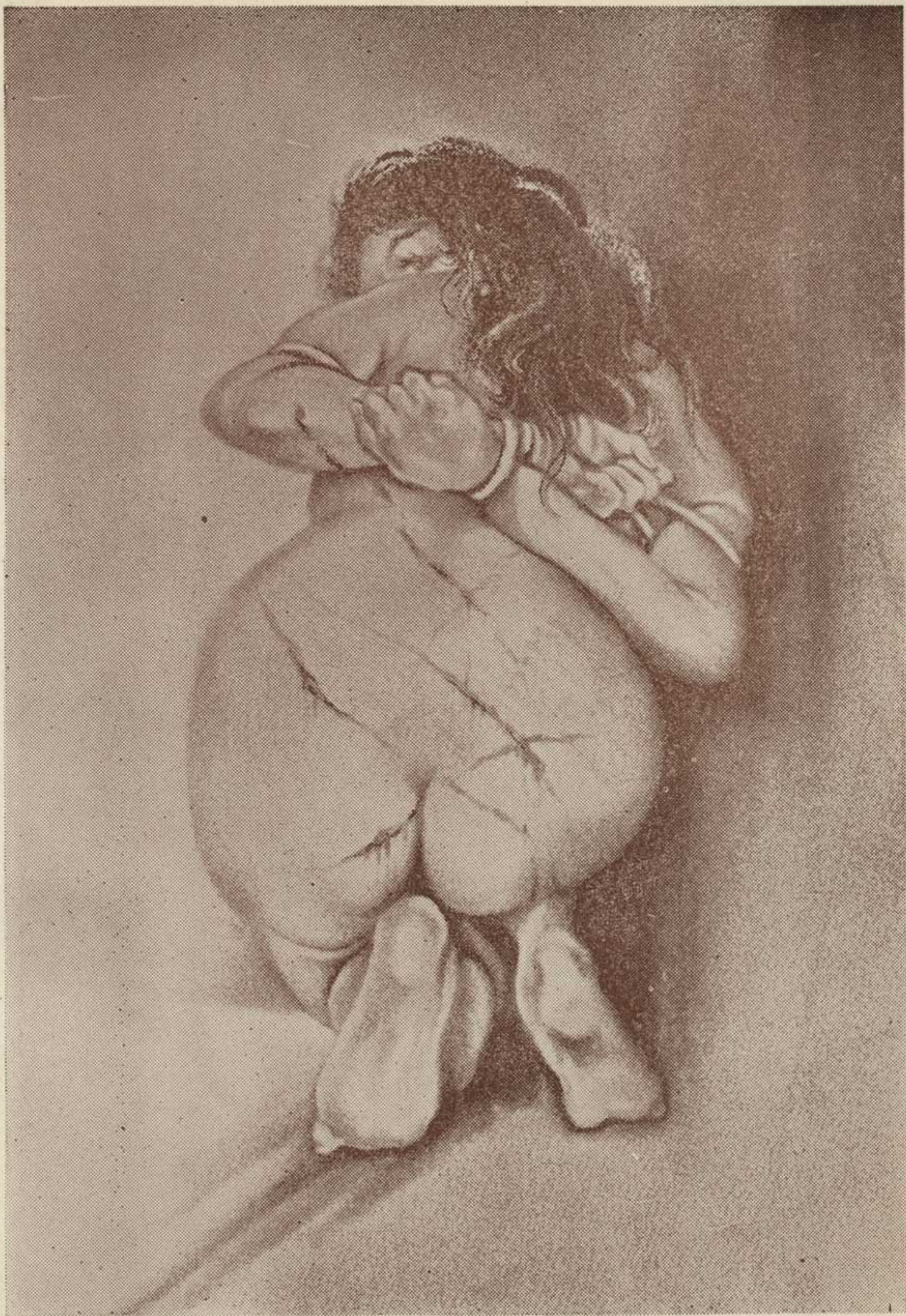
バイク一本の身をころがされ 足をもつて二つ折り ぐいと押えたり ひねったり いろいろにいじめられるとき 男のからだの奥から 奇妙な感覚がわき出して やがて官能のあらしのなかに没入し 陶酔の海に浮かぶへモデル・霧島茂樹



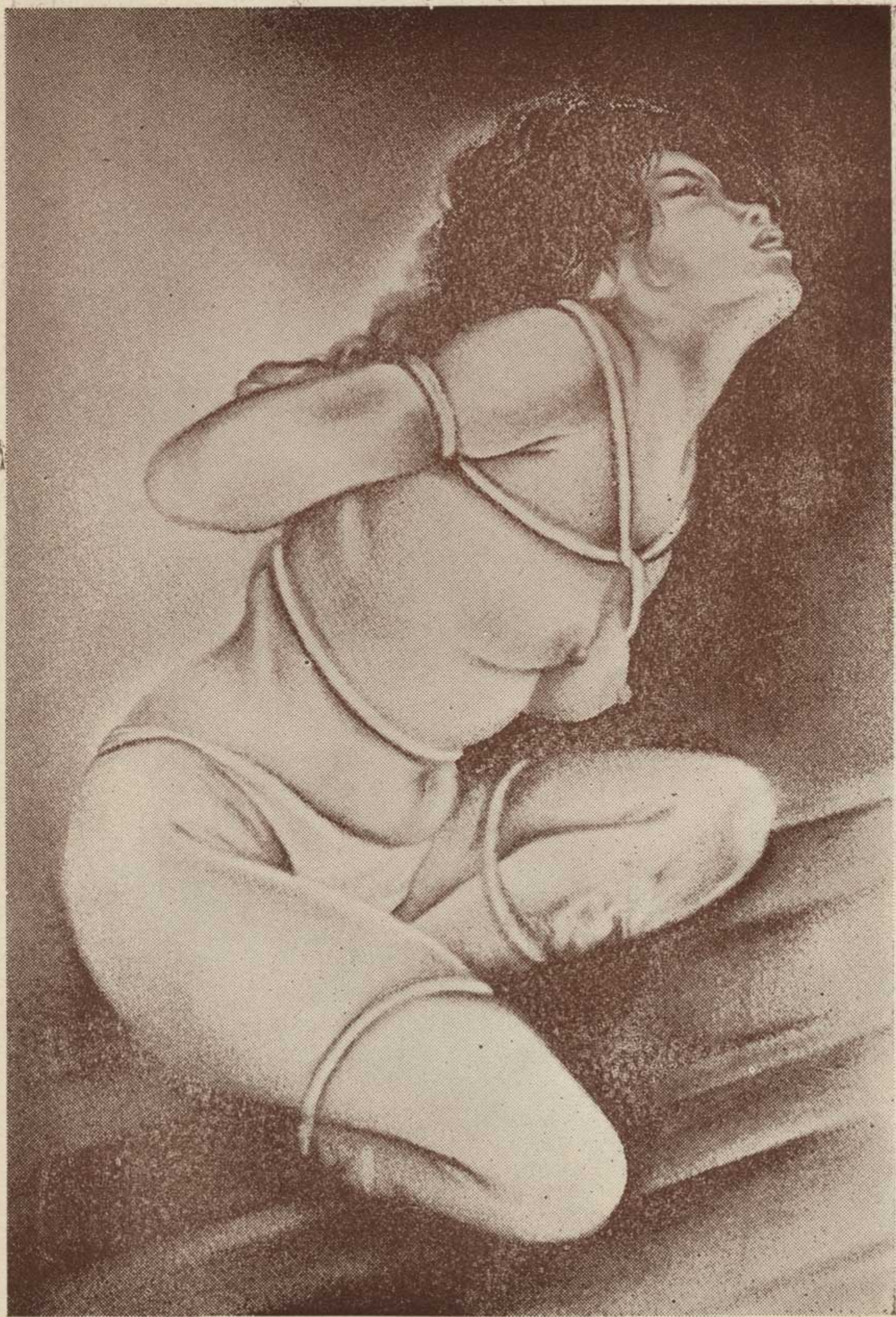
田上恵子
女体責め絵
特選画集



「ベッドの上で——しばられたうえに ムチでたたかれて あたしは 夜のいけにえなのか



お尻にムチが——むき出しの肌に ムチは痛い だが このムチ跡から快樂が生まれ出る



階段の途中で——身動きすれば ころがり落ちるし それでなくとも 階段のかどが痛い



に広がる だが そのあとにくる解放感が えもいわれぬ陶酔をかきたて 法悦境に導く



浣腸の苦痛と陶醉——浣腸液を注入されて 排泄をこらえるときの苦痛は 身内いっぱい

水責め地獄——地下室の練瓦の部屋にとじこめられ　しかも壁にクサリで固定された裸体の女の頭上から　冷たい水が降る





火責め地獄——裸身を柱に結えつけられ 足もとから炎の舌になめられる苦痛 煙が呼吸をふさぎ 火が肌をジリジリ焼く

残虐なる サディスチン

〈コロンのプロ作品〉



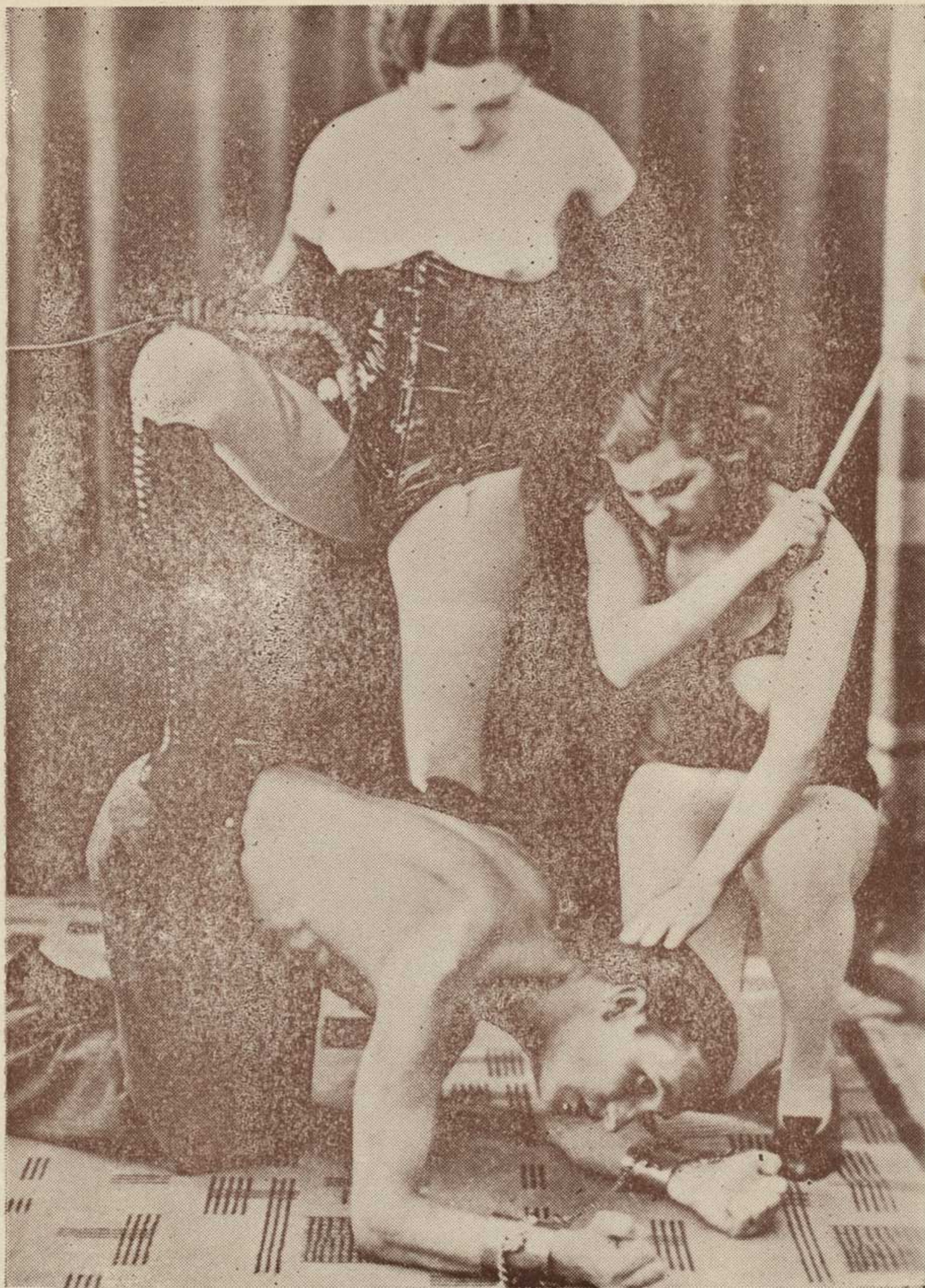
鉄の貞操帯——ベッドの枠に手足を拘束し 女の命の個所を 鉄でふさごうとするむごさ



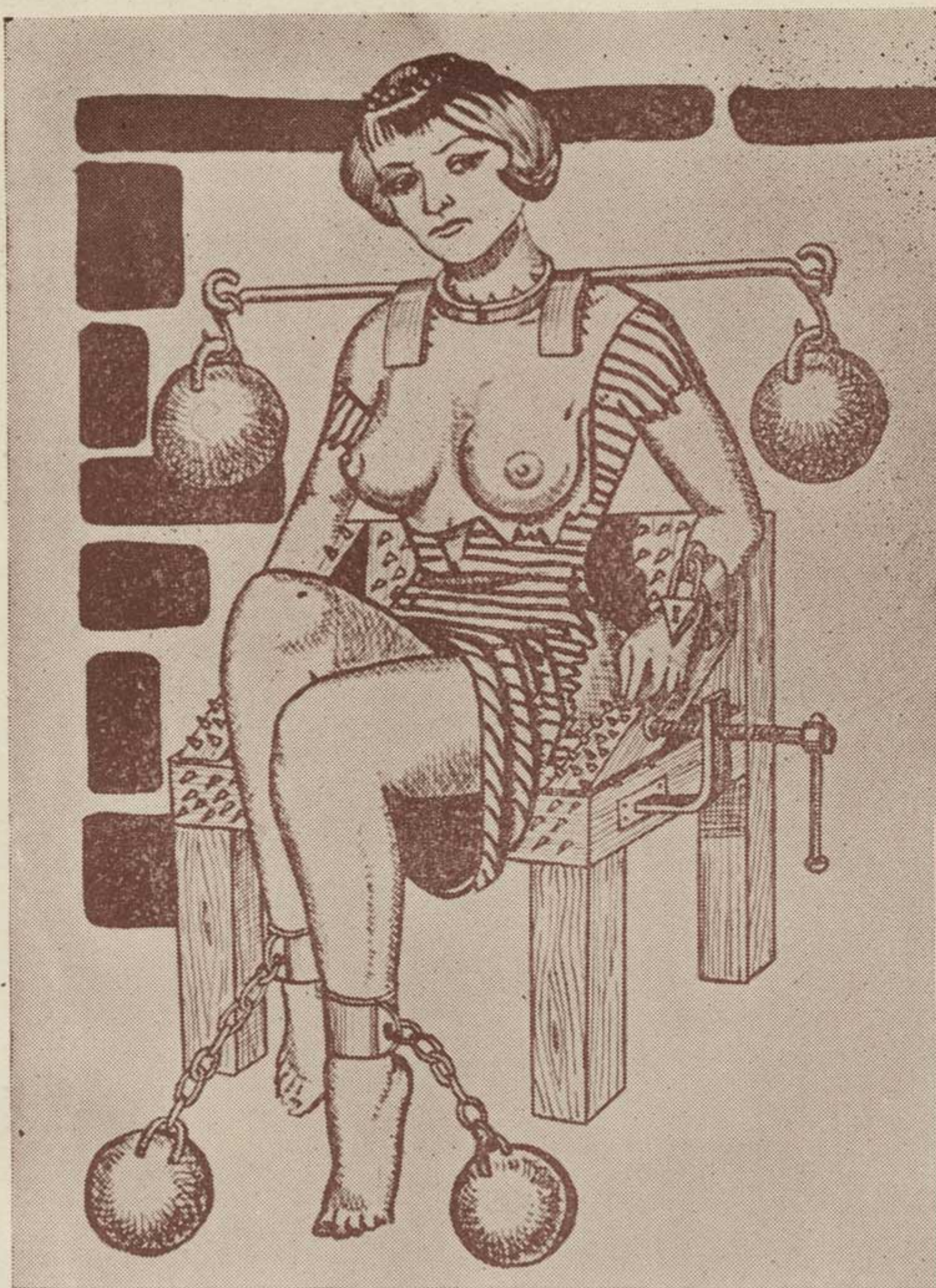
乳房に針を刺す——トゲのある鉄のベッドに寝かされて プツリプツリと針を刺す残忍さ



犬をいじめる——おまえは 首輪をつけた あたしたちの犬だ 踏んづけようと構わない



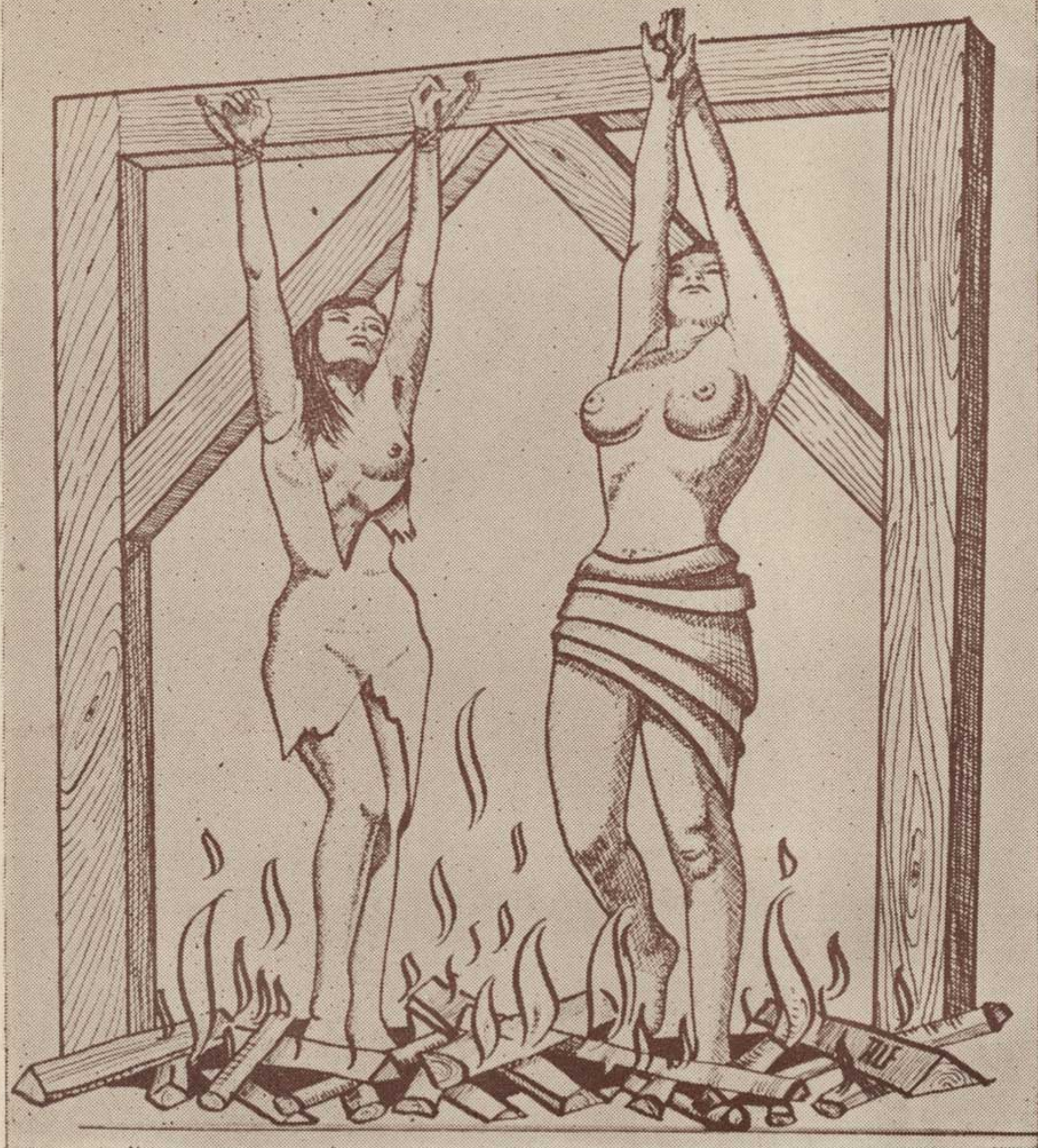
お仕置きは痛いよ——おとなしくムチを受けな 少しぐらいキズがついても いいだろう



中世拷問諸刑具のいろいろ

ここに紹介するのは、西ドイツから送られてきた珍しい写真である。由来、ドイツのみならずヨーロッパでは、宗教政治や専制君主のもとでむごたらしい刑罰や拷問が、たいした理由もなく犠牲者に課せられてきた。現代では想像もできないほどにひどいものが多かったのは、西洋史をちょっとひもといても容易にうかがえる。

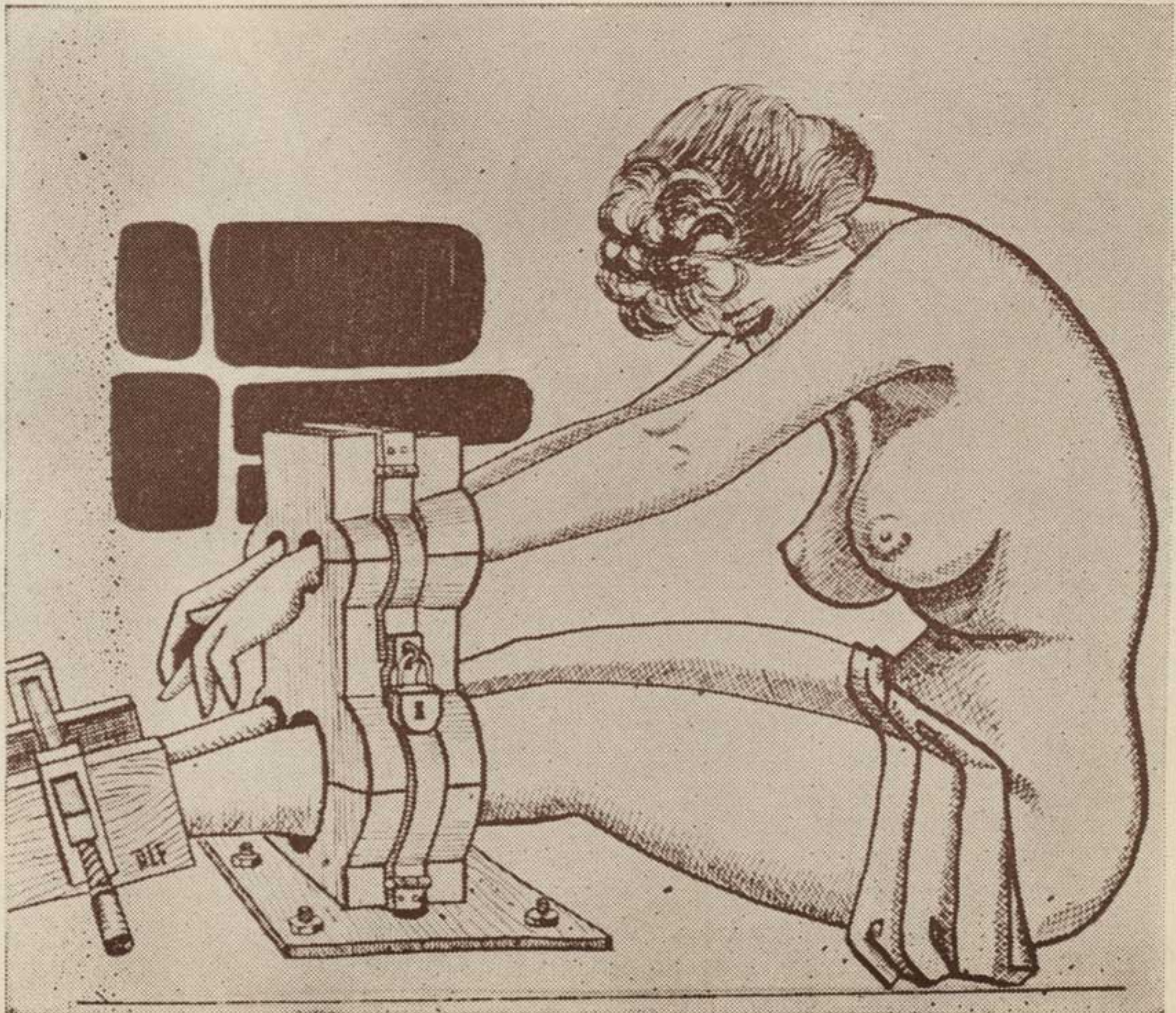
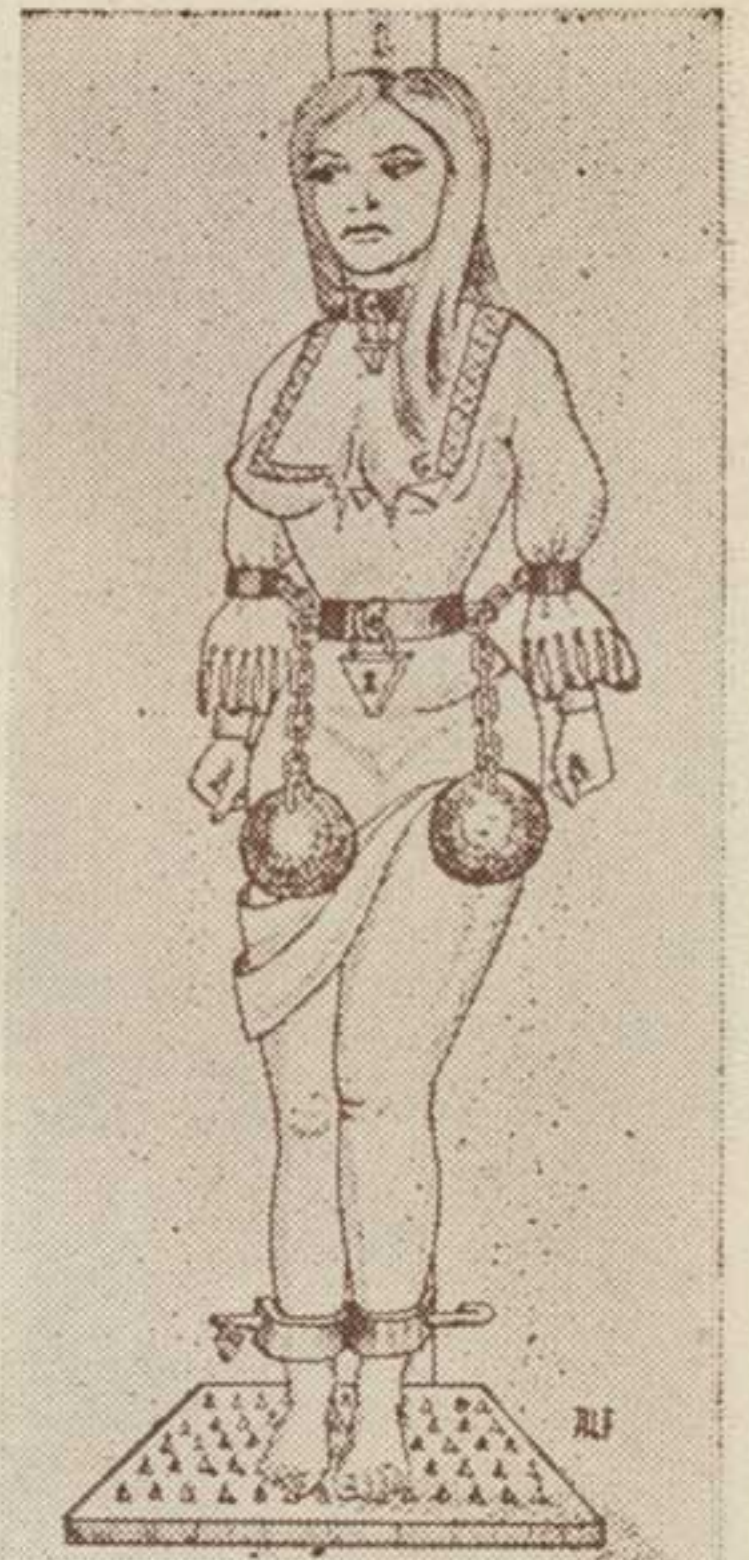
われわれはこれまで、多数のこうした刑罰や拷問の銅版画などを見てきたが、この写真ほどハッキリと器具や設備方法について説明を加えたものはなかった。その意味でも貴重な資料であろう。

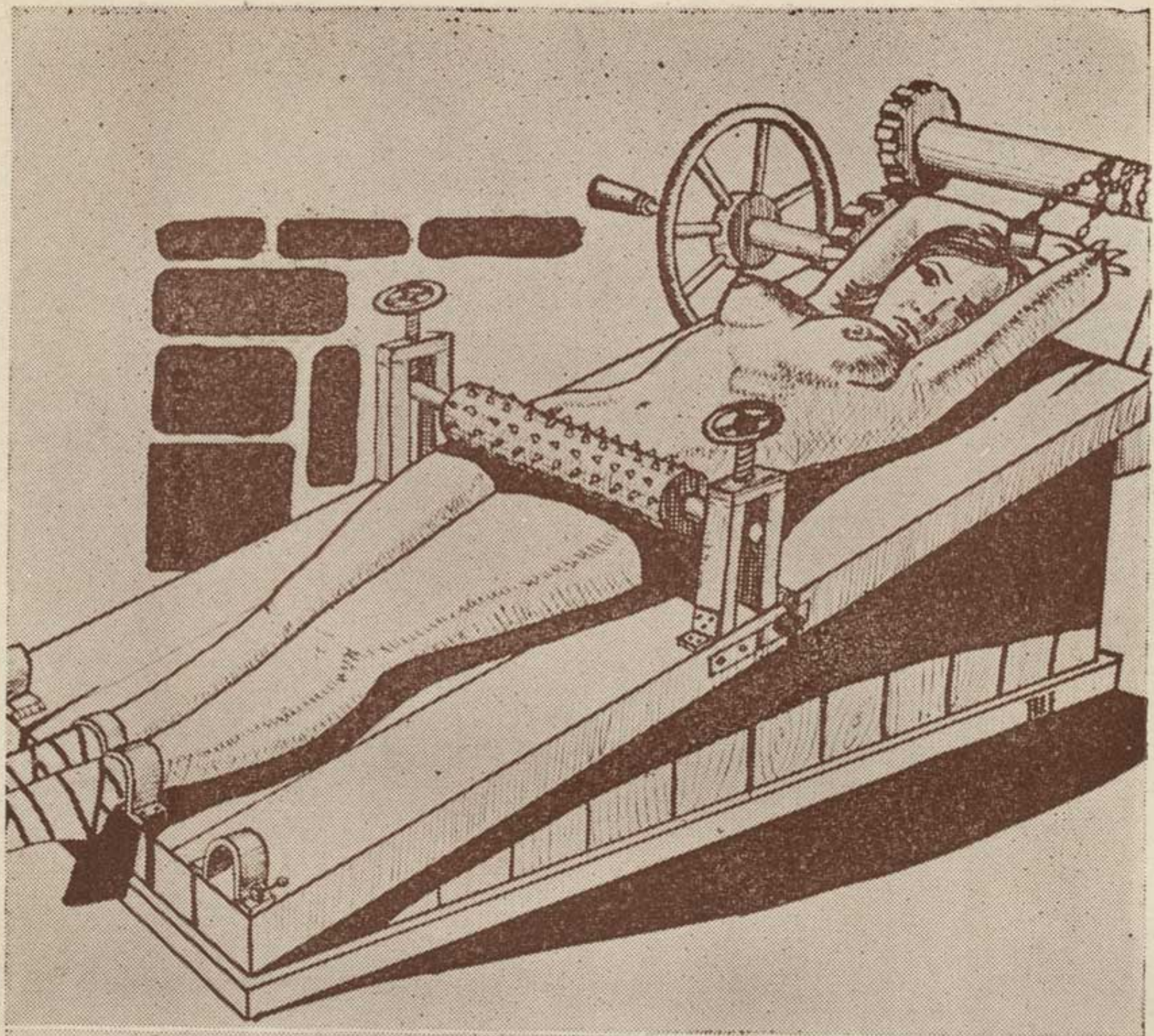


右は、拷問椅子の一種である。肩にトゲのついた首肩カセをつけ、トゲつきの木椅子にすわらされている。肩のオモリは、時に応じてその斤量を増加できるように取り替え自在になっている。

上は焚刑台で、魔女裁判で処刑される中世の女である。左の女は比較的罪が軽く、両手は綱で縛られている。右の女は重罪で、両手を釘づけにされている。焚刑は多く公開刑で、熱さを避けようと身をよじったり、煙で気絶したり、一般民衆は、この残酷さに興味をもっていた。ふつうは、有名なジャンヌダルクの処刑にも用いられたように、1本の支柱が中央にあり、犠牲者はその柱に鎖で（ナワでは燃えてしまうので）縛られていた。

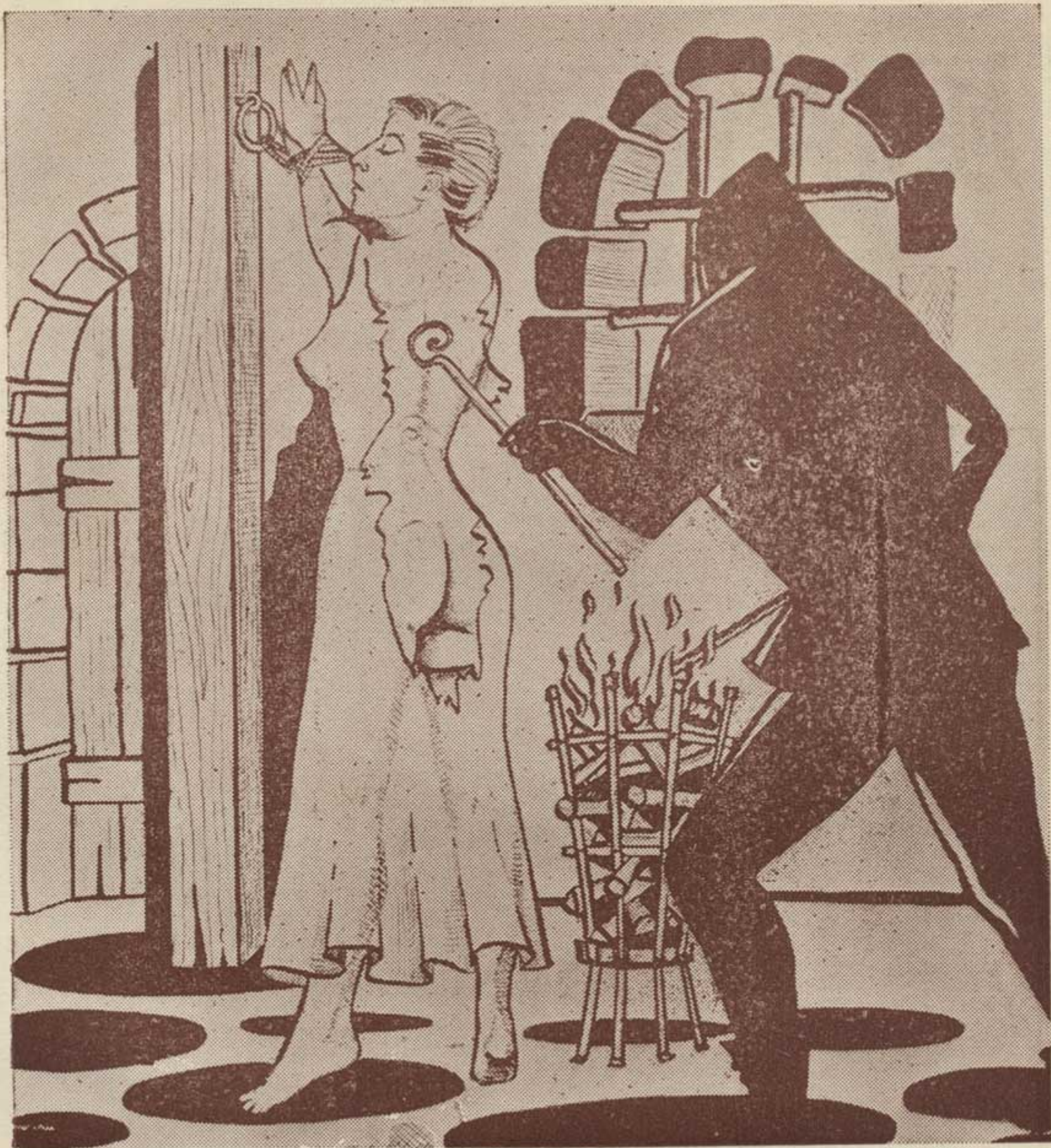
右は立ち台による処刑。鉄丸と鎖とで巧みに腰と両腕を固定させ、首を鉄輪でうしろ柱に結びつけ、両脚をいっしょにして柱に結び、トゲの植えてある台の上に立たせている。はじめはそれほどなくとも、刻一刻と苦痛が増す。これも公開刑として比較的一般に用いられた。下は手足力セ。これは刑というより拷問に近いもので、この状態で尋問が行なわれた。そのうえ、左端に狭脚器が見えているが、これで、脚、足首、足指などをおそろしい圧力で締めつけると、苦痛は全身を駆けめぐらる。しかも、このまま何日も放置されると糞尿はたれ流しになり、その恥ずかしさを忍んで尋問官に接しなければならぬので、二重の苦痛となるわけだ。





上は引き延ばし台とでもいうのか。滑車と歯車によ
 って受刑者のからだを無理やりに引き延ばす。しか
 も、中央にはトゲつきのロールが設定されていて肌を
 かむ。ふつうには見られない刑だ。
 左は有刺首輪。この首輪をはめられると、下を向く
 ことができない。疲れて首が下がってくると、たちま
 ち鋭いトゲが肉に突き刺さる。緩慢だが、意地の悪い
 処刑法である。





上は烙印刑。まず左肩、次に腕、ヒジ、さらに内手首という順に執行される。この絵では渦巻き形の最も原始的な烙印刑である。右側の人物は、頭からスッポリ頭巾をかぶっているが、わが国では非人に属する。烙印刑は宗教的な刑罰で、他人に見られて恥ずかしい点を見込んでいる。

これらの絵は、処刑される者がすべて女性である点、サディシチックな人のために編集されたものであるが、その装具、器具が、男女を問わず利用されることと、単純な絵が妙な魅力を持った点、不思議な人なつっこさを感じさせる。

譚奇俗風

1961年8月号

特集

女体に魅入られ 下着を狂崇する男たち

フェチシズムの犯罪性を避けよ

一八八九年八月二十七日の夜、パリの町は、夏の夜のそぞろ歩きを楽しむ人々にぎやかだった。その群衆の中で、若い女の悲鳴が聞こえた。女のいのちともいうべき髪の毛を切られたからだった。犯人はすぐ逮捕されたが、四十歳の独身男だった。

だが、驚いたことに、その男の家を捜査したところ、切り取った女の髪六十五が発見された。かれは、ひとりでいると耐えがたくなり、町へ出ては女の髪を切り、持ち帰って全身にこすりつけて快感を覚えていたという。それも、ウインドなどに飾ってある毛髪では全然刺激を受けず、若い女の髪を見ると、興奮にふるえ、それを切り取ろうとハサミをもつとエレクトリシ、切断のせつなにエジャクトするという性癖の持ち主だったのである。

これはクラフト・エービングが報告している事例であるが、いうまでもなく、毛髪フェチシズムに取りつかれた男で、かれの場合は、サディスチックな傾向が結びついたものである。

フェチシズムは、本来、異性のからだの一部、またはその身につけた物品によって性的慰安を求めようとするものがあるがで、とかく犯罪に走りやすい。いくら、性向からだとはいえ、許されるべきことではないし、社会に害毒を流すものとして罰せられて当然である。

したがって、フェチシズムの性向者は、格好のパートナーを見つけることによって、その弊害を回避すべきであろう。

△奥村世紀男▽

珍奇収集館主人

獅々村 裕

女の身に着いたものを手に入れ、その女の肢体を想像して、思いのままに恥ずかしめるたのしさ、

チコと鉛筆と

あんただから話すのだ、あんたは私のコレクションをうけつぐ地上でただひとりの人間だからね。といって、五十嵐老人は凄^{すさまじ}い目で私をみてニヤリと笑い、それから話しはじめた――。

私のそんなヘンテコな収集趣味は子供のときからあったんだね。こんなことがあったっけ。相手は五ツぐらい、私と同年の女の子だった。仲がよくて、いつも私のうちへあそびにくるんだ。名まえはチコといった。その日も例によってあそびにきた。

「あっちであすぼう」

といって、私はそのチコを家人の目のとどかない土蔵^{どぐらう}の裏手のほうへつれていった。旧家だから庭はとてもひろい。それに土蔵の裏ともなると、めったに人がくることもない。そんなところへチコをつれて

いったのは、いまから考えるとなにかコンタンがあったんだね。よく晴れた秋の日の午後だった。

あざやかな色に熟れたカキの実が、枝もたわわになっていたのをいまでも覚えている。

私とチコはそこへゴザを敷いてあそびはじめた。

そのうち私が、チコにむかって無理をいいはじめたんだ。どういふものか鉛筆を一本持っていたんだけど、その鉛筆をからだの中にいれさせろといいだしたんだね。

チコもこれにはまいったらしい。

「いやよ」

といって、着物の袖^{そで}をかみながらカブリを振っていた。しかし私は執拗^{しつよう}だった。いろいろとチコを脅迫^{きようはく}したらしい。そこでチコもとうとう観念^{くげん}したんだね。半分ベソをかきながら、いうことをきいた。

やってみてチコはおどろいたらしい。自分のからだにそんな受け入れ能力があったことが意外だったんだね。しまいにはチコのほうがお



もしろがりはじめたよ。

が、私はどうも調子にのりすぎてしまったようだ。とうとうチコを傷つけてしまったようだった。

出血したかどうかはおぼえていない。

あるいは、カキの実のあざ
やかな赤が

記憶に残っていて、それが出血の連想を私の記憶の中に植えつけたのかもしれない。どっちにしても傷つけたのは事実だった。

日がすうーとかけた。

チコは泣き泣き帰っていった。気がつくといはひとりゴザの上にすわっていたんだ。そして、チコを傷つけた鉛筆を、だいじそうに握っていたんだ。

チコは口の堅い子で、それを自分の親にもだれにもしゃべら

なかったらしい。そして間もなくどこかへ引っ越していった。

チコがいなくなる

と。私は寂しかった。

チコはいなくなったが、その鉛筆はしばらくのあいだ、私の手もとにあった。鼻にあててみると、ほのかにシナの木のおいがした。私にはそれがチコのおいのような気がした。なつかしかった。でも、そのうちどこかへなくしてしまった。あれは惜しいね。いま手もとにあれば収集第一号になるんだが――

身についたものの以外でも

私はものにコダわらない性質でね。あつめるにしても女の下着でなくちゃいけない、というようなことはないんだ。かなり幅は広いほうなんだ。身についたものでなくてさえいいんだ。たとえば、ぎっしり文字を書きこんだノートのようなもの。これは必ずしも身についたものとはいえないだろう。身についたものといえば、ふつう衣類か服飾品などを指すのが常識だからね。

これは私がもう二十代の終わりに近づいたころのことなんだが、朝鮮の裡里というところにいた。長崎の高商を出ると、しばらく内地でいくつかの職を転々としていたが、どうも思わしくないのでつてを求めて朝鮮の総督府に就職したんだね。総督府の小役人というわけだ。さっそく赴任したが、赴任先は京城の総督府ではなくて、群山にある出先機関だった。

そこには官舎もあるわけだが、私は官舎ぐらしはなんだか窮屈に感じられたので、すぐ近くの裡里という町に知人がいたのをさいわい、そこから通勤することにした。裡里から群山まで

は列車で一時間たらず。列車がこむとニンニクくさくて閉口だったが、裡里というのは緑が多く水のきれいな田園都市で、住むにはこたえられなかったね。

その通勤の列車の中で、いつもある女学生といっしょになるんだ。やはり裡里に住み、群山にある日本人女学校に通っているらしい。私はこの少女になんとなくひかれていた。

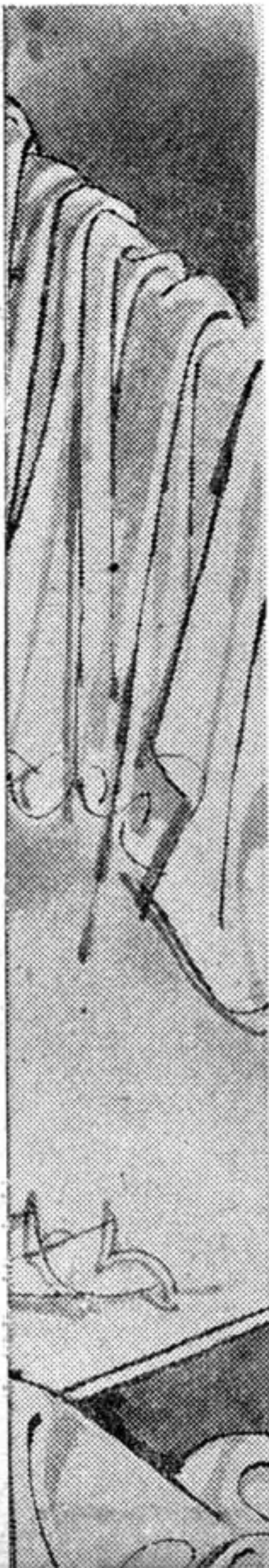
当時の女学校の上級生くらいの女の子には、どういうものかニキビのある子が多かったね。しかし、本人はいやだろうが、私はニキビのできた女の子が好きだった。ムツとするような、若いメスのにおいが感じられるんだね。

彼女が家で机の前にすわってニキビをつぶしているところなんか想像すると、もうたまらなくなっちゃうんだ。で、列車がこんだりすると、それをいいことに、その少女のすぐ後ろに立って、その髪の毛のにおいを嗅いだり、肌のおいを嗅いだりした。

私も若い時にはニキビにはなやまされたからよく知っているが、皮膚の表面に頭を出している赤いポツポツを爪先でつぶすと、白いあぶらのかたまりが小さな芽かタネのように押し出されてくる。それをひとつ、ひとつ、たんねんに観察するのがたのしみでね。

女の子だって同じだと思うんだ。

で、私はそんなことを想像しながら、じっと女の子のうしろに立っ



て、観察する。すると髪のおいにまじって、ミルクにふくんだ脂肪のおいが、プンと鼻をかすめてくる。ニキビのおいだね。ちょっとチーズのおいに似ている。それを嗅いで、ニヤニヤとエツに入っていたというわけだ。

ある日、私は彼女の後ろから群山で列車をおりなが、足もとにパタリと音を立てて落ちた物を見てハッとした。ノートだ。彼女のものだった。プラット・ホームと人ごみに押されたはずみに、手提げカバンの中から少しのぞいていたノートがひっかけられて落ちてしまったんだ。私は反射的にそれを彼女のものと認め、同時に身をかがめてひろっていた。

彼女を呼びとめようとした。しかしその瞬間、「まてよ」

と思ったね。この戦利品にひどく気をひかれた。自分のものにした欲望につきあげられたんだね。

そう思うあいだにも私は人に押されて改札口のほうへ歩いていく。彼女も歩いている。

気がつかないようだ。人ごみの中ですばやく身をかがめて拾ったので、だれもそのことに気がついていない。

「よし」

私はネコババをきめこんでしまえと決心し



た。決心すると同時にワザと歩行をゆるめたので、みるみる彼女と私のあいだは人垣で距てられる。こうしてノートは私のものになったんだ。それを彼女に渡してキッカケをつくり知り合いになる、そんなことより、そのノートをこっそり領有して、ひとりたのしむほうが私の性に合っていたんだね。

ノートのあいだに毛が……

それはすばらしい拾い物だった。国語のノートだったね。表紙には何年の何組、それに名まえもかいてある。その少女の顔つき、からだつき、その体臭——それに名まえがピタリとかさなって、なんといふかな。いままでより何倍もナマナましい感じで、その少女の存在が迫ってくるんだ。

ほとんど少女そのものを手に入れたような喜びだった。

なかには細かい字がギッシリかきこんである。万葉の中に出てくる詞の注解だとか、歌の意味なんか書いてある。少女らしい、緻密な感情や情緒が、その細かい字のあいだからプンとおってくるようだ。おまけに私をよろこびで卒倒させそうになったのは、ところどころに彼女自身の感想のようなものが書きしるしてあるんだね。

つまり、私は彼女の秘密な感情生活の一端を、マザマザとのぞいて見ることができたんだ。その行間から、ぐわぁと彼女の体臭がふきだしてきて、私をチッ息させてしまいそうになるくらいの感動だった。

おまけに、人を気ちがいさせるじゃないか。ページをくってゆくと、ところどころに彼女のものにちがいない抜け毛とか、フケとか、

またニキビのシンらしいものまで、はさまっているじゃないか。

もう、これじゃすっかり彼女自身を手に入れたも同様だったね。

その一冊のノートさえあれば、彼女がニキビをむしっているところや、アクビをしているところや、便所でしゃがんでいるところや、人前ではすました顔をしているくせにひとりでイタズラしているその姿態や、ありとあらゆるものがいきいきと目の前に描きだされるんだね。その晩はノートを抱いて寝て、彼女を恥ずかしめてやったよ。

ノートをなくしたことに気がついて「いやだわ、困ったわ」途方にくれている彼女を想像すると、恥ずかしめはよけいに小気味のいいものになったね。

次の日、列車の中で私は何くわぬ顔をして彼女のうしろに立ってやった。そして、彼女の髪の毛のはしが私の鼻に触れるように接近しながら、心の中で彼女に呼びかけたもんだ。

「お嬢さん。あんたが落としたノートはぼくが持っています。書いてあることはすっかり読みましたよ。あなたのニキビのシンまで、この目でよっくたしかめましたよ。あのノートがぼくの手にあるかぎり、あんたはぼくの恥ずかしめからのがれることはできないんですよ。あなたはぼくの汗くさいふとんの中で、毎晩のように恥ずかしめられているのですよ」

列車が急に速度を落としたので、彼女は私によろめきかかった。そしてふりむいて私の顔を見ると、

「すみません」

といってまっかになった。

「すみませんのはこっちのほうだ」

そう思いながら、私は心の中でクツクツクツと笑いこけたね。

このころから、女そのものより、物に対する執念が私の中で首をもたげだしてきたもんだ。そして、憑かれたように、それをあさりつけてきたんだ。

なに？ そのノートを見せてくれて？ ところが残念なことに、朝鮮から帰ってくるドサクサまぎれに見えなくなってしまったんだ。ほんとに、いまでも思い出すと惜しくってしかたがないんだが――

持ち主をたしかめる

中年のころから、私の収集癖はだんだんひどくなってきたね。落ちていたものを拾うくらいじゃ満足できなくなって、もっと積極的な手段で集めるようになったね。大きな声じゃいえないが、かっぱらい同様なことさえやったな。

なんといってもネライやすいのは洗たくものさ、道を歩いていて、ちよいと手の届きそうなところに、女の下着なんか干してあると、もうそれだけで胸がキューン、とせりあがてくるんだ。

風をはらんで、ハタハタと踊っている洗たく物のなまめかしさ、獲物を発見して胸がパタつくような感じ――あれだけは、この病にかかった者でないとわからないね。

あいつあ、まるで生き物さ。手をのばしてつかまえようとすると、パタパタと身を踊らせて、逃げようとするのね。そいつを、どうにかとりおさえ、あわてて上着の下かなんかにつっこんで、そ知らぬ顔の半兵衛をきめこんで、あるきだすときの気持ちといったらないね。

「うまくいった」

という思いと、いまにもうしろから呼びとめられるんじゃないか、

という気持ちがごっちゃになってね。

現場からだいぶはなれ「もうだいじょうぶ」という段になってはじめて、収穫のよろこびがこみあげてくるんだ。そして、家に帰りつくのが待ちきれず、歩きながらソッと上着の下に手をつっこんで、その手ざわりをたしかめてみたり、まるで新しい恋人でもできたようなものだ。

家に帰ると、待ちかねたようにそれを取り出してひろげて見るね。

そして、その持ち主のことを、いろいろと想像してみたりするんだ。

私はその想像が当たっているかどうかをたしかめるために、あとでよくその現場付近をウロついたもんだ。すると、二十七、八の人妻らしい女が、その日の洗たく物をひろげていたり、家の前に打ち水していたりする。

「はあ、この女のだな」

なんとなくピンとくる。

パンティーのようなものにも、ひとりでにその持ち主の年齢とか、生活がにじみ出すもんだ。そして、時代につれた移り変わりもどうかかえておもしろい。

いまのはピッチと股をしめあげてくるやつだが、昔のはズロースとって、ふわあつとふくらみがありゴムがはいていて先のほうがびしっとしまるようになっていたのが多かった。布地もぶあつなネルかなんかでね。

なかには、ずいぶんおり物のきつい女もあると見えて、前のところが黄色く変色している。そこだけ布地が変質してへばりかけているのを、刺し子のようにいていねいにキルティングして補強したりしたのがある。いかにも生活がにじみ出している感じだな。

それでも、最近是一般に消費生活がハデになったせい、そんなのもあまり見られなくなったね。終戦までもないころなんか、そりゃあずいぶんひどいものだったが……

なんだった？ そんないろいろの時期のものをそろえてあるかって？ そりゃあ、もちろんさ。そろえて年代順に整理してあるよ。下着にみる戦後十六年史っていうわけだな。

日時、収集場所、その持ち主の年齢や特徴なんかを記入した小さい布を縫いつけてね。それはあんたが見た通りだ。むろん、持ち主のたしかめられなかったやつもある。しかし、つとめてそれはたしかめることにしているんだ。なあに根気よくすれば、たいていはなんとかわかるもんだ。

つごうのいいことには、住民登録票というものがあって、区役所の出張所にゆき、三十円の印紙代を払えば、それを閲覧できるようになっているからね。

表札に出ている名まえを照合し、その家族の登録票をみると、家族の者の名まえや年齢が、みんな記入してある。年ごろの娘が何人もいるような家庭では、はたしてそれがどの娘のものかわからないことがあるが、若夫婦だけの場合とか、娘がいてもひとりのような場合には、持ち主の名まえや年齢がどんぴしゃりに浮き上がってくるね。

そうしておいて、さらに今度は、その本人を実物についてたしかめるんだ。根気よくその家のあたりを偵察していると、いつかはその人物らしいのを見かけることがある。

勤めに出ている娘なら、朝のうちにそのあたりを散歩のふりをしていると、家から出てくるのに会うことができるし、主婦なら主婦で、さっきのように洗たくものをひろげていたり、そうじしていたり、夕

方の買い物に出かけたり、というわけで、いつかは見ることもできるものだ。

それをたしかめられた時の満足というのはなんともいえないね。何くわぬ顔でそのそばを通り抜けながら、

「奥さん、私はあなたの下着を一つ持っていますよ」と、心の中で呼びかけてやるんだ。

こんなふうにして、その持ち主がハッキリすると、その下着なら下着が急にいきいきとしたなまめかしさを発散しはじめるから不思議なものだ。その中につまんでいる太腿のはりきった肉づきや、全身の線が浮かび上がってくる。私は思うさまその下着を恥ずかしめてやるんだ。

すると、下着は恥ずかしそうに身をよじったり、まるで命があるもののように見えるんだね。そして、その下着との新鮮な情事の期間が終わると、整理票をつけてケースの中にほうりこまれ、また次の恋人さがしがはじまるというわけなんだ。こんなたのしいことはないよ。それが私の生活のすべてなんだ。妻をもらわずひとりで暮らしているのも、そんな生活を思う存分たのしみたいからなのさ。だれにもじゃまされずにね。

隠しカメラで

私はそのうち、いろんな品物の持ち主を隠しカメラで写真に撮るところを思いついたね。

文字の記録だけでも、当座のあいだは印象はあざやかだが、そのうちにだんだんうすれてくる。



年月日、場所、氏名、年齢はわかっていても、

「ハテナ。どんな女だったかな」

その記憶はしだいにあやふやなものになってくる。それで、写真をつけることを思いついたのだ。これなら一生忘れっこないくらいだ。そして、私立探偵のような隠し撮り用の小型カメラを買って、練習をはじめた。

はじめは、なんでもない通行人を、スレちがいざまにパチリとやることからはじめた。

相手に気づかれぬようにそれをするのはなかなかむづかしい。しかし、一念というのはおそろしいものだ。そのうちにどうやら相手の映像を盗めるようになった。ときによると、それがあんまりあざやかに写っているので、ギョッとするようなことさえあった。

「もうよし」

という自信がつくと、私は自分の収集にいいよ使いだした。むろん失敗することだってある。顔が切れ

て胸から下のあたりだけうつうつといたり、どうしても前向きを撮れなくて、後ろ姿だけ撮ったりしてね。

そのかわり、時には、ちゃんと本人に話をつけてカメラの前に立ってもらおうというタチのわるいことまでやった。

むろん、見ず知らずの初老の男に、通りすがりにいきなりカメラの前に立ってくれといわれたら、奇異の感じを持つだろう。それには、もっともらしい口実がいるのだ。

たとえば、こんなことがあった。やはり私に盗まれた女——それはまだ結婚前の娘さんだった——が犬をつれて散歩しているのだ。私がちょうどその家の前を通りかかったとき、庭から出てきたんだから、まちがいない、おまけに家の中から弟らしい少年が、

「O子ねえさん、散歩にいくの？」

大きな声で呼びかけた。住民登録票でたしかめた名まえまでぴたり一致している。もう彼女にまちがいはなかった。私はとどろく胸をおさえながら、その背後からついていった。

犬をつれた娘は、すぐ近くにある小公園にはいっていった。犬はスバラしいスピッツだ。このとき、私の頭にそうだ!! とひらめくものがあった。それまでは隠しどりをしようと思っていたのだが、考えが変わったのだ。

「いい犬ですね」

というような話しかけから、

「一枚、犬を撮らせてくれませんか」

話はいともスムーズにはこんだ。

私は犬好きで、ある程度犬の知識も持っている。娘はこころよく私の申し出に応じた。

娘にもいっしょにカメラにはいってもらった。後ろから犬を押えている役割りだから、これはごく自然のなりゆきだ。が、私のレンズの焦点が、犬よりその娘に合わされていたことはいうまでもない。

シャッターを切ると、

「ありがとうございます」

といって、私は娘と別れた。念のために三枚ほど撮ったので、撮り損じはないはずだ。

家に帰ると、さっそく暗室にはいって現像をはじめた。私はおそるべき執念で、現像や焼き付けもすべて自分でやる技術を身につけていたのである。

成功だった。

娘は犬のうしろにしゃがみ、私のほうを向いて笑っていた。なんにもかも信じ切っている笑い顔だった。おまけに、なんということだろう。前のほうが犬のからだで隠されているという安心感からだろうか。しゃがんだスカートの裾のあいだから、ほんのちょっとだけだが、目にしみるような白さの下着がのぞいているのだ。一枚めの写真にはそれはなかったが、二枚めは私がちょっとアングルを変えたので、それが撮れてしまったのだ。

私は「キャッ」とさけび出したいようなよろこびの衝動にかられ、暗室の中で目を皿のようにしてその写真をながめるのだった。こんな完全資料、こんな傑作はなかった。こんな完全な恥ずかしめもなかった。

私はその下着を抱いたり、帽子のようににはげ頭にのせたり、それから部屋の中をコロげまわった。しばらくのあいだは、その下着をつけて外出したりした。

マニアの距たり

私のもう一つのたのしみは、そうした収集品をひっぱり出して、いままでの総ざらえをすることだった。それは虫干しの意味もかねていた。そして、その山に埋もれながら一日を暮らすのだ。そして、その収集品の一つ一つにまつわる思い出を、ゆっくりかみしめるのだ。

それは下着類だったり、靴下の片っぽうだったり、またハンケチや小切れのようなものもあった。そうかと思うと、湯のみや弁当箱のようなものさえあった。

知らない人がみたら、いったい何のことかわかるまい。が、それは私にとっては貴重な私の生活史なのだ。どれもこれも、かけがえのないものばかりだった。

それをながめ、手にとり、それにまつわる思い出をたどっていると、時のたつのもわすれた。

たった一本のヒモにだって、ひとりの女のいのちがこもっているのだった。

五十嵐老人はある日、そうした収集品を私に見せてくれた。なるほど、たいしたものだった。

しかし、他人の収集品というやつは、ことにこの種の収集品は、それをあつめたご当人でなければそれほどの切実な感じというものはないものだ。

「なるほどねえ」

私は五十嵐老人の執念みたいなものには敬意を表したが、サテ、そ

れをそっくりそのまま譲ってやるといわれても、むしろありがた迷惑に思っただろう。

いってみれば、それらの品物は、私にとっては命のないものだった。つまり、五十嵐老人に命を吸いとられたカスのようなものである。自分の汗やあぶらのにじんだ生活史の裏づけがないからだ。

それと、私のやり方は、五十嵐老人のとはすこしちがっていた。私には、あんな妄執的な収集癖はない。

ある女のからだをはなれた何かの切れ端が、私の手にはいる。それが私の手の中で命をもちつつけているのは、せいぜい長くても一ト月くらいだ、その期間がすぎると、それは私にとってなんの感興もない一個の無機物と化してしまうのだ。

五十嵐老人のように、二十年も三十年も前の切れ端を、歴史記念物的に保存しておき、それによって肉感をそえられるということはない。極端に言えば、その持ち主の体臭なり体温なりの感じとられるあいだだけ、それは私にとって興味ある存在となる。

冷えてしまっただけなわけだ。要すれば、自分がこっそり愛撫したその切れ端を、また持ち主の女のところに戻して置く。女が何も知らずにそれをまた身につける。それをながめてよろこぶ。私にはそんな趣味があるのだ。同じマニアでも、いろんなタイプがあるものだ。

ある日、こんな人を見たことがある。りっぱな服装をした中年の紳士だが、駅で、捨ててある紙くずをそっと拾ってはポケットに入れているのだ。拾うとちょっとそれをひろげてなかを改めてみる。なにかなまめかしいものを求めているようだった。私はうそさむい気持ちでそのかたわらを通りすぎた。

秘密パーティ

エレナとの一件があつてから、あたしは、何か熱に浮かされたようで、夜が来るごとに、エレナの寝室から、呼び出しがかかるのではないかと、胸騒ぎを覚えるのでした。

しかし、女主人は、そんなあたしの不安は知らぬげに、毎日、みがきたての乗馬靴をもう一度自分の目の前で入念にぬぐわせてから、キュッ、キュッと皮鳴りをさせて乗馬に出かけるのでした。

あのことがあつてから、四日めだったでしょう、エレナは、乗馬から帰ってくると(別に乗馬したらしい様子もありませんでしたが)、あたしにすぐ自分の部屋^{へや}に来るように言いました。

あたしは、ハイボールを持って二階の彼女の部屋にまいりました。

ち

悦子

エレナは、長いマツ毛を伏せて、ロッキングチェアにもたれておりました。服装は、出かける時のままで、乗馬靴には拍車もつけたままです。

あたしの差し出すグラスを一気に干すと、エレナは、妙にかすれた声で、

「悦子、今晚、プレイしないか？」

と申しました。

あたしは、人目にもわかるくらいビクッとしました。恐らく顔色が変わったことでしょう。

「恐ろしいのかい？」

「いいえ？」

「うれしいの？」

「——」

まさか、好きですとも言えませんから、黙っていました。

「おまえには、いい素質があるわ、でも、忍耐力がないわ。もうプレイを長びかせて、楽しまなくちゃ。三倍ぐらい時間をかけてプレイしなくちゃ——今晚、会員の皆に会わせようと思うの」

「会員？」

「おまえには初めてだけど、もうあたしの正体を見破られて、いっしょに遊んだ以上、か

くす必要もないわ。あたしたちと同じような趣味の持ち主が集まって作っているパーティよ。ときどき会合を持って、お互いにプレイを楽しんだり、そんなことに興味のある殿方を招いて満足させたりするのよ。今晚、その会におまえを連れて行って皆に紹介しようと思うの、いいでしょ」

「ええ」

「会員はだれもが秘密を守るし、身分を明かさないうし、お互いに聞きもしないという紳士協定があるの。だから、悦子があたしのメイドでも、そのパーティでは、何の関係もないことよ。単なる秘密パーティの会員として自由^{びよう}にふるまえることよ。それともう一つ、あたしたちのパーティでは、エロはいっさいご法度^{はつと}なの、女同士の時は、何をしても構わないけど、男性を交えている時は、乳房でも見せることはご法度だわ。できるだけ、女らしくくない(ということは、実は反語的にとれるのですが)服装と、高貴なる態度でふるまうことが必要なのよ」

エレナはそれから、そのパーティの会員が、名まえを呼び合わず、ニックネームで通じ合っていることを告げました。エレナは、コンテッサ(伯爵夫人のイタリア名)で通っ

— 乗馬服を着てのプレイ② —

レザー・フェチの女

一ノ瀬



ていました。

女海賊だとか、調教師とか、いろいろな名まえがあるのですが、のちほど詳しく説明いたしましょう。

さて、おまえは、なんにするといわれて、わたしは困惑しました。

ただ、以前映画で見たナチスの俘虜を虐待する女子監視員の冷酷残忍さが強い興奮を覚えましたが、そのことを言うと、エレナは

笑って、

「ああ、それがいいわ、カポよ。カポなら、威厳はあるし、残忍さはあるし、文句なしだわ」

「じゃ、カポの服装で行くべきよ。あたしのを貸してあげるから」

そうして、ふたりの間には、いつの間やら、主人とメイドのへだたりがなくなっていて、共通の話題について熱心に語り合う親しみが漂っているのです。

悦子のふん装

軽い夕食を済ませると、あたしとエレナは、急いで出かけるしたくをいたしました。したくといっても、あたしの場合、すべてがエレナまかせで、何もすることはありません。

カポの服装というのは、荒い縞模様の囚人服に黒いブレザーコート、それに長靴でしたが、エレナは、それじゃあんまり粗末だし、自分の好みに合わないからと言って、男仕立てのステンドカラーの縞柄のワイシャツに、黒地のギャバジンのタイト

スカート（極端にすそがっぽまっているので、小幅でヨチヨチ歩きしかできません）をさせ、その胴のくびれを、広幅のナイロンベルトで、ギューギュー締めつけました。

こうすると、うつ向くのも窮屈になります、からだ全体がひき締まった感じです。

頭はカボらしくスカーフで包みます。

靴では、エレナとあたしの意見が分かれました。あたしは、スーザン・ストラスパークが「ゼロ地帯」ではいたような膝下の長靴を希望したのですが、エレナは強く反対しました。タイトスカートと長靴の間から白い脛が見えるのはエロティックだと言うのです。

けっきょく、あたしは、彼女の言うように、太股まである柔らかい長靴をはきました。いや、はかせてもらいました。

あたしがこうしてエレナに任せてもらってしたくを終わると、エレナは、自分の着替えに移りました。

すると下着を全部脱ぎ捨てると、黒光りのするワンピースを着ました。そしてあたしに、背中のジッパーを締め上げさせました。なんと、この服はみごとに仕立ててあるのでしょう。

まるでゴムのはいった水着でも着たよう

に、エレナの肌に皮が密着して、露骨にからだの線を浮き立たてます。

次いでエレナは、太股のつけ根までもある編み上げ長靴を入念にはきます。これまた妖しいくらいにエレナの美しい脚線を描き出してくれます。

この長靴は、五インチ以上もあるハイヒールつきで、しかもその先端がピッケルの先のように細いので、よほどじょうずに歩かないと、転倒しかねないしろものでした。

エレナは、最後に、二の腕までもある黒皮の正装用手袋と、黒いサングラスをかける（なんのために、夜だというのにサングラスをかけるのかわかりませんでした）と、あたしをうながして出かけました。

あたしの持ち物は犬鞭と、エレナが乗馬の時使う黒皮の手袋だけで、ハンドバッグの携帯は許されません。

あたしは、不安と期待の入りまじった気持ち

ちで、エレナの車の後ろシートに、ふかふかと腰掛けました。

マドモアゼル・ド・マスク

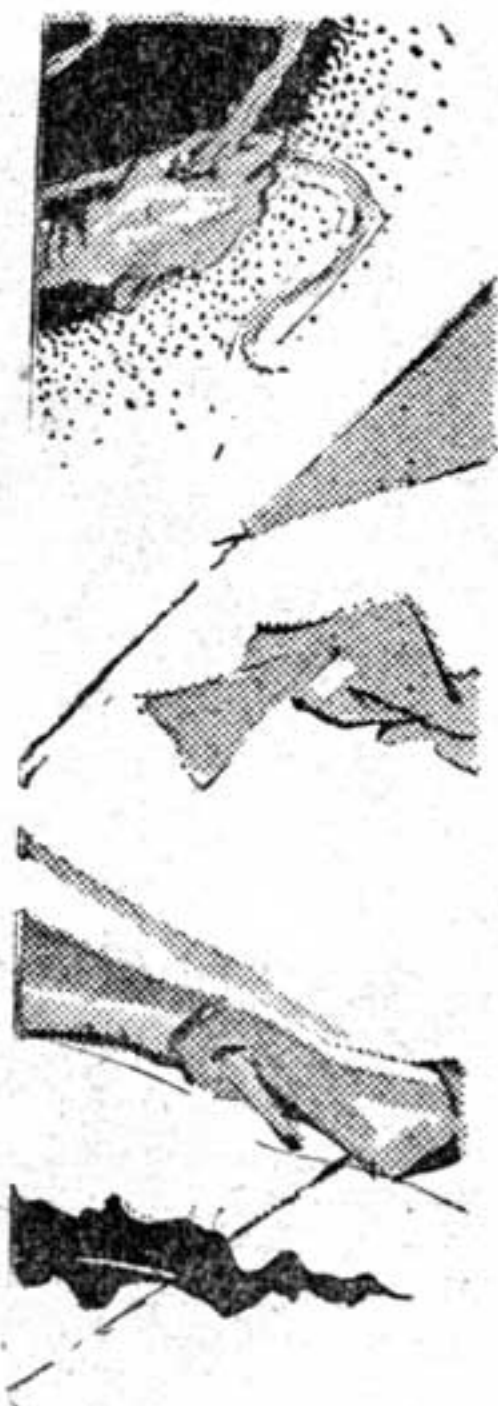
車は、三十分ぐらい走って、物静かな住宅街の、ある家のまえにとまりました。

鉄のとびらが締まっていたましたが、エレナは、なれた手つきで、かたわらの小門から中にはいり、内側からギーッととびらを開きました。そして、車を入ると、ふたたび元のようにとびらを閉じ、ゆるい坂を上って玄関前まで、車を走らせました。あたしたちが最後なのか、そこに、もう車は五台も並んでいました。

合図なのでしょう、ベルを三回ばかり断続して押すと、とびらが開きました。その内側からのぞいた顔を見たとき、あたしは、ギョッとして、危うく声をたてるところでした。

顔はもちろんのこと、頭髮の部分までも全

部黒い皮のマスクで包んだ人が出てきたのです。あいてるのは、大きな二つのひとみの輝いている目の部分と、毒しく塗ったまっかなくちびるのところだけです。女であ



ることは、マスクの後ろから、はみ出た金髪がそれを証明しています。

この女は、輝く金色の皮のブラウスに真紅のプリーツスカート、それに高価なエナメル皮の長靴をはいていました。

「ようこそ、コンテッサ！ おそかったわね。皆待ちかねてるのよ」

「悪かったわね。今夜は新しいお友だちを紹介するために、ちょっと手間どったのよ」

とエレナは言いわけをしながら、ずんずん先に立って客間のほうへ行きます。よく、あんなハイヒールで歩けるものだと思うぐらいですが、当人はなれたもので、ポッブスカートををはかされて、長靴をきしませながら、ヨチヨチ歩きをするあたしよりも、ずっと正しいのです。

客間には、数人の会員がすでに集まって、あたしたちを待っていました。黒めがねをかけ直したコンテッサ・エレナは、おもむろにあたしを皆にひとりずつ紹介しました。

さきほどのマスクをつけた婦人は、この家の主人であるマドモアゼル・ド・マスクでした。

女海賊のアンは、異名のとおり、白いタフタのブラウスに黄色皮のタイツ、それに折り



返しをついた魅力的な長靴でした。カラミティ・ジェーンは、赤いブラウスにGパン、それに太股の上までもくる長靴と、二メートルもある犬鞭です。

ミス・トレイナーと名のる女は、肩に垂らした魅惑的な髪と、白皮のジョーブス、それに、仕立てのよい堅い乗馬長靴が特徴です。ミセス・ウォーンは、皮製の白い支那服を

着ていましたが、大きくあけたスリットからは、エレナがはいているような皮長靴がのぞいていました。

それらの人々が、今夜の会員の全部でした。

私を交えて七人の女が、それぞれ、奇妙な皮の衣装に身をこらしめて、一つの部屋に集まったのは、なんとしても奇怪な光景でした。だれもがみな皮の衣装をつけ、皮の長靴をはいているのです。

カカトの低い長靴をはいているのは、カポと名のるあたしと、女海賊だけで、そのほかは、みなハイヒールつきの長靴でしたから、この人たちは、この特殊靴を、それぞれの目的にそって造らせたのでしよう。

エレナのコンテッサは、团长格で、一番、いばっていました。そして、まっ先に酒をおおり、並べてある食べ物に手をつけました。あたしのかたわらの席についたマドモアゼルは、マスクの中から、大きなひとみを輝

せて、あたしに耳打ちしました。

「この長靴クラブの会合は、今が一次会で、ただのパーティなの、二次会は十二時以後、夜明けまでということになっているのよ。今のうちにうんと飲んだり、食べたりして栄養をつけておくがいいわ」

マドモアゼルは、あたしの長靴にぴったりと自分の長靴を密着させて、続けました。

「あたしたちのサインは、こうしてやるのよ。それご覧、皆やっているでしょう。長靴をからませて、相手の気持ちを知るのよ！わかる、あたくしの気持ち？」

「——」

（なんのことか？）あたしにはトンとわかりません。しかし、相手の体熱が皮を通して伝わってくるのは確かです。

「あたし、気に入っちゃった！ ずいぶんアタ情熱的ね。あたし最初からつき合うわ」と、マドモアゼルは、またもや耳もとでささやきました。

あたしも、この女性があたしと同年配か、またはそれより若い年ごろだと直感しました。それであたしも負けずに、

「いいわ、それよりも前に、あんなの顔を見せてよ。そのマスクじゃ、好きになれない

わ」

「ふん。これはあたしのトレード・マークよ。顔を見たけりゃ、むしり取るしかないわ、力づくでね」

マスク嬢はニヤリと笑います。

あたしは、酒の酔いもてつだって、彼女をこづくと、席を立てて退席しました。ほかの人たちは、トイレにでも中座したと思ったでしょう。

彼女はレザー・フェチ

マドモアゼル・ド・マスクは、部屋を出るが早い、あたしの腕をつかんで、走るように、つきあたりの小部屋に引きずり込みました。

あたしも負けていません。

あたしの指の爪は、彼女の顔のマスクをしっかとつかみかかりました。彼女は、あたしの長い髪の毛を引っ張ります。あたしは苦しいので、長靴の脚を相手の脚にからませて体重をかけたので、マスク嬢はドッとはかり床の上に転倒しました。

しかし、そんなことぐらいでひるむ相手ではありません。今度は、あたしのワイシャツの中に両手を入れると、乳ぶさを握り、マス



**男性の悩み
解消**

発明博、展覧会優賞受領
多数専門医家の御使用

性器短小、勃起力減退等の生理的欠陥のために、男性としての自信を失い、失意の暗い人生に悩む人は今直ぐ申込まれよ、医大教授を始め医家の御注文と、発明展覧会より金牌を受領せる性能の素ばらしい優秀器。

日本政府登録商標

テンマ真空器

定価 金千六百円 荷造送料 金百円
テンマの使用で性器は強大となる。

説明書申込次第無代密送
先ず説明書を一読してその真価を知れば世の中が明るくなる。

夫婦和合の秘器（物理的原理応用）
リックバンド（リング）本器の使用で早漏を防ぎ、勃起力が倍加する。

定価一組金四百円（送料共）説明書進呈
東京都目黒区下目黒四丁目九七四のA

振替東京七七三九番 **錦光社**
電話目黒九五三三番

目黒駅よりバス停四つ目下目黒四丁目下車スグ

クの顔を近づけて、その毒々しく塗ったくちびるで、あたしの乳首を吸います。

あたしは、皮くさいにおいで、息がつまりそうになりながら、次第に快美感がからだじゅうに広がってくるのを覚えました。

しかし、ここで負けてはならないと、左右に首を振る皮のマスクをしっかりとかかえ込むと、その強く締めたバンドを少しずつゆるめて行ったのです。

「アッ」と叫んで彼女は首を上げました。ついにマスクははずされました。皮のマスクは、あたしの手の中に残りました。

その顔を見たとき、あたしは（ああ、ひどい！）と思いました。

その美しかったに違いない顔の左半分は火傷のひどいひつつれができて、この女性をふた目と見られぬ醜女しゅうじょにしているのです。

「とうとうあたしの秘密を知ったわね。もうただじゃおかないわ」

とわめくと、あたしのベルトに手をかけるや、すばやく解き、次いで、スカートに手をかけました。

あたしは、もうかなり気分を出してしましたから、彼女のなすがままにさせました。

彼女は、わけのわからぬ呪いのろいのことばをは

きながら、あたしの尻を、鞭でピシャピシャたたきます。

しかし、その鞭はたいして迫力のない柔らかい感触で、かえってあたしのマゾ気分をそそります。

あたしは、次第に興奮する自分を自制することもできず、この女の首に片腕をからませて、その醜い顔にはほずりし、もう一方のあいている手の指先を、プリーツスカートの下にそっと挿入して、この女のごきげんをとるのでした。

マドモアゼル・ド・マスクが、随喜ずいきの涙をポロポロ流し、うめき声を立てて、あたしもろともに、のけぞったのは、それから十数分後のことでした。

こうして、マスク嬢を自分のものにしたあたしは、その場で、彼女の皮のマスクを奪い、ぶんぶん強いにおいのする皮で顔をおおいました。

そして、ワイシャツを脱いで、彼女の高価なナメシ皮のブラウスを着ました。スカートだけは、相変わらずホップスカートでしたが、長靴は、彼女の希望で取り替えた。あたしとしても、カカトの高いエナメル長靴のほ

うがより魅力的でした。

その長靴は、じゅうぶんに長く（あたしの太股の半ばぐらいもありました）、かつ顔が、写るくらい強い光沢があったのです。

あたしは、マドモアゼルの醜惡な半顔を、ブロードの髪を、ゆったりと垂らすことではとんどかくせるので、そのようにしてやりました。

彼女は、自分の衣装を全部あたしに提供したので、新しいタフタの黒いイブニングドレスに着替えました。

あたしはすその大きく割れた夜会服に長靴はおかしいと言って反対しました。

そこでふたたび彼女は、服を変えました。紅皮のジャンパーに白いタフタのトレアドルパンツ、それに、あたしの脱いだ長靴です。

彼女は、激しいレザー・フェチなので、一瞬といえども、肉体から、皮を離すことは寂しいようです。

あたしたちが一時間余りもこんなことで、中座していた広間のほうでは、どんなことが起こっていたのでしょうか。マスクをつけたあたしが、長靴をききませてドアを排した時に……（この続きは、次の機会に書かせていただくことにします。）

ママン

する――

也

お尻はすばらしい
ぼくはママンの肩へそっと手をのせた。ママンはふり向いて、ぼくらは顔を見合わせ、ニッコリ笑う。



ママン——頼子おばさまのことを、ぼくは甘えてそう呼ぶ。彼女は、ソファの上で、両手をひろげてぼくを抱きしめた。甘い、なつかしいにおいにおうわりと包まれて、ぼくはすぐうっとりとなってしまう。

なんという生地きじなのかしら。黒っぽい、さらさらとした、透けるような感じの着物を通して、ママンの柔らかい、弾力のあるオッパイが、ぼくのほおにあたって、とても気持ちいい。

この離れの洋室には、おてつだいの恵子さんだってやってこないだろう。この部屋は、ぼくとママンだけのものなのだ。

ママンは、ぼくの短く刈り上げたえり足に優しく、軽い接吻をすると、立って行って、ちょっと窓に手をかけてたたずんだ。青々とした庭木の間から吹いて来る涼しい風が、ママンのびんのあたりのほつれ毛をなぶって、部屋の中へはいつて来る。でも、そんなことより、ぼくは、ママンの立ったうしろ姿の美しいのに見とれてしまった。

なだらかな、柔らかい肩の線、髪をアップにしたえり足も、とても美しい。帯で締められた胸がきゅっとしまっ、それからゆるやかな曲線を描いた腰が、やがてふっくらとふ

の く ぼ

——頼子おばさまのお尻に、
ぼくはいつでも興奮

美 紀 中 野

くらんだお尻に続く。あまり大き過ぎはしなくて、股から脚へかけての線も、自然に流れるようだ。スリッパをひっかけたまっ白な夏たびのこはぜがきちんとはめられている。やせても、太ってもいなくて、すらりとして格好がいい。

でも、ぼくの目はやっぱりママンの好もしいお尻にひきつけられてしまう。

それは、いかにも柔らかそうで、優しく、しっとりとして落ち着いていて、そーッと話しかけて来るような、三十の女の人でなければないものだ。

見つめているうちに、夢中ですがりついて口にかんてしまいたくなる。

「まあ、なにを見てらっしゃるの」

ママンの優しい顔がふり向いて、ちょっといたずらっぽくほほえんでいた。ぼくはあわてて、思わず赤くなってしまった。

「おバカさんね」

ママンは全部の窓をしめて、手早くカーテンをおろしてしまうと、ぼくのほうに近づいてきた。

「かわいいひと」

飛びつくようにソファに腰をおろすと、ぼくをよいしょと膝の上へ抱き上げてしまう。

ママンの首にしっかり手を回しながら、ぼくは、

「重くない」

と、きまり悪そうにささやく。

「大きな赤ちゃん、わたしのかわいい赤ちゃん」

ママンは歌うようにいいながら、楽しそうにはおずりする。

ぼくのお尻の下に、ママンの、柔らかくてしこしこする股があって、ぼくは、こうされるのがほんとうは大好きなのだ。

「かわいいお手々」

いたずらなぼくの手が、えりもとへさしまれるのをおさえながら、ママンはいう。

ほんとうにぼくの手ひらは、女の子のようになきゃだ。ママンの、白い、すきとおるような手のほうがぼくの手ひらより長いからだ。

手のひらだけではない、手首もとても細っこい。ひじのところへ近くなってようやく男の子らしい特徴を示しているとはいうものの、同年輩の男の子たちに比べたら、恥ずかしいようだ。

だから、からだぜんたいだって、やせてるってわけではない。肉づきは割合にいいのだけれど、骨組みがきゃしゃだから、やっぱり女の子みたいだ。そのくせ毛ずねだけはちゃんと一人まえだからいやになっちゃう。

「紀美ちゃんのここだけは大学生らしいわ」
ママンはいつもこういって、ぼくをからかう。実際バカにしている。ぼくにいじめられて泣くこともあるくせに。

ママンの頼子おばさまは、おじさまがいない。三年ほど前に病気でなくなってしまった。だから、いまは、この広いお屋敷に、おてつだいの恵子さんとふたりで住んでいる。

恵子さんは、若くてなかなか美人だけれど、

ママンのほうが上品で、はるかにきれいだ。それに、恵子さんのぼんと張ったたくましいお尻より、ママンの優しい、ふっくらとしたお尻のほうが、やっぱり好き、なんだが甘えられるような感じがする。

お尻にも、ずいぶんいろんな形がある。細いなよなよとした、いわゆる柳腰^{やなぎこし}。歩くときもスッと腰から前へは行って行くような感じで、^{いすじ}粋筋の女の人に多い。その反対なのが出っ尻、後ろへぐっと突き出すようにぶるんぶるんいわせて歩いて行く。それから、恵子さんのような、張り切った、たくましいお尻。中年になると、これは巨大なウスのような感じになって圧倒されてしまう。

柳腰もなんだかもの足りないけれど、出っ尻だの、このウスのようなお尻だのは、あんまりよくない。ウスのてまえで、ムッチリと色白で豊満なのは魅力がある。

よく締まった、シシのような形のいいお尻というのが、西洋では昔から喜ばれたようだけど、あんまり肉感的な魅力はない。

中学生や高校生ぐらいの、まだじゅうぶんには熟しきらないポチャポチャとしたかわいなお尻も魅力的だ。

ほかに、まん丸いのだの、細いのだの、平

ッたいのだの、いろいろあるけれど、それを一々説明していたら日が暮れてしまう。

ぼくにわかっているのは、ママンの、ほどよいふくらみと豊かさを持った、格好のいい、なんだかことばではいい表わせないような優しみのこもったお尻が、この世の中で一番好きだということだ。甘えたくって、なつかしくって、ふるさとのような感じ、顔を押しあてて泣いてしまいたいような……。

ぼくは、いつから、こんなに女のひとのお尻に興味を持つようになったのかわからない、いつのまにかそうなってしまったのだ。

女のひとを見ると、すぐそのお尻に目がいってしまふ。女のひとを、そのお尻と切り離して考えることができない。

どんなに美人で、気立てのいいひとだって、うすっぺらな魅力のないお尻の持ち主だったら、ぼくは、ちっとも好きにならない。大学の教室でも、庭でも、ぼくは、女の子たちのお尻ばかり目にはいつて困ってしまうことがある。

ほかの人が、ぼくの目の向けられているところに気がついたら、なんと思うだろう。通学のとときの満員電車、格好のいい、柔らかいお尻、ぷりぷりした弾力のあるお尻がぼくの

元東京中野病院外科部長 上谷文一著

慢性淋疾短期根治

★新薬盲信の害即ち慢性淋疾の本態尿道側管淋の病理を明らかにし側管壁に生成される防壁の為薬剤は菌に到達不能となり根治至難再発する理由★現行全療法慢性淋根治至難の理由★難治淋を一回淋糸消滅十日以内絶対根治の合理的無痛無害直接殺菌の一方方法説明す★全国根治患者礼状集

発行 東京都中野区宮園通り四の五 価送料共百円

発売 東京都中野区駅前20番地(南口大 通百米左側) 宮園書店

ほうへぐいと押しつけられてきたりすると、ぼくは興奮のあまり、うわずってしまふようなことがある。それから……。

でも、あんまりほかのひとのお尻の話はようそう。ママンの頼子おばさまに叱られるから頼子おばさまのお尻が一番すてきだとほめたいし、ぼくはなんていったって、頼子おばさまが、だれよりも好きなんだから

おばさまもそれが……

頼子おばさまは、さっきから、ぼくの髪を優しくなでてくれている。こうしていると、とても気持ちがいい。このままとろけてしま

いたいようだ。

こうしてもらうために、ぼくは、毎日のように頼子おばさまのお家へ来る。たいてい学校の帰りに寄るのだが、講義のない日など、家へは学校へ行くと言って朝からきてしまうことがある。ときどき午後からの授業もサボッてきてしまう。

「いけないひとね、学校だけはちゃんと出なければいけないわ」

おばさまは優しくしかるけれど、がまんできなくなってしまうんだからしかたがない。頼子おばさまだって、ほんとうはうれしくて、ついそれが顔に出てしまっている。

この家が、学校とぼくの家の中間にあるのもいけない。

頼子おばさまのおとうさまは、ぼくのおじいさまの末弟にあたる。そして、おばさまは養子をお取りになった。だからぼくは、小さいときからこの家へはよく遊びにきていて、そのころからおばさまを慕ってばかりいたし、おばさまもぼくを小さな恋人のようにしてかわいがってくれた。だから、おばさまが、そのずいぶん年のちがったお婿さん（むこ）をもらったときには、ぼくは幼心にも、とても悲しかったものだ。

でも、そのおじさまが、四十代の若さでなくなつて、ひとりで寂しがっているおばさまが、ぼくをしょっちゅう手元に置きたがっているうちに、いつのまにか、おとなの愛人同士になつてしまった。それはとても自然に、なにかの拍子で、おばさまがちょうどきょうみたいにぼくを抱きしめて、さもいとしくてならないようにほおずりしてくれているうちに、どちらからともなくおぼれるようにそうなつてしまったのだ。

そのとき、ぼくたちは、初めからそうなるようになっていたことを、いまやっとしたという感じがしたものだ。

もちろん、ぼくは童貞だった。童貞だったくせに、ぼくが、奇妙なくせ——お尻への異常なあこがれを持っていることに、おばさまは間もなくお気づきになった。そのときのおばさまの「まあ」というように顔を赤らめなさった様子を思い出すと、ぼくは、いまでも急に恥ずかしくなつて、どうしようもなくなつてしまう。

ぼくは、いたずらを見つけられた子供のよう、に、柔らかい羽根ぶとんの敷かれたベッドの上で、まっかになつてうつむいてしまつていた。おばさまには知られたくなかつたのだ。

ぼくの恥ずかしい欲望。それは、おばさまだけにあこがれて、ほかの女の子にはほとんど興味を示すことのできなかつたぼくの閉ざされて、内攻的になった思春期が、自然とはぐくんていったものかも知れない。

そして、ぼくは、その持ち主とは関係なく、女の人のお尻への異常な興味を激しく燃やし続けてきたものだ。それが、孤独なぼくの、唯一の慰めでもあった。

おばさまとの、望みうべくもなかつたこうした関係を持つようになって、ぼくのその異常な性癖は、もう取り除くこともできず、悲しく定着してしまつていた。

おばさまは、なんというだろうか、ぼくはおばさまの目を見られないで、いつまでも頭を上げられなかつた。

「いいのよ、紀美ちゃん」

おばさまの声が優しく聞こえて、ぼくは、そつとひきよせられた。臆病（おくびょう）に見上げるぼくの目に、おばさまの顔も優しくほほえんでいる。ぼくはとたんにおばさまの胸にしがみつき、なにかわけもなく泣いてしまつた。

「おバカさんね、おバカさんね」

おばさまの手は、いつまでもぼくの背をなでていてくれた。

それからはおばさまは、ぼくが求めなくても、ぼくの望みを満たすようにそっと導いてくださる。

ぼくの頼子おばさま、ぼくのママン。でも、もしかすると、もしかするとおばさまは、ぼくのそんな求めに答えるものを持っていたのではないかしら。このごろ、ふっと、そんなふうに思うことがある。

どうしてといわれると困ってしまうけれど、ぼくが、そういうことをするとき、ママンがとても喜ぶような気がするのだ。ママンはとても夢中になって……。

こんなことを考えては、ママンにいけないけれど。

ゆっくりなでるとき

おばさまとぼくの秘密には、いつも、この離れの洋室が使われる。このごろでは、ぼくはすっかり大胆になって、おばさまのうえにも平気で、ぼくの異常な行為を加えるようになった。おばさまがすなおだからいけないんだ。おばさまがそれでも「アッ」と思わず叫ぶような目にも合わせる。

おばさまの胸にうずまって、いろんなことを考えているうちに、ぼくの中の小悪魔が、だんだん目を覚ましてきた。

ぼくの手は、そろそろとおばさまの腰からお尻へ伸び、すそをさぐった。ママンは気づいているのか、気づいていないのか、ぼくの髪をそっとなで続けている。

ゆっくりと、そしてすばやく、ぼくは、ママンの下着ごとたくし上げてしまった。

「あっ、いや」

ママンは、あわてたようにぼくを突き離し、お尻をずらせる。

でも、もう間に合わない。

ママンの雪のようにまっ白なお尻が、むき出しになる。そして、それが、一瞬の羞恥にバラ色にそまったような気がする。おばさまはいつも、決して、いまの若い女のひとたちが着けるような下着をつけない。

「ダメよ、ダメよ」

そんな声も、ぼくには、もうママンの甘えにしか聞こえない。ソファに顔をうずめて、



身をもむようにするので、たえようもない魅力を持ったそれが、ぼくの顔にいつそう近近とせまる。しゃにむにむしゃぶりつきたくなるような誘惑も覚えるが、ぼくはそこに手を触れると、そっとほおをあてた。

やわらかい、ほんとうにやわらかい、そしてぼくを抱きしめて長くすわっていたせいか、ふだんだとひやっとする感じのそこが、なんとなくぬくもっている。ときどきぴくぴくといれんが伝わって、それがとても快い。いつまでも、いつまでも、ぼくはほおずりをくり返す。大切な、大切なもののように。なつかしいママンのにおい——ぼくは、深々と吸いこむ。

おばさまは、もう両手を顔にあてたまま、じっと動かない。

ぼくは、ほおずりにあきると、こんどは、顔をこすりつけるようにしながら、熱烈な接吻をする。夢中になって、あっちにも、こっちにも、もう所きらわず、赤いあとがつくほど吸う。

そのところになるとおばさまの口から、

「ああ」

というため息がもれ始める。

もしもじとお尻を動かしながら、両手にこ

ぶしをつくって、身を乗り出すようにする。

こうなれば、ぼくももう、恥ずかしがったり、テレたりする必要がない。そんなことを考える余裕もなくなってしまう。

ぼくの興奮がママンへ、ママンの興奮がぼくへ……、ぼくはママンの口づけのためばかりではなく、すっかり桃色に上気したお尻をしっかりとかかえこむようにして、舌先でちよろちよろとなめて行く。ママンはくすぐったがってけんめいにのがれようとするが、ぼくは許してあげない。ゆっくりと、わざとじらすようになめまわす。しっかりと押えこんでいるお腹^{なか}がじっとり

と汗ばんで、ママンは、ハッハッと短い息をつきながら、もがき苦しむ。

あんまりするとママンがかわいそうになる



ので、ぼくは、顔を離し、ママンを抱き起こして、ひたいの汗をふいてやる。ぐったりとしたママンのからだだが、いっそう重く感じられ、涙をにじませたうるんだ目が、うらむように軽くにらむ。上気した顔がなまめかしく、ママンの顔が一番美しくなるときだ。

「ごめんなさい」

ぼくがいうと、ママンはすそをおろしながら、恥ずかしそうにぼくを抱きしめて接吻する。

そうして、少し休むと、また、ぼくの手はママンの着物の中へはいって行く。もうママンはなんともいわない。じっと抱き合いながら、ママンのほてったお尻をいつまでもなでているのがぼくは好きだ。

はじめて浣腸を

ママンとぼくのこんな遊び方には、もっといろんな方法がある。はじめぼくも恥ずかしくてなかなかいいだせなかったし、ママンも恥ずかしがって許してくれなかったことも、いまではずいぶんするようになった。

じゅうたんの上にうずくまったママンの着物のすそをまくってしまつて、ぼくは十分でも二十分でもながめている。ママンの白たびが、この場合素、足よりもいっそう魅力的になる。

ぼくはママンのうしろのひじかけイスにすわってじっと動かないし、ママンも、ぼくの気のすむまでそうしてくれている。まっしろな小丘と小丘とがまん中で合わさって、それ

が格好のいい二本の円柱につながっている。そして、それぞれ丘のはしにポコンとできる愛らしいえくぼ。

でも、ママンが一番恥ずかしがるのも、この格好だ。しっかりと両股を合わせて、じっと目を閉じている。ときどきぴくりとからだを動かすこともある。それでもぼくが、

「あれ」

とおねだりすると、しかたがないひとというような目をして、静かに求める姿勢になってくれる。

そのあとは、恥ずかしさからか、ただ見つめられているというだけなのに、ママンはとても興奮したようになって、ぼくをすごく優しくしてくれる。

ぼくはこんなふうにして、ママンのお尻を見るのが好きだ。ぼくのいっとう好きなことかもしれない。

ぼくがすごく興奮してしまうのときだ。

ああ、ママンのお尻、すばらしいお尻……。ないしょだからいいけれど、お尻のことばかり話しているとママンにしかられてしまうかもしれない。だけど、しょうがない。ぼくは、お尻が、ママンのお尻が、大好きなのだ。

もの。ママンも、もうそれは許してくれてるはずだ。それにママン自身だって……。

ぼくは、ママンと一度だけいっしょにお風呂にはいったことがある。それは、恵子さんが知り合いのうちへ泊まりに行ったときのことで。そのとき、ぼくは、ママンのからだを洗ってあげるといって、ママンのお尻だけを、いっしょけんめい洗っていたので、しかられてしまった。しばらくじっと任せておいて、

「まあ、なんて子でしょ、ほんとに」だって。そして、フフと含み笑いしている。

ぼくは、ママンが笑うもんだから、そこを

サド・マゾ・フェチシストにひそかに贈る 泰西出版資料の2大コレクターズ・システム



第1類

ヌートリクス社出版物の中から最上の選択で毎月定期的にお手元に最低の費用で資料をおとどけます。全30回 30カ月にわたる月ぎめコレクション

初回 5000円、以後毎月 2000円

第2類

ヨーロッパの同好者が贈る個人作品の分割20カ月にわたる大集成
初回 5000円、以後毎月 2000円

○ゴルドン社版短期収集会

5カ月で各種の収集全部がそろふ。
初回 10,000円、以後毎月 2000円

○夏期特別予約

ヌートリクス社小冊子3冊1組の廉価集
(いずれもくわしくは返信料添付のうえ
で本社あてお申し出てください)

泰西出版資料会社 横浜市中区北方町 1-67
Sitten-Bild-Verlag KG. TEL (2) 9313

思いつきつねってしまった。ママンは飛び上がって痛がった。つけ。

それからぼくは、ママンのお尻をつねることも覚えてしまった。はじめ、痛い、痛いって、なかなかつねらせてくれなかったママンも、しまいには、眉をひそめてつねらせてくれるようになった。その顔を見ていると、なんだか気持ちよがっているみたい。

でも、ぼくがママンに一番したがって、ママンが最後まで許してくれなかったのは、浣腸だ。それは、ママンにとっては恥ずかしいことに決まっているからだ。ぼくだって、とても恥ずかしい。

だけど、ママンのアヌスは、とても愛らしい。ぼくは、ほかの女のひとなんか知らないし、ママンのものはみんな、そう見えてしまうのかもしれないけれど。だから、一度浣腸してみたいと思っていたのだ。

きのうはじめてママンを説きふせて、それをした。ママンは、ぼくのいうことは、けっきょく、なんでも聞いてしまう。

ママンをそっとソファの上に寝かせて、ぼくは、ぶるぶるふるふる手で浣腸器を持った。ママンの着物をひきあげるのも、なんだかいつもとはちがうような興奮を感じる。

ぼくは優しくひらいて、ゆっくりと浣腸器をさしこんだ。

ママンのお尻が、瞬間キューンと締まるようだった。それが、ぼくの手にも伝わって、しびれるような陶酔が全身にひろがるのを覚えた。ぼくは泣きたいような気持ちになって——ぼくは感情がせまると、すぐ泣きたくなってしまうんだけど——ママンをいたわるようにあと始末していた。

そのとき、だれか女のひとの頭の影が、チラッとカーテンの間から消えた。ぼくが「あっ」といったので、ママンも気がついた。たしか恵子さんだった。

そのときは、あんまり暑いので、カーテンだけひいて、窓をしめなかったのが失敗だった。恵子さんだって、わざわざのぞきにきたわけじゃない。なにかの用事で庭を歩いていて、ひいてあるカーテンに若い女性らしい好奇心が動いたのだ。

でも、ママンとぼくにとっては、あまりにも大きなショックだった。ふたりともあおざめた顔をしばらく見合わせていた。

なにもかもダメになるかもしれない。恵子さんはママンの遠縁の子で、おとうさんもおかあさんもなくしてしまったので、ママンが

引き取っていたのだ。養女にするつもりかしない、とぼくたちの親戚ではいつている。

養女といえば、ママンは、ぼくに、このごろ、「ママンの子にならない」といつている。うっかりすると、父や母にもなにかいつているかもしれない。ぼくは三男坊だ。そうすると妙なことになる。しかも恵子さんは見てしまったのだ。とんでもない悲劇になるような予感がした。

でも、もうしようがないわ、ママンはなにか決心したようだった。ぼくたちがこれからどうなるのかわからない。でも、もうママンに任せてしまった。だから、きょうだって、かえってくそ度胸ができて、こんなことをしているのだ。きのうのママンは、

「あの子もわたしたちの仲間に入れてしまったら」

こんなことをつぶやいていた。異常な決心をしたような顔だった。どういふことなのかぼくにはわからない。ぼくはただ、ママンが好きだ。だから、もう、あしたのことなんかどうなったってかまわない。

恵子のことについては、またあとで語らなければならなくなるかもしれない。

ふんどしマニアの女 分部 久

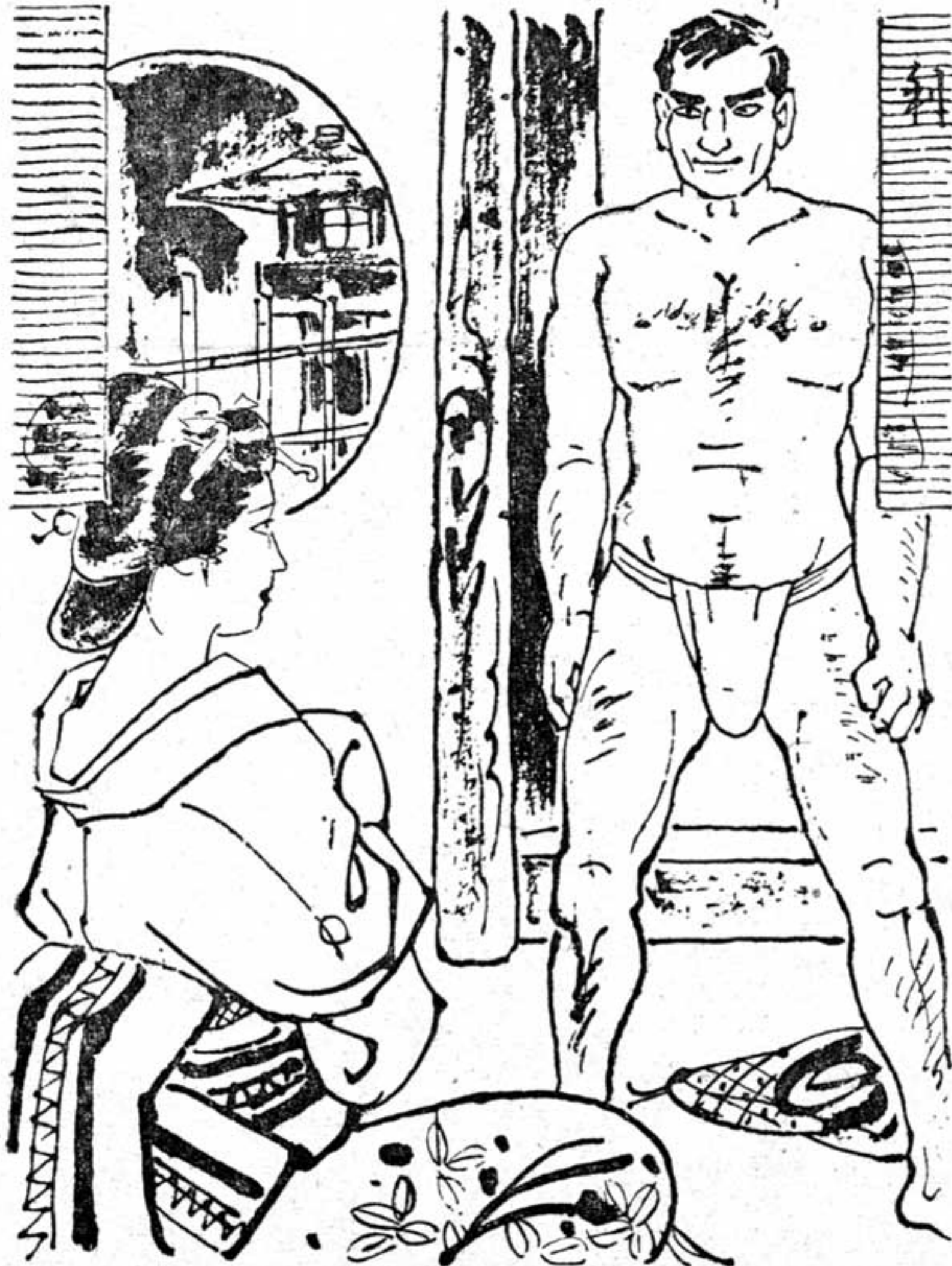
“ふんどし芸者”と異名をとった女のふんどしにまつわる逸話――

昭和のはじめ、新橋に“ふんどし芸者”と呼ばれて、有名な芸者がいた。“^{つた}蕪の家”の自前芸者で秀香^{ひさか}という女だった。

彼女は、自分がふんどしを愛用するわけではなかったが、男のふんどしをキリリと締めた姿が大好きだというねえさんだった。

しかも、なかなかの美人で、そのころ目黒の雅叙園で開かれた“現代代表美人写真展”で、百人の美人のひとりに選ばれたくらいである。

声もよかったので、売れっ^こ妓で、繁盛していた。おまけに江戸っ子の気っ^こぷのよさをもっていたので、金づかいが荒く、人気はあがる一方だった。



その彼女には、なかなかおもしろい逸話があるが、そのなかでふんどしに関するものを二、三紹介しよう。

浜口宰相一本参る

昭和五年の春ごろのことである。時の宰相さいしやう浜口雄幸が新橋に遊んだとき、秀香が呼ばれた。謹厳な浜口さんも、美女を相手に杯を傾け、その夜は、そこに泊まることとなった。自然に秀香が、その夜の席に待まちることとなったのだが、そのとき彼女が、

「閣下、裸になって見てください」と言い出した。

突然のことでびっくりしたが、酔いもてつだって、浜口さんは即座に、

「よし見せてやる」と洋服を脱ぎすてて、禪一つになった。そして、

「ふんどしは取らなくていいかね」と聞いた。彼女は、

「ええ、けっこうです。そのまましゃんとお立ちになってください」といって、そのふんどし姿をしばらくながめていたが、やがて、そこへ手をつけて、

「閣下、今夜はこれで失礼させていただきます」と、丁寧に頭を下げた。冷たい口調だった。

た。

「いった、どうしたというんだ？」

「閣下のふんどしがゆるんでいるようですので……」

「ふんどし……？」

「はい。男のだいじなところを包むふんどしが、ゆるんでいたたり、よごれていたたりする人は、あたし、大きい。どうせ、心のゆるんだ、たよりない男に決まってるんですもの」

そういうと彼女はあでやかに笑って、ふすまをしめて立ち去った。

「わはははは、こいつは一本やられたわい、あっぱれなやつ！」

あとに残された浜口宰相、さすが腹ができているだけに、大笑したということだ。

泥棒に禪二百本

それより少し前、昭和三年十一月に、今の天皇の即位式があった。新橋でも、政界の連中が集まって祝賀会を開き、秀香も、その席によばれ、夜おそくなって帰ってきた。

酒の酔いと疲れで、彼女はすぐ床について眠ってしまった。

どのくらい眠ったろうか、のどのかわきにふと目のさめた彼女は、まくらもとのスタン

ドをつけて水差しに手をのばそうとした時、だれかはおかむりした男が、向こうむきになってタンスの引き出しをあけているのが、目にはいった。

「だ、だれだい？」

度胸のいい秀香は、起きあがるなり、鋭く声をかけた。

その声に男は、くるとこちらを向いたがその場へすわりこんでしまった。

「なにしにきたんだい」

「いわずとした泥棒さまよ」

「おや、きのどくだったねえ。あたしゃ、宵越しのお金が身につかない貧乏芸者だよ。とんだお門かどちがいったね、ホホホホ」

「おい、ねえさん、静かにしねえ」

男は言って、ふところから短刀を出した。

「そんなものに驚く秀香ねえさんじゃないよ。お寒ッ！」

秀香は、男を無視して立ち上がると、茶ダースからウィスキーのびんをとり出して、コップにつぐと一気におおった。

「ちよいと、おまえさん、こんな貧乏所帯にはいり込んだのも、なにかの縁さ。どうだい、一ぱいやらないかい」

秀香は、コップを男にさし出した。

男も、彼女が別段さわぐ様子もないので、少し安心したらしく、

「うむ、せっかくだから、一ぱいもらおう」

と彼女の前にきて、あぐらをかいた。

「ほおかむりぐらい取ったらどう？」

「うむ」

「顔を見たからって、警察へ訴えたりするほどケチなあたしじゃないよ。安心おし。……おや、おまえさん、なかなかいい男じゃないか。泥棒なんて柄じゃないよ」

男は二十七、八の好男子。秀香のついたウイスキーをなめながら、

「そう言われると恥ずかしいが、おらあ十七の年に、たったひとりのおふくろに死なれてそれから他人の飯を食ってきたのだが、十九のときからグレだして、二十七の今日まですっかり身もちくずしてしまった。近ごろどうやら正業にかえる気になったが、まともな仕事をしようにも、先立つものが一文もねえ。そこで悪いと知りながら……」

「そうだったのかい。せっかくはいったのに悪いところへはいってしまったね」

秀香はその時、ひざをむき出しにすわっている男の股間に目をやった。まっ白いふんどうしをキリリと締めている。ああ、この人は、

根はしっかりしてるに違いないと思った。

「ね、おまえさん、本当に改心するつもりかい？」

「うん、そのつもりだ」

「じゃ、あたし、お金はないけれど、いいものをあげよう」

彼女は立ち上がると、押し入れの中から、きれいに洗たくしてアイロンをかけたまっ白なふんどうし二百枚ばかりを取り出した。

「なんだいこれは？」

「ふんどうしよ」

「えっ、ふんどうし？」

「あたしが、お客さんからもらって集めたのよ。みんなしっかりした人のふんどうしだからだいじょうぶ、きっと運が向くよ。一本から手ぬぐいが三枚とれるから、そうしたら六百本ぐらいできるだろ、これで、なんとか身を立てられないかしら？」

「ありがてえ、ねえさん。こいつを染め直して売って、きつとまっとうな暮らしをする。すまねえ」

男は、頭を畳にすりつけて礼をいい、二百本のふんどうしをもらって立ち去った。

記念に褌をちようだい

これより前、昭和二年の春先のこと、秀香は、ある料亭からお座敷がかったので出かけていくと、お客がひとり、ポツネンとすわっていた。鼻の低い、ブ男だった。

「こんばんわ、毎度あり……」

「いや、わたしは、今晚はじめてあなたをよんだのです。じつは、あなたのお名まえを慕って、はるばる甲府の在（ざい）からやってきた井筒重蔵というヤブ医者です」

その男はそういって、丁寧に頭を下げた。ブ男はいくらもいるから、そう驚かなかったが、その男が言い出した次のことには、さすがの秀香もびっくりしてしまった。

「じつは秀香さん。お願いがあつてうかがったのです。わたしは今年三十一になりますけど、どうにか不自由なく医者として暮らしております。だが、ご覧のとおりこの顔です。そのため、今もって嫁にきてがありません。しかしわたしも男です。なんとかして、日本一の美人と、一夜でもいいから、まくらをかかわりたいと、はるばるやってきたわけなのです」

これには秀香もびっくりした。そして、バカにするな、とも思った。だが、男の目には必死の色が浮かんでいる。

それを見てとった秀香は、男がきのどくに

なってきた。そこは江戸っ子のことだ、よし、あたしが一夜かわいがってあげたら、この人はこれから人生にどんなにか自信をもつことだろう、と考えた。

「よくわかりました。場合によっては、あなたの願いをかなえてあげましょう。じゃあ、裸になってちょうだい」

「えっ、裸に？」

「ええ、ふんどし一つになってください」

こんどは、男のほうがびっくりする番だっ

た。しどろもどろになりながらも、それでも、洋服を脱いで褌一本になった。「しゃんとして、あたしのほうを向いてちょうだい」

言われるままに男は、秀香の前に直立不動の姿勢をとった。五尺六寸ぐらいはあろう。均勢のとれて、ひきしまった体格で、まっ白い六尺ふんどしがキリリと締まって、顔に似合わず、みごとであった。

「まあ！」

△女装のための美容講座▽

目を美しく見せるコツ

美しい表情の90%は目で作られます。このメイクアップがおろそかでは、ほかがどんなに美しくとも、魅力は半減します。正しいメイクアップこそ、女装の美しさを倍加するものです。

アイ・シャドウ——目をチャームアップにしたり、すっきりみせるために使われるものです。鼻すじの通った高い鼻に見せるためにも用いられます。

それに、目は衣装の色が反射するところですから、そこをよく考えて色を使いわけします。洋服が、紺、紫、赤の場合にはバイオレット、青、茶、緑だったらグリーンやコバルト、夜のはなやかな装いにはコバルトかブルーを。

つける量は少量、上まぶたのまつ毛のはえぎわに5ミリくらいはかします。日本人は外国人にくらべてまぶたがはれはったいのですから、オーバーにならないようにすることが大切です。

細い目の人は、目の上にピラミット型にぬると大きな目に見えます。下がりに目は目じりの上にほかします。

眉——髪や目の色に合わせて、おもに茶系統の色を使います。眉の長さの目頭から外眦以内で眉角をきめ、一本一本、毛を植えるようになだらかなカーブを描いていきます。山を高く描いた眉は顔を長く、山を低く描いた眉は顔を丸く見えます。

まぶたの両はしにつけ、上のほうに指でぼかす眉は目と眉の間をせまく見えます。眉じりの長さは、鼻と目をむすぶ線まで入れると立体的な知性美をえがきます。

アイ・ライン——目を美しく強調したり、目の型に欠点のあるときはそれをかくしたり、つまり目を印象的に見せるものです。黒いのはやばい感じがします。ブラウン系のアイブローペンシルで上まぶたのまつ毛の生えぎわに、はそく一本入れます。上まつ毛のきわの両はしを少し上にはねると大きな目に見えます。そして、アイシャドウと同系の色をつかうほうが無難です。

マスカラ——寝る前にベビーオイルやオリブ油を付けておくのがコツです。つけるときは上だけにします。あまり長い間つけておくと目がつかれ、美容をそこねますからご注意ください。

△大熊早苗▽

秀香は、感嘆の声をあげて、その夜は、夜を徹して自分から打ち込んでいった。

その翌朝、男は床の上はきちんとすわって、

「ご恩は一生忘れません」

と丁寧にあいさつした。

「じゃ井筒さん、そのふんどしを記念にあたしにくださらない？」

「は、光栄の至りです」

井筒は請われるままにそのふんどしを秀香の手に残して、喜んで帰っていった。

後日譚になるが、五年ほどたって、秀香が足にケガをした。丹毒^{たんどく}だったので、命にかかわる重病だった。

片足を切らねば助からない、とすべての医者がいったとき、わたしが責任をもってなおしますと申し出て、みごと手術に成功したのが、このときの井筒医師だった。

奇しき再会に、ふたりが喜び合っているところへ見舞いの客がきた。これまた不思議な因縁で秀香に助けられた、かつての日の泥棒後藤重次郎だった。

後藤は今では、りっぱな呉服屋の主人となり、秀香を迎えて妻としたのは、それからいくらかたないことだった。

〱告白手記〱

おシリ、おしり、お尻……

わたしはきょうも女のお尻を追う

久 我 良 平

臀部こそ悪者

いつからぼくにあの奇妙な病気が始まったのかは知らない。そうして、それはもうどうしてもやめることのできない習性になってしまっている。

もしぼくにいくらかの説明を加えさせてくれるとしたら、ぼくは、「あの彼女たちの豊かな臀部に魅せられてあとをつけているだけだ。ツミがあるなら、あの左右にゆれる彼女たちの臀部こそ悪者だ」というしかない。

それでもわからない人は、ぼくのささやかな、しかしいつわりなく書いた日記を読んでください。



マイアミの亮子

×月×日 晴れ

けさ起きて鏡を見ると^{まぶた}瞼がはれている。睡眠不足のセイだ。油っけのない髪が顔にたれてひどく寂しい気持ちだ。しかしぼくにはこの病気はやまらない。

「マイアミ」の亮子^{りょうこ}を尾行し始めて、きょうで四日めになる。案の定、彼女はたいへんなカマトトだった。

社の帰りに「マイアミ」による。亮子はいつもより一インチほど短めのショート・スカートに明るい色のブラウス、ピカピカするメッキのイヤリングがひどくいやみだ。

「あら、あんた、きょうもひとりなの……」おれの顔を見ると、彼女は大げさな表情でそういった。

「まったく、あんたいつもひとりで、ムツツリしてるのね……」

返事もせずにいると、亮子はパイと向こうのボックスに行ってしまった。

この豊かなお尻^{しり}をプリプリ動かして歩く姿がたまらない。オレがここに通うのは亮子の、この後ろ姿をながめるだけのこと。あと客はみんなこの亮子をハりにきているか

ら、齒の浮くようなおせじをいって彼女の気を引こうとするが、オレはそれをやらない。

だから彼女には気に入らないのだろう。

そうだ、オレはひとりだ。しかし世間のやつらはなんだってあんなにしゃべったり、つながったりして歩くんだろう。男と男、女と男、女と女。オレにはあんな無意味な社交や恋愛よりも、ひそやかな孤独をたのしむ。孤独な男には、またそれにふさわしい遊びがある。

「亮子さん、今夜ぼくにつきあわないか」

「ダメなのよ。だってあたし、お店がすんだら、まっすぐにお家に帰らなくちゃ……。うん、ほんとなのよ。うちのおとうさんたら、そりゃ厳格なんですよ」

隣のボックスの客にしゃあしゃあとそう答えているのが亮子。女というものは心臓の強いものだ。オレはなんでも知っているんだ。

ゆるるヒップの曲線

オレはすぐアパートに帰って、いつものしたくをしてから再び外出した。黒のスボンに黒っぽいスポーツ・シャツ、ラバーゾールの靴、これなら昼間のオレを知ってるヤツでもまさか気がつかないだろう。

例のガード下に着いた。この場所から斜め

右前方に「マイアミ」のネオンが見える。ひどく見とおしがいいのだ。

夜光どけいを見ると九時半だ。夜の「マイアミ」は映画帰りの客が目当てだから、十時半には灯が消える。このガード下で一時間待つわけだが、オレにとってはこの一時間が一日のうちでもっとも期待にみちた時間だというわけだ。なにしろ想像は自由だからね。それに頭の上をひっきりなしに通る国電の音が、まるでジャズのようにオレの期待をかき立ててくれる。

パトロールの警官が、うさんくさそうにオレを見て通る。だが、さすがに声はかけない。うっかり見のがすところだった。まだ十時というのに、もう亮子が出てきたのだ。急ぎ足で橋のほうにまがる。オレはゆっくりと尾行を開始した。

案の定、橋のたもとで、背の低い男といっしょになる。この男は新顔だ。しかしどこかで見たことがあると思うと、そうだ「マイアミ」によく通ってくる自称カメラマンだとかいうキザな男だ。景気はよいらしく金ブチめがねに金側とけい、なんでも金ピカ趣味の男だ。ふん、これが亮子の四人めの男か……。

亮子は今夜もしきりにあの癖を出す。右手

は男と腕を組んでいる。ハンドバッグをさげ
た左手で、忙しく靴下をひき上げる。それを
半丁ごとぐらいには繰りかえすのだ。あれで
はよっぽどくたびれたガーターをしているの
だろう。しかしそのたんびに彼女の豊かなヒ
ップをハッキリと現わす曲線が、豊かにゆれ
る。夜目にもそれがくっきりとわかって、オ
レはゾクゾクする。

男が手をあげた。タクシーがとまる。オレ
もほとんど同時に小型をとめる。

「どちらへ」

「あの車を追ってくれ」

「……………」

運転手はチラッとオレの様子を見てヘンな
顔をする。そんなとき、オレはひとりごとの
ようにつぶやいてやるのだ。

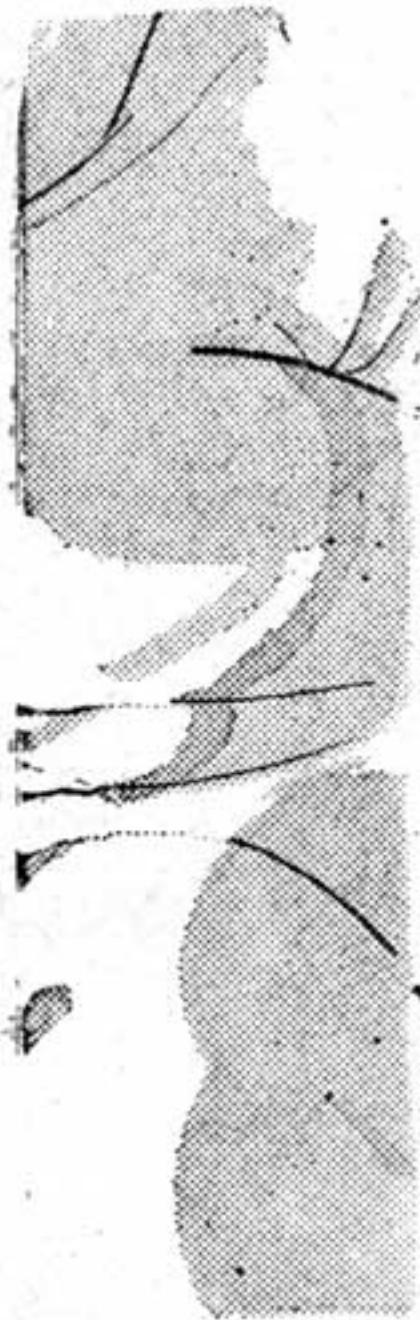
「あの車に、女房が男と乗ってるんだ」

これは効果がある。

「ようがす」

運転手は町の正義派だ。車は勢いよくスタ
ートする。

だが、オレはときどき本当に女
房を……、オレの女のあとをつけ
ているような気がする。尾行して
いるとき、その女は少なくともオ



レの情婦だ。オレの目をかすめてよその男と
うわ気する女を、オレは尾行しているのだ。

「マイアミ」の亮子は、変屈男へんくつおとこのオレには手
一つ握られたことはない、というだろう。

が、なんといってもダメだ。オレが尾行し
ているときはその女はオレの女だ。だから今
夜も亮子はオレに対して不貞を働いているこ
ともなる。あのオレの……オレを魅了した
豊かな臀部が、オレを裏切っているのだ。

前の車が止まった。オレはわざと追い越し
てから車を止めた。上野駅に近いホテルの前
だ。もつれあってドアに吹い込まれて行っ
た。

オレはすぐ近くの都電の停留所に立って、
タバコに火をつけた。うまい。尾行中はその
タバコさえ忘れていた。オレは深くタバコを
すいこみながら、しかし注意深く前方を見守
っているのだ。

灯がついた。二階の右から四ツめの窓だ。
チラと亮子の影が窓を横切る。やっぱりあの

窓だ。チビの金ピカの男が亮子を抱く。畜
生、あの豊かなヒップも、あのイヤらしい男
の手が遠慮なくなでまわしているのだ。

オレは、オレが乗る終電の時間まで、その
ホテルの前をうろうろと歩き回った。あの窓
の灯はいつまでたっても消えない。おそらく
煌々たる電灯の下で、あの男は亮子のヴォリ
ュームのある肉体を鑑賞し愛撫しているのだ
ろう。からだじゅうの骨がピシピシと音を立
てて鳴るような気がした。

これがオレの嫉妬しとなのだ。アパートの冷た
い床の中に帰っても、オレの妄想もうそうはつづく。

恵子の情事

×月×日 曇りのち雨

オレの目下の女は古橋恵子だ。もちろんオ
レが一方的にきめたことだけど……。

彼女は二十三歳。オレと同じ会社にいるタ
イピストで、背丈せたけは五尺三寸はあるグラマー。

そのうえ、ハイヒールをはいて歩くときの
臀部の動きがすばらしい。ことに、彼女が階
段を上るあとから、ついて行く時のながめ
は、またとない盛観である。女の後ろ姿は、
鼻につくほど見あきっているオレでさえ、その
リズムカルな動きには目をうばわれる。

きょうは土曜日、十二時半には社を出ると同時に、かねて用意しておいたレインコートをカバンから出して着る。チャコール・グレイはくすんだヤツ。社ではこんなレインコートをオレがもっているとはだれも知らないから、きょうの目的には最適なのだ。

一時ジャスト。古橋恵子が舗道に現われる。友人のBGがふたり。しかし、これは駅近くで別れる。別れると急に急ぎ足になる。これは待ち合わせにちがいない。

オレはコートのえりを立てて、切符売り場に並んだ恵子から三人おいたうしろに立った。まともに顔を見られたら最後だが、女が男と会うために歩くときは決して後ろはふり向かないものだが、ちょっとこのスリルはたのしい。

「渋谷……」

オヤ？ と思ったが、そのまま彼女のあとを追う。例の五尺三寸のグラマー・ヒップがびくびくと階段を上って行く。

大事をとって、隣の電車に乗る。行き先が



知れているのだから楽なものだ。恵子はなれきたように、駅前の広場をつつ切った。あきらかに渋谷は彼女のホームグラウンドらしい。オレはなんだか息苦しくなってきた。

恵子がいっただのは小ぎれいなフルーツ・パーラーだ。やっぱりデイトだ。こんな店に

なんの意味もなくひとりではいるわけがない。オレは五、六軒手前の街灯にもたれながら、店にはいる客を見張った。恵子の相手はどんな男だろう。どんな男がああすばらしい臀部を自由にするのだ。

夏のあつい日に照らされながら、嫉妬にオレの唇はカサカサとかわいた。今や、女はオレを裏切ろうとしているのだ。

出てきた、ふたりだ。男は彼女より先に中で待っていたらしい。ギョッとオレはびっくりした。

まちがいない。相手の男はなんとウチの会社の経理部の部長だったのだ。オレはあいつらのあとをつけながら、声を立てずに笑った。タイプピスト古橋恵子の男は経理部長だ。まったくうまくできてやがる。

それにしても、あいつらはしらじらしい顔で立ち回っていたものだ。このオレでさえ、気がつかなかった。おそらく、社内でもだれひとり知るまい。

だが、もうオレが知ってしまったのだ。あいつらは人目を恐れるように、横丁へ、横丁へとそれながら歩く。しかしもうオレの目からはのがれられやしない。

あいつらは、小じんまりした旅館の門をく

ぐった。なれきった態度だ。いきつけに違いない。楽山荘とある。白昼だから恐れいったものだ。

オレはこの楽山荘を中心にグルグルと歩き回った。ジッと立ち止まってはいられないのだ。今ごろ、古橋恵子は、あの好色そうな部長に抱かれて……いや、ふたりはいっしょに風呂にでもはいっているかも知れない。彼女のあの日本人ばなれのした豊かなヒップに、部長の赤黒い腕がかかる。恵子は嬌声をあげる。部長はタバコくさい息をはきながら……。

あいつらが出てきた。旅館にはいつてから三時間と十分だ。部長が彼女のハンドバッグをぶらさげている。社でのソリかえった部長を思うと情けないほどだ。恵子の唇は赤々とぬり直されている。だが、彼女はたしかに美しい。

女狐の報酬

×月×日 曇り

古橋恵子を尾行し始めて一週間め、きょうも土曜日だ。彼女の男との関係を知ってみると、そのあまりのしらじらしさに、オレは自分の目を疑いたくさえる。女とは、なんと

いう狡猾な動物なのだろうか。

十二時過ぎ尾行開始。恵子はどうも、朝からソワソワしている。どこことなく変わっている。それがいっそう、オレの尾行欲をそそいだ。

十二時半、彼女は大胆にも社の近くの喫茶店で部長に会った。だが約五分でまず部長がひとりで喫茶店を出た。社のほうに戻るらしい。オレは靴をみがかせていた。やがて恵子が出てくる。セカセカと駅に急ぐ。きょうは部長のお供はやめたらしい。

駅の構内にはいつて、大きな柱を回ろうとして、オレはギョッとすくんだ。思いがけず、つい鼻の先に恵子が立っている。このとけいの下でデイトしていたのだ。やむを得ず、すぐ横を通り過ぎたが、彼女は気がつかない。相手の男はオレがBと呼んでいる例のニヤケ男だ。つまり彼女の第二の男ということになる。

この前の火曜日のように、きょうはこのBと遊ぶのかと思ったら、これもホームであっさり別れる。別れぎわに、恵子は男からなにか封筒にはいったものを受け取って、ハンドバッグに押し込んだ。金……。オレはそのバッグのパチンという金具の音まで聞こえる

ほど近くにいたのだ。

ひとり電車に乗った彼女は、隅田川に近いある駅で降りた。オレには彼女の行き先は見当もつかない。この土曜日を、ひとりでおとなしく過ごすようなあいつでもあるまい。とすれば、オレの知らない第三の男が現われるのだろうか。

あいつは川端を急ぐ。××橋を渡った。なにが気になるのか、チョイチョイふりかえる。尾行がひどく困難だ。

やがて、あいつはあたりを見回してからフツと姿を消した。オレもさすがに驚いた。病院。しかも産婦人科の……。

あの女狐は性病まで持っていたのか——オレは何げなく病院の前を通り過ぎた。××産婦人科医院と金文字で書いたスリガラスの中にすべてはかくされてしまった。

あつい日さしの中でオレは待った。一時間、二時間——おかしい。あいつはまだ出てこない。治療ならこんな長くかかる訳がない。

三時間たって、オレはやっと事態を了解した。治療ではない。このときおそらく恵子は病院のベッドの上に横になっていたのだ。多量の血を失って……。人工妊娠中絶。掻爬。オレはこれに思い当たると、再び声もなく笑

った。

あいつがいつもになく、部長たちとあっさり別れたのはこのためだったのだ。おそらく、部長にもBにも、かれら自身の子供だと思ひこませて……、そしてあいつはその双方から手術代をとったのだ。

不幸な胎児が、Bの子か部長の子か、オレは知らない。おそらく、彼女自身さえわからないだろう。だが、オレがこうして表に立っている病院のベッドの上で、あいつは血を流しているのだ。不貞の代償としての血を……。

オレは身ぶるいした。オレの網膜にはっきり見えるのだ。血を流す、まっかな彼女の洞窟。そしてのたうつあのヒップ。いかにも高慢ちきにオレの目の前でゆれていたあの臀部が、今は苦しさにあえぎながらのたうち回っているのだ。

苦しいだろう、ざまあみやがれ。

四時間後、病院から出てきた恵子の様子を見てオレは、オレの想像が全部適中したことを知った。あいつは急に三つも四つも老けたような生気のない歩き方をしていた。あの自慢のヒップさえ頼りなくしぼんで見えた。

アパートに帰ってから、オレは興奮して

いた。古橋恵子の妊娠中絶はさすがのオレにもショックキングだったのだ。

手術の状況を想像しているうちに、オレの全身の血が騒いでくる。オレは夜ふけて机に向かった。

例の怪文書を書く。もちろん古橋恵子の私行を暴露する内容だ。一通はBあて、もう一通は部長夫人あて、そして最後の一通は古橋恵子自身にあててだ。

半紙に毛筆の左手書き、これがオレだとはわかりっこない。

発送された怪文書

×月×日 晴れ

オレのきらいな快晴だ。

三日休んだ恵子が出勤する。やはり美しい。彼女のみにくい私行をすべておあって、輝くばかりの美しさと豊かなヴォリューム。

オレはこの美しさを憎悪し、そしてひかれるのだ。

オレはこの朝、あいつあての尾行記を、彼女のタイプライターのカバーの下に入れておいた。

この怪文書を読んで、どんな顔をするか、あいつのぎょうてんぶりを見たかったから

だ。

Bあておよび部長夫人あての文書はすでに発送済みだ。

オレはタバコをふかしながら、三間ばかり先の彼女の様子を、それとなく見守った。

封筒を発見して、あいつは首をかしげている。ギクリと顔色が変わった。

ざまあみろ。

手が震えている。ふん、全女性に対するオレの憎悪を受け取ればよいのだ。

部長のところ相談に行つて騒げばよい。

ふん、その部長の家庭も目下、大騒動のはずだ。Bとのつきあいもこれで終わりだろう。

偽瞞にみちた女、あわてるがよい。だがオレはもうこの古橋恵子には興味がない。

きょうからオレの女は、同じアパートの、四号室の大沢静江だ。二十八歳、そして彼女は人妻だ。

唇のすぐ下にホクロがある。恵子よりからだは小柄だが、そのヒップの肉づきはもっと豊かだ。それに色が白い。オレは偶然の機会にそれを知ってしまったのだ。

同じアパートだから、尾行は非常にむづかしい。だが、その困難さはきつとオレの喜びを倍加してくれるだろう。

ネクターール願望の男

—マゾヒストの手紙から⑬—

谷 貫 太

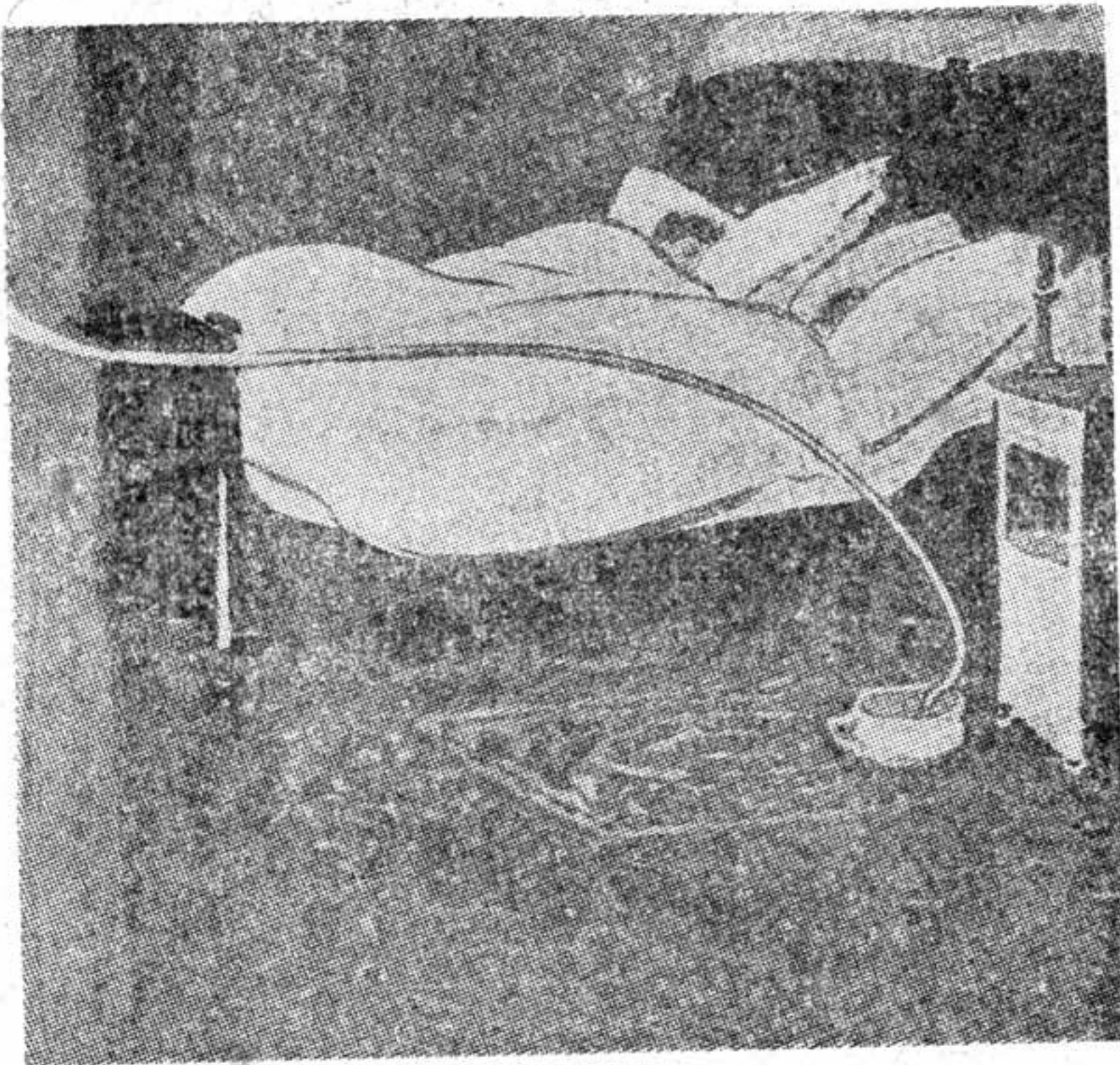
“神酒”の不潔感

手紙ももうずいぶんつづきました。そこで、近いうちに、何か別の趣向を考えるつもりでおりますが、まだ、手もとにはたくさん手紙が山積しているありさまであるので、もう一、二回つづけさせていただけようと思います。

今回は、ネクターール、つまり、女性の尿にょうに関するマゾ・フェチシズムについて関心を持たれる人々によってつづられた手紙のなかから、比較的まとまったものをここに掲げました。

ネクターールとは、神酒というほどの意味で、現在はどうしておられるかは知りませんが、以前は、かなりのあいだ連絡を保っていてくださった沼正三氏の命名するところであるかに覚えています。

一般に知られるように、尿は大便とともに、科学的な分析はと





ビデオに撮られた男（A・ヴァイスケルパン画）

もかくとして、概念的に、最もきたくないもの、不潔なものという観念でながめられておりました。

したがって、こうしたものを口にするような行為は、むしろ、狂人のような行為と考えられているのは当然です。そして、ネクトール・フェチシストの大部分が、その心理のなかに、人一倍、この不潔感を感じていることも事実です。いや、むしろ、そのような人々は、不潔感を意識するからこそ、マゾヒスチックな官能を燃やしてネクトールに群がるのだ、ともいえましよう。

その心理は、浣腸^{かんじょう}フェチシストが、多くサディスチックな傾向を帯びており、排便の姿態に、女性の羞恥心の発現を見いだして愉悦するのは、根本的に違います。

女性の最もきたくない排泄物が口にはいるということ、さらに、女性によって、そうした行動を強制されるということ、それは、かなり長く、かつ複雑な心理のブリッジを渡って、マゾヒズムに直結してゆくのです。こうした、気持ち、わたしは、次にあげる書簡のなかに発見することができます。

発信者は、中国地方の在住者。当時二十七歳で、学生でした。（何かのついでで卒業がおくれていたのでしょう）もちろん未婚、女友だちは少なく、性向を話す相手には恵まれていませんでした。

あて名は、久埜友枝ということにしておきましょう。二十六歳で、中小企業主を父に持つ、中産階級の娘さんで、水泳の選手だった人です。

茂みのなかの甘露

手紙は、一九五九年六月十二日付け。

——先に話をしたことについて、少しばかり言い残したことがあったので申し添えておきたいと思い、筆をとりました。いつもながら、変てこな話ばかりですまないと思いますが、ぼくにとっては、大変なことなのです。そのへん、よくわかってください。

あなたが、ちょっとでもいやな顔をしたり、ぶあいそうになると、正直のところ、ビクリとします。気にさわったんじゃないかな、と思うからです。話さないですむことなら、という気持ちと、どうしても話さなくては、という気持ちが乱れてしまっていて、それでも、この手紙を書き始めてみました。

ぼくは、いつも、目をつぶって、想像の世界で遊びます。あなたは、ひとり、日の照っている明るい花園を歩いている。少し暑いからといって、さっき咽喉^{のど}をうるおしたレモネードが、あなたの尿道を催させる。

一步一步、歩みがつづくと、それだけ、オシッコがしたくなって来る。でも、近くに便所はない。周囲を見まわしても人影がないので、小走りに茂みのなかにしゃがみこむ。

一方、ぼくは、そんなことは知らず、グウタラの本性を、発揮し

て、茂みのなかで、空を仰いで寝ころがっている。茂みは深く、近くにどんなことが起こっているかも全くわからない。ただ、音だけが、人の気配を伝えて来る。

ザッザッと音がして、だれかが近づいてきたと思うと、衣きぬずれの音がして、何やら、しぶきが、ぼくの顔に向かって飛んで来る。

なまあたたい、それは、甘露かんろのようにしばらくの間は降りそそいで来る。

ぼくは、声もあげられずに、身を反射的におこした。

そこに、可憐なキミの姿があった。若い、美しい娘さんが、ひそかにしゃがんで、用を足している姿というものは、かわいいものだと思います。

あなたがもし、ふつうの女の人ならば、キャッと叫ぶところでしょう。しかし、あなたは違う。思いがけないところに、ポーツとした男がねそべっていることが、無性むせうに腹立たしいのです。

「こいつ、やつつけちゃおうかな」

きっと、あなたはそう思う。

そして、もう一度、改めて、今度は、ぼくのほうに向かって、残っていたのをそそぎかけるんです。

そのあたかな水は、茂みの枝にかかって、霧のようにぼくに浴びせられる。太陽の光が、それをすぐさま暖ためて、水蒸気のように、そのにおいが、そこいらじゅうに立ちこめるのです。

はっ、と思ったとき、もう、あなたの姿はない。ぼくは、起き上がって、あなたを求められるけれども、ついにわからなくなってしまう。

あたりの茂みには、あなたの豊かなからだを通して、ぼくに与えられた液体の名残りが、キラキラと陽光に輝いている。それは、

乙女おとめの涙のようでもあり、また、真珠しんじゆの気高い色のようでもあります。

こんな夢想をすると、ぼくは、けだもののようにほえたい衝動に駆られます。

なんというすばらしいチャンスでしょう。

犬の首輪をつけられて

また、ある時は、こんな夢想をします。

それから何日かたった日――

ぼくは、町で、あなたに偶然出会います。

「あら、こないだの失礼な人ね、あんたは！」

少し話をして、けっきょく、あなたは、ぼくを自室へ誘います。

その家は、ぼくが思っていたとおりのすばらしい家でした。

その家の、人のいないガラシとした浴室で、ぼくは、口を開いたまま、すわることを命ぜられるのです。

目をつぶって待っていると、あなたは、遠慮なく、あたりまえのように、ぼくの口の中に排泄するのです。

念のいったことに、あなたは、かるくぬぐって丸めた柔らかい紙まで、ポンと、ぼくの口の中に放り込むのです。

ぼくは、うなります。憤慨してではなく、喜びの情を、犬があなたに伝えようとする時のように。

あなたは、それから、濡れた衣類を脱ぐように命じます。

ぼくが命じられたようにすると、あなたは、だまって、犬の首輪を出して、ぼくの首につけます。ヒンヤリとその皮の感触が、ぼく



ネクタールの奔流をのぞく子供

に、犬らしい気持ちを起こさせるのです。首輪が新しいので、なかなかとまらず、まちがえて、あなたは、ぼくの首の肉を金具にはさんでしまいます。

「うっ」と、ぼくがうめくと、

「なによ？ 静かにおし！」

手にしたひき皮の余りが、ピシリとぼくの背中に飛ぶのです。

グイグイと首輪をつけ終わると、ひき皮をつけて、自分の部屋まで、ぼくは引きずってゆかれます。

犬は、その部屋に引っぱり込まれたら、どんなお仕置きが待っているかを知っているから、なかなかはいろうとしないのです。

それから一時間、ぼくは、愛らしいご主人にしいたげられて、へ

トヘトヘになって追い出されるのです。

どうですか、こんな夢想をするのは、とても楽しいものです。もし、あなたが、こういう遊びにちょっとでも興味があるのならと念じています。

ぼくの考えからいえば、女の人だって、こんなふう遊ぶのは、きつと痛快だと思っています。 — 以下、二十三行略 —

あなたは気違いです

この、あまりうまくない手紙に対する返事。

同年六月十七日付け。

——前二十二行省略——

——そんなおかしなやつとつき合っているのかと父に言われました。

父の話では、そういう人は、一度精神病院で見てもらえというのです。

あなたが、見てもらうかどうか、わたしにはわかりかねますけれど、どちらでもよろしいのです。精神病院といえは、気違い病院です。わたしは、気違いといっしょにおつき合ひするのはごめんですから、せいぜい、病院の患者さんのなかにはきつと、男の人にお小水をかけておもしろがる人もいるでしょうから、やってもらったらいかがですか。とにかく、あたしは、お目にかかる気もしません。お手紙も、お尋ねくださることも、一応お断わりいたします。家族の者も全部その意見です。

わがりのわるい人たちとお思いになると思いますが、これが普通の考え方だと思います。あしからず。

「普通なら、これでやめてしまうのですが、かれは、ちょっとばかりしつっこい男でした。」

出した手紙は開封もされず、受け取り拒絶の符箋ふせんをつけて戻ってきましたが、平気で、何回となく手紙を書きつけました。

そのなかの一通にはこう書いてあります。

「きたる八月一日午前零時を期して、あなたの寢室に伺います。どのような責め折檻をされても、突き出されても、かまいません。あしからず」

そして、その日、かれは、苦心さん胆の末に忍び込みました。

当然のことながら、かれはののしられ、彼女の兄に、竹刀しなでなぐられ、門の外にほうり出されました。

かれは、それでも、じゅうぶんだのしんでいたのでしょうか。そのあとで、近く一杯のみ屋で、そのちょっと肉感的なおかみさんをくどき落として、近くの安宿で、思う存分、その尿をのんだのです。

その翌日、しょうこりもなく、かれは、彼女に手紙を書きました。

「きのう、ついに思いを果たしました。ぼくは、キミのお小水を飲

んだのです。キミは知らないだろうが、ぼくは、キミのものを、ほかの女からもらいました」

この手紙は、飛躍が大きいので、ちょっとわかりにくいのですが、この意味は、

「キミのことを考えながら、キミのものだと思って」という意味なのです。

このように、この種の人々には、現実希望が実現しないために、その補足手段としての想像が占める分野が割合に大きいのです。

わたしたちは、すべて、異様なよろこびを持っています。しかし、それがひとりの女性によって完全に充足されるとは思われません。

そこで、想像という行為は、大きな意味を持てきます。

ドン・キホーテが、風車に巨人を見、ヒツジの大群に軍勢を見、そして、商人の娘を王妃ドルシネアと思い込んだと同じように、真のドミナ、理想的な女性は、常に彼岸ひがたにあります。

ですから、わたしたちにできることは、理想のドミナにめぐり合うことではなく、ドミナを思わせる女性とめぐり合うことなのです。

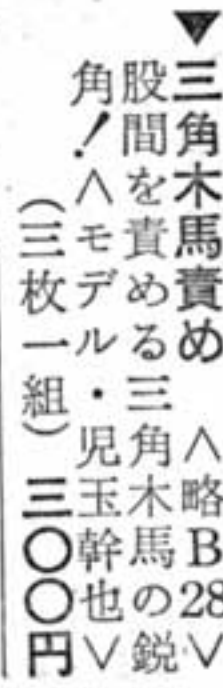
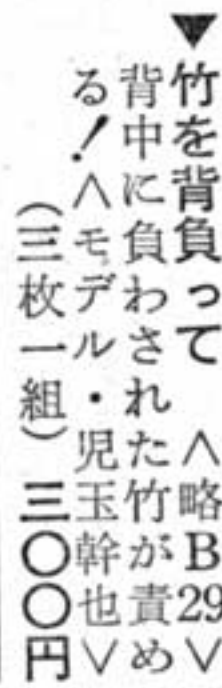
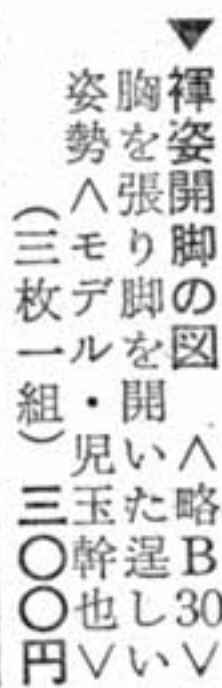
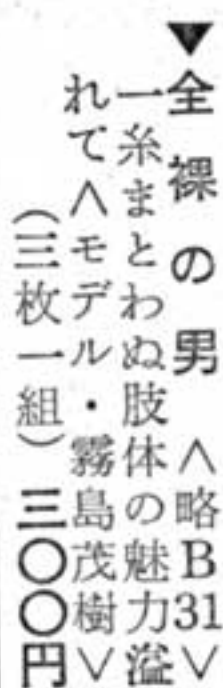
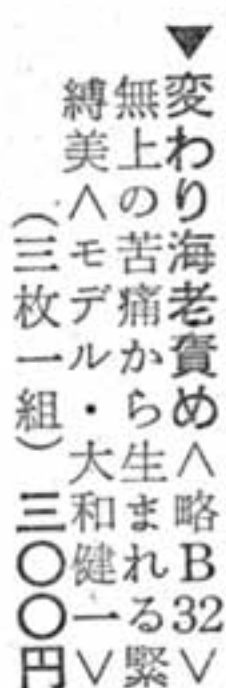
好きな人に贈る!!

大人の珍本 送共 千四百円

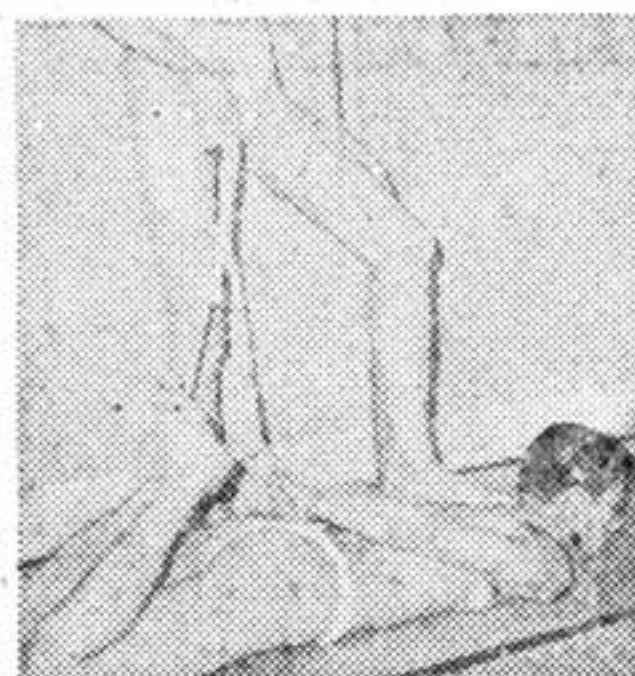
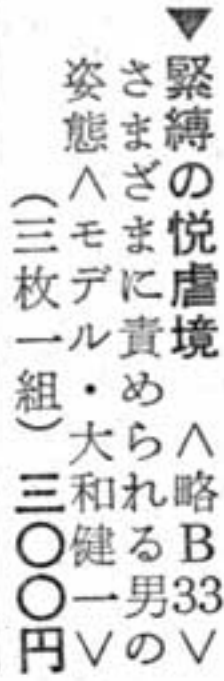
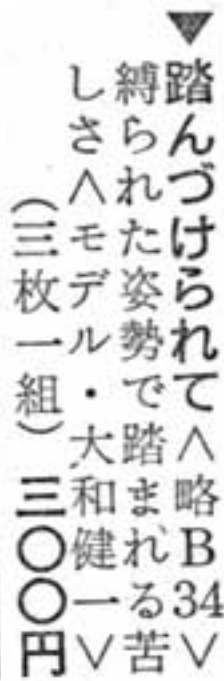
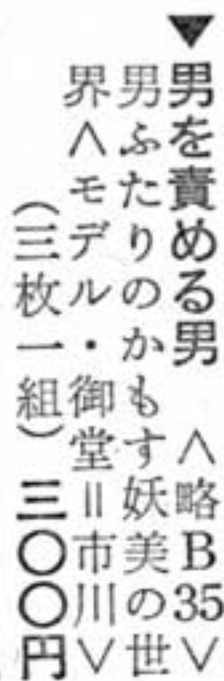
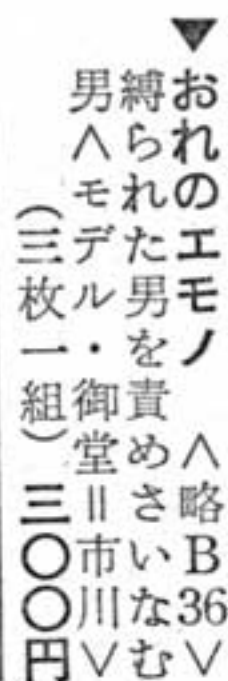
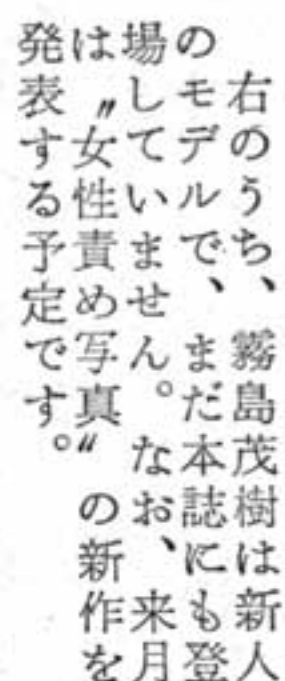
大人の写真 送共 五百円

書画目録 30円封入の方に送る

東京都新宿局64号(イ) 愛好堂



☆：好評の男性責め写真に、
こんど左のとおり新作を作り
ました。お申し込みください。



ある女の素面の告白

あたしはレスボスに人生を賭ける

葦 田 奈 貴

さいしよのひと

あたしは眉子まゆこに血のラブレターをかいてやろうと思った。むかしの女性が心に秘めた思いのたけをおのが血でかきつづつて、恋するひとに送ったという小説を、まえに読んだことがあったからだ。

その夜は停電だった。ローソクをつけ、机の前にすわったあたしは、サカズキをひきよせ、カミソリを手にとった。からだじゅうがひきしまるような緊張感があったが、こわいというような感じはなかった。カミソリで小指のさきをすっとひいたとき、痛みよりもカッとする熱さがあった。

白いサカズキの中へあざやかな血の色がタラタラとしたたり



おちた。

あたしはその血をペンに含ませて、便箋びんせんに大きな字で二、三行もかいただろうか、そのときには血はかたくなって、ペンに乗らなかった。便箋の字はみるみる赤茶いろに変色していった。

なんということだろう——あたしはすっかり幻滅してしまった。

こんなロマンティックなことをころみたといって、あたしは眉子をほんとうに愛していたというのではなかった。ただ、あたしがおのがレスボスを自覚しはじめてからのさいしよの相手であった。

一月ほど前、同級（中学三年）の彼女からモーションをかけられて、仲よくなったのであった。レスボスの



実験台に利用してやろう——あたしはそんな打算的な気もちで彼女にちかづいていったのだ。

しかし、なんの体験もなく、書物で得た知識を実行するほどおとなでもなかった。精神的なものが大部分だった。血のラブレターも、そんななまぬるさを突き破ってやろうと思って、くわだてたことなのだ。

それからまもなく、新潟市内の映画館に「くちづけ」という洋画が上映されていたときのこと、ある夜、あたしの家へ遊びに来ていた眉子が、

「奈貴、あたしたちもくちづけをしてみない？」

といいだしました。

ほかに、ある水商売の店をもっている母は、いつものとおりそこへ行っていて、家

にはあたしたちふたりきりだった。

眉子が部屋の電灯を消した。「さあ、抱いて……」と眉子が誘ったが、あたしは彼女をだくことができなかった。だめだわ」といってあたしは電気をつけた。

が、十二時近く、眉子を家へ送っていく途中、積雪でまっ白にうずもれた町を肩をならべて歩いてるとき、ふと意外に近い彼女の顔をみとめ、あたしはなんのためらいもなく、彼女の唇に唇を重ねた。それはほんのふれあっただけのようなものだったが、妙になまあたたくやわらかな彼女のくちびるの感触が、あたしをうっとりさせた。

翌日、学校で眉子から手紙を渡された。家へ帰ってひらいてみると、ゆうべの接吻



のことが、よろこびにあふれた文章でかいてあった。あたしは読みながら、急に自己嫌悪（けんお）に自己譴責（けんせき）におそわれた。

こんなことを母が知ったらどう思うだろう、あたしの大好きな母がどんなに嘆くだろうというのと、ゆうべをきっかけにずるずると異端の世界へおちこむだろうことを思っ

て、自分がいとわしくなり、そのおもいからのがれるように、眉子からきた手紙や写真の類を、いっさい火中に投じた。

そして級友に、眉子への交際断絶の伝言をたのみ、それから彼女を黙殺（もくかく）しつづけた。

ていた就職口を友だちに譲って、上京していった。

いえでのみちづれ

その後は、実話物の雑誌の文通欄で知りあったレスビアン的な女性四、五人と文通していたが、すべて遠隔地にいるものばかりなので、半年もたつと、会えぬままに自然消滅となってしまった。

十七歳のときだった。「創苑」（仮名）という異常風俗雑誌のSの作家門田奈子（おなじく仮名）という二十六歳の女性と知りあった。半年近く文通していたが、十八歳の冬、母にはスキーに行くとうそをいって奈子さんに会いに上京した。

そのころ、レスボスの道を進もうか、そこからきっぱりとはなれるよう努めようかと、その岐路（きろ）に行き当たっていたあたしだったが、けっきょく、なんでもいいから経験してしまえば決まるだろうという心まかせで、東京行きの夜行列車に乗ったのだ。

奈子さんと会い、彼女から「創苑」の編集者佐次浩介氏（仮名）にも紹介されて、一夜を三人いっしょにすごした。

奈子さんはサディストで、レスビアンではない。レスボスは遊びでやるのだ、と彼女はいった。

が、それにしても、あたしにとってレスボスとしてのこの初夜は、あまりにも想像と異なり、期待をみごとに裏切ってくれた。

初対面からふたりのあいだには、愛などというものが露ほどもない事務的なふんい気だった。それをそのまま夜の床へもっていった。ただ肉だけをもとめる手をあたしは拒む。あたしはすなおに従えなかった。

いつもの愛のささやき、口先だけの愛のことばでもよい、わずかの優しさ、甘さがほしかったのだ。拒みながら、しらじらしい床の中で、あたしは愛撫の手をからだへきざみこんだ。

甘い恋のあこがれをもののみごとにペシヤンコにくれた東京の町をあとにしなから、「またきつとこの都へ来るんだ。そのときにはすばらしく美しい激しい恋をしてやるんだ」と心にさげんだ。

その年の六月のおわりころ、中学卒業のときから交際を絶っていた眉子^{まゆこ}が、帰郷し

て、電話交換手の実習を受けていることを知った。

あたしは、ある日、彼女を、わが家に誘って、

「前のことはほんとうに自分が悪かった。だが、あれからだれとも交際していない。ぼくにとってあなたは、初めてのひとだし、いまでもあなたが好きだ。できるなら前のようにつきあってくれまいか」というような意味のことをいって、かき

くどいた。

が、あたしの心のそこは、ほんとうは愛のなんのというのではなく、ただ眉子を抱いてみたかった。女の肉体を抱きたかったのだ。しかし、あたしには、彼女が自分のいうとおりになるという確信はなかった。

すると、眉子は「泊まってもいいわ」といいだした。あたしは腹のなかでペロリと赤い舌を出し、会心の笑みをもらした。

その夜、あたしは、眉子のくちびるとやわらかな胸のふくらみを自由にできた。さいごのものはなんとしても許してくれなかった。しかしあたしは、この場はそれだけで満足しようと思った。いつかは……とい

う自信をもったからだだった。

そしてその後まもなく、あたしの思いどおりに、眉子はすべてをあたしに投げだしてくれた。あたしは彼女のヴァージンを破ったことになるのだろうか。シーツをよごしたあざやかな血の色を、あたしは忘れない。

眉子は、あたしの甘いことばだけで満足し、あたしの愛をすこしも疑わなかった。あたしは眉子の肉体をむさぼるように執拗にもとめた。眉子を肉体的に支配するともに、眉子のすべてを支配し、自分のものにしたかった。眉子を通して女心・女体のすべてを知りたかった。自分の今後のために……。

あたしは、眉子と関係ができてしばらくのち、タバコをおぼえた。眉子が教えたのだ。パールのけむりをのみこんで、あたしはくらくらするような陶酔の快感を覚えた。よる愛しあった直後にのむ一服は、とくにうまく、安らぎがあった。

あたしは毎日若さをもてあましながら、レスビアンとして生きるための将来の目的を、頭のなかでいろいろと計画した。あた

しの望みとは、レスボス・バアとでもいうようなものを開き、かたがたレスビアン的女性だけのグループをつくりたいことであつた。

そうした望みを実現するためには、こないなかにいてはだめだ、東京に出なければと思った。

そうだ、眉子を道づれに家出しようと、私は気がついた。さっそくそのことを眉子に相談してみると、彼女は東京でふたりで生活できるということで承諾した。あたしの本心は自分の目的実現の足がかりを作るためだったが、もちろんそんなことは眉子には話さなかった。

あたしは東京行きの決心をすると、今まで腰のへんまでのばしていた長い髪をプツリと断った。自分の決心を自身へ証明することと、目的に徹したかったためだ。服装もボーイスタイルにかえたことはいうまでもなかった。

あたしは細心の計画のもとに、ある夜、眉子としめしあわして家出した。だが、なんとということだろう、ふたりが新潟駅に来るとまもなく、追ってきた家人につかま

てしまった。眉子のほうからもれたのだ。東京行きの計画はあっけなくこわれてしまった。

うわきのむし

家出がみつかったから、あたしと眉子はたがいに関人の目をぬすんでは、会うことにことかかなかった。

あたしは、母にすまないと思ひながらもいまままで勤めていた会社をやめて、毎日ズルズルと怠惰の生活をすごし、夜は眉子とのセックスの遊びにふけていた。まったく肉体の遊戯にしかすぎなかった。

そうしたある日のこと、眉子とあたしと

の関係の理解者であり、やはりこの道の同志である同年の厚子と、レスボスについていろいろと話をしているうちに、あたしは厚子を誘惑した。彼女のグラマーな肉体にひかれたのと、刺激のない毎日にあきあきしていたからだ。

厚子にたいしてなんの愛も感じていず、いちどだけのうわきのつもりだった。また厚子のほうもそのつもりじゃなかった。

が、あたしは、厚子から自分を好きだといわせたい願いが途中から起こり、二度三度とデートを重ねた。そして、ついに、彼女はあたしを愛しているといった。

厚子はそのころ、あるバアのママと関係



があり、そのひととの金銭的なつながりの救いに、あたしを愛したようであった。あたしがそのママのことをいくらかたずねても、厚子はことばをにごして語らず、もちろん紹介しようとはいわなかった。



眉子は、女心の敏感さで、あたしのうわ気を感じとったらしく、会うたびにさぐりをいれてきた。そのたびにあたしは「そんなことないわよ」と否定しながら、イライラするものを覚えていた。

あたしとしては、眉子と厚子のふたりともひきつけながら、適当につきあうつもりだったが、ある夜、酒に酔ってくどくどと問いつめてくる眉子と対していたとき、あたしはとうとうカンシャク玉を破裂させてしまった。

「きみの思うとおり、ぼくには新しい恋人ができたんだ。きみよりもその人のほうを愛してるよ。もうきみとは別れよう」と、あたしはどなるようにいった。

あたし自身も酔うとクダをまくほうだが、他人に酔ってからまねるとシャクにさわって、百年の恋も一時にさめてしまうほどきらいだった。

翌日の昼、眉子と厚子とあたしの三人で話しあったが、あたしはいったん口に出していってしまうと、ほんとうにそう思ってしまう、眉子の顔を見るのもいやになっていった。

眉子が「別れるのはいやだ」と泣きながら、手の中でハンケチをズタズタに引き裂いているのを目にしたとき、あたしは肌にアワを生じるほど寒けをおぼえた。泣きはらした目でみすえられると、あたしはぞっとするほどの女の執念の恐ろしさを感じ、ただ一刻もはやく眉子からののがれたかった。

そしてあたしは眉子と別れた。

そのころあたしは、新潟のD町に住んでいる中年の断髪の女性がレスビアンだということを小耳にはさんだので、さがしあてて尋ねていった。

そのひと加賀藤代^{かがふじよ}さんは、紹介者もなくぶしつけな訪問をしたあたしに、すぐころよく会ってくれた。

彼女はやはりこの道のひとで、近くにバアを経営し、その雇われマダムを恋人にしているということだった。彼女はいった。

「あたしがこんなになったのは、青春時代が戦時中で、男がいなかったせいかもしれない。でもけっきょくは親にすすめられて結婚し、子供もふたり生んだ。しかし、いやなものはどうしてもいやで、男を好きに

なれない。それで、夫と円満に話しあって別れてしまった。夫はいまでも一年にいちどくらい尋ねてくるけれど、友だちづきあいよ」

藤代さんはまたこんなこともいった。

「女がほんとうにほれると、死のうといいですが、ぜったいに死んではならないよ」

あたしとおなじ男型のひとらしいが、こんな夫人からなら可愛がられてみたいと思った。だが、自分からそんなことをいいだせず、そのまま、いとまをつげた。

厚子と別れてすぐ、あたしはルンペン生活ともさよならして、バーテン見習いになった。生まれたのが花柳界のドまん中で、小さいときから水商売の空気を感じて育ち、あたしは脂粉のかおりが好きなのだ。

でも、飲みにくる男たちは軽蔑にだけしか値しない。あたしの男性嫌悪は小学五年のころからののだ。

そのころ、あたしがおにいさんおにいさんと慕っていた、近所の十八、九歳の少年から、本を買ってもらう約束のもとにいたずらされた。しばらくして、そのことがどん

な意味をもつものかを知ったとき、なんにも知らぬ幼い自分を、エサで釣ってだました相手を憎んだ。レスビアンになった多少の理由であろう男性嫌悪は、このことを起点としている。

あのときの苦痛とともに、屈辱をもって、粗野で動物的で厚顔で、女にたいしてセックスしかもとめぬ男性というものへ、わたしは嫌悪感だけしか持たないのだ。

わたしのセックス

厚子をえらんだあたしは、まちがったようだ。広告放送のアナウンサーという職業が、ハデであり、グラマーな厚子をねらうオオカミ連は多かったようで、あれからまもなく勤め先の上役の男に、酒のうえで自由にされたということだった。

「奈貴ちゃんにあわせる顔がない。別れて……」

と厚子はいった。

「それよりも、厚子はどっちを愛してるの、その男か、奈貴か……」

ときくと、

「そりゃあ、あなたにきまってるじゃない

の」

大きな目でにらむようにあたしをみた。

あたしはもう過ぎたことにこだわる必要はなかった。かえって、男を知った厚子にセックスのぶしつけな質問をして、知らない知識を得るだけあたしにとってプラスとなった。

夜の職場をもつあたしと昼の勤めの厚子とでは、会う時間も思うにまかせず、あたしにはいわなかったが、厚子はだんだん男との乱交をはじめていたようだった。

あたしは、店の近くの酒場の女バーテンが、やはりレスビアンらしいことを耳にはさんだ。

さっそく会って話してみると、同志だった。あたしより五歳年上で、すっかり男性として通っていた。同じ店の女の子を奥さんにしているということだった。

それから、昼間ちよくちよくと、そのふたりの部屋へ遊びにゆくようになった。ふたりはこんなことをしているのは、自分たちだけかと思っていたといった。

まもなくふたりが別にバアを開店することになったので、あたしはそこで働くこと

になった。

あすが開店という日の夜、あたしひとりで留守番をしているとき、厚子が尋ねてきた。彼女の目が、あたしになにをもとめているか、すぐわかった。あたしはひどくやさしく彼女にキスをし、冷たく追いかえた。ひとり寝るにしても、厚子をだく気がしなかったのだ。その後しばらくたってから、厚子から電話があつて会ったが、そのときには彼女にはヤクザの男がついており、いちど墮胎をしたということだった。それきり彼女とは会わなくなった。

眉子から一、二度電話があつた。彼女はこの秋には結婚するといっていた。あのひとは、けっきょくは男性のもとへゆく女だと、あたしははじめからそう思って、そのようにつきあっていた。それにしても彼女のヴァージンは、同じ女のあたしが破ったのだ。

だいたいあたしは相手にたいして口唇と手指でペッティングし、あとはラーゲのくふうだ。クニリングスは門田奈子さんからおぼえて、相手に用いた。能動被動のポ

ジションは、眉子にたいしては、あたしの一方的愛撫であり、厚子とは三度に一度くらいは相互的になったこともあった。

しかしあたしは、上半身はともかくも、下半身を他人にふられるのはいやなのだ。自分の欲望は自分で処理する。このことは中学一年のときからの慣いなのだ。

あたしは、女性だけがもつものに魅せられる。それとかぎりない母性崇拜、ナルシス——そんなものが、あたしをレスビアにさせた因子だと思う。

このようになったうへは、この道に一度きりの人生を賭けよう。ノルマルとよばれる多くの女性たちの知らない異端の世界へひとすじに進もう。同じ性であるがゆえに一分のすきもなく交わることができる、同じからだをもつがゆえに、溶けあえる生の燃焼の激しさ。背徳のうへに狂い咲く悲しいまでに華麗な花。女と女でなければできないのちの恋に、サタンの愛に、身も心もささげ、造化の神のエラーでできた奇形児とさげすまれようと、あたしは自分のおかれた道にすこしの悔いものこさず生きよ

う。女でありながら女を愛するという不可解な性を知るものだけが知る甘美なよろこびを、どん欲にむさぼりもとめよう。

レスビアンであるということだけで、不当なけいべつをうけることをあたしは許さない。レスアピンであるということで、へんな劣等感をあたしはもたない。

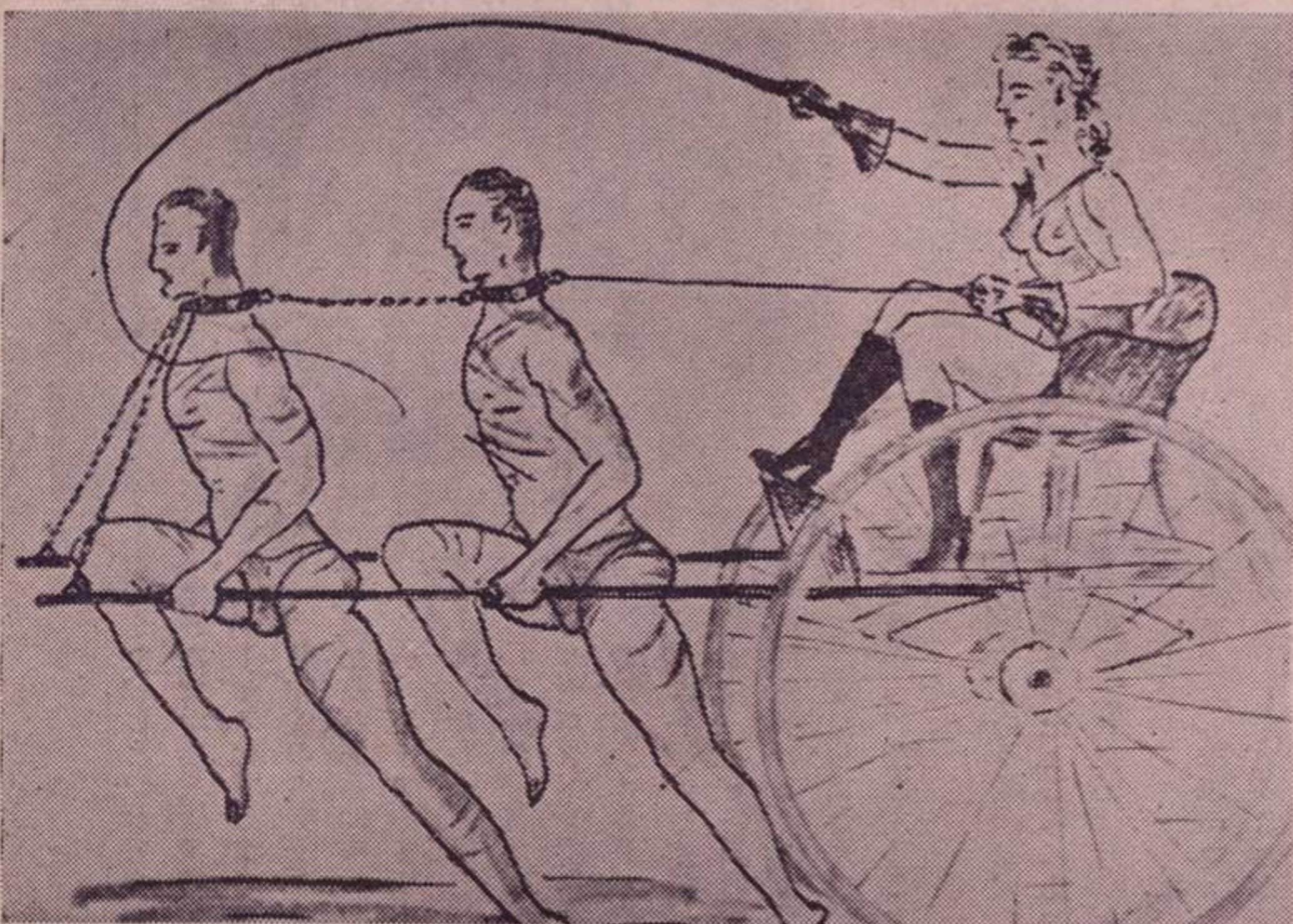
あたしは女であり人間なのだ。人間が人間を愛するのになんのひけめを感じることもあろう、子孫繁栄の天職を放棄する。許されるべきことだと思う。あたしはレスボスの世界にのみ、望みもよろこびもかなしみもみいだしていききたい。

(付記——この手記者である葦田奈貴さんは、編中でも記しているようにレスビアンのための親睦グループをつくりたい念願なので、小生も微力ながらバックアップしたいと思っている。性向を同じゅうする女性で希望のかたは、「東京都中野区江古田二ノ九七八、かびや・かずひこ方葦田奈貴あて」にご連絡ありたい。なお葦田さんは、本年二〇歳、日本のなほそおもての美貌と、純情な性格、ハキハキした男性的な態度と行動の女性である。

(かびやかずひこ)

ハムブルグの

血に狂うインゲボルグ



ハインツともうひとりの男にひかせた車に乗って、美しいクリスチーネは、ひそかに愛しているハインツに残酷なムチをふるう。

この物語は、この四月にわたしあてに、長文の手紙とともに、はるばるフランクフルト・アム・マインに住むヨアヒム・エデルマン氏から送られてきました。わたしはその物語がたいへんおもしろいものだと思っていたながら、発表するのにちょうどよいさし絵がないので、その機会をまっていたわけです。ところが、今度、エデルマン氏は、その物語の旧版についていたさし絵の中から貴重な六枚を送ってきました。これが今、わたしがこの物語をここに発表する気になった一番の理由です。一九三〇年代のドイツについての知識を必要とする部分もありますので、その部分は適当に加筆してあります。——谷 貫太

ハムブルグの見せ物市場

あなたがたはきっと、ハーゲンベックの名を、ハムブルグ市の名とともに思い出してくれるだろう。ハムブルグは、ドイツ第一の港町であったが、数十年前のハムブルグにくらべると、今では、ハムブルグは三つの名物を持っている。もちろん、第一に最大の港、第二にハーゲンベックの動物園とそれに付属している世界最大の動物サーカス、そして第三は——それこそ、いまわたしが思い出をつづろうとしているサント・パウリ区の娼婦街に



サロンに掲げてあったインゲボルクの絵

ほかならない。

若い人々は知るまいが、一九三〇年ごろまでのサント・パウリ区は、ハーゲンベックが動物の百貨店だとすれば、女の百貨店ともいえたらう。「黒靴下の女」「長靴の女」などと呼ばれた女たちには、中東のハレムから逃げてきたような高級な女から、貧困のために十六歳で娼婦になったような貧民の子まで、また、シックでエレガントな貴婦人のタイプから、粗野で、今にも動物にかえるのではな

いかと思われようような野性的な女まで、ま

つぎだとしたのだったから、想像することも簡単だと思う。

わたしが、いましようという物語は、サント・パウリでも一番奥まったところにあった血のインゲボルクの家を訪れたときの話だ。そのころ、ほかにもいろいろな変態娼家があった。もちろん、有名な「拍車のロッテ」や「侯爵夫人の家」なども忘れることができないけれども、それ以上に一部の人々に感銘を与えたのが、「インゲボルク」だった。

わたしは、一番初め、悪友のひとりに誘わ

た、しとやかで女性的な女から、鞭で客にサービスをするような変態性愛のベテランまでありとあらゆる女たちが、この、あまりひろくはない一区画に雑居していた。悪名高いパリやロンドンでさえ、このバリエティや高度の各種の技術には及ばない、と各国の女郎町を歩いてきたような水夫たちでさえきわめ

れて、酒の勢いでこの店に行ったものだ。チーク材のどっしりした厚く重い木のとびらが街路に面しており、その上には142という番号が、電気看板と門灯とをかねて吊られていた。とびらには小さなのぞき窓があって、そこから、ノックのたびに、女将のインゲがそつとのぞくのだった。

二、三回、わたしは、その家に遊びに行った。インゲは、商売気のある魅力的な若い女だった。客のことごとくが、インゲ自身をはり合って口説いたものだが、インゲは笑って相手にならなかった。そして、若い時から中年まで、いろいろな女を捜してきては店に置いた。

女は全部で十六人いた。もちろん時々やめに行ったり、新人が二、三人まとまってはいつてきたりするので、女の数はいつも同じだったとはいえない。

インゲの家は、一階に二十メートル四方ぐらゐの広いサロンがあって、客はそこで女たちと飲み、踊りながら、相手を決める仕組みになっていた。こういうやり方は、当時サント・パウリのほとんどの店がやっていた、一番あたりまえのやり方だった。

ただ、ほかの店と違うことは、インゲの店

には、インゲが、三文画家に描かせたという大きなインゲ自身の絵が、ぎょうぎょうしくサロンの壁にかかっていることだった。

この絵を見ればわかるように、インゲの家は、変態娼家といっても、被虐性の客だけを扱っていた。

インゲは、若く美しかったが、いつも、ヒザまでの編み上げ靴をはき、まっ黒な長衣のすそから、それを見せながら客と応対していた。手には黒い、太いムチを携えていて、商談が決まると、ソファであれ、柱であれ、手近な物を、それで、ピシリと音をたてて打つのであった。

客たちは、その音で無性に興奮して、われ先にと相手を決めるというふうだった。

興味ある招待状

そんなふうには、インゲの店に遊びにいき始めてから二カ月ぐらいたったある日、わたしは、インゲから、印刷された一通の招待状をうけとった。

「よそでは絶対に見られない、特別仕立ての趣向で、あなたをご招待いたします。ご参加になるならば、当日、所定の時刻までに、米貨で十ドルお持ちになってください」

とあった。

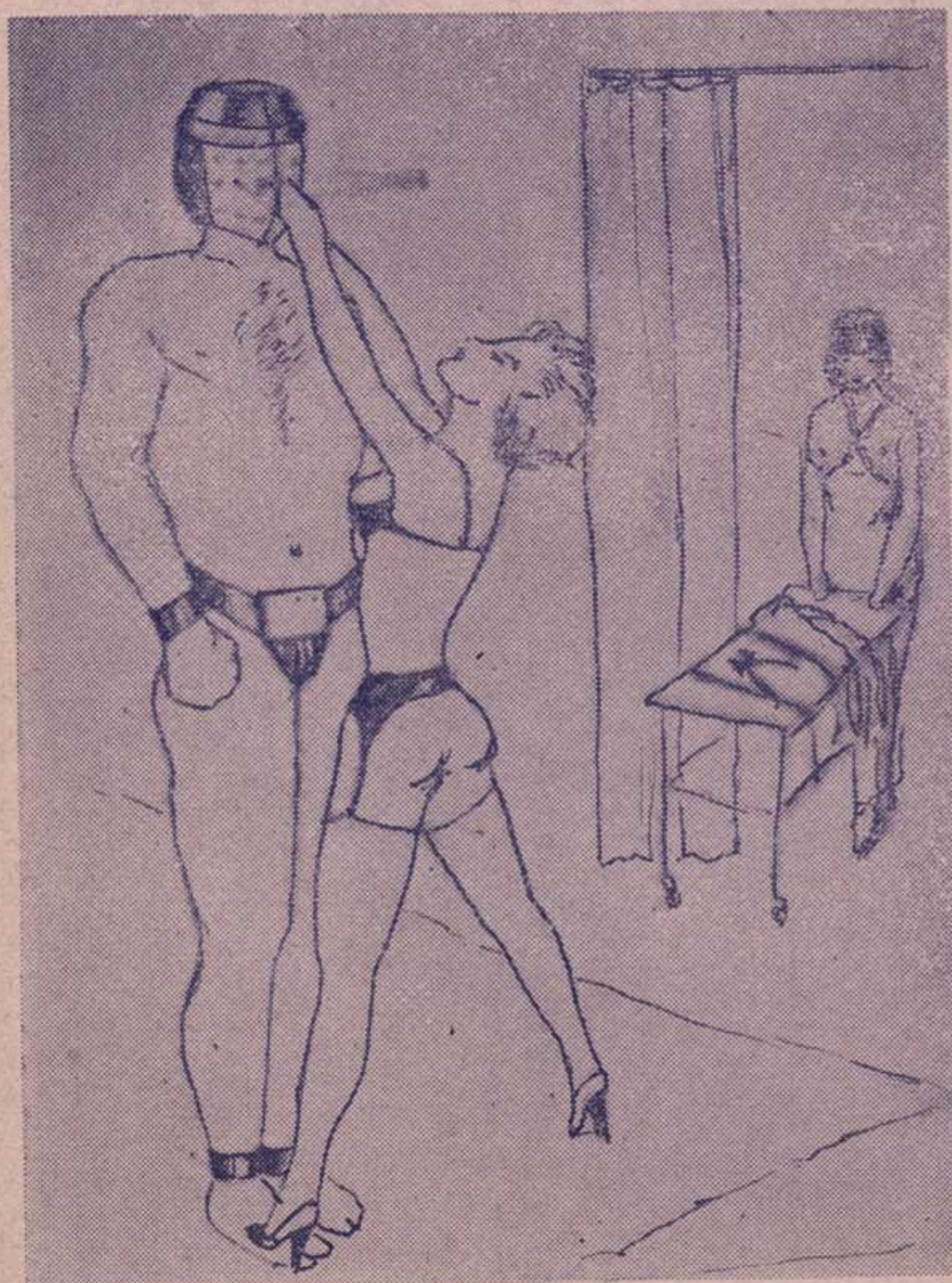
当時、まだ米貨が一部では珍重されていた時代だったから、「ドルで」というのは、一つも不思議ではなかったが、それにしても十ドルは高かった。

でも、わたしは、そのころ、幸いに金回りもよく、自分の仕事の性質上、米ドルを手に入れることも容易だったので——それに第

一、わたしはインゲにぞっこんほれていたから、彼女にケチな男と思われたくなかった——行ってみることにした。

所定の時間とは、午後八時だった。わたしは八時十五分前に、インゲの家の前にタクシーを止めた。サント・パウリに自家用車で乗りつけるなどということは、社会的地位を考える者にとっては、狂気の沙汰だと思われる

マリアンネは、鉄仮面のネジを力いっぱいしめた。



いたのだ。

例のサロンには、見知らぬ男たちが七、八人、すでに集まっていた。どちらを見ても知らない顔ばかりだ。利口なインゲが、知り合い同士をこんな店で会わせるようなことは決してしなかったから、おそらく、招待状は、何度にもわけて送られたのだったろう。

八時ちょっとすぎると、インゲは、特別におめかしをして現われた。その日のインゲは実に美しかった。ちょっとかげのあるその表情が、インゲを、この世のものではないような錯覚に陥らせるほどだった。

彼女は、皆にひとりひとりにあいさつをすますと、一段と声をはり上げて言った。

「皆様、ようこそおいでくださいました。きょうは、とっておきのショウをお見せするつもりでおりますの。出演者は、あ

たくしの店の女性たちと、ここにお呼びした皆様のなかのどなたかにしましょう。有志のかたがおいでになれば、そのかたにお願いいたしますし、おいでにならないければ、あたくしがお名まえを指名いたします。おいやなたは、今ならお引き取りくださっても結構です。お恨みはいたしません、お金は一マルクもいただきませんから」

ずいっと、彼女は目のふちに微笑をたたえながら、一同を見まわした。二、三人が、わざとらしくセキ払いをしたが、やがて、なか

マリアンネが男の尻にムチを打ちおろすのを、インゲは快げにながめている。



のひとりが一步前に出た。四十四、五になる紳士だった。

「わしが志願しよう。だが、まだ二、三、ほかにも出てくださるとよいのだが、わしひとりでは、わし自身は何も見えないわけだからね」

インゲは、満足そうに言った。

「さあ、ひとり決まりましたわ。それと、こちらのおっしゃることはもっともですわ、あと三人、どなたかいませんか？」

わたしのかたわらの威勢のよい若者が、
「ぼくも。だけど、ケガはさせないでしょうね？」

「何をおっしゃるの、ハインツさん？ いたい、あなたはあたしの家で傷でもつけたことがおありになって？ でも、もしつけてほしければ、いくらでもつけてあげますのよ」
こうして、さらにふたりの男が志願した。

鉄仮面と貞操帯

まず、一番はじめの中年男が、インゲといっしょに奥に姿をかくした。女たちもどやどやと姿をかくした。

「いったい、どんなことを見せてくれるんですかね？」

ハインツと呼ばれた男は、ちょっと不安そうに言ったが、皆カタズをのんで、答えるものはいなかった。わたしは、ポケットから雑記帳を出した。珍しいだし物があればスケッチしておこうと思ったからだ。

二、三分、いや

四、五分はたったろう。中年男が、下腹部に貞操帯のような鉄の帯をはめられ、鉄仮面をつけて出てきた。女のなかでも若い、マリアンネという娼婦が、ストッキングとブラジャーという格好で、ついてきた。マリアンネは手に鉄の手カセと足カセをもっていた。

部屋の中央まで来ると、マリアンネは鋭くサディスチックに言った。

「止まれ！」

立ち止まった男の両手には、クサリのついたカセがガチャリとはめられ、足にも、囚人のようにクサリつきのカセがはめられた。



マリアンネは、インゲから練習させられていたのか、慣れきった手つきで、すべてのことを運んだ。彼女の手が鉄仮面にのびると、そのまん中にあるツマミを、グイとねじまわした。

「ウワーッ」

と、うめき声が、鉄仮面の中からもれ、手カセのクサリがブルブルとふるえた。

「このネジをまわされると、クツワをしめられた馬のようにおとなしくなるのよ」

そのとき、奥から、一台の車つきのテーブルの上に皮のムチを幾つも並べ、ヤットコを

のせて、もうひとりの女——それはヴァレリと呼ばれていたフランス女だった——が、ガラガラと押しながら出てきた。

道具が、一つ一つマリアンネの手で巧妙に使われた。ムチは当てられなかったが、彼女はそれをクルクルと巻いて、男のからだをくすぐった。

「待望のムチよ、ホラ、こんなに太いのよ。きつと痛いでしょうね！」などといいながら。

ヤットコは、鉄帽のまん前のネジを回すのに使われた。それをねじられたとき、男は、とび上がって踊った。そんなに苦痛がひどいらしかった。きつと、最も敏感な部分をしめつけたのだらう。

ジャラジャラとクサリの音の伴奏つきで、踊るようにもがいている男を、グイと押しやって、マリアンネは、そのたくましい肉体をテーブルの上におし倒した。両手両足をバラバラにテーブルの脚に結びつけると、ムチが、ピシリと当てられるのだった。

インゲが現われた。皮の長靴をはき、手に乗馬鞭をもって、長いパイプでタバコをくゆらせながら、胸もとは何一つおあっていない。パンティーは、最小限度に小さく、その

上に上等の紗で作ったおおいをスカートのようにはいているだけだった。

「アイン・ツヴァイ・ドライ……」

インゲは、きびしく数を読んだ。ピシリ、ピシリと打ちおろされるムチは、深く食い込んで、男のお尻は、シマ馬のようだった。

「ドライツェーン・フュンフ(35)」

35回でムチは終わった。

戸口のところには、呼び込まれた志願者が下帯一つで並んでいた。黒人の給仕アグラールが、インゲにお酒を持ってきた。

その杯を手にして、インゲは、ソファに腰をおろした。

マリアンネは、車つきテーブルに中年男を縛りつけたままで、それを押して退場した。

42 打めのムチで

「ビューッ」とインゲが口笛を吹くと、縛られたふたりの全裸の女が、ヴァレリにこづかれながらよろめいて出てきた。インゲは冷ややかにふたりの女をみながら言った。

「ふたりでわたしをだまして逃げ出そうなんて、そうはいかないよ！ いまから、ヴァレリねえさんが、おまえたちにごちそうをしてくださるからよく味を覚えておき！ ヴァレリ、こいつらは、お金を出して痛い思いを

尻をつき出させられたふたりの女は、ヴァレリのムチが打ちおろされるたびに、悲鳴を上げた。

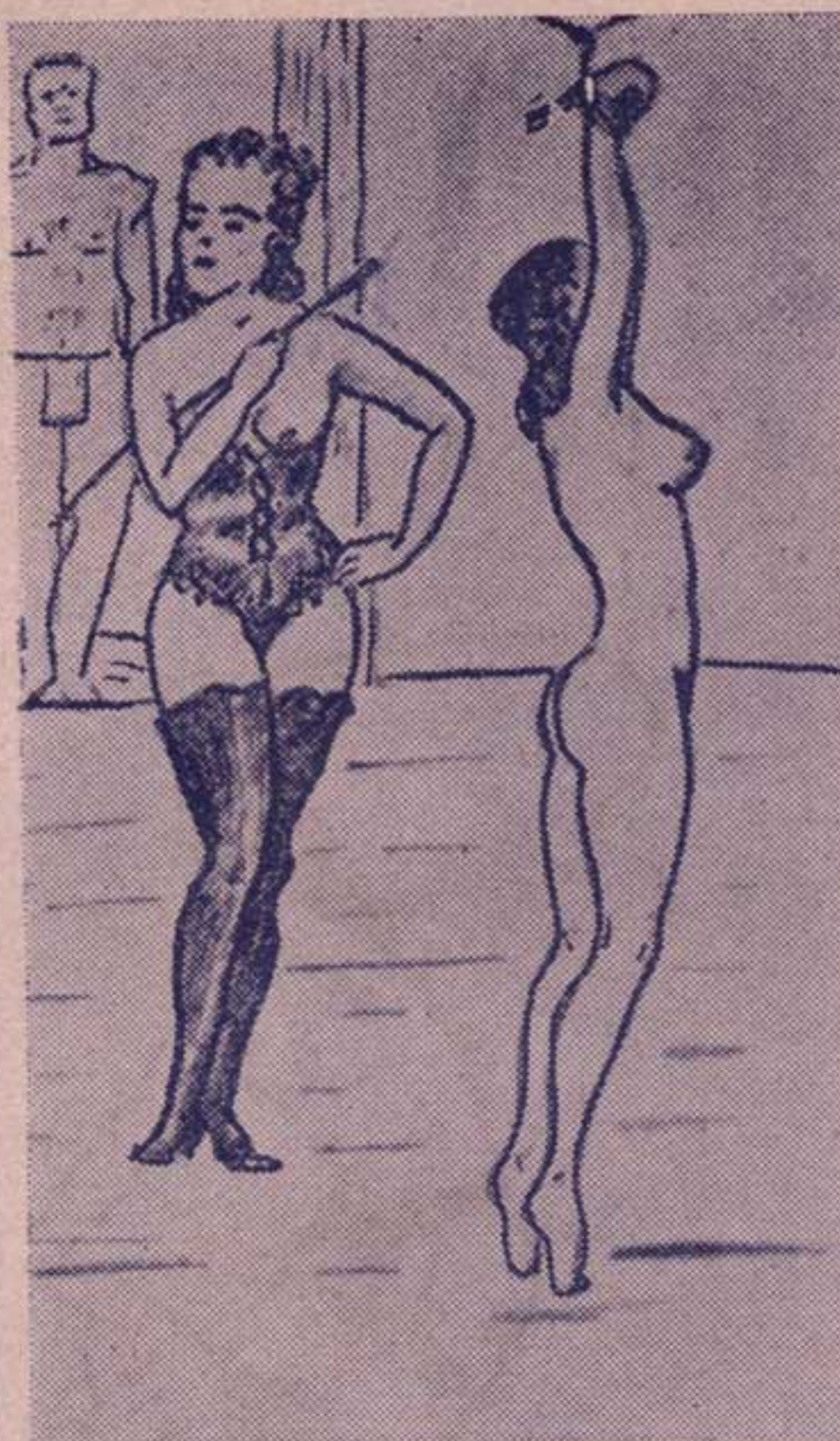
ヴァレリは、本当にサディスティックな女だった。ふんばってひらいた彼女の足は、大地に根が生えたように、床にギシギシと音をたてた。女をムチ打つヴァレリは、サルまわしが、サルを折檻しているようだった。

女のお尻は、一ムチごとに赤くハレ上がり血がにじんできたが、ヴァレリはいっこうにやめなかった。42回めに、女はドサッと床に倒れた。

もうひとりの女は、天井からのナワで吊られた。つま先だけでかろうじて床に立っていた。悲にヴァレリの乗馬鞭がおそいかかった。女は立っていられず、グルグルとまわった。その女の裸身に真横に胴をまくように、ヴァレリは残酷にムチを当てた。女のわき腹は、赤いバンドをしているようだった。傷口は破れて、血が流れ始めた。

そんな様子を見ていて、インゲはさらに命じた。

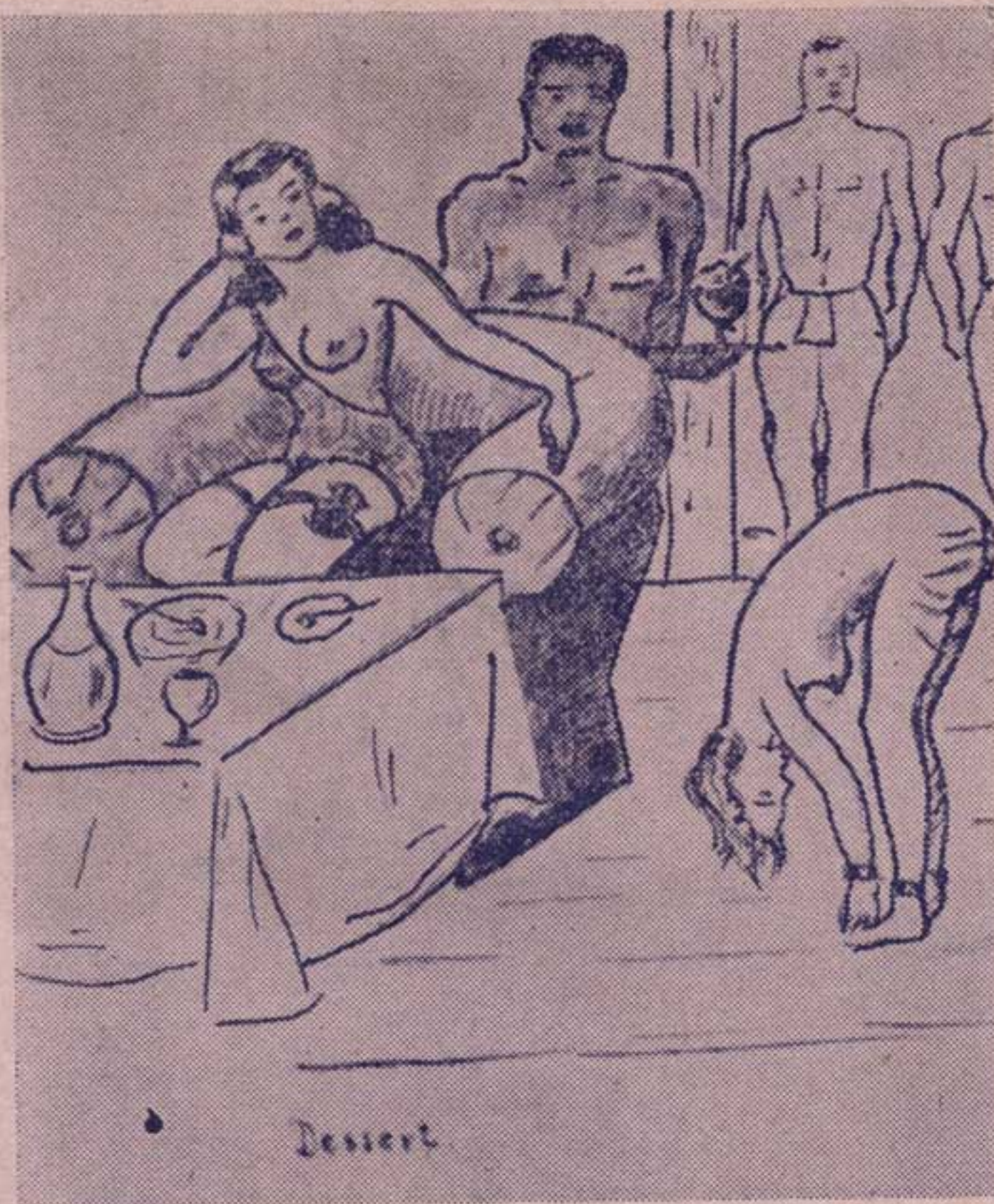
「ヴァレリ！。血のシャワーを浴びせておやり！」



け容赦ないムチの下で悲鳴をあげる。

したいというかたとはちがうからね。おまえは好きだろう？ 女ふたりにムチを浴びせるのもきつとおもしろいと思うわ！ 手加減なしに打ち据えなさい。せいっぱい恥ずかしい格好をさせてね！」

両手足を一つにまとめて結ばれて、お



幕間劇として、インゲにそむいたふたりの女はヴァレリの情

ヴァレリは、さらに容赦なく打ちつづけた。もう女のからだは、手足を残して、皮をはがれたブタのようになったところ、ヴァレリははじめて打つ手をやめた。

二人引きの馬車

ふたりの打ち据えられ血まみれになった女たちが、ヴァレリにひきずり出されると、こ

「ソラー！」

「ピシーッ」

という音がきこえると、一台の馬車——いやふたりの人間にひかれた車が、クリスチーネをのせて現われた。カラカラと車はなめらかな床をグルッとわたしたちの前で回った。男たちは首輪で手綱をしめられ、からだには無残なムチのあとが、なまなましかった。

の店で一番美しいクリスチーネが、長い皮鞭を小意気に腕にかかえて出てきた。「皆様、いままで、あちらで調教しましたので、からだに傷がついていますが、見苦しい点はお許しください」

「ハインツ！」とクリスチーネはしかるように言った。「傷がつくと困るといったそうね！馬車をひく馬がそんなこと言って、あたくしがきくと思っているのかい！思いきり傷をつけてやる。ソラー！足を高く上げて！」

「ピシーッ！」と美女の長いムチは、ハインツの胸に容赦なく打ちおろされた。クリスチーネは、先頭の男にはあまりむごい鞭は当てなかったが、ハインツには厳しかった。

「ほかの女の前で泣くがいい！こうやって傷をだれにつけてもらったというのだい？」

クリスチーネは、乗馬靴をはいた長い脚をハインツの両肩にのせた。

「おまえの肩にのせているのはなんだい？返事をおし！」

ハインツは悲しそうに恥ずかしさを忍びながら言った。

「乗馬靴です」

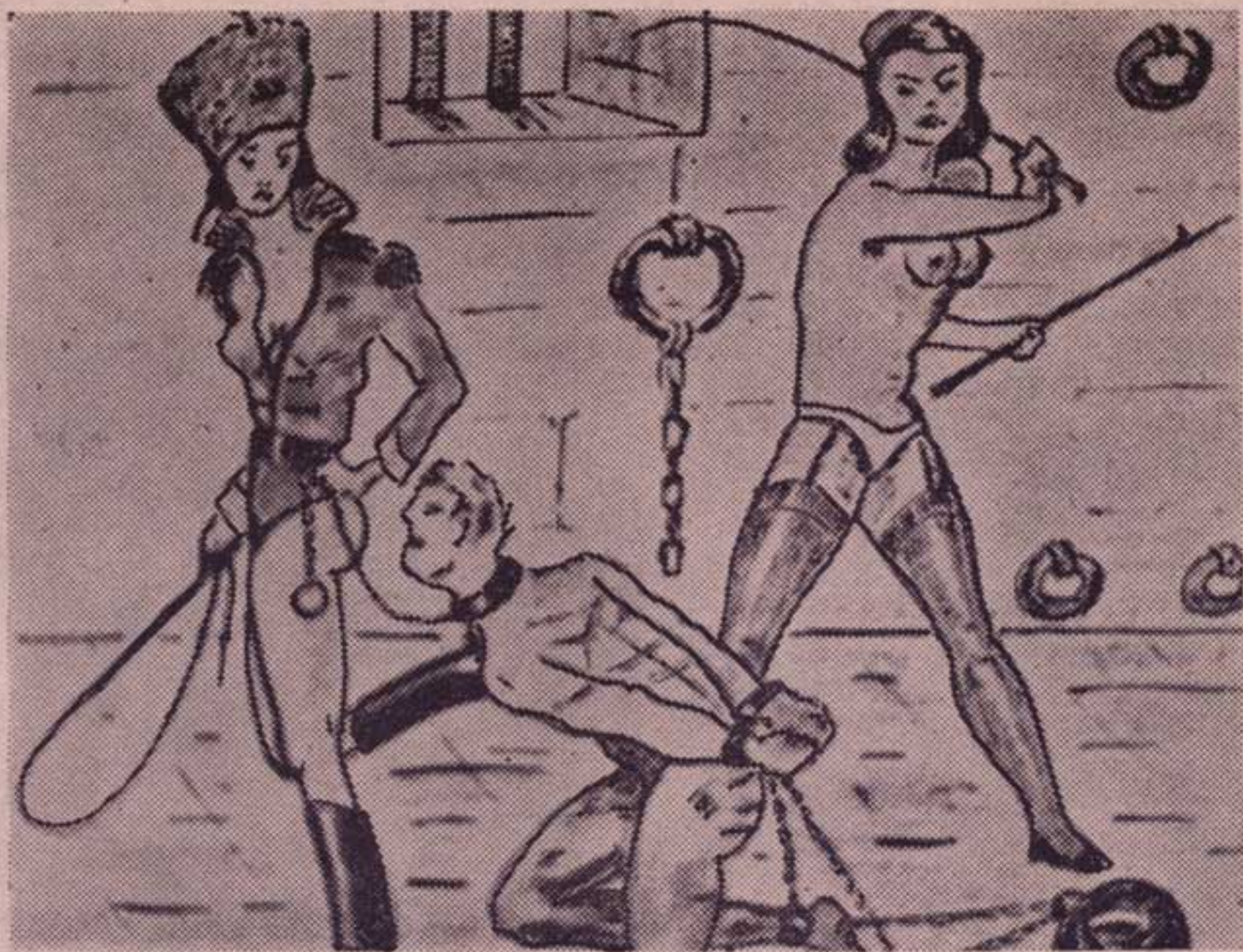
「その靴はどういう時にはくんだい？」

「馬に乗るときにです」

「その乗馬靴をはいたあたしの車をひかされているのは、いったい何者なの？」

「ウ・ム・です」

「そうよ！ウマよ、畜生だわ。じゃ、畜生らしく元氣を出して走るんだよ！」



牢の室。でひとりの男が鉄の玉をひかされていた。

槍騎兵のいでたちの女

インゲが立ち上がって言った。

「あちらに行きましょう」

皆は、ゾロゾロと彼女に従った。

二階の「牢の室」に案内されたわたしたちは、そこに、首と両足に十字架と鉄丸をつけられて、はわさされている男を発見した。

ロシア兵のかぶるアストラカンの帽子をかぶり、槍騎兵の上着をつけ、竜騎兵の長靴をはいたラファエラが、男の前のクサリを握り、手には、おそろしい牛追いムチをもつて、じゃけんに引きずっているのだった。そのうしろからは、ヴァレリが、二本の短い皮ムチで、男の背後から責めていた。

ピシーリッ、とクリスチーネは、ふたたびハインツに力いっぱいムチを浴びせた。隣の男がわたしにささやいた。

「クリスチーネのやつ、ハインツにはれてい

たんですよ」

馬車は、やがて、室外に去った。

そのあと、ここでは、さらにみだらな見せ物が行なわれた。時計が十二時をさした時、インゲは、腰を上げて言った。

「これで終わりです。ご満足だったかしら？ 出て演じた人はきっと満足したでしょうけれどね。でも、ヴァレリ、クリスチーネ、それからマリアンネとあたくし、四人の女は心底からのサディستنです。あたくしたちが本当に楽しめるのは、あれほどにやらなければならぬのよ。わかっていただけるかしら？ それに、今の四人の殿方は全部婚約しましたわ。もちろん、クリスチーネはうちのナンバ―ワンだけれど、やむを得ないんです。調教師が、自分のライオンを買うといい出したら、他人のいうことなんかききませんもの。この日から、わたしたちはインゲにあだ名をつけた。『血のインゲボルク』とだ。

そして、わたしは、告白しなければならぬ。そのインゲボルクこそ、いつかお手紙に書いた、わたしの先妻なのだ。彼女は、性的な遊び以外では、すばらしく女らしい女性だった。四十四歳で病気で死んだが、わたしには過ぎた妻だったと思っている。

墓には、彼女の希望で、刻んだ。『血のインゲボルク・エデルマン』とね。 J・E

ほも禁秘帖 ⑩

男色者における異性関係

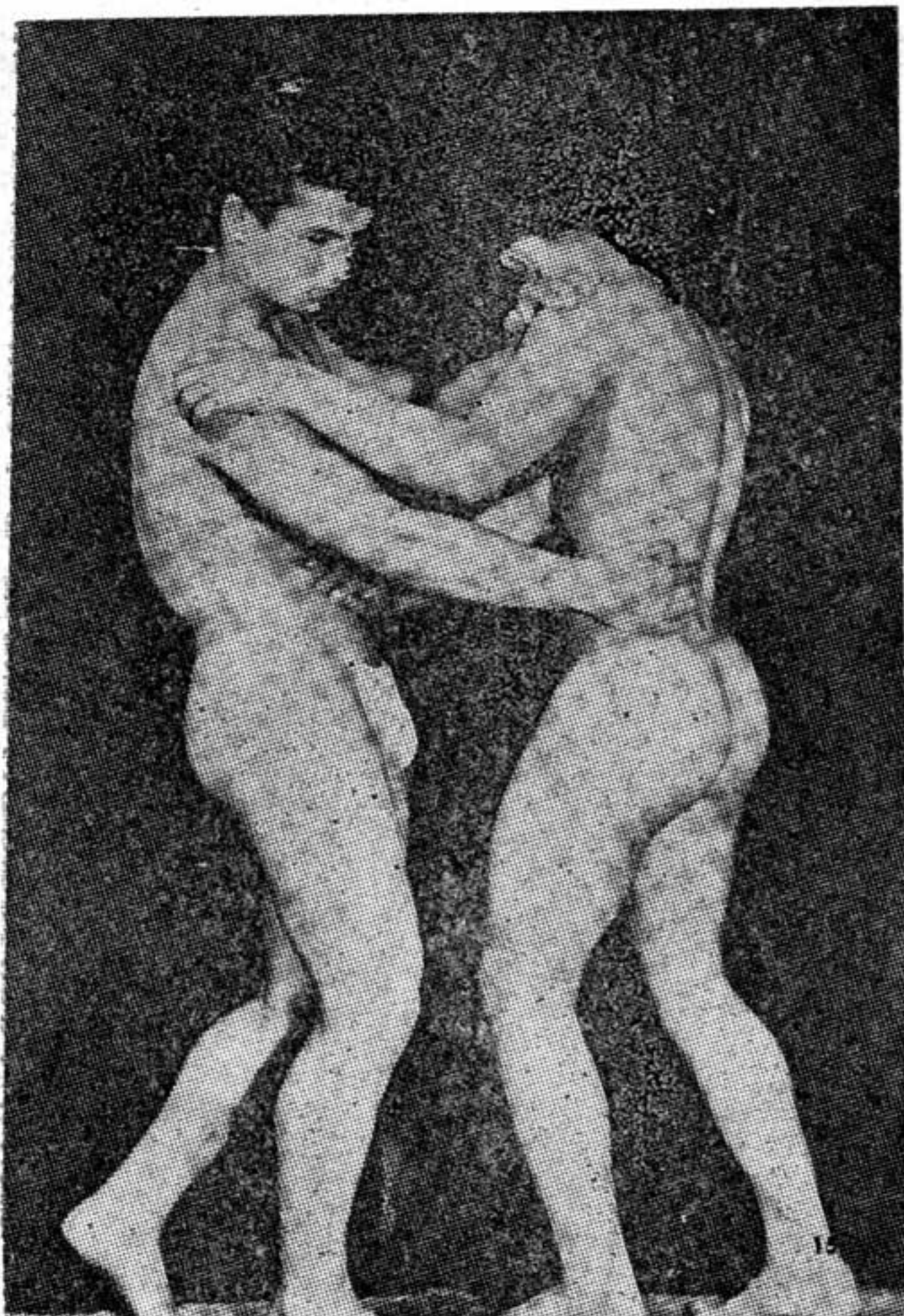
かびや・かずひこ

異性嫌悪の人々

女性にたいする男色者の見方・感じ方は、だいた
いにおいて、無関心でなければ、嫌い・いとわしい
などというのがもっとも多い。

女を嫌うようになった心因はいろいろあるが、幼
少時の家庭環境から起こったものでは、次のような
のがある――

ぼくの家は、もと下関で相当大きな遊郭を営ん
でいましたので、小さい時から女性のきたならし
い、いやらしいところをさんさん見てきて、女性
にたいしては嫌悪感^{けんおかん}をもちこそすれ、恋しいとい
うような感情など全然起こりません。



これは下関在住のK・Tという十九歳の工員が寄せてきた書信の一節である。

幼時、自分の家にかえられていた娼婦^{しょうふ}たちの、手れん手くだで客をだますさまや、そのアケスケの会話などを見聞きして、女というものに嫌厭^{けんえん}をもつようになったわけだ。

これに似たケースはすくなくなく、芸者屋の家庭に育ったものや、女きょうだいの中で生育した男性には、男色者がよくみられる。
次の例などもそれである。

いままで女性と交際したことは一度もありません。そんなことは想像したこともありません。女の子を教える職業であります、なんだかきたならしいような気がして、手も触れません。教えるつごうで、よんどころなく手を握ったりすると、あとですぐ手を洗います。職業がら、女の誘惑は多いのですけれども、そういう女性を見るのも嫌いです。

この書信者は、岡山県在住、二十五歳、日本舞踊の名取りで、現在その師匠をしているU・Fという青年である。

祖母という人がやはり踊りの師匠だったので、幼時から女ばかりの中で成長し、子供のころから女の



子のような振りそでをきせられ、赤いコッポリをはいて、遊びも女の子の遊戯だったということだ。完全なウールニングである。

踊りを教えるために、よぎなく相手の女性の手をとったりしたときは、あとですぐ手を洗うというにいたっては、まさに徹底的な女性嫌悪^{おんせいけんあく}といってよからう。

また、次のような例がある――

私は中学生のころまでは、ふつうの男性の性心理とすこしも変わったところがありませんでした。たとえば女子生徒と文通したり、美しい女性を見てウットリとしたり。あるいは頬^ほがあくなったり、世の若い男子学生のたどる道を順調に歩いていたのです。

それが中学三年のころ、私の実家が産婦人科医院であるところから、好奇心でふと診察台上の婦人の股間を盗み見たとき、その不潔さは、少年の潔癖心と、いままでいっていた女性への夢とあこがれをひどく傷つけられてしまったのです。

それ以来、高校および大学在学中、数人の女性と関係をもつ機会がありました、中学生時代にかいまみた女性の股間をおもいだすと、もうどんな美しい女性にたいしても、リビドーが失せてしまい、やっこのことですすすといった状態でし

た。

東京在住のS・Hという三十二歳のエンジニアがよせてきた手紙である。

少年時代に盗み見た、かれのいわゆる「不潔な」女性の性器のすがたが、いつまでも脳裏から忘れられない悪夢のように、かれの頭蓋にこびりつき、それが強迫観念となって、かれを女性嫌悪へとかりたてているというのだが、手紙の文面から察すると、その嫌悪感はずほど強いものではないらしい。

その後、高校時代また大学時代に、数人の女性とともに、かくにも性的交渉をもったことからそれがいえるし、また、この引用文中には省略したが、S・Hは現在「女性の美をも理解しよう」と努めているがダメだ」とあるところなどをみても、そう考えられる。

Hは、本来は両性愛的のペデラストなのだが、かれの異性愛的のものは、その偏執的なまでの潔癖感のために、行途をとざされている形となっているわけだ。

おれは異性と恋愛・性愛できる

以上の場合とは反対に、よろこんで女性と性的な愛撫またコイツスをおこなう男色者もいる。もっと



もこれはウールニングにはほとんど皆無で、ペデラスト傾向の者にかぎられるが……。

既婚者の場合は後項で述べるとして、ここには独身のソドミアの例だけをあげると――

私のもとへ遊びにくるジェロントフィリア傾向のC・Aという二十三歳の青年がそのひとりだ。

C・Aは現在堅いところに勤めているが、高校を出てから二、三年間グレて、ゲイ・ボーイの仲間にはいり、おどしまがいのことなどとして、警察の留置場にも再三はいったらしい。

そのころ、Aの勤めていた酒場の近くの若い女給たちが、かれの美貌とゲイであることに興味をもつて、さかんにモーションをかけてきた。かれはそれらのモーションをかたはしからOKして、女たちと受け身の形で歡をかわしたというのである。

「とてもおもしろかったです。男とちがったよさがありました」

とAは女との交歓の快を、そう私に述べた。

もっともさいきんのゲイ・ボーイには、ドンテン（男色女色両方できるもの）であることをみえにしている風潮があるから、Aもまた、おれだって女とできるゾという仲間への虚勢から、異性と関係したのかもしれないが、とにかく、動機はどうであって、快感をもってことをすませたというのは事実らしい。

「女を愛せるかい？」

と私はAにたずねた。

「だめだめ、それはだめですよ」

かれはそういういながら、いそがしく手を振った。

愛のころは、やはり同性——好みのタイプの同性にたいしてでなければ起こらぬというのだった。

次に、私の書いたものをみたといって尋ねてきてから、ときどきフラリと顔をみせていたE・Yという二十歳の大学生がある。

良家のむすこらしいぽっちゃんふうの、しかしなにか気おったところのある、これもなかなかの美青年だった。

E・Yの態度や話すところには、たぶんホモにひかれているようなのだが、一方また、こんなことにひきずられないゾという構えたふうもみえた。

同性愛というものが、まだ身にしみてわかっていないらしい。だがそれが未知なだけに、自分の心をひきつけるその不可解の門の奥深くさぐりいつてみたいようすなのだ。いわばおそい無差別期にかれはさまよっているのであった。

私はあるとき、尋ねてきたYにわざと女の話をした。するとかれは、

「ぼくもいま、つきあっているガール・フレンドがいるんです」といった。



どの程度のつきあいかと私がたずねると、かれは恋愛関係だと答えた。自分も彼女を愛しているというのだ。

「じゃあ、セックスのほうも……？」

ときくと、かれは「ええ……」と大きくうなずいた。

自分は女性を愛せるし、性の交わりもできるのだから異常ではないといった、かれ特有の構えたふうがうかがわれた。そのことは他人にたいしてのみでなく、自分自身への証——^{あかし}ノーマルであるという——としていようでもあった。

つまりは、そんな構えをしてみせるだけに、かれはりっぱな男色者なのかもしれないと私は思った。それからしばらくして、Yが手紙をよこしてきたが、そこには、

「先日おはなし申しあげた愛人の女性が、ぼくの子を妊娠したらしいので、近く彼女を自分のもとにひきとって同棲するつもりです」

うんぬんとするされていた。

Yとそのガール・フレンドとの同棲生活がどんなふうであるか、私は大いに興味をもっているのだが、その後、かれは私の家にブツツリと姿をみせなくなったので、その間の消息がわからない。

また、男色者としてはちょっと他と変わったセックスの処理方法として、R・Wという三十歳の独

身のサラリーマンから、さいきん次のような話をきいた。

R・Wは性の欲望にたえがたくなると、他のソドミアたちのように、ゲイ・バアや映画館などへかけて相手をもとめるようなことはせず、新宿や池袋などのトルコぶろへ行って、そこの若いマッサージ・ガールに、いわゆるスペッシャル・サービスをさせるというのだ。

「スペッシャル・サービスにも第一、第二、第三段階までありましてね、ぼくはその第一段階の弄根サービスをしてもらうのです。相手はビジネスですからへんな顔もせず、こちらの注文どおりやってくれますし、ぼくも女のほうが気がささないでいいですよ。そのチップ一〇〇〇円なりですから、安いもんです」

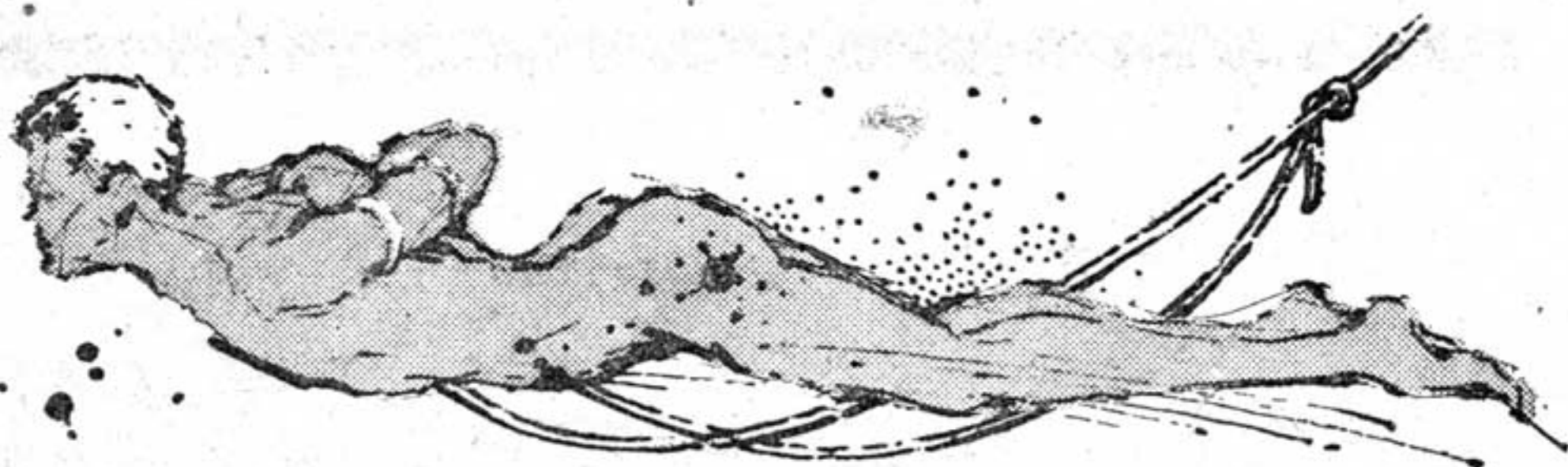
とWは説明した。

かれのいうところの「女のほうが気がささないでいい」というのは、自分が相手に正常な異性にみえるという意味だろうと私は解釈した。

妻との性生活はどうか

おもしろいことに、男色者には縁談をもってくる者が多い。

というのは、



一、かれらは女遊びをしない。異性関係の浮いたうわさがない。

二、比較的マジメである。

等のため、当人をソドミアとは知らない周囲や親せきの者、勤務先関係の人などから、結婚の話をもちかけられやすいのだ。

そうしたとき、男色者はどのような態度をとり、どのように処理するかというと、私の知るかぎりにおいては、おおむね結婚するようだ。

もちろん、そこにいたるまでの過程には、懊惱^{おうれう}するもの、一時のがれに延ばすもの、その他いろいろの場合があるが、けっきょくは結婚をとりきめることになるのが多い。

そこに至るプロセスの細部な心理分析はここにおいて、男色者がこのようにおのが結婚問題にがえんじることとは、自己の同性愛性向を他に秘するためと、社会との調整関係を保つためにほかならない。では、このような心理状況で結婚した男色者の夫婦生活——性生活とはどんなふうに営まれているかをみてみよう。

四十歳、身体健康な会社員です。二十数年前に現在の妻と結婚し、すでに子供も高校に通学しております。

どういうわけか女性に興味がなく、どんな美人

といっしょにいても興奮などせず、むしろいやな気がするくらいです。妻との性行為も一般とかわりなく過ごしておりますが、ときどき中途でいやになります。

(大分 T・H)

三十八歳の会社員、いままで女色については知らぬことはないくらい経験してきた者ですが、今では、女性にたいする性的興味や関心が、まるで薄らいでしまったのです。どんな美しい容貌や肉体美にたいしても、その美を衣服を脱してながめる程度の欲望はあっても、関係してみたいというような、ふつうの男としての性的感情がわきません。

こんなわけで、現在妻帯しておりますが、妻との性生活において、それを始めるまでは男としての正常心理なのですが、行為に移るとおいおい自分の理性が強くなってきて、そうなる^{きざし}と索然とした気もちにおちいってしまうのがオチなのです。でも妻へはゼスチャアによって、自分も満足したように思わせていますが、われながらいやになってしまいます。

(三重 M・Y)

周囲のすすめで結婚しましたが、自分の心は同性に傾いており、異性にたいしてはすこしも興奮も魅力も感じないので、夫婦仲がうまくゆ



くはずはありません。そこで今は妻と別居しております。それがぼくには好つごうとはだれも知りません。三十二歳の公務員です。

(福井 Q・Q)

四十五歳の気の弱いインテリ・サラリーマンで、経済的には中流くらいの生活をしています。結婚をして子もありますが、もちろん後悔しています。そんなわけでおたがい不幸なのですが、いまさらどうすることもできず、満たされぬままに日を送っています。

結婚の話が出たときは、こうした性向は結婚すれば次第になおると簡単に考えて、結婚しました。

さいしょのうちは事務的に夫婦生活をしていましたが、次第にそのことに興味がなくなり、ついには嫌悪感さえ覚えるようになりました。自分は同性愛の宿命をもって生まれたのだとはっきりわかりました。

(高知 E・G)

飲食業を営む二十八歳の妻帯者です。結婚生活六年、五つになる女児がいます。

私たちは三年ほどはふつうの夫婦生活とかわりはありませんでしたが、あるとき妻が実家に帰った留守中に、近所の十九歳の美少年が遊びにきて

泊まっていたおり、かれの寝入ったのをまっつて、ふといたずらしてからというもの、むしように同性が恋しくなり、そのころより妻といっしょに寝るのがいやでいやでたまらず、まして交情など考えるさえゾツとするほどになってしまいました。しかしそれでは家庭不和のもとになると思い、努めて——ほんとうに努力して、週一回くらい妻と情を交えることにしております。

(広島 N・D)

以上の五例のような、内容的に、いわゆる円満ならざる性生活が、男色者の結婚には多い。

したがって、夫婦生活の頻度も、すべての年齢層を通じて、ふつうの人のそれよりは少ないようだ。五番目の広島N・Dのような、週一回というのは多いほうで、ここには書信資料を失って紹介できないが、結婚早々の男性で妻と月一〜二回をようやくおこない、それ以上は苦痛——精神的に——だと訴えてきたものがあつた。

そしてその少ない性生活も、「偶然のエレクシヨンを利用して、単なる機械的操作ですます」というのが多く、また、「好きな同性のイメージを脳裏にえがきながら、その同性の代償において事をすます」というのもけっこう少なくない。もっとも、後者のようにしておこなうコイツスは、事後ひじょう



に疲れるということだ。

このような不幸な夫婦生活の多い中で、まれには次のようなケースもある。

私は世の女性にはなんの性的関心もありませんが、妻だけは地上最愛のものとして愛しており、妻もまた私に絶大の愛と信頼をかけておりまして、夫婦仲はすこぶる円満です。

性の欲望は、この老妻と月に二回くらいの愛撫行為によって解決しているので、それについて悩みもありません。

ただソドミアとしての希望として、自分の好みにあった十五歳ぐらいから二十五歳くらいまでの若者の裸体をあからさまに見たいだけで、その発散を月一、二回ぐらやっております。

この書信を寄せてきたのは、現在は、某大学の教授であり、学位も持っている五十八歳の老ソドミアである。

そのいうところによると、かれは大学内でも品行方正の人格者でとっているだけに、世間にはぜったいにかれがホモであることを知られておらず、また、妻や子供にも全然気づかれていないので、堂々と、かれのいわゆる「発散」のチャンスをつかむことができるということだ。

ある画家の異常な夫婦生活

おわりに、ふつうにはいささか異常とも思える、変わった夫婦生活をいとなんでいる男色者の例をあげよう。

私が孤独な戦いの中に得た過去のいろいろな体験は、世の常の考え方からしては、醜くも汚れたものとしてみられるかもしれませんが、私としては、孤独な現実からのがれられない人間のあがきとして、自己をも滅亡させたいほどの苦しみの中からなんとかして立ち直ってゆきたい、自己への一種の戦いでありました。

私が二度の妻帯をし、その二度目の現在の妻もそして初めの妻も、その女心のうわ気性を利用して、私は妻に他の男性とさまざまな肉体的交渉をさせながら、自分の妻にたいする愛情が、いかにいつわりであるかを自覚するとともに、妻と交渉する相手の男性にたいして思慕の思いを深め、自分のソドミアとしての自慰にふけりました。

それがついに昨年、私の長いあいだの同性の愛人であるA君（私と同年の四十八歳）と妻と話し合いのうえに納得させて、三人三態の性の乱舞をおこなうようになりましたが、愛するA君と妻の交情が深まるにつれ、A君の心が私をはなれてゆ



くのを知り、私は驚きおそれて、妻とA君との仲を引き裂いてしまいました。

が、その結果は、A君はついに私からも離れ去ってしまったのです。

私の悲しみ、さびしさはことばに現わせません。そのことによって受けた孤独ないたでは、私にソドミアとしての誇りと自負とをいだかせたといえます。

この書信のぬしは、有名な美術団体に所属しているS・Gという洋画家で、りっぱな体軀と童顔をもつ、純情でパッションネートな性格の人である。

かれは私の家へたびたび来訪してきたので、この手紙にしるされた「危険な関係」について、つぶさにきくことを得た。それによると、かれは妻女と、もう長いあいだ性の交渉がないので、妻女のうわ気をゆるし、その相手として自分の同性の愛人Aを紹介したうえ、自分からすすめて妻女をAのもとへ泊まりにゆかせた。

そしてかれはひとり家でいて、妻女とAとの交歓のさまを想像しながら、ひとりたのしんだというのだ。

一見奇矯ともみえるS・Gのこうした心理状況をくわしく分析してみたいが、スペースがないのでまたの機会にゆずろう。

夫婦和合の祕器

NEO

ワゴリング



(新案特許出願中)

性に悩む男性に朗報!!

本器を使用すればアナタの悩み
即日解消! 専門家も断然推奨す

★勃起不全に対して

本器使用数分内に完全隆起し且つ射精後も萎縮しません。

★短小の方に対して

本ワゴリング使用数分内に局所は驚く程膨大します。

★早漏の方に対して

本ワゴリングを(併用)により絶対に30分以上持続し効果絶大!

空前の反響を呼ぶ!

▼週刊新潮3月23日号及び夫婦生活等に紹介され、益々反響話題を呼ぶ新製品! 本器は(取付けたまま使用)するので効くのは当然! 而も長年月使用しても副作用又は使用感がありませんから全く理想的です。

アナタの性能を即時10倍にする新製品ワゴリングをスグ御使用下さい。

ハガキで申込次第カタログ無代進呈致します。

▼定価送料共一組11,350円
(個人名で急送します)

短小のポテ
ビル療法!

◎専門医家激賞!
★画期的構想による最新式
短小増大器の発明!

男性器発育不全、短小のため失望せる方は、最新式真空治療法「ラージ増大器」の出現により局所の肥大、伸長を図り、大なる喜びを得られよ!

●定価一組11,450円(荷造、送料サービス)

ラージ真空増大器

手芸品

おみやげ
贈物に...
大好評!

名産 肥後

九州名産品

★好評新発売★

特製品7種1函...850円で急送!

- 性力チヨコレート! 普通板チヨコと同一で、食べて30分位で性的亢奮を示す! 男女共有効! 六枚入り...六五〇円
- オットセイ丸末 驚異の一夫多妻のオットセイの睾丸を粉末とせる性力の王者! 一函...千円
- スポンチ式スキン 従来のスキンの外面に微細なるザラザラを付す好評品! 一ダース...三〇〇円

東京都杉並区神戸町128
株式会社 療養の友社
電話(398)4679 替振東京118443
(高田馬場より西武線井荻駅下車 徒歩2分)
(荻窪より井荻駅行バス5分、柿の木町下車)

ホモの窓



▼レスビアンとソドミアと

ついこのあいだ、レスビアンの女性ふたりと会話して、彼女たちが、いかに男性器にたいして嫌悪感をいだいているかを、つくづくと知った。

それは、ソドミアが女性器を嫌厭(けんえん)する気もちよりも、いっそう強烈なもののように思えた。

しかし、同性の性器にたいするナイドは、両者(レスビアンとソドミア)のそれを比較すると、これはソドミアのほうがたしかに強いらしい。どちらがより美的であるかは別として……

——以上、筆者の感じたカン

である。

▼ジイドの日記から

ジイドはその日記において、自己の同性愛をあからさまにぶちまけている。

たとえば、かれは七十三歳(一九四二年)のとき、独軍支配下のフランスを去って北アフリカのチュニスにいたが、そこで十五歳の少年を愛して肉体的交渉をもったことが、日記の中に次のようにしるされている。去る六月、チュニスで、こんな年齢になっても味わわれるものとは、もはや夢にも思っていなかったような快楽を二晩経験した。二晩ともすばらしかった。そして二晩めは、最初の晩より

は思いがけない驚きをもたらし、消灯の時間に、Fがホテルのわたしの部屋に会いにやってきた。さいわいにかれの部屋はすぐ近くのだった。かれは十五だといっていた。または、それ以上にもみえなかった。顔よりからだのほうがずっと美しかった。わたしは到着した日から目をつけていたのだが、人なれないようにすなので、思いきって話しかけることをためらっていたのだ。かれは快楽に一種の陽気な抒情を、楽しい狂熱をもたらし、そこにはたしかにむさぼるような欲望と同時に、未経験者の渴(かわ)きがはいっていたにちがいがなかった。かれのほうでは、相手に満足させるということは、問題ではなかった。なぜならば、かれのほうでは、わたしと同じくらいに、みずから進んでこの遊びを楽しんでいたから、私の年齢などはまるで気にしてはいないようだった。それで、わたしのほうでも、それをまるで忘れてしまった。これまで、これほど充実した、これほど強烈な快楽を味わったことは思い出せない。

「この最初の夜は、わたしが誘ってやって来たのだが、二度めの夜、それは四日後であったが、こんどは呼ばれないのに自分のほうからやってきた。

それから数日後、三度めにわたしのドアをたたいた。そのときかれをはいらせなかったことを、今日どんなに後悔していることだろう。(中略)かれはたしかに童貞だった。かれの激情が新鮮だったことも、たしかにそれを物語るものである。それからまた……(思いきっておうか?)かれの感謝も、かれの全身も、感謝の歌をうたっていた。多くの若い人びとは、相手とともに、相手のおかげで恍惚の頂点に達するのに、相手の若さや美しさを全然必要としない。——われわれは、かれらの若さと美しさで、そこに誘われるのであるのに」(新庄嘉章氏の訳による)

▼ふたたびジイドのことばについて

ジイドは、男子同性愛のいろいろのタイプをかれ一流に分類しているが、そのなかのアンヴ

エルティを、「男子同性愛で女の役割りをひきうけ、相手に所有されることを欲する男」とかは定義している。そして次のようにいつている。

「アンヴェルティとは、ほとんど交際したことはないが、精神的な形、または知的奇形というあの非難に価するものは、かれらだけであるようにわたしにはいつも思えるのだ。あらゆる同性愛嗜好者に、いちように放たれる攻撃の矢の対象となるのは、かれらだけにすぎないような気がするのだ」うんぬんと批判しているが、これはヒューマニストのジイドに合わせることではあるまいか。

▼稲垣足穂のエッセイ

イナガキ・タルホの全集が出ている。京都宇治の物置き小屋のような陋屋（ろうおく）に、仙人のような質素な生活を送っているという若者のために、この全集が大いに売れてくれることを祈るのは、あなたがち筆者ばかりではあるまい。かれの名エッセイ『A感覚とV感覚』から、その一節を――

「わが国でも最初の女神男神がセキレイから夫婦の道を教わるまでは同性愛ばかりだった、といひますからね。それからまた、古代ギリシャでは、そういう風習について一般的了解があったということも含めていたのでしようよ。マックス・ウェーバーは、『宗教の経済原理』のなかにはさんだ小論文で言っています。プラトンのエロスは、その歓喜は認めるとしても、もともと微温的感情であって、この関係からしてディオニシス的情熱はそれ自身としては古典ギリシヤでは公認されていなかったと。――わが西鶴を借りれば、こうでしょう、『若道（じゃくどう）世の契りとなし女絶えた男島、夫婦いさかきかず格気（りんき）おさまる静かなる時』です。同性愛者は階級制度とか社会的地位とかいうごときものにきわめて淡泊である、とヒルシュフェルトもかいています」

▼ある独身の弁

少壮大学教授のソドミアから、みずからの独身主義の弁を筆者のもとに寄せてきた。

「わたしが結婚しないのは、単に女性に興味をもてないためだけでなく、結婚が自分の勉強にマイナスになりはしないかと恐れるため、次には結婚式場のふんいきがたえがたいため、さらには子供を作るのがこわく、子孫を残したくないため、さいごに『日本人民共和国』ができた時の用心のためです。こんなことをいうと、百人のうち九十人は冷笑するでしょう。九人は許しがたい保守反動のやからといきまぐでしょう。でも、ひとりくらい共鳴してくださるおたのあるのを期待したいのです。」

わたしの唯一のなぐさめは仏像なのです。といって仏教に帰依（きえ）したのではありません。宗教はむしろ私たちの心の重荷をますだけのようです。あるいは、宗教を冒瀆（ぼうぶく）することかもしれないが、わたしには白鳳から天平にかけての諸仏像に理想的な美少年・美青年の姿をみいだし、それらが無二の恋人ともなったのです。千二百年の年月はただ、きのうときょうの違いです。その昔の失われた世界が、今のわたしの夢なのです」

▼むかしのソドミアの投書

今回は新聞の同性愛記事のかわりに、三十年ほど前、記者のもとに寄せてきた、当時の男色の投書を紹介しよう。

それは妻帯者で、一方、男色にふけていたK・Sという人の手紙で、かれは自己同性愛の経歴を述べたさいごに、自分の好みのタイプを次のような個条書きにしるしている。

「私のもっとも好める人は、一、美少年なる十七、八歳より二十歳ぐらいまでの学校生徒。

二、紺（こん）のもも引き、紺のハッピを着したる東京によくある火消しの意気なる若衆。
三、十七、八歳より二十七、八歳ぐらいまでの商家の店員。
四、芝居（しばい）は好めるなれど、俳優は好まず。青白き肉体は好まず。
五、色は黒き男らしき男性は

なんとなく恋し。
わたしは、多年の経験によって考えるに、一面識なくとも自分の好める同性とは、かならず二年三年ののちには握手す」

虐殺指令

③

— 大量殺戮の状況 —

恐怖の細菌作戦は関東軍によってついに敢行された。
苦しみ、もたえ、断末魔にあえぐ無数の中国人たちノ

真野麗

江馬美久・え

女囚らは性病菌を注射された

十二月二十八日午後、証人のひとりである古都義雄にたいする尋問がおこなわれた。

古都は若冠^{じやつかん}二十五歳。鳥取県の出身、十七歳のとき郷里で職を求めていたところ、職業紹介所の斡旋^{あつせん}で、関東軍軍属の職を得て、その年（昭和十六年）七月に第七三一部隊に入隊した。

部隊では第六四三支部衛生兵として、病原菌研究班に勤務していた。

法廷での尋問は、おもに、古都らが参加した特別細菌戦派遣隊の行動についてであるが、それはあとで記すとして、まず、やはりそのころかれが加わっていた人体実験の状況をみてみよう。

（検事） あなたの参加していた人体実験について話してもらいた

い。

（古都） はい。それは一九四三年（昭和十八年）末のことであります。ワクチンの効力を試験するために、実験材料として五〇名の中国人と満州人が使用されました。はじめこれら五〇名に予防注射をやりましたが、ある囚人には一回、他の者には二回ずつといったぐあいに区分して、注射をやりました。また、ある者にはそれぞれ異なった量のワクチンを注射し、これら五〇名のなかの一部には、全然ワクチン注射をしませんでした。

こうして、これら五〇名は五つの各組に分けられ、全員にチブス菌で汚染した水を強制的に飲ませたのち、予防注射の有無その回数と量によって、それぞれの場合、この病原菌がどんな効力を示すのかを観察しました。

（問い） この実験の結果はどうであったか？

（答え） 大部分の者はチブスにかかりました。何パーセントかはつきりとはおぼえていませんが、とにかく十二名か十三名が死



にしました。

(問い) 感染の効力検査のために、かかる残酷な人体実験がたくさんおこなわれていたか？

(答え) 私はこんな感染実験をもう一つ知っています。それは一

九四四年末か一九四五年の初めのことで、当時も同様な方法で感染が行なわれました。

(問い) あなたはチブス菌による果物の汚染実験に参加したか？

(答え) はい、参加しました。青果の汚染実験が行なわれたのは、一九四三年か四四年か、時日はおぼえていませんが、使用されたのはスイカとマクワウリでちょうどこれらが熟していた時期でありました。スイカ、マクワウリの一部には、細菌を注射して汚染し、他の一部は汚染しないままにしておきました。

注射器を使ってこれらをチブス菌で汚染したのち、細菌の濃さを検査していましたが、このためにこれらのものを実験室にとりよせて、これらのものの中でこれらの細菌がどれほど繁殖したかを分析していました。この検査ののち、細菌量が多いことが判定された場合、中国人と満州人五六名に、これらのスイカ、マクワウリを食べさせました。

(問い) それらのくだものを食べた人びとはどうなったか？

(答え) 全員が感染し、一部の者は死亡しました。

次いで古都は、検事の尋問に答えて、第七

三一部隊の監獄に收容されていた中国人、満州人の女にたいする、特殊実験の目撃証を陳述した。

それは梅毒の予防手段の研究のための実験で、女囚の一部に秘所へのスピロヘータ・パリダ（梅毒病原体）の注射をおこなったのである。

注射された女囚のからだには、三週間の潜伏期ののち、梅毒第一期症状が現われてきた。まず米粒大からえんどう豆ぐらいのまっ赤い、こり（硬結）が、舌や口唇や性器にでき、それらの近くのリンパ腺が腫れだした。

研究員は、それらをしらべたのち、さらに、その後の経過をみまもる。

やがてスピロヘータは女囚たちの全身にまわりはじめ、第二期症状を呈する。かるい熱を出し、ぐったりとだるいようすをみせてくる。うすあかいバラ疹が、女たちの胸や腹や背中あたりにあらわれる。

そしてまもなく、えんどう豆大の丘疹や、うみをもった膿疱が、肛門や性器にできてきた。

それらの発疹には、ぞつとするほど無数のスピロヘータが群居していた。

女たちはいずれも声がかれ、頭髮がぬけはじめた。このころになって、彼女らはようやく自分たちのからだの異常に気がつく。それがどんな病気かも知らぬままに……。

が、研究員にとっては、研究がおわれれば、梅毒の人間を收容しておくことなど害あって益はなかった。それらの女囚たちは、まもなくいろいろの形で消されていった。

ペスト・ノミが町じゅうに散布された

第七三一部隊は、大規模に細菌戦を準備しながら、中国にたいして開始した戦争中、すでに一九四〇年（昭和十五年）に、細菌兵器を部分的に実用した。

それは同年夏、第七三一部隊長・中将石井四郎を中心とする特別細菌戦派遣隊が、中国中部の戦闘行動区域に派遣されたが、寧波市付近で、同部隊の飛行機が機上からペスト・ノミを大量散布したのである。

そのころ北京の防疫給水部本部に勤務していた元軍医中佐西俊英（被告のひとり）は、ある日、第七三一部隊派遣隊の活動ぶりを撮った記録映画を見た。

画面にはまず、ペストで感染されたノミの特殊容器が、飛行機の胴体に装着されているところが現われた。ついで飛行機の翼に散布器がとりつけられている場面が写され、さらに、

“特殊容器にはペスト・ノミが充填されている”

という説明ののちに、四、五名の人々が飛行機に乗った。だれが乗ったか、西にはわからなかった。

飛行機が上昇した。

“機は敵方に向かって飛翔している”

という説明があつて、飛行機、中国軍部隊の移動、中国の農村などの場面が、順々に現われた。

まもなく、飛行機の翼から煙の出るのがみえた。

“この煙は敵にたいして散布されたペスト・ノミである”

と解説があった。

飛行機は飛行場に帰ってきた。スクリーンに、「作戦終了」という文字が現われた。飛行機は着陸し、消毒班の人びとが機に駆けよって、いそがしげに機乗者や機体を消毒する。

消毒がおわると、先頭に石井中将が機からおりてきた。ついで、碇少佐、そのほかは西の知らぬ男だった。

このあと「結果」という文字が画面に出て、中国新聞とその日本語翻訳文が写された。

「寧波付近で、とつぜんペストが猛烈な勢いで流行しはじめた」

と説明が述べられ、さいごに、中国の衛生兵が白い作業衣をきて、ペスト流行地区で消毒を行なっているさまが写された。

見おわって西は、寧波付近で細菌兵器が使用されていることをハッキリと知るとともに、ペストに感染した無数の中国男女が、七転八倒して苦しみもだえながら死んでいくさまが彷彿と脳裏にえがかれた。

「これが戦争というものだ」

かれはそう腹の中でつぶやいた。――

十二月二十六日午後の公判廷で、西はさらに次のようなことを供述している。

(西) 私はノモンハン事件、すなわち、ハルハ河方面事件のさいも、石井部隊が細菌兵器を実用したことを知っています。

一九四四年七月、私は孫呉市の支部から平房駅の第七三一部隊教育部長に転任せしめられました。私は前任者サノダ(原記のまま)中佐から事務を引き継ぎましたが、前日、同中佐が日

本に向けて出発したのち、かれの書類箱を開いてみて、ハルハ河畔で細菌兵器を使用したことについての書類を発見したのであります。

そこには当時の写真の原版、この作戦に参加した決死隊員の名簿、碇少佐の指令などがありました。決死隊は将校がふたり、下士官・兵約二〇名から成っていました。この名簿の下には、血でしたためた署名があったのを記憶しています。

(検事) 第一番目にだれの署名があったか？

(答え) 隊長碇の署名です。ついで碇の一連の詳細な指令、すなわち、いかに自動車に分乗し、いかにガソリン瓶を利用するかなど、さらに、いかに帰還するかについての指示が若干ありました。

これら二つの文面から、二〇人ないし三〇人から成る決死隊員が河――私はハルハ河と思いますが――を細菌汚染したことが明らかにになりました。

翌日私は、これらの書類を碇少佐に手渡ししました。そのとき、さてこの作戦の結果がどうであったかと興味をもちましたが、碇は黙ったまま書類を引き取りました。

派遣隊の残虐行動

これより先一九四一年(昭和十六年)第七三一部隊はふたたび中国中部、常德方面へ派遣隊を送り、同部隊の飛行機がまたもペスト・ノミをこの領域にまき散らした。

そしてさらにその翌年、中国中部の戦闘区域から日本軍が退却し

たとき、同部隊は中将石井四郎の指揮する細菌隊を派遣した。

この派遣隊の最も主要な目的は、玉山市付近の中国軍および「平和的住民」にたいする謀略実施であった。

そのさいの残虐行動については、派遣隊に参加した前記古都義雄の供述に聞いてみよう。

(古都) 一九四三年七月に、一二〇名の将校および軍属から成る

第七三一部隊別班が、汽車でハルビン市を出発しました。われわれは、日本の中国中部派遣軍防疫給水部が所在した中国中部、南京市に到着しまして、その防疫給水部から将校・兵の一団がわれわれに加わりました。派遣軍の人員はけっきょく一五〇と一六〇名となりました。

(検事) 派遣隊は中国中部で何に従事していたか？

(答え) 私が参加した派遣隊の業務は、何かといえますと、それは、貯水池・河川・井戸・建物などを、チブス菌およびパラチブス菌で汚染する方法による、細菌攻撃でありました。

第七三一部隊は、同部隊第四部で大量製造した前述細菌を、この派遣隊のために送りました。細菌はペプトン用のビンに詰められていました。

これらのビンは「給水」と表書きした箱に詰められていました。そして箱は飛行機で南京に送られました。



(問い) ところで、それらの箱に詰められた物をあなたがたはどうしたか？

(答え) 南京部隊に到着次第、ビンに詰められた細菌の一部は、これを飲料水用の金属製水筒に入れかえ、あとの部分はビンの中に残しました。ビンといっしょに水筒は全部箱詰めにし、飛行機で攻撃予定地に送りました。

攻撃は水筒およびビンを、井戸、湿地、村落の民家に投げこむ方法によって行なわれました。ペプトン用のビンの一部は、特製の肉汁で細菌を繁殖するのに利用されましたが、この肉汁の成分は何であったか記憶していません。

(問い) これらの謀略工作中、あなた自身は何をしていたか？

(答え) 私は細菌を充填した水筒を、井戸・湿地・平和的住民の住居に投げこむことに参加しました。

当時そこには、総数約三〇〇〇人からなる中国軍の俘虜の収容所が、二つありましたが、三〇〇〇個の特製のまんじゅうが製造されました。まんじゅうの製造には派遣隊員が加わり、しばらくしてこれらのまんじゅうには、注射器で細菌が注入されました。

(問い) まんじゅうを汚染したのは誰か？

(答え) 派遣隊に参加した第一部第一課の勤務員全員が行ないました。ですから、もちろん私も参加しました。

(問い) それら三〇〇〇コのまんじゅうはどんな細菌で汚染されたか？

(答え) チブス菌とパラチブス菌が使用さ

れました。

(問い) それからまんじゅうをどうしたか？

(答え) まんじゅうは細菌で汚染したのち、收容所に送り、そこで中国語を知っていた通訳の春日が、これらのまんじゅうを中国軍の俘虜に配布しました。まんじゅうを手にした中国人を撮った写真を私自身が見たことがありますが、確かであります。

(問い) 細菌入りのまんじゅうを俘虜に食べさせたことを、善行として写真に撮ったのか？

(答え) そのとおりであります。

(問い) それらの俘虜はそれからどう処置したか？

(答え) チブスおよびパラチブスの流行を惹起するため、收容所から全員を出してやりました。



(問い) 石井の命令で製造したビスケットのことに話してもらいたい。

(答え) それはタマゴ形のもので細長い形の二種のビスケットでありました。小麦粉で作り、まんじゅう同様、細菌で汚染しました。その後、このビスケットはどんな種類のものであるかをあらかじめ警告された日本軍兵士に引き渡され、兵士たちは、垣根の下や木の下、休憩地などに、置き忘れたかのようにそれらをまきました。その数は三〇〇ないし四〇〇コでありました。こうした派遣隊の現地工作の結果、その一帯にチブスやパラチブスの流行が突発したのであります。とくにパラチブス菌が有効でありました。

細菌戦部隊壊滅す

この年——一九四二年、第七三一部隊および第一〇〇部隊は、細菌戦遂行の準備のため、ソビエト同盟との国境地帯の特殊視察を行なった。

このときの状況について、被告のひとりである元第一〇〇部隊員獣医中尉の平松全作（石川県出身、三十三歳）は次のように供述している。



<新発売!>

西独エクス・ポ・サービス社版の

男女縛り・鞭打・鎖しばりの写真

を本社代理部で発売することになりました

EP-Z 1	EP-Z 4	価 各組とも
EP-Z 2	EP-Z 5	八〇〇円
EP-Z 3		各4枚1組になっています



一九四二年七月から八月ごろ、私は夏期演習に参加しました。この演習隊を指揮したのは村本少佐で、かれの下に研究員・将校・技術員ら総数三〇名ほどが加わっていました。

実験は、北興安省三河付近のソビエト国境近くを流れているデルブル河畔で、野外の条件下で行なわれました。この実験の目的は、実戦における細菌使用の可能性を研究することでありました。

このさい、延長約一キロメートルにわたる地域が、河湖は鼻疽菌で、土地は炭疽菌で、それぞれ、汚染されました。二名の研究員がゴム製のボートに乗って、汚染を行ないました。

このように中・満・ソにわたって、前記両部隊の細菌による大量感染、大量殺戮の計画が準備され、また実行に移されていた。

細菌戦部隊の実験業務が最も強化されてきたのは、一九四五年（昭和二十年）であった。

が、ついに日本は戦いにやぶれ、この年八月十五日停戦、無条件降伏のよぎなきに至らしめられたのである。

その直前、軍統帥部は、各細菌部隊およびその支部の建物、設備書類などすべてを焼き払い、灰燼に帰せしめた。

当時、第七三一部隊の教育部長であり、また孫呉市の同部隊支部長をも兼任していた西俊英は、そのさいの支部の処置について、こう述べている――

一九四五年八月九日戦争が終わりました。

八月九日夜、私は本部から暗号電報を受け取りましたが、この電報が部隊長からのものであることは、争う余地はありませんでした。私はその暗号を解くことができませんでした。

電報を解読しないままに残し、私は部隊とともに孫呉地区の陣地におもむきました。

私は井上少尉を含む五、六名の班に、部隊に残って支部を焼き払ったのち陣地にくるよう、命令しました。

私は支部勤務員各人に青酸カリを支給し、もし諸君が万一の場合、ソビエト軍の俘虜になるようなことがあれば、これを飲めと

いいわたしました。それから私は陣地におもむきました。これはわれわれは日本が降伏するとは決して考えていなかったからであります。したがって、山中にはいり、そこで集団自殺を行なうことに決めたのであります。

しかし日本は降伏し、われわれは師団長から命令を受領して、整然と降伏しました。ひとりだけ自殺した者がいました。

かくて、大いなる組織網と設備と細菌生産能力を誇りながら、残酷をほしきままにした日本細菌戦部隊も、文字どおり跡かたもなく潰え去ったのである。

裁きはおわりぬ

一九四九年十二月二十九日午後、ハバロフスク市の沿海州軍管区軍事裁判所の公判廷においては、裁判長チュルトコフが、以上の細菌戦事件に関する審理の終結を宣言し、裁判は、検事の論告にはいった。

国家三等法務官・国家検事スミルノフが席から立ち上がった。

「裁判長同志諸君！ 軍事裁判委員同志諸君！ この教日間、諸君がかくも細密に審理してきた本事件の意義は、現在、被告席にすわっている犯罪人らが負うべき個人的な罪の判定、および責任の程度の規定の範囲をはるかに越えるものである」

うんぬんの第一声にはじまって、

「……これらの人間憎悪者どもが犯した残酷的行為は、じつに他に比肩しうるものがない。この凶悪な行為の性格、無コの人びとの膨

大な多数の野獸的殺戮を期したその方針から出発して、幾千の無防備の犠牲者を悶死せしめた非人道的実験から出発して、全被告は極刑に処せらるべきである」

に、おわったス検事の論告は、ロシア的な長い長い、しかし、なかなか鋭い舌鋒のものであった。

あくる三十日、公判は続行され、山田元大將を弁護するペロフ弁護士の本論からはじまった。かれは、

「私は、現在すでに約七十歳の私の被弁護人の山田の理性、意志、性格および道徳的風貌が實際上、いかなる要因の影響下に形成されてきたかを述べたい」

こう前置きして、「人間の心には生来の汚損はない」と主張したルッソー・ロジヨン・ロックのことばなどを引用し、意志と性格の形成にたいする社会的国家的政治的および思想的要因の影響に関する問題を、かなりくわしく述べながら、日本における天皇制、軍閥財閥三者のからみあい、とくに財閥の悪と毒とを糾弾した。

十二名の被告にたいする弁護がおわると、裁判長は、各被告にさいこの陳述を許したのち、判決文を読みあげた。

「判決す。」

山田乙三——一九四三年四月十九日付のソ同盟最高ソビエト常任委員会法令第一条により、二十五年間を期限として、矯正労働収容所に収容すべし」

次いで梶塚隆二、高橋隆篤、川島清の三名が同じく二十五年、柄沢十三夫、佐藤俊二の二名が二十年、西俊英十八年、三友一男十五年、尾上正男十二年、平松余作十年、久留島祐司三年、菊地則光二年とそれぞれ判決された。

サロン・マソキスチカ



■「人間の無い神」の含むもの

「バルタイ」で名声を得た倉持由美子が、ふたたび意匠をこらして世に問うた中編と短編小説集。中に表題となった「人間の無い神」をはじめとして、「囚人」「死んだ眼」「夏の終り」の四編がはいっている。

まず第一に言わねばならないのは、このすべての作品の中に取り上げられている実際上の事件自体のもっているニュース・バリュウである。屠殺場（とさつじょう）の状況と人間の死刑、しかも理由のない処刑や裁判と

交錯させた「囚人」、つづいて、樺美智子さんの犠牲を明らかに意識して描いたと思われる「死んだ眼」、そしてだれしもが、そのあまりにもナマな酷似に思いついたと思われる「人間の無い神」とナチス・ドイツのヒトラーとの関係。しかも、まさに、イスラエルでアイヒマン裁判が注目のうちに行なわれ、松川事件をはじめとするいくつかの裁判に関する疑惑が人心に暗いかげを呼びよせつつあるときである。これらの題材の選び方、それと描写の明らかに奇をてらった、そしてエロティックな書き方に作者の商業主義が露呈して

はなはだ不快な読後感を持たざるをえない。

しかし、一方、わたしたちは、その文学的につたなく、まともりのない未完成な作品の中に、数えきれないほどのアブノーマルな要素を指摘できるのだ。

たとえば、一般的マゾヒズムを感じられる部分には、こんな

「Kが、このなりゆきをみまもりたいたいと思って、首をもたげた」とたんに、二又（ふたまた）になった義手のような金属器械が、人間ばなれのした早業でKの首をついたおし、ベッドに押えつけた。それは、女の補助作業員のしわざだった。（囚人）

もちろん、作者は、エロティックな描写を忘れない。「それから、家畜用の断種バサミを握った男が、左手をKの股のあいだにさしこみ、睾丸をぐいとしぼり上げると、無造作に切断してしまった。ほとんど、それと同時に別の作業員が陰茎を根もとから切りとった。」

そして、「彼は苦痛よりも恥に気をとられていた。」

さらに、49ページに、わたしたちは明らかにマゾヒズム、または女性サディズムに直接関係のある部分を発見するのだ。

「Lは動物園の虎鷹（はげたか）の餌料係秘書、唇はうすく、事務的だが、Kに親しみを感じているが、残忍にKの内臓を鷹に与える作業に従事している。そのことは、彼女のKに対する好意とは関係がないのだ。Kはいう。

「——ぼくとしても、あのいやらしい虎鷹に食わせるより（自分の肉を）あなたのような女に食べていただく方がずっと気持ちいいですからね」

そしてついに、「すこしたべてみてもいいわ。レバーだけ」

「どうぞ」とKはいい、Lが食べようようにと仰臥した。

「おお」

「痛い？」とLはうわの空でいい、両手の指をまっかに染めながら、ひきちぎった肝臓を食べるのに夢中だった。Kはめまいと吐きけをおさえ、無理な微笑をうかべていた。味はいいでし

よう？ 食べたすとやめられな
くなりすよ」

「ほんと——すごくおいしい
わ」

Lは食べつづけ、

「そして、Kの腹腔に顔を突っ
込み、たまっている血や体液も
すっかりなめてしまった。その
ときKは快感をおぼえた。あき
らかな勃起の感覚があり、Lに
見られはしまいかと顔をあから
め」るのだった。

もちろんこれは、ほかの作品
にもいえることである。屈辱に
ついて、こういう部分が、「死
んだ眼」による。これはKと白
人留学生フレッドとの肛門性交
による同性愛についての描写の
部分である。

「Kはふいにおき上がり、ぼく
とフレッドとの関係は——と告
白しはじめた。つまり、ぼくは
もっぱらぼくの裏側を提供する
のだ。そういって、Kはけたた
ましく笑い出し、わたしもいっ
しょに笑った」

「フレッドと(Kとは)友だちだ
が、Kはこの屈辱的な交わりの
瞬間、アメリカ人に対する日本
人として恥さらしな男娼にされ

るのだ」

そして、またしてもエロティ
ックなことばが、この作品のお
しまいにこう語っている。

「——また女という凹型の存在
自身をおしひろげて、男を包み
あいする型の存在でありつづけ
るつもりもなかったように思う
——」

ページの終わりは、姉妹が同
一の男Kを愛することを書き連
ねているし、最も長い「人間の
ない神」は、ヒトラーと思われ
るHは、その妹を妻にしている。
そして、「緑色の制服を小さい
きこなし、ピカピカ磨いた乗
馬靴をはいた少年兵」というの
が、なんとなく現われて、主人
公の行為や、「収容所」の背景
に点在する。

クルト国というこの国では、
ナチス・ドイツと同じく、ユダ
ヤ人でなく、ヘルニヤ人という
のを大量に抹殺しつづけてい
る。

収容所の庭をおとずれたK
は、そこに骨の粒がキラキラと
輝いているのを発見する。

そして、斜述には、
「つまり、かれは(Hのこと)

魔神が犠牲として献ぜられた人
間の女と身体以外の魔力で日夜
交わるのと似たような愛しかた
でソニアを愛しているんです」
イルゼ・コッホを思わせるイ
ルゼも登場する。そして、皮肉
なことに、作者の意図に反して
こうした道具立てのすべてが、
全くどのような効果をも示して
いない。

このほかに、食人症もある。
殺人淫楽とも思われるものもあ
る。だが、数え切れないほどの
種類の変態性欲を意識して書か
れたこの作品が、すべて、全く
のキワモノ的な観念にしかよっ
ていないことは、一読して明白
である。

■純情少年と縛り写真

——彼には、いまだに、ガー
ルフrendが一人もいない。そ
のくせ彼は、ひそかに、西洋美
人の裸体写真をあつめていた。
発散できない性欲が、インに
こもって、ゆがんでしまったの
だ。

その裸体写真は、どれも、白
色婦人がしばられているシーン
だった。鉄のくさりでしばられ

て、うずくまったきり、両手両
足を綱でひっぱられたりしてい
る写真だった。——

これは、朝日新聞、去る5月
26日(金曜日)付けの夕刊連載
小説「花と花輪」(武田泰淳作)
の一節だが、ごく内気で、恥ず
かしがりやの十七歳の少年大浦
啓三の一面を描いたものであ
る。かれは、姉の花枝以外の人
とは、心を開いて語り合うこと
をしないほど内攻的な性質だ
が、そんな少年の内面に、セッ
クスは、どんな形で内蔵されて
いるかがうかがえて、おもしろ
い。

■定期刊行物から

『週刊大衆』6月18日号グラビ
アのページに、女子馬術大会の
特集をしている。編集者の意図
はともかくとして、マゾヒスチ
ックな傾向のものであるには違
いない。

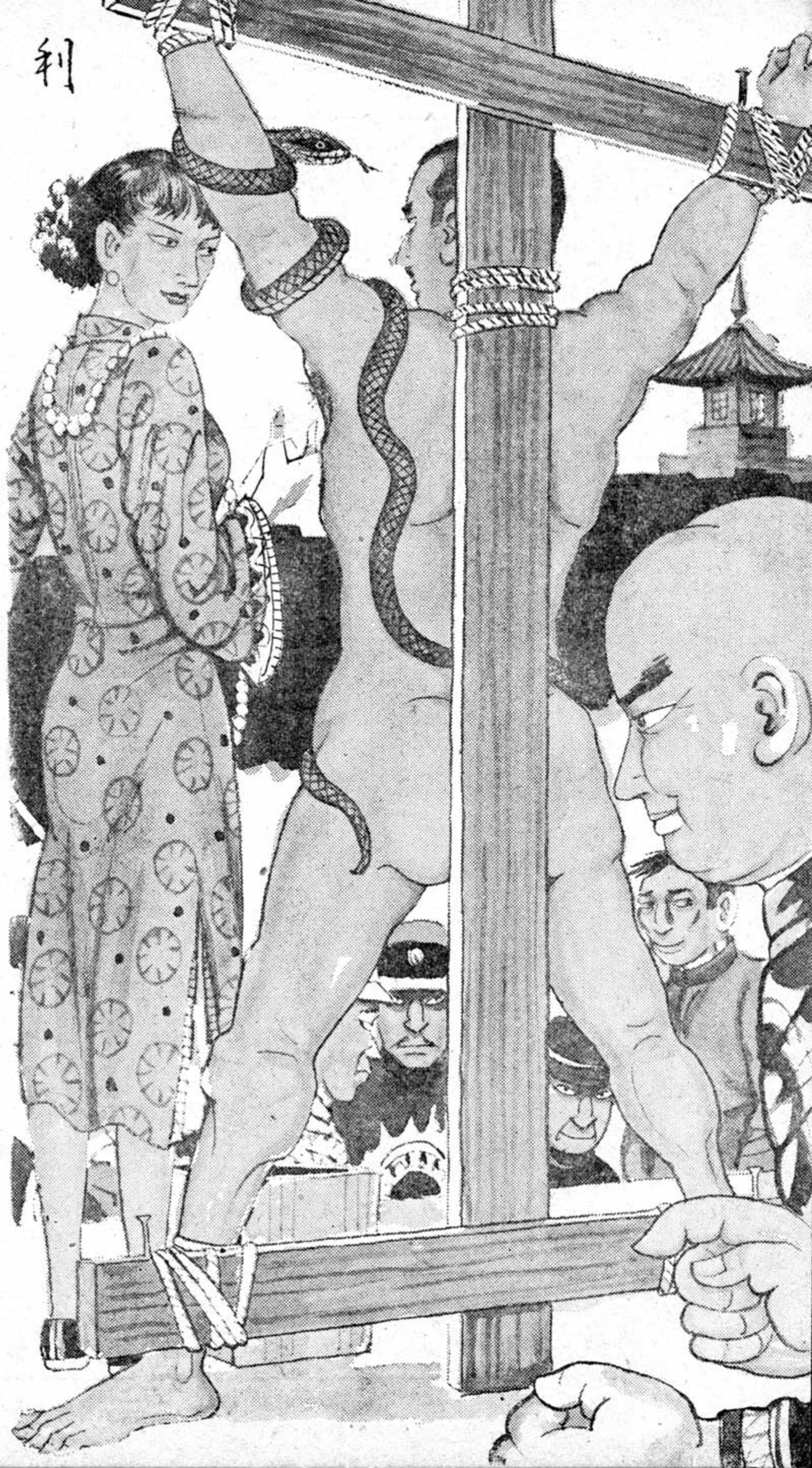
また、『漫画読本』7月号に
は、お色気で猛獣を馴らす女調
師を、スッキリと小島功がかい
ている。ふつうの人ならそのま
ま見過ごすだろうが、やはり、
胸にくる。

利

連載
小説

炎帝廟

(4)



青 竜 章 V 芦 立 鋭 吉

小 田 利 美・え

刑架のもだえ

砂漠地帯に近い北支の太陽は強烈であった。流砂にまじった岩塊の群れはかわききって濃い影を地上に刻んでいる。紗ほどの雲もない空は、つよい太陽の熱気に声もなく焦げつつづけていた。

東哭丘の刑架の人となった風早中尉は百余の群衆の背後に、それらのものを見た。ふしぎと平静だった。これからいかなる責め苦と凌辱が行なわれるか知れない処刑前の真空のような静けさが、そこに流れていた。

ざわめいていた群衆も、彼が刑架の人となると、いっせいに黙して、このすばらしい受刑者の容貌と体軀に、見ほれているようだった。

時々きこえるものは、ため息にまじって彼の肉体を賛美するひそかなささやきであった。

赤、青、黄というけばけばしい原色の一塊が、殺風景な処刑場の一隅にあった。さらし車のあとを追ってついて来た娼家の女たちらしい。女たちは激しい太陽の直射を避けるために、赤い日傘をさしていた。それは砂漠に咲いたケシの花のようにあざやかで、残酷だった。

かたく目を閉じていた風早中尉も、目をひらくとすぐ、それらの色彩が流れ込んで来た。彼は目をまぶしくまたいた。

洪汜嶺は、風早中尉の裸の胸のあたりを叩きながら言った。

「泰然自若としておるな。なかなかいい度胸だ。だが、今に見ろよ、必ず音を上げさせてやるからな」

そして群衆のほうに向かって、

「おまえたちの中で日本軍人に恨みのある者はいないか、いたら、恐れずにここに登ってきて、恨みを晴らせ」

とどなった。人々はわれにかえったようににわかにざわめき出した。そして、罵倒の声とともに、ふたり、三人とさらし台の下に集まって来た。それに誘われるように、人数は十五、六名になった。人々は口々に日本軍や日本兵による被害をわめき立てはじめた。

意外にもふえた人数に、洪汜嶺や花和尚たちは、一応それらの者の身柄をしらべ、被害の多寡や怨恨の種類または殺害されたものと等属について問いただし、それを最小五人にしぼった。

彼は、責めの希望者に、絶対に致命的な危害を与えないこと、苦痛よりも恥辱的な責めであること、などを約束させた。

このころ、刑架の風見中尉は、まだ、苦痛も凌辱も加えられない前に、しきりと身もたえをはじめた。かたく閉じた唇からは、かすかにうめき声さえもれた。彼の頬は紅潮し、額からあぶら汗が浮いていた。事情をしって

苦痛を受ければ受けるほど、ふしぎな輝きを増す風早中尉の肉体に、淫婦朱雀苑の血は、妖しくもさわぐ……

前号までのあらすじ

昭和十三年の晩春といえ、蘆溝橋で火ぶたをきった日華兩軍が各所で衝突し、戦線は次第にひろがり、抗日の風潮が中国をおおっていたころである。

北支山塊地帯の濃い朝霧をついて馬を走らせるふたりの日本兵があった。共匪掃滅のため派遣された機部隊の将校候補風早中尉と部下の植上等兵が、濃霧のため方角を失った姿だった。

ふたりは、不意に匪賊の襲撃を受け、中尉は投げ縄で捕えられ、植上等兵は谷底へ落ちてしまう。

捕えられた風早中尉は、匪賊の巢窟になつてゐる炎帝廟に連れ込まれる。この匪賊は、玄武祥を頭目とする「黄旗団」といい、洪汎嶺、花和尚、ソ連軍人あがりのコスロフ中尉などがいる。

仲間の何人かを斬られた匪賊たちは、風早中尉を私刑にかけすることに決め、言語に絶する責め苦が中尉に加えられる。裸一本の姿で、炎帝像の肩からさかさに吊られて鞭で打たれたり、急所に風鐸を吊り下げられたり、ローソクまたぎをさせられたり、はては頭目の愛妾朱雀苑の部屋で全裸で女どもにくすぐり責めにあわされたりする。あげくのはてに、鬼哭丘でさらし刑にかけられることになり水と偽って催淫薬を飲まされる。

だが、風早中尉はかつて機少佐と誓ったことを忘れず、どんな責め苦にあつても音をあげない。その誓いとは、どんな場合でも命を大切にしようということだった。

一方、谷底へ落ちた植上等兵は、幸運にも一命をとりとめ、部隊へ帰って機少佐に、風早中尉の危急を報告した。

いる花和尚は、コスロフ中尉と目を合わせて微笑したが、わざと、

「どうしたんだ。何が苦しいのだ。まだ責めにはいっていないのだぞ」といった。

風早中尉はすでに脳裏がもうろうとして来た。あれほど平靜であつた自分が、にわかに自分の裸形を数百の瞳がやきつくように見入っていることをつよく意識しはじめた。

ことに、赤、青、黄のよそおいの娼婦たちの嬌笑が矢のように胸を射た。胸がもえるよ

絹でゆるく包まれたその個所は、激しく隆起していた。

それをきっかけに、群衆の視線はすべてそこに集中し、その笑いはさざ波のように満ちひろがっていった。

風早中尉ももちろん、群衆の人々も、娼家で水にまぜて飲まされた媚薬のことを少しも知らなかった。風早中尉は、こんな場合に、こんな状態になった自分の肉体を恨み、かつ恥じた。心の中でしいて神聖なことを考えようと唇をかんだ。機少佐の名も呼んでみた。し

うに熱く、苦しく妙に吐きけさえ感じた。と同時に、からだの皮膚がばさばさにかわいて行くのが感じられて、せつなかった。と、さらし台の近くにゐる人はにわかに声を上げて笑った。

「見ろ、あれを」と、そのひとりは、刑架に縛されて大きく開かれた風早中尉の股間を指さした。白い薄

かし、それらとうらはらに彼の肉体は急激に怒張していった。

「なかなかきく薬だな」と洪汎嶺は、コスロフ中尉にささやいた。コスロフ中尉は赤ひげのある唇をちょよとまげて、黙笑した。花和尚はさらし台にのぼると、口辺に薄笑いを浮かべながら風早中尉の禪の結び目に手をかけた。

「……………」

風早中尉は哀願するように花和尚の顔を見た。花和尚は、

「どうだ、つらいか、白状すれば許してやるぞ」

と言った。白状ときくと、彼は目を閉じ、唇をかんだ。

「よし、軍人の誇りはおろか、男の恥を公衆にさらしてやる」と言いさま、手荒く禪をはぐと、台下に投げ捨てた。

受刑の肌

一条もまとわぬ受刑者の肌が、はげしい太陽の光の中に波うった。それは、人々が歓声を上げるほどみごとなものであった。自然の恵みをうけて豊穣に熟れた果実であった。

漆黒な草むらにおおわれ、ゆたかな房をたれた果実であった。しかも、若いエネルギーが集中した敏捷な弾力をもった雄蕊は、緊縛から解放されると、跳躍して腹をうった。六月の清流をはねる若アユでもあった。

「むッ……」

と風早中尉は唇をはげしくかみ、不可能と知りながらも、もがいた。ハリツケ柱がキキときしんだ。

洪氾嶺は、乗馬鞭で、垂直に天を指した風早中尉の男根の頭を軽く打つと、無理に下を向けようとしたが、鞭がそれるとふたたびはねて腹をうった。人々は笑いかけたが途中で声をのんだ。

雄渾さと凄惨さとの交錯した、名状しがた光景だったからである。

そうしたなかに、最初の責め手である中年の男が、さらし台にのぼった。貧弱な、苦力のような姿の男で、兵火で妻子を失ったという。

彼は台にのぼると、すでに興奮していた。

「この業さらしめが」

と叫びながら、風早中尉の頬にこぶしを降らせた。そして、次のこぶしは、彼のみぞおちを突いた。観念している風早中尉は、声も

発しない。ふたたび目を閉じて、ひたすらこの苦痛を耐え忍んでいる。

男はさらに足を上げると、彼の股のあたりをけ上げ、男根を腹の上に踏みつけてグイグイ押した。

「ムッ……」

と風早中尉は、太い眉根を苦痛に寄せた。

なおいきり立つ男が、降ろされると、今度はふたりの兄弟らしい少年が代わってさらし台にのぼった。日本兵に両親を殺されたという二少年は、兄は十七、八、弟はまだ、五、六歳であった。

兄は細いシノダケの鞭をもっていた。

「オレたちの親を、よくもむごたらしく殺したな」

といいながら、鞭を、雨のように風早中尉の肩や胸の上に降らせた。彼が黙って目を閉じているのを見ると、今度は、その形のよい臍窩をこづいた。

弟のほうは、さらし台の上になるとあがってしまい、ただうろうろとしていたが、勇敢に責めている兄の姿にはげまされて、この受刑者に武者ぶりつこうとしたが、なにぶんとも背が小さいので、顔や胸までには届かない。自然と、大きく八の字型に開かれた無防

備な男の股間にしがみついた。

「おれたちのおとっちゃん、おっかあを、なぜ殺したんだ。返せッ」

と叫びながら、ぶらりと垂れた陰囊を小さな手でつかんだ。このとき兄のほうも、風早中尉のたくましい脈うつ男根を握った。すると群衆は、

「そこだ、力まかせにねじり上げろ」

「きんたまを締め上げろ」

と声援するので、ふたりは夢中になって顔をまっかにして力みながら、風早中尉の性器を右に左にひねり上げ、ねじり上げた。

「うッ、うーむッ」

と剛気な彼も、この攻撃に耐えかねてうめいた。頬は紅潮し、玉のようなあぶら汗は、額から頬に、さらにあごから胸へと筋をひいて流れた。目は充血し、こめかみに太い青筋が張った。

あまり激しい汗のため、少年の手はしばしばすべってよろけた。夢中になった弟のほうの手が墨丸を絞めはじめたのに、さすがの風早中尉も苦悶しはじめた。

「うッ、うッ、うーむッ」

と目を白黒させてもだえはじめた。人々はますます熱狂して、少年たちにさらに責め個

所を教えたが、受者刑の苦痛がひどくなったので、この少年は台から降ろされた。

蛇と山蟻

三人めにさらし台に登ったのは、三十五、六歳の女で、年の割合にはでな服装をして、安っぽい耳飾りなどが耳にゆれていた。

女はいった。私の夫は、スパイの疑いで、日本軍に捕えられ、ひどい拷問の末、殺された、と語った。そして、今は大道芸人としてはかないたつきを過ごしているのだという。女は、へび使いだった。かたわらの手箱の中から一匹のへびをとり出すと、これで責めるのだと言った。さらし台のかたわらにいた女や子供たちは、さすがに顔色を変えて遠くへ身を引いた。

「亭主を殺された恨みだ、思い知るがいい」といって、青大将をつかむと、そのうねる鎌首を風早中尉の顔のあたりに向けた。さすがにちよっと眉をひそめたが少しも恐れる様子はなかった。花和尚は笑って、
「バカ、これほどの責めに耐えられる日本軍人が、女子供ではあるまいし、へびなどこわがると思うか」と言った。

女はくやしそうに唇をかんでいたが、急に思いついたように、

「このへびが少しもこわくないなら、私にも考えがある。こうしたらどうだ」

と言いながら、女はそのつかんだへびの鎌首を、風早中尉の大きく開いた股をくぐらせると、挿し込んだ。

「……………」

さすがの風早中尉も、腫の色が、変わった。体内にはいる異形の生物に感じる不快感と苦痛に、首を左右に振って呻吟した。へびの首がはいればはいるほど、彼の下腹部は苦痛に波立ち、へソの左右に太い青筋が稲妻のように走った。

「さすがは大道芸人だ、味な責めをやりおるわ」

と、洪氾嶺は感心したように言った。

この苦痛と恐怖で、あれほどみごとに怒張した雄器は、草むらの中に首をうなだれてしまった。

股間に縄のように垂れたへびの尾は、うねりながらも徐々に短くなった。

「うーむ、うーむ」

と歯ぎしりをして苦痛に耐えようとする風早中尉に、コスロフ中尉は、言った。

「どうだ、苦しいか。ひどい汗だな」

と、冷笑しながら、額の汗をハンカチでふいてやった。そのやさしげな行為もしょせん一種の屈辱の形をかえたものにほかならなかった。

やがて青大将は、体内から引き出され、へび使いの女はさらし台をおろされた。

四人めにさらし台にのぼったのは、二十七、八の若者だった。ひどくよごれた服装の男で、目ばかり光らせた精悍な感じだった。男は五里ほど奥の山地から、日本軍人の捕虜がさらされるといふ話をきいて、馬を駆けてやって来たのだと言った。

「オレの妹は、日本兵のために犯され、そのために生涯の不具になっている。嫁にも行けないでいる妹のことを思うと、オレは、日本軍人が憎い。せめて、妹の恨みの万分之一ではらしてやりたい」

と申し出た。その男は、紙につつんだガラスびんのようなものを持っていた。洪氾嶺がたずねると、男は紙をといて中身を見せた。円筒形のガラスびんの底には、赤黒いものがうごめいていた。洪氾嶺は、
「なんだ、アリじゃあないか、どくするんだ、これを？」

とたずねると、男は、
「山アリです。こいつにかまれると猛烈に痛
いのです。これで、この日本人の肌をいため
つけてやりたいのです」

と言った。砂漠に近い地方の強烈な太陽の
下に育った山アリは、サソリのように猛烈で
凶暴であった。
「これはおもしろい。ヘビ責めのあとはアリ

早中尉のたくましい雄器を指して、あの垂れ
下がったものをびんの中に入れたら、アリは
どこにも出ることなく、受刑者の肌をかむこ
とができるだろうと言った。人々は、この思



責めか、ハッハハハ」
と洪氾嶺は笑った。
人々は、どうして受刑
者の肌をかませようか
ということになった。
うっかりぶちまけられ
ては大変だと、人々は
警戒するのであった。
ヘビをおそれたさらし
台の下の人々は、今度
は山アリときいてまた
あとずさりをした。
男はさらに、
「別にハチミツを用意
して来ました。これを
かませる部分によく塗
っておきますと、アリ
は、そこにかみついて
離れません」
と言った。

コスロフ中尉は、風

いつきに手をうって賛成した。

男はハチミツを刷毛の先にじゅうぶんふくませ、風早中尉のうなだれた男根をつかむと、ていねいに塗りはじめた。先端から根部まで塗り、さらに罌丸まですき間なく塗りつ

けた。

塗り終わると、例のガラスびんの中にすっぽりとめ込んでしまい、びんについていたひもを、腹部を締めている縄にむすびつけた。

利

二分、三分——時がたつにしたがって、ガラ

スびんの底をはいまわっていた山アリは、甘美なミツのにおいにさそわれてびんの中に垂れた亀頭や陰囊にはいのぼっていくのが、透明なガラスをすかして人々によくわかった。人々は、この異常な光景に息をのみ、だれも声を発するものはなかった。

しずかに目をとじて、抵抗もなく、なすにまかせていた風早中尉も、最も敏感な部分にはう昆虫の触手に一種の痛痒を感じた。

「……………」

見る見る彼の形のよい眉がけいれんした。

次の瞬間、

「あッ、うーむッ、むッううッ」

と唇から苦痛の声がもれた。人々は、風早中尉の露出した肌におびただしい山アリが吸いつき、ミツをねぶっているのが見えた。

「なかなかいい思いつきだろう。ハッハッハ」

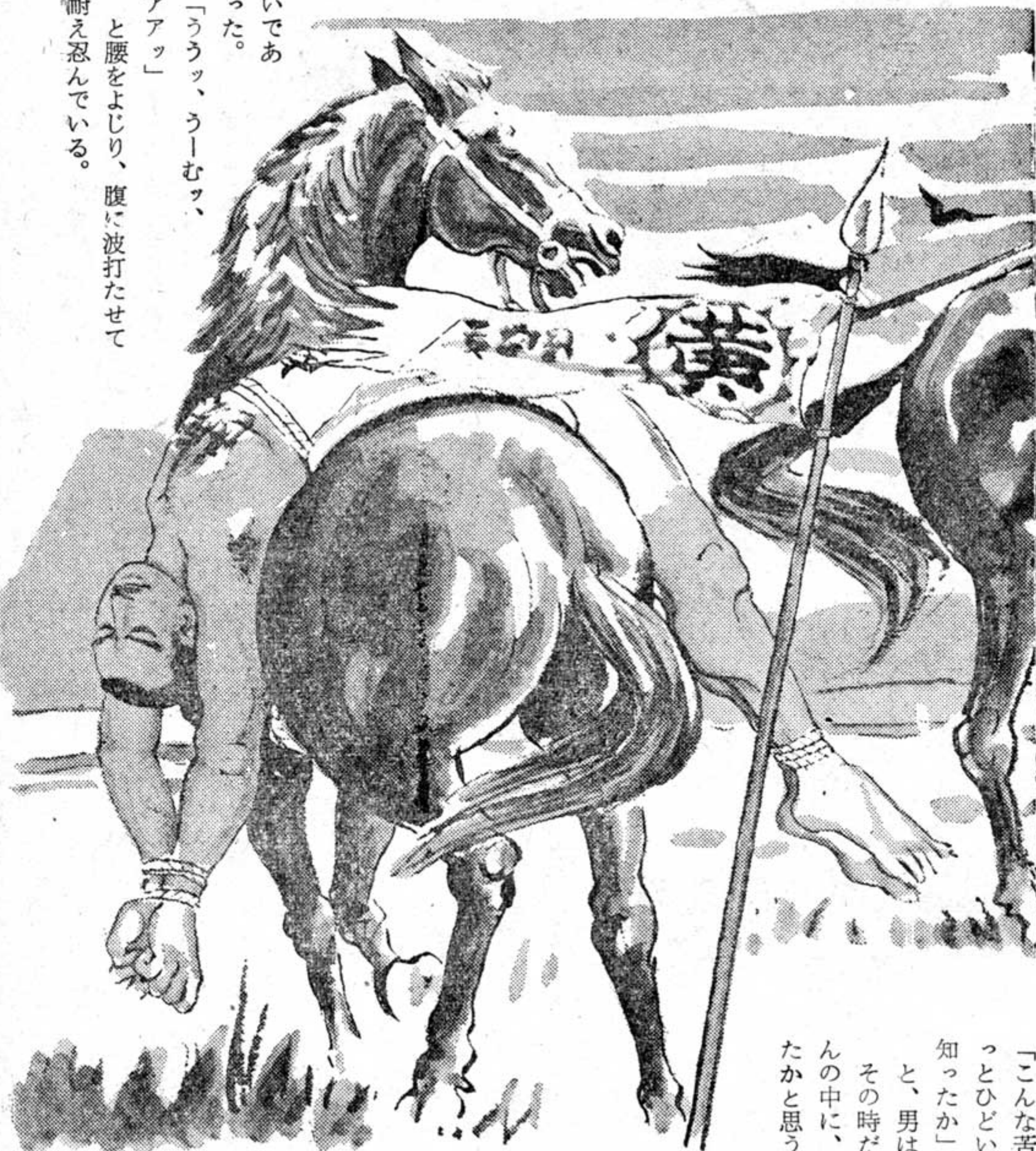
と洪氾嶺は笑っていたが、やがて、風早中尉の苦痛に上下するあごのあたりをぐっと押えて持ち上げると、

「苦み走った面の男が、齒を食いしばった格好は、なかなかよいものだな」

とあざけり笑った。しかし、風早中尉の血走った顔は、苦痛に耐えるのが、せいっぱ



いであ
った。
「ううッ、うーむッ、
アアッ」
と腰をよじり、腹に波打たせて
耐え忍んでいる。



「こんな苦しみなどなんだ。オレの妹は、も
っとひどい恥ずかしめにあったのだぞ。思い
知ったか」

と、男は毒づいた。

その時だった。股間に吊るされたガラスび
んの中に、泉がほとばしるような音がきこえ
たかと思うと、淡黄色の液体が見る見るびん
の中からあふれ出した。中に群
がっていた山アリは、皆浮かび
上がり、びんから流れ出してし
まった。

彼が、あまりの苦痛のため
に、われ知らず排泄したものか、
それとも故意に行なったもの
か、人々には全くわからなかつ
た。

「畜生！」

とくやしがる男を、花和尚は
無理になだめて、台からおろさ
せたのであった。

烙印

キャンプの中の玄武祥と朱雀
苑ははじめ酒をかたむけなが
ら、風早中尉のからだに加えら

れる責めと凌辱のかずかずをながめていた。

玄武祥の老いたしわの深いまぶたは、興奮に色づいていた。彼は予想外に発展して行く加虐の興味に、ほとんど酔いしれていた。

朱雀苑も同じであった。しかし彼女は、自分の心が風早中尉を真実憎んでいるのかどうか、いまだに解せない気持ちであった。

なぜなら、しいたげられて行けば行くほど、彼女は風早中尉の肌から一種のかがやきがあらわれてくるのを痛く感じた。これは、被虐への愛情であろうか、しいたげられる肉体の魅力であろうか、彼女にはどうしても不可解であった。

「朱雀苑、これほど責め、恥ずかしめたら、もうおまえの胸は晴れたであろう。どうじゃ」と玄武祥がきくと、

「なんだか少しかわいそうな気もするわ」と言っ、白い糸切り歯をみせて笑ったが、何か胸が押されるようにせつなかつた。

この時、五人めの責め手がさらし台の上にのぼった。ツルのようにやせた、目のするどい白髪長髯の老人であった。彼は、ひとりむすこが匪賊とあやまられて、取り調べもないままに日本軍に射殺されたと言っていた。

「自分はいれ墨を業とするものだから、この

恨みを、入れ墨の針にとめて、この日本軍人の肌に恥辱の印を永久に刻みつけておきたい」

と申し出て、ふところから入れ墨に使う針や墨つぼを出してみせた。洪汎嶺は、いかにもこの刑罰の最後をかざるのにふさわしい責め手だと思つて、許した。

老人は黙つて受刑者の前に立つと、何を肌に刻もうかしばらく考えていたが、刑架の上に立てられた「醜虜」と大書した文字を見ると、はたと膝をうち、墨をたっぷりふくませた筆で、風早中尉の胸に一字、腹に一字、書いた。王義之流の達筆で、墨痕淋漓とした文字であった。

はげしい太陽の光は、すぐにその墨をかわかした。老人は、手なれた指先で針をうごかしながら、その文字の上を刺していった。血が噴き出すと、布きれで血を吸い取らせながら、黙々と、そしてすばやく、針をはこぶのであった。

じつと、この針の苦痛に耐えていた刑架の風早中尉は、胸の一字が彫り上がったところから、針をうけた個所に激しいうずきを感じた。「うーむッ」

と、かたく閉じた唇からかすかにうめき声

がもれた。群衆は水をうったように静粛をきわめていた。人々は皆、息をのむようにして、この老人入れ墨師の針の動きを追った。時息苦しくなつて大きなため息をつくものもあつたが、すべての人の目はぎらぎらと燃えるようにたかぶっていた。

胸がすむと、老人の針は腹部に進んだ。臍窩の下から、陰部の草むらの上の豊かに白いふくらみに針を動かした。風早中尉が苦痛に身をうねらせると、針がはずれてしまふので、老人は業をにやして、

「きさまも軍人だろう、きんたまを持った男だろう。この程度のつらさぐらい忍んでみろ」と言いざま、左手で彼の男根を、墨丸ぐるみわしづかみに握りしめると、ふたたび針を進めた。

「醜虜」という字画の多い文字も、老人の熟練した針によって、小一時間かかると完成した。

風早中尉は、自分の肉体が針のさいなみをうけていることだけは感じたが、何を彫られたのか全くわからなかつた。ただ、胸から腹にかけてのはげしい苦痛に、呻吟の声も果ててしまったようである。

やがて老人がさらし台を降りて行くと、洪

汎嶺は、女たちからコンパクトの鏡を借りてくると、風早中尉の顔の前につきつけて、「きさまの胸と腹に彫った入れ墨の文字をよくみせてやろう。しっかりと見るんだぞ」と言いつつ、醜虜の二字を映してみせた。

「醜虜」とは、自国に絶対な誇りをもつ中国人が外国の捕虜を軽蔑してよんだ名だった。

「どうだ。この文字をからだに彫られたうちは、無事に隊に戻っても、もはや軍人の仲間にはなれないのだぞ。人命より名誉を重んじる日本軍隊は、捕虜になったり、まして、捕虜の烙印を肌に印されたものは、ひきょうな軍人として軍法会議で処断されるだけなのだぞ。もはや、降伏して黄旗団の一員となるよりほかに、きさまの生きる道は残っていないようだな」

と、日本の軍隊の組織や制度を熟知しているコスロフ中尉は言った。

「うぬッ、キ、きさまたちは、これほどまでしてこのオレを恥ずかしめ、苦しめるのかッ」

風早中尉は苦しい息の中にも、悲痛な声を上げ、目をむいて汎汎嶺たちをにらみつけた。その目には、無念と絶望の涙がとめどなくあふれた。最後の瞬間まで生きぬこうと櫛少佐との男同士の誓いにも限界が来ていた。も

はや原隊に戻ることも、軍人として生きることの望みも、全く失ってしまった風早中尉は、われとわが舌端を歯でかみ切って、恥多き刑架の上で果てようとした。

——その時だった。静かな機翼のひびきが遠くの空からきこえて来たかと思うと、一機の偵察機が、青空の深みにその姿をあらわした。

「敵機だッ」

と群衆の中からだれかが叫ぶと、人々はいっせいに空を見上げた。機翼はゆうゆうと炎帝廟のほうに近づいて来た。とたんに、付近に備えてある高射砲の音がはげしく空で炸裂した。偵察機は巧みに体をかわして、鬼哭丘の上空に近づいた。群衆はわっとどよめきながら、クモの子をちらすように、四散した。

風早中尉は、その機翼についた日の丸の標識を見のがさなかった。友機だと思つと、彼の顔には見る見る喜色がよみがえって来た。風早中尉は苦痛も忘れて、全身の精力をしぼって、

「おーいッ、ここだッ、おーいッ、ここだぞ」と絶叫した。それは臓腑が見えるほど口をひらき、血をしばり出すような叫びであった。その声を通じたか、どうか、偵察機は、さ

らし台の上空を一巡すると、つづけ射ちの高射砲の攻撃を避けながら、上昇して、遂にその姿を消してしまった。

「畜生！ 日本軍にとうとう本処をかぎつけられてしまった。刑は中止だ。早く捕虜をつれて帰れ」

と、すっかりあわてた玄武祥が言った。

「風早中尉の失踪から、敵に感づかれたかも知れぬ」

と汎汎嶺がいった。

「こいつ、声などあげおって、太いやつだ」と花和尚は、風早中尉の頬を二つ三つ殴りつけた。

「早く捕虜を本部へつれて行け。仕置きはあとでゆっくりする」

と玄武祥は言うつと、朱雀苑をつれて轎で帰っていった。コスロフ中尉がハリツケ柱の縄を切つたので、風早中尉は前のめりに倒れた。彼は、兵たちに命じて馬の鞍に仰向けに縛りつけると、自分も馬にまたがり、鞭をふるった。

岩塊の多い、丘の道を五、六騎が砂塵を立てながらかけおりて行った。ややおとろえかけた太陽は余燼のように砂を焦がしていた。

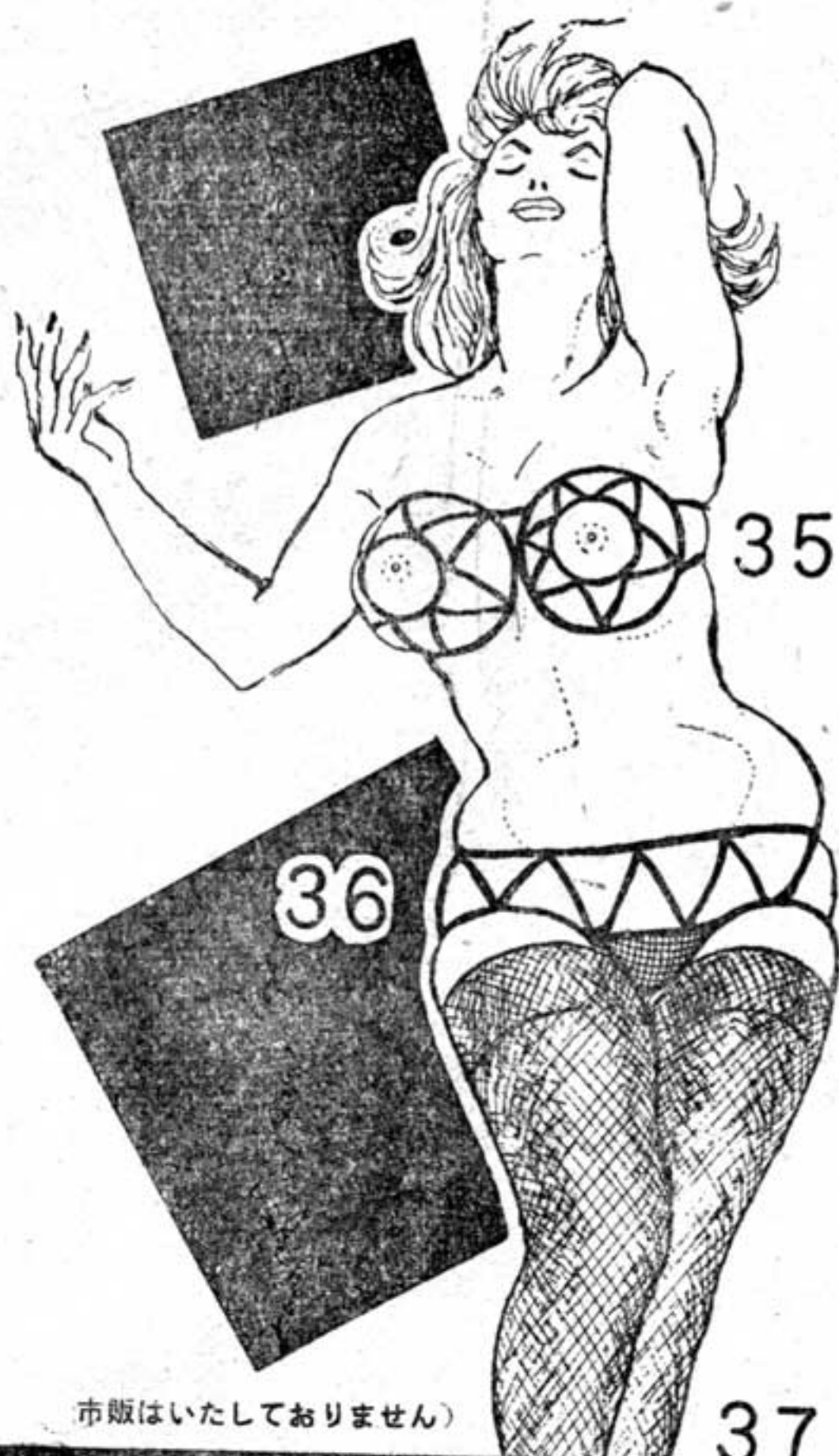
(つづく)

豊満な肉体に、グーッと食い込む太紐！ 何の操作もなく、はいた瞬間にググーッと、ブラジャーは乳房に、パンティは下腹部と太腿に思い切り食い込んで、柔肌の魅力が妖しくのた打つ、読者待望の『ネオ・エキサイト・アブ・パンティとブラジャー』

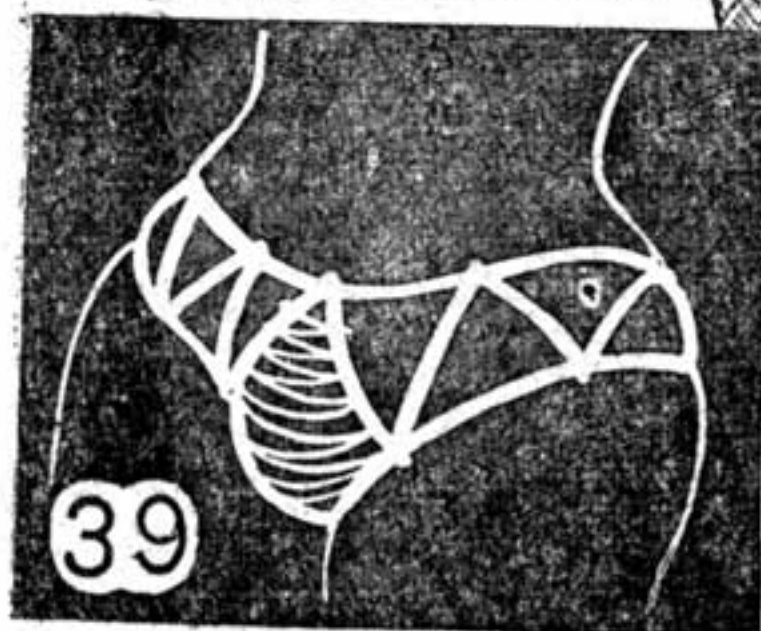
☆ 本誌愛読者に限り特別頒布

35・37=ブラジャー 36・38・39
=パンティ (いずれも 黒・赤・白の3色あり) 価送共 各700円
ご注文は品番号に尻まわり寸法を記しご希望色をご指定の上、現金または小為替で、必ず書留便で下記へご送金下さい。

シャープ舞台衣裳通信販売部
東京都世田谷区玉川奥沢町3〜74



市販はいたしていません



by
Sharp

各種パンティ
カタログ要50円

愛読者券

ムチに生きる令嬢

夫計多場番
え・子恵上田

生来のサディスチン

坂根紀美子は、二十五歳になるが、まだ独身である。別に働いているわけではないが、亡夫のばく大な遺産を受けついでいたので、どんなぜいたくもできる身分だった。しかも比類ない美貌ときていいるから、鬼に金棒といったところだ。

そのうえ、父ばかりか母も数年前になくな

って、現在は、大きな屋敷に、三人のおてっだいさんと、老執事ひとりにかしずかれて、女王のように君臨した生活を送っている。

美貌に加えて富裕ときては、彼女のまわりに多数の男が蟬集するのは当然のことだ。

だが、彼女はだれひとりからだを許していない。そればかりか、彼女は、群がりよる男たちの血を浴びて、ますます美貌にみぎをにかけている感じである。



それが証拠に、一日の彼女の美しさは輝きを増している。

だが、彼女の美しさは、その下に、冷たい残忍さを秘めている、いわば、毒グモのようなものを感じさせた。それも道理、彼女は、生まれながらのサディスチンなのだ。

彼女は、彼女の美貌にひかれて集まってくる男たちを、次から次といけにえにして、その血を静め、性向の満足をはかっている。それも、考えつく限りの、彼女の手でできるか

ぎりの責めを、男の肉体に加え、サディスチックなプレイに没頭するのだった。

イラクサのムチ

丹羽宣夫は、坂根紀美子の電話を受けて、その日、勤め帰りの足を、彼女の邸宅までのばした。

「きょうは、あたし、からだじゅうの血が騒いでしょうがないの。だから、あなたを呼んだのよ」

「はい、うれしいと思います」

「そう、なんでも、言うとおりにするわね」

「はい、あなたは、ボクの女王さまです。なんでもお言いつけください」

「なら、裸におなり」

丹羽は、言われるままに着ていた服を脱いで、たくましい裸体をあらわした。二十四、五歳だろう、若さのみなぎった。スポーツマン・タイプの体格だ。

「そのイスにおかけ」

紀美子は、かたわらの椅子を指さした。そのイスは、鉄パイプを曲げてつくったがんじょうなイスだった。

丹羽は、言われるままに腰をおろした。すると紀美子は、手早く、丹羽の両手をうしろに回して、イスの背にくくりつけた。ロープは前に回されて、胸にも何本かが回された。足は両わきに広げられ、それぞれイスの脚に結ばれた。

この身動きできない丹羽を見おろす紀美子の目は、いつかギラギラと光り、残忍な色が輝き出している。

「いいかい、きょうのムチは、ちょっといつもと違うよ。ネをあげるんじゃない」

いつ取り出したのだろうか、彼女の手には



イラクサを束ねたムチが、にぎられていた。

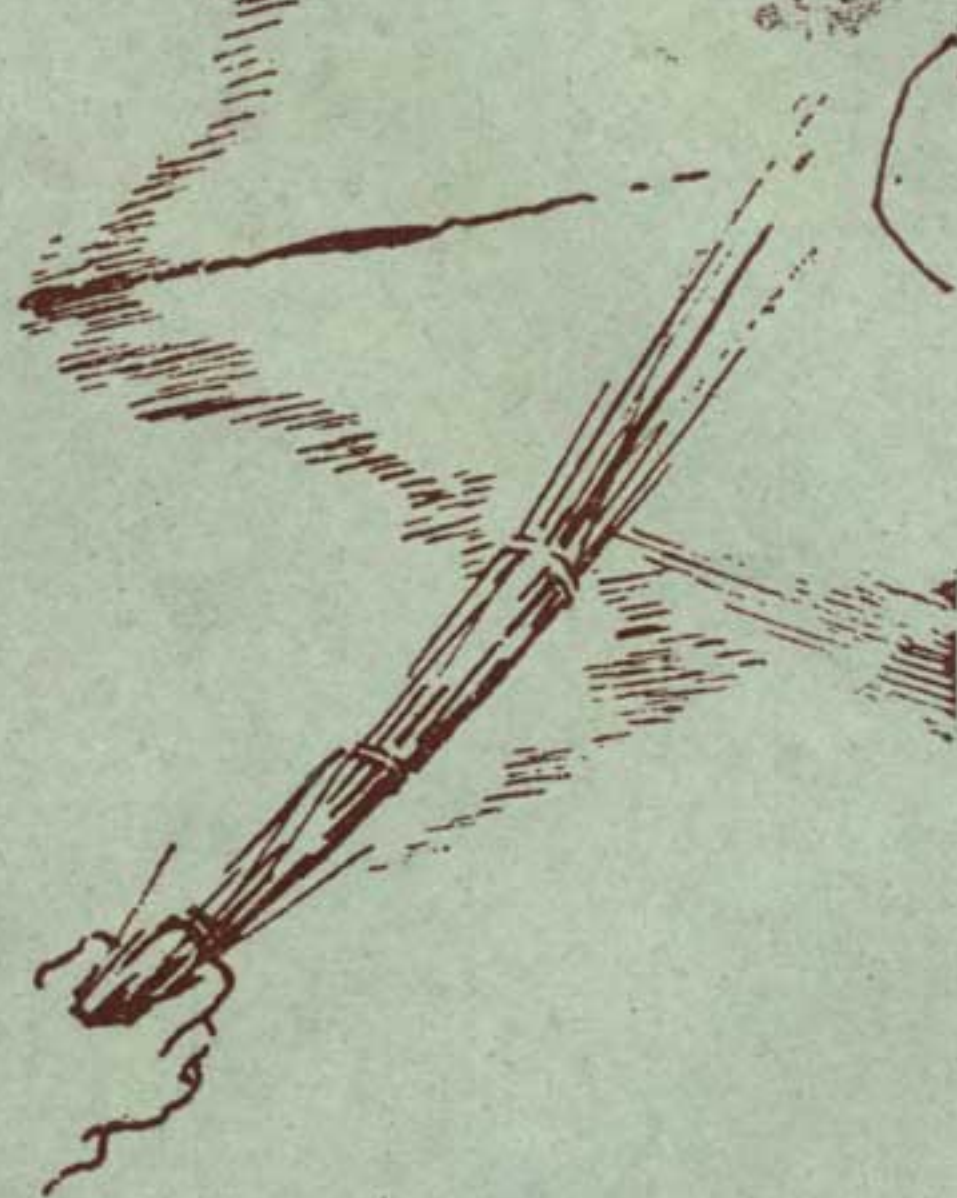
ビシャリ！

鈍い音をたてて、そのムチが丹羽の肌に鳴った。皮のムチのように、ピシリッという小気味のいい音をたてないかわりに、イラクサのムチは、肌にくい入り、肉をかんだ。そこから徐々に血がにじみだし、ボタンの花のような血模様を描いた。

たくましいけれども、まっ白な肌に、鮮烈な血の描く模様は、印象的であった。

ビシャリ！ ビシャリッ！

一打ごとに、白い肌に血の模様がふえていき、ついには、全身から、フツフツと血が吹



き出し、そのいくつかはスーッと流れ、血模様をさらに鮮烈なものにした。

齒を食いしばってこらえている丹羽は、さすがにこらえかねて、ウウウーム、とうめきをあげたが、やがて、ガックリと首を落とした。半ば失心の状態なのだ。

「よくがまんできたね。もうひとがまんしなければ許さないよ。そのかわり、こんどもネをあげなかったら、右の足にキスをさせてあげる」

言うのと、水のはいった容器を持ち出した。

「さあ、奇麗にふいてあげようね」

紀美子の声はやさしかったが、目は、さら

に光を増したようだった。そして、容器の中に、タオルをひたすと、それで、丹羽の血にまみれた肌をふいた。

「あッ、あッ、あ」

丹羽は、飛びあがらんばかりに身をよじった。紀美子の手にあったのは、濃い食塩水だったからだ。ムチで打たれた傷口を食塩水で洗われたのでは、たまったものではない。だが、縛られているイスは鉄製だ。身を避けようにも、動くすべもない。

また紀美子の手が、丹羽の肌にふれた。今の今、半ば失心状態だった彼も、激しく身もだえした。

だが、紀美子の手が何回か動いたとき、ついに彼は、ふたたび首をたれて、今度は本当に失心してしまった。

紀美子は、口もとに残忍な微笑をたたえて薬をとり出し、丹羽の肌に一面塗りつけた。ボクシングの選手が使う、アメリカ製の血止めの薬だった。

インスタント首力セ

「おまえは、あたしの囚人だよ」

次の日、紀美子のもとによばれたのは、四十を半ば過ぎた江川孝夫だった。彼は、大き

な食料品店を経営している。そして、紀美子の美貌の前にひれ伏して、犬になることを誓った、いわば主従の間柄である。

「囚人は、まず首カセをしなければならぬわね」

彼女はそういうと、ハンガーを二つ持ってきて、それを江川の首に前後からあてがってその両端を紐で縛った。インスタント首カセといったところだ。

「今度は足をお出し、足カセをするんだよ」
江川が足を出すと、両足をそろえて、ハンガー二つで、また足カセをしてしまった。

「さあ、今度は四つんばいだよ、馬になるんだよ、ぐずぐずしないでサッサとおしッ！」

紀美子の口から、次々と命令が吐き出される。



「ハ、ハイッ！」

「バカッ！ 馬が口をきくものかい」

それはまことに珍妙な格好であった。ハンガーの首カセをつけられ、四つんばいになった中年ぶとりの男の裸体は、たとえようもなくこっけいなものだった。

珍妙といえば、こんな恥ずかしい姿態をとられた江川の下腹部に、変化の起こって



ることだった。それは、徐々に興奮状態を示し、やがてはち切れんばかりの怒張を表わして、うごめいている。

そんな様子を冷ややかに見おろしていた紀美子は、サッと着ていたガウンを脱ぐとハイヒール一つという裸体にムチ一本をもつと、どっかと、江川の背中にもたがった。

「走るんだよ」

首に取りつけたハンガーに手綱をつけてグイとひっぱると、珍妙な馬にムチをくれた。

ピシリッ！

ムチは、江川の裸の尻で、小気味のいい音をたてた。

馬は走り出した。いやノロノロと動き出して、八畳ほどの居間の周囲を回る。

「もっと早く走れないのかい」

ムチが、容赦なく鳴る。ハイヒールのかかとが、腹に回されて下腹をける。

たちまち、江川の尻には赤いムチ跡がいくつも走り、急所をけられるたびにピクッと飛びあがる身ぶりをするが、背中にのせた五十余キロの女体が、それを許さない。

ムチが鳴り、カカトがけりあげることがつづき、何回めかのはい回りのあと、馬は息をあえがせ、そして床につぶれてしまった。

均衡を失った女王のからだがよろめいた。
「バカッ！ バカッ！ なんていうことをするのッ！」

罵声といっしょにひとしきりムチの乱打。
馬はその場に動かなくなった。床にエジャクトした粘液が、ドロップと流れた。

つねりとムチと

「おねえさま、今晚は」
一目で勤め帰りとわかるBGの小宮夏江が



紀美子を訪れたのは、次の日の夕方だった。
ふたりは、レスボスの仲というより、サド女王にしいたげられるマゾ奴隷の間柄なのだ。

「きょうはむし暑いね。洋服をお脱ぎよ」
「ええ」

とはいったものの、若い娘のこと、いくら仲よしの間柄とはいえ、すぐに裸になることもならず、モジモジしている。

「お脱ぎしたらお脱ぎっ！ あたしの言うことがきけないのっ！」

紀美子のカン高い声がひびいた。
「ハ、ハイッ！」

すでに女王と奴隷の関係だ。夏江はブラウスを脱ぎ、スカートをはずした。まっ白いシユミーズが、まっ白な肌にまといついた肢体が、電灯の下でまぶしいくらいだ。

「夏江ッ、おまえは、あたしの恋人を横取りしたのねッ！」

「まあ、そんな……」

もちろん、紀美子の出まかせだ。憎い恋がたきを責める、という設定が、今夜の筋書きなのだ。

「さあ、そのテーブルにおのり」
ためらう夏江。

「早くするのよッ」

どうやら紀美子は、筋書きにのってきたようだ。夏江は、おずおずと、そばの角長なテーブルにのった。

紀美子は、荒々しく夏江の肩に手をかけると、グイと押し倒した。テーブルの四つの脚に、両手両足をそれぞれ結えつけた。横倒しのハリツケみたいな格好だ。胴にも何本かの縄が巻きつけられた。

「ああッ！ ううッ！」

夏江の口からうめきがもれた。紀美子の指

が、夏江の肌を、ところきらわずつねりはじめたからだ。

「ああっ！」

息をあえがせながら、夏江がうめく。そのうめき声が、よけい紀美子の心をあおりたてるのか、両手の指を全部つかって、紀美子はつねりまくる。白い肌に、紫色のあとが、点々とつく。

「おねえさま、もう堪忍して……」

「ほほほ、あたしのいい人を横取りしといて堪忍もないものだわ」

紀美子は、小型のナイフをとり出すと、夏江のシュミーズの紐を切った。ブラジャーも二つに切り裂き、パンティーまで破いた。

まっ白い裸身が電灯の下で輝き、その肌のあちこちに、紫色のつねった跡が痛々しい。



「まあ、こんなところにホクロがある。これは男殺しといわれるホクロだね。このホクロが、あの人を迷わせたのだね」

紀美子の目は、もう血走っている。プレイに打ち込んで、興奮しきっているのだ。

「おまえのからだから、あの人への恋心をたたき出してあげる」

言ったときは、紀美子の手には、長いしなやかなムチがにぎられていた。

ピシリッ！

紫色の斑点を散らした白い肌に、こんどは赤いスジが一本、すーっとふくれ上がった。

いつものことだが、ムチの音が紀美子を駆りたてる。そして、ムチの乱打の末、紀美子は、夏江のからだにとりついて、いつものように夏江には舌を使わせ、自分では口や手を



使って、レスボスの花が開くのだった。

ふたり重ね責め

コツ、コツ……

ドアをノックする音で、レスボスの陶醉からさめた紀美子が顔をもちあげた。いつものキリッとした面ざしはなく、恍惚の感情がただよっている。



「だれっ？」

「はい、ハルでございます」

おてつだいの春代の声だ。

「なに？」

「はい、お電話で……」

「だれから？」

「山上さまでございますが……」

「いいから、断わっておしまい……あ、それ

から、ハルはすぐここへおいで……」

「ハイ」

一度遠ざかった春代の足音がまた帰ってきた。ドアを内から開いた紀美子は、春代の手

をいきなり引っぱって室内へ入れると、すぐカギをおろしてしまった。

「まあ、お嬢さま……」

裸の紀美子を見て、春代が驚きの声をあげた。その手を離さずに、紀美子は、

「いいから、おまえも着物をお脱ぎ」

言ったときには、もう春代の帯に手をつけていた。春代はたちまち裸にむかれた。

「こっちへおいで」

まだ、さっきのままにテーブルの上に縛られていた夏江のからだに、向きあいの姿勢で春代を重ねると、ぐるぐる巻きに縛りつけてしまった。

「ハル、おまえは、あたしの楽しみを中断したんだから、お仕置きされるんだよ」

言ったかと思うと、春代の背中で、ムチが鳴った。

「あ、あーっ！」

身をもたえる春代の動きが、下にいる夏江に伝わって、これは二重の苦悶図だ。

紀美子は、この自分の思いつきに、すっかり満足したように、足をふんばって、目の下のまっ白い二つ重ねの肉体を見おろしながらピシリッ！ピシリッと、ムチをふるいつづけるのだった。

浣腸とお灸と縛り

マダムは体内でウナギを泳がせ、
あたしは水道浣腸で気を失った！

夏川 絹子

思わぬ同好者

あたしと、パートナーの玲子は、ある日、勤めの帰りに、会社の河野さんに連れられてあるバーへ行きました。河野さんがちょいちょい行くところらしく、バーテンと親しげに話しこんだり、アルコールの酔いにつられて長時間遊んでしまいました。

二、三日して、玲子があたしを誘いますので、ふたりだけでまた、そのバーへ行ってみ

ました。まだお客もなく、バーテンだけがポツンと本を読んでいた。あたしたちの姿をみると、あいそうよく、

「いらっしゃい、河野さんはいっしょじゃないの？」

「ええ、きょうは、あたしたちふたりだけなの」

「女ばかりじゃおかしいかしら」

「とんでもない、最近はお女の人だけでも、皆さんいらっしゃいますよ」

とりとめもない話をしながら、カクテルなど飲み、しばらくして、

「あなた、いま読んでいた本、何なの？ おもしろそうね」

あたしは、かれが隠した本の表紙をちらっと見て知っていました、とぼけて聞いてみました。

「いや、なんでもない、普通の本ですよ」
「そうなの、そういわ



れるとよけいにみたくなるわ、ちよっとみせてよ」

無理やりに本をみせてもらいました。やはりあたしの勘は当たりました。『風俗奇譚』の増刊号です。

「わー、すごい、こんな本読むの」

あたしは大げさにさげびました。

「ちがうよ、ちがうよ。マダムの本を借りて
るんだよ」

まっかになって弁明します。

「で、あなた貞夫さんといったわね、これから時々来るから仲よくしてね」

「ええ、もちろん喜んで。あなたがたのお名まえは」

「こちら、佐川玲子さん。あたしは夏川絹子、どうぞよろしく」

「こちらこそ。まてよ、あなたの名まえ、どこかで聞いたことあるよ、どこだったけな」

かれはいっしょうけんめい考えています。

玲子がいたずらそうに笑いながら、

「あなた、知らないの、その本よく見なさいよ」

「この本？」目次を開いて「あっ、これがある。ただ、これは早いですか。信じられないな。そうだったの。それなら、話は早い。ボクだっ

て、この本毎月マダムから借りて読んでるの
 だけど、こんな近くに同好者がいるとは思わ
 なかった。こんどボクのアパートにいらっし
 やい。いいものを見せてあげるから」

それからあたしたちの経歴、マダムと貞夫
 さんの今までの話など、いろいろしました。

マダムと貞夫さんの話をまとめると、次のよ
 うになるのです。

それからあたしたちの経歴、マダムと貞夫さんの今までの話など、いろいろしました。

マダムと貞夫さんの話をまとめると、次のようになるのです。

マダムは今年三十五歳、五尺五寸、十八貫大グラマー。

パトロンという人がまた小さくて、五尺二寸あるかなしで、月に一、二回アパートに訪れるだけだそうです。

貞夫さんは、マダムの隣の部屋に住んでいます。かれとしては、ちょっとりっぱすぎる部屋ですが、マダムが部屋代を出してくれるのだそうです。これには、マダムと貞夫さんの間になにかあるなと思いましたが、あとでわかります。かれは五尺七寸以上もある細面のハンサムな青年です。

隣の部屋からノゾく

日曜日、あたしたちは、貞夫さんの部屋を朝早く尋ねました。夜の遅い商売ながら、かれは起きていました。静かにというふうに、

現代科学のすバラシキ驚異!!

★写真の中にすまして金裸の美女が突然あなたの眼前
★現！一瞬目を疑うこの不思議！
★息づく乳房くねる腰しびるようふるえるモモ思わず
★手を出してさわりたくなる物凄い飛び出し感！
★一糸まとわぬ美女群が限界線を超越したあられもない悩
★殺姿でお目見得！この種の写真では絶対不可能の特
★別秘写真新作ついに完成！秘密確保のためハガキ注文
★お断わり！
★本品は単なる目のごまかしや錯覚によるものではなく科
★学に立脚する画期的製品で現実の世界を手にとるように
★再現します。一口に言えば生きたヌード美人をそのまま
★写真の中にカンヅメにしたものです。お気に召さぬ場合は返
★本品は通例の誇大広告に非ず！
★品交換ご自由！

飛び出す!!ヌード集

定価 6組入五百円 15組入千円 40組入二千元
★各種共携帯用特許眼鏡一台付 ★厳封発送料各種共30円
見本写真 及び説明書送料共50円 ☆個人名にて誰れにも
分からぬように厳封発送す！

浦和市元町一の二〇K 振替(東京)三九八九三番
日本ステレオ科学研究所

二〇K 振替(東京)三九八九三番
日本ステレオ科学研究所

口に指をあて、

「ちようどいい時にキミたちはきたね。いまおもしろいことが始まっているよ」

と、あたしたちを、押し入れの中に誘います。

ちょうど目の高さに三十センチ四方くらいの穴が切っており、隣の部屋がみえます。

「こんな大きな穴あけて、向こうから見えないの？」

「平気さ。向こうに鏡があるけど、普通の鏡だったので、マダムの留守にすかし鏡と取り替えちゃったのさ。だから、わかるものか」

それを聞いて安心して向こうを見ますと、マダムは全裸にされて上半身を台の上にのせ両足をおもいきり開き、ピンとはった紐で部屋の前すみに引きつけられています。

男の人は六十すぎにみえましたが、その人がパトロンだそうです。

先端に十センチ角のゴム片をつけた細い竹のムチで、マダムの大切な場所をピシリ、ピシリ打ち続けます。

声を出そうにも口にきれをいっばいつめ込まれ、ただからだをくねくねと動かし、汗をいっばいかいております。

あんなすごい責めをみたのは、ふたりともはじめてですので、押し入れから出ても、胸がドキドキしてしまいました。貞夫さんはニヤニヤしながら、

「マダムはね、本当は浣腸が好きなんだ。だけど、パトロンがどういうわけか浣腸に興味がないらしく、ムチなんかばかしなのさ。それでぼくがマダムに浣腸責めをしてあげるんだ」

それでわかりました。かれがマダムから部屋代を出してもらい、りっぱなアパートに住む理由も。

「キミたち、よかったら、マダムに紹介して

あげようか」

「ええ、ありがとう、お願いするわ。いいでしょ玲子？」

「ウン、もちろん大賛成だわ」

と玲子。

「じゃ、お昼まで待ちなよ、パトロンも帰るから」

「ええ、だけど、あたしたちのこと河野さんや会社の人たちにないしょよ」

「もちろんさ、こんなこと、やたらの人に話せる訳がないじゃないか、まかしとき」

急にあたしたちは十年の知己のようにうちとけてしまいました。

体内でウナギを飼う

昼すぎ、パトロンは帰ったようです。

「どら、マダムを一つ責めて来るかな。それからキミたちを紹介するよ」

かれは、隣の部屋には行って行きました。

「あたしたちはもちろん押し入れの中へ。かれは、マダムの傷を手当てしています。そして、ビニールのようなものを出してきました。天井には大きなバケツがつるしてあり、それをバケツにセットします。」

わかりました。あれは、金物屋などで売っ

ている大きな器から油などを小出しにする時に使うサイホンです。差し込みのところ、ちょうど十センチぐらいあります、あれなら、相当奥までも挿入することができます。かれも、なかなかいいものを見つけたものです。

さっそく、プレイの始まりです。マダムは、四つんばいになり、そこへ、かれの持ったものがすーっとはいります。途中のフクラミの部分で二、三回押えると、水が動き出しました。透明のビニール管ですので、薬液がどんどんはいるのがよくわかります。

終わるとセンをしておいて、大きなオシメカバーで、マダムのからだをつつみ、そして、からだじゅうをマッサージします。

マダムは、苦しそうな表情のなかにも、必死にがまんしています。声はよく聞こえませんが、けんめいにこらえている様子です。

そのうちに急にからだの力がぬけたとみるや、マダムのからだはグッタリとしてしまい、お腹で大きく息をしています。

かれは、マダムの口にウィスキーをそそぎ、バスルームのほうへ連れて行きました。しばらくして、からだを洗ったのでしょ

う、すっかりごきげんになったマダムが、ま

た貞夫さんから浣腸を受けます。こんどは真水で行なうらしく、バケツに半分ほど用意します。

それが注入し終わると、かれはどこからかウナギを二匹持って来て、マダムに押し込みます。マダムのウツトリした顔。きっとマダムのからだの中でウナギが泳ぎ回っているでしょう。排泄された便器の中は、きれいなものでした。さっきの洗浄できれいになったマダムは、自分のからだの中でウナギを飼っているのです。

そのプレイを終わった時、かれはマダムに何かささやきました。大きくコックリしたマダムをみて、貞夫さんは大急ぎであたしたちのほうへ戻ってきました。

「マダムに話したよ。OKさ。紹介するからいらっしやい」

そこであたしたちはマダムに紹介され、いっぺんにふたりの友だちができたことをお互いに喜びあいました。

温泉浣腸 の魅惑

それから時々遊びに行くうちに、あたしは、貞夫さん



に一つのアイデアをさすけました。例のピンポン、卵、そして温泉浣腸です。かれも、このアイデアに大賛成で、さっそく実行すると張り切りしました。

その時の模様を、次の日聞いてみますと、大成功だったと話していました。最初、ヒマシ油をドンブリ一杯のませ、一時間ぐらいしてから何回も何回も洗浄して、マダムがグロッキーになる寸前まで責めてから、いきなりソーセージを使用したところ、ビックリしたのですが、それから大変喜んだので、その次に温泉浣腸を行ない、またまた喜ばれたそうです。しかし、ピンポンとタマゴは苦しんだそうで、タマゴはなかなかじょうずに生めなく、ストレート溶液で排泄させてあげたんですけど、それからは温泉浣腸を望んで困るから、プレイの前はビールを二、三本飲んで行なうようにしているんだと話していました。

あたしもこの話を聞き、しばらく温泉浣腸

をしていないので、マダムがうらやましくなっていました。

「貞夫さん、今度あたしにもやってくださる」

「ウン、いいよ、お望みならね」

と承知してくれました。あたしはさっそく玲子を連れてかれのアパートに行きました。マダムは前夜から熱海に行って留守でした。あたしたちは三人でプレイをすることになり、

「貞夫さん、あのサイホンでやってくれな、あたしたちはじめてなの」

「O・K、じゃふたりいっしょにするから、したくするまでに服を脱いでいてくれよ」

と、かれはいいいます。かれはガスの元センの二股に別れた口金をもってきてセットします。

「さ、ふたりともあおむけに寝て」

といいながら、口金の先についたゴムを挿入します。

はじめての器具なので、胸がドキドキしています。いきなりヒンヤリしたものがはいってきました。スーッとしたなんともいえない気持ちです。エネマより苦しくありません。ふたりですので、かれは時々バケツの中に

薬を入れます。

そのうちに、下腹が急に重苦しくなってきました。手をあてますと、プツクリとふくらんでいます。せつなくなってきました。

玲子が先に音をあげてしまいました。そこで薬を止めてもらい、排泄に行こうとしますと、

「まだ早い、そのまま静かに」と、ふたりを抱き合わせにしっかり合わせて紐でしばり脱脂綿で押えつけるのです。ますます苦しみは加わってきます。

「お願い、堪忍^{かんにん}して、もうダメだわ」

「ダメダメ、こんなことでは、キミたちマニアもたいしたことないな。立って風呂場^{ふろば}においで、そこまできたら許してやるから」

あたしたちは縛られたままの不自由な姿で、苦しいのをがまんしながらやっとの思いでバスルームにまで行きますと、まだ許してくれません。



「あと三分、押えるのはやめるけど、三分だよ。がまんしなかったら承知しないよ」

しかし、あたしたちはダメでした。ふたりで抱き合ったまま、とうとう排泄してしまいました。

「ダメだな、そこをきれいにしたら、また部屋に戻るんだよ」

かれは、そのまま行ってしまいます。

除毛とお灸

からだを洗い、部屋に戻りますと、今度は二人三脚のように縛られたまま、また寝かされます。あおむけに寝たふたりの自由なほうの手足を縄^{なわ}で四すみにしばられてしまいました。

「がまんできなかった罰だ」

とかれは、電気カミソリを持ち出してきて、ふたりのある部分を除毛しようとしています。

「約束がちがうわ。浣腸はするけど、そこまでは許せないわ」

あたしは必死に叫びました。しかし身動きもできません。玲子は涙をポロポロ流しています。

「だいじょうぶ、ぼくは約束を守るよ」

そのままかれは作業を続けます。一とおり除毛がすむと、今度は普通のカミソリで、きれいにそりあげてしまいました。

「さて、さっきの罰だ、お灸^{きゅう}をしてやるから覚悟しな」

とばかり、もぐさを両わきに一つずつのせ、火をつけるのです。

あたしたちはあきらめました。だいじなところ^{ところ}に傷あとのこっても、しかたがない。

自分たちで飛び込んだ訳だものと、しかし熱くないものです、ホンワカとした暖かみだけなのです。

「あっはっはっ、びっくりしたかい、もぐさの下に味噌がつけてあるから安心だよ、キミたちをおどかしただけさ」

実のところ、あたしたちもホッと一安心しました。また、あらためて貞夫さんが好きになりました。

「さあ、次は温泉浣腸だよ」

「ええ、じゃ玲子、先にやってもらいなさいよ」

玲子はまださっきのショックがさめないうか、ボンヤリしています。

「さあ、ベッドの上に上半身だけうつ伏せにして、足を大きく開いて」

その声を聞きながらあたしは、次の部屋にさがりました。

「キャッ」

突然、玲子が声とともにあたしのところにとび込んできました。

「絹子さん、助けて、痛くて痛くて、あたし、あんなのはじめてよ」

「しようないわね、あたしがしてもらうから、あなた見ていなさいよ」

あたしは、おもむろにベッドに寝ます。期待に胸をはずませながら、本当に久しぶりの温泉浣腸です。貞夫さんが近づいてきます。

「ウッ」あたしも思わずうなりました。

貞夫さんはワセリンをつけないのです。これでは、玲子ならずともびっくりします。しかもちょっと大きいようです。あたしのからだも、なかなか受けつけません。あたしも、手をにぎりしめ、苦痛をこらえます。それでも、徐々にはいつてきますと、局部がカッカッとはてっているようです。

とうとう全部はいつてしまいました。そして、暖かい水。本当に、本当に久しぶり。あたしは汗でいっぱいです。

それからというものは、浣腸プレイのほかにお灸も、あたしたちにかかせないものになりました。しかし、本当の灸では傷あとのこりしますので、味噌を下につけて行なっております。

針を刺されるマダム

それからしばらくして、あたしたちはまたまたすごい責め場を、マダムの部屋で見えています。

あたしたちがされたと同様に、きれいに除

飛び出すノーパンティショウ

★今迄誰も手がけなかった女体の秘密をあます所なく捕らえたステレオ界前代未聞のズバリポーズ。うら若き女学生達の温泉場面を秘密撮影。澄みきった湯に映るむっちりとした魅力のモモきゅん。とくびれたたまたまの隠し技。はたまたまの神に身をくねらせて泣く身も心もろける様なセクシーモードの体当り演技。男子禁制のまばゆいばかりの桃源境を貴方の眼前で再現。他秘密撮影演出。撮影等各種豊富。今評判のステレオも大半が雑誌の口説き程度ですが本誌は当会員の特別頒布品の中よりや、平凡な物を選んで一般分譲。本誌お買上げの方は準会員とし、特典あり。正会員は準会員より進歩し個人のご希望に必ず市販のステレオに不満の方始めのうめせひ当会にご加入下さい。

7組入千円 20組入二千円 40組入三千円

右は特殊眼鏡一台付千円の価格必ず書留にて型録ナシ会員の皆様へ。長い間ご迷惑をおかけ致しました。此のたび漸く営業停止期間が過ぎましたので。新しい新たに発足致しました。何卒引き続き宜しくお願ひ致します。従前通り会員特報毎月送付。通信は必ず私書宛。大宮局私書第二十三号。

(ステレオクラブ改め)ステレオ趣味の会

毛されたマダムがあおむけに寝ています。そのまわりは、きれいにお化粧がほどこしてあります。手足を縄で大の字にしばられ、口にさるぐつわをされたマダムは、パトロンに針でもってチクチクと化粧をしたあたりを刺されています。

マダムは、からだをくねらせ、苦しそうにしていますが、逃げられません。額に汗といっしょにベッタリとついた髪の毛が光っています。口からは、かすかなウメキ声も聞こえるようです。それでもなお。針は休みなく急所をチクチクと刺しています。

二十分ぐらいたったでしょうか、マダムの顔から苦痛の表情が消え、なにか夢をみているようです。目を細め、ウツトリとしています。すると、パトロンは、太い葉巻きに火をつけて、その場所に差し込みます、時々もえつきた灰が落ちますが、からだはピクリとも動きません。貞夫さんが、

「今にすごいぞ」

とあたしたちにささやきます。

「ヒーッ」

という声とともに、マダムは激しく動きまわりました。パトロンはゆっくりと立ち上がり、水差しの水をそそぎ、火を消します。マダムは、またもやグッタリとしてしまいました。

押し入れから出たあたしたちも、なんだか変な気持ちになってしまいました。玲子は急用で先に帰ってしまいましたので、あたしとかれとふたりでプレイをすることになり、例により、いろいろな浣腸や、卵を生むニワトリ遊びをしたり、お灸などですっかりいい気持ちになっていきますと、かれに風呂場に連れて行かれました。

手足をまた大の字に広げられ、縄でしばられ、水道浣腸です。水圧は低くして、じわじわとあたしを苦しめるのだそうです。あおむ

けに寝たあたしのからだに、つめたい水がはいってきます。

するとかれは、いきなり、あたしの頭をおさえつけて、鼻に洗たくバサミをはさむのです。苦しくなって口をあけますと、口の上のほうの水道のセンをひねって、口からも水責めです。口をあけねば息ができないし、口をあければ水を飲むといったぐあいです。あたしのお腹は、きつとカエルのようになっていました。そのうえにかかれは、鳥の羽であたしの急所という急所をくすぐるのです。あたしはとうとう気を失ってしまいました。

どのくらいあったでしょうか、何か激しいショックを受けたようにあたしはとび上がりました。紐はすでにとり去られていました。が、なんとということでしょう、あたしのだいいじなところに味噌もつけない本当のお灸がのっていたのです。

いそいで水をかけて消しました。早く気がついて消したのでたいしたことなかったようです。

「気がついたかい、びっくりしたよ。からだじゅうつねったり、たたいたけど気がつかないんだもの、最後の手段と思ってやったんだ」と、かれもまっさおな顔をしています。そ

のおかげで、とうとう三、四日あたしは下痢をしてしまいました。

一週間ほどして行くと、マダムがあたしに「絹子ちゃん、この間は大変だったわね、苦しかったでしょう」

「あら、マダム知っているの。貞夫さんに聞いたんですか」

「ちがうわよ、あのバスルームの大きな鏡ね、あたしのお部屋から見えるようにできているのよ。だって、貞夫ちゃんの部屋からも、あたしの部屋が見える鏡があるでしょ、だから、あいこよ」

あたしたちより一枚上手でした。あたしたちに見られていることを知りながらそれを楽しみ、そのうえに、貞夫さんのほうのバスルームにそんな鏡がついているなんて、あたしも貞夫さんも完全に一本とられてしまいました。

「だけど、貞夫ったら、案外いくじがないのね、絹子ちゃんがあんな状態なら、何しようとかできるのに、まっさおになっておろおろしているんだもの、しっかりしなさいよ、貞夫」あたしはあんな恥ずかしいことを第三者に見られたことを知り、自分の顔がまっかになったことを感じました。

美女の凄艶切腹図絵

——右手にもった氷の刃の切っ先が白絹に突き立て
られたとき、宙に弧を描いて飛ぶ鮮血一筋！

及 川 滉

首の座の美女

(いまに、この絶世の美女が白い手で三方の上の短刀の鞘を払う。続いて、そのしなやかな手でぐさりとばかりに、われとわが細い咽喉もとを突き刺す。ぱっと吹き出すくれないの血潮とともに黒髪前へ泳ぎ、肩や腰をなまめかしくくねらせて苦悶する——)

全くこれは千載一遇の見ものじゃ。彼女の苦痛にあえぐ、悩ましい姿態をほどよく楽しんだところで、この大刀一閃すれば、コロリと即座に血まみれの生首がおれの眼前にころがりおちるのだ——)

主君の侍女、荻田露の介錯を命じられた有馬主税は、今年二十二歳、まだ独身だ。

たすき十字に綾取った胸のあたりに、怪しげなときめきをおぼえながら、まじまじと白無垢姿も目ざめるばかりのあざやかな露を見守った。そのえりもとににおう伽羅の芳香が、五、六尺離れて対座する主税の鼻をほのかにくすぐる。

露はさかさまの白い小屏風を背にして、うぜんと白い毛氈の首の座にひかえている。堅く紐で縛ったひざの前には、白木の三方、その上には白鞘の短刀九寸五分。三方の手前

においた線香台には、うす紫の煙が細く、露の最期を痛むかのように立ちのぼる。

つややかな黒髪を束ねて、五味藤に梳き立てた大前髪の籠島田、菱結びにはね返した銀箔の平元結がきらりと百目ろうそくの光に反射する。

雪よりも白い頬に二筋三筋、こぼれた鬢のほつれ毛。ほっそりしたえりあしをすべる、そり返った鬢。

ゆるやかな月の眉、男心をとろかさずにはおかぬ黒耀石の瞳。品のいい、彫刻的な鼻筋、におう丹花のくちびる、小さなおとがい——。一分の隙もなく整った優艶な細面は、水もしたたるばかり。

(見れば見るほど、美しいこの娘！ いままでひそかに思いを寄せたかいもなく、もはや、今宵かぎり——)

ごくりと主税がなまつばをのみこめば、またしてもときめきが胸をゆする。たとえば、それは美しい、清らかな花を粉みじんに踏みにじってみたくなるような、気違いじみた喜びとも興奮ともつかぬ、あの——。

「では、有馬さま、お世話になりますぞえ」玉をころがす声とともに、そっと露が三方の刀を取り上げて鞘を払えば、氷の白刃が主

全裸

税の目を刺す。彼女はそれをしばし灯に透かすように見ていたが、切っ先三寸ばかりのぞかせて、そのあとは柄まで幾重にも用意の白布を巻きつける。

(それ——)

と、主税がかたわらの大刀を左手につかめば、思わず全身武者ぶるいを始めた——。

他人にもらせぬ秘密

有馬主税は、五代將軍綱吉の側用人柳沢吉保、飛ぶ鳥も落とさずにはおかぬ、当代きつ



ての実力者の家臣だ。若年ながら、一刀流免許皆伝の腕まえ、そのうえ、当世風に弁舌さわやかで、決して他人をそらさぬ、利口な出世型だ。主君の信任も厚く、しばしば上役か

ら嫁の話も持ち込まれる、幸福な身の上であった。

だが、主税は、そんな話にいったい見向きもしなかった。というのは、きょうまで、だ

れにも言えぬ、一つの秘密があった。かれは
独身の朋輩たちとは違って、

(好きな女性に添い臥して、ただ肉体の欲望
を遂げるだけではつまらない。うんと相手の

新鮮な肉体を虐待した
あげく、その苦悶する
姿態を愛撫したりしな
ければ、とうてい満足
できそうにない)

と、ふだん考えてい
たので――。

しかも、それを主税
は、夜ごとの夢に経験
すると、ひとり寝の床
中に興奮して、無上の
快楽をおぼえた。また
ときには、むしろ自分
自身が相手の女性から
言語に絶する虐待をう
けてみたいとすら思う
こともあった。

だが、もし、この嗜
虐的行為を、妻として
もらいうけた重役の娘に実行してきられわれよ
うものなら(それは、じゅうぶんに予想でき

る)、それこそ一大事、たちまち家中に知れ
渡って輕蔑の的となるのは必定だ。

そこで主税は、嫁をもらうなら、家中に身
寄りのない、他藩の娘に限ると、ひとり心に

ることになった。

露は、もと越後高田二十二万石の城主松平
光長の家老として聞こえた、糸魚川三万石の
城主荻田主馬のひとり娘である。たまたまお

家騒動が起こって松平
家は断絶、家老の主馬
は主君の補佐ふゆきと
どきのかどによって、
八丈島へ流された。以
来十年、まだ公儀の赦
免がおりそうにみえな
い。

露は、名門の生まれ
だけに、女性としての
教養はもとより、武芸
においても男に舌を巻
かせるほどの腕まえ、
士風すたれた元禄の世
には、まことに珍しい
不思議な女性である。
天性の美貌に、男まさ
りの気性、しかも賢く
て、打てばひびくとい
すこぶる吉保の眼鏡に



決めた。すると、半年ほど前から、柳沢家の
御用商人の口ききで、荻田露が当屋敷に仕え

った勤めぶりなので、
もかなっていた。

この露に、主税は、人知れず思いを寄せ、あわよくば妻にしたいと思っていた。彼女は、家中に身寄りが無い。たとえかれが変態的欲情にふけたとしても、朋輩たちにもれる恐れはないと計算した。

ところがけさ、思いがけない事件が起こった――。

老女の藤野が、露の部屋から、彼女が井伊掃部頭の重臣中村紋太夫にあてた手紙の下書きの切れはしを発見したのだ。それには、最近の柳沢家の内情、吉保の動静などがつぶさにしるされてあった。井伊掃部頭は、日ごろ吉保の権勢を憎み、隙あらば落とし入れようとしている、恐るべき競敵である。

さっそく露を取り調べてみると、彼女ももはやのがれられぬところを観念したのか、すらすらと白状した。

「お察しのとおり、あたくしは中村さまの間者（スパイ）としてご当家に潜入しました。ご当家の機密を通告すれば、公儀に願って、八丈島の父にご赦免おられるように取り計らうと仰せられました。それゆえ、心ならずも間者を働きました。あたくしも武士の娘です。事発覚した以上、いさぎよくご成敗を受けましよう」

吉保は幕閣随一の権力者、侍女ひとり消すぐらい平ちゃらだ。それで、井伊侯にみせしめのため露の命を断つとしても、もともと気に入りの侍女のこと、しかも手数をかけさせず白状したし、家柄もすぐれているので、本来ならば打ち首のところを免じ、男の切腹と同格に自害を申しつけて、介錯を主税に命じたのだ。

主税とすれば、妻にしたいとまで惚れぬいた女性を殺せといわれて、一時は氣も動転したが、なにしろ浮薄な元禄の世の若武士だ。（もはや処置なし。せめてこの目で露殿の最期のさまをながめることができれば、人にはもらせぬ、おれの嗜虐趣味も、多少満足させられるというものだ）

と、あっさり功利的に割り切って、主君の命令に従ったのである。

今生の願いに切腹を

主税は、短刀握った露の手もとを見つめながら、武者ぶるいを押えて、

「露殿、まことに痛い限りなれど、これもせんないこと、もし、何かご遺言でもござれば、この主税、たしかにうけたまわってお伝えいたしましょう」

ゆらめく香煙のなかで、ちらと露のうるわしく細面に微妙な陰影がかげったかと思うと、

「もはや覚悟をきめたこの身に遺言としてはございませぬが、ここにただ一つのお願いがございます」

「して、その願ひとは？」

「ご承知のように、この露は、春日山上杉謙信公以来、武門の誉れ高い糸魚川三万石の城主荻田主馬のひとり娘として生まれました。父・主馬の遺志によって、あたくしは幼少より男子として育てられましたので、いささか武士のたしなみも心得ています。このたび格別のご慈悲をもって自害仰せつけくださいましたことゆえ、どうか武士同様の切腹の儀お許しくださいませ」

「え、そなたがご切腹とな。あとう、女子の身をもって――？」

主税は目を見張った。いまがままで、露は咽喉かそれとも胸でも突くのかとばかり思っていたのに――。

露は、にっこり、頬のえくぼに一まつ寂しさを漂わせて、

「たとえ、女だてらに、男なみの切腹いたしまししょうとも、いよいよこと切れる場合には

女子に返って、この首はねていただきます。さすれば、有馬さまにはご迷惑かかりますまい。今生こんじょうにおける、露のたった一つのお願、なにとどお聞き届けくださいますように——」

ちらと見上げる切れ長の目の美しいこと、思わず主税はぞっとした。

さて、露がどんなふうにして、かれに迷惑かけずに死ぬのか、主税にはじゅうぶんに納得いかないが、不思議な魅力に輝く瞳ひとみの前には、それを問いただす勇氣もない。どうせ見分役ぶんやくも跡かたづけするのも自分ひとり、あとで適当に始末しておけば、余人にわかる気がかいはない。

また一方、思う人の切腹と聞けば、いよいよその嗜虐的欲情が胸をかむ。主税はいちがいに拒絶することもできなくなった。

しばしためらっていると、露のほうでは、それを承知のしるしと見たのか、さらにたたみかけるように、

「露が刃やいばを腹に突き立てましょうとも、『介錯かくさくみます』と申すまでは、首をはねずに、しかと、その場にてお見届けくださいませ。元禄の華美太平に酔いしれて、やすやすと出世なさるご家中の皆さまには、はばかりなが

ら、よき手本となりましたようぞ」と、気負いこんだありまきには、主税もただうなづくよりほかしかたなかった。「ご存分にお腹召され」

白絹の柔肌に白刃が

露は、主税から視線を離して、右手の刀を三方にもどすと、白い帯止めや帯を解いてかたわらに始末した。しだいに桜色の顔が青ざめてくる。上着と下重ねの前をぐっと広げて左方から双肩もろかた脱げば、上半身は長じゅばんと肌着だけ。だが、ひざのほうは上着と下重ねとをまとったままにしておいて、腰紐こしひもをひざ近くまで下げて締め直した。

次に伊達だて巻きをほどけば、くずれたえりの間から、統ふらよりもなめらかな肌がのぞく。それを長じゅばんでおさえて、伊達巻きをたたむ。両手を肌着のなかへ入れて、右手でわき腹を、左から右へかけて軽く二、三度なで回した。

絶世の美女の、壮烈な、それでいて、なまめかしい最期！ 氷の白刃が、汚れを知らぬ処女おとめをむざむざと散らしてしまうのか。いつか主税は寒気がしてきた。

それと知るや知らずや、露は、えりを正し

て正面を見すえる。ふたたび三方の刀を逆手握り締めたまま片ひざの上におく。おもむろに左方の肌着をかすかにくつろげると、左手をなかへ入れて、そっとわき腹にあてた。

「ちらと主税へ微笑の目礼送れば、ぱっと白蠟ろうの顔に一面の紅葉——」。

「有馬さま、あつかましくも重ねて願います。いっそのこと、古式にのっとる戦場での切腹を——」

すでに主税は、全身欲情に燃え上がり、目は血走ってうわの空。露のくずれたえりの間にのぞく白妙しろたえの肌に見とれていたので、思わず、

「ええ、どちらでも——」

「——しからばごめん！」

はらりと長じゅばんと肌着とを左肩からうしろへはねのけて、左上半身は糸おおわぬ全裸となった。なめらかに輝く肩、ふっくらと盛り上がる丸い乳房、うす紅色べににはほえむ乳首、たっぷり脂肪ののりきったあばらから小さな琥珀色こはくいろのヘソのあたり——。

もともと露は骨細ほほそで長身、着物姿はやせて見えるが、こうして着衣をはいで見ると、外見のわりには案外肉づきもふっくらと豊か

だ。

「あっ！」

まっ白のきめの細かな淡紅色におう玉の肌のまぶしさに思わず主税が息をのむ瞬間——露はきりっと柳眉を釣り上げさま、丹花のくちびる真一文字にかみしめるや、目ざめるばかりの高島田をぐっとうつ向ける。それと同時に、ぐさと右手の氷の切っ先を、われとわが白絹の柔肌めがけて突き立てた。

とたんに、ぴゅっと、宙に弧を描く鮮血一筋！ あでやかな前髪も高島田もいまはこわれて、ばらりと黒髪が頬やあらわな肌に垂れかかる。その黒髪のすきまから、じわじわと真紅の血潮がにじみ出して、あたりの白い毛氈をからくれないに染めていく——。

「う、う、う……」

灼熱の火ばしを突っ込む、鋭い、言いようのない苦痛。露は目を閉じ、なおもくちびるをかみしめて、左手に刀背を押しながら、わき腹を縦に一寸ほど切り下げる。左手を右手に持ち添えて、ぐいと切っ先を右直角にねじると、愛くるしいヘソの近くまできりきりと引き回した。

いかに古式にのっとるとはいえ、花恥ずかしい美女の全裸の切腹に、主税も一時はぼう

ぜんとした。だが、すらすらと切腹が運ぶとたちまちあの悪魔的な感情が胸いっぱいこみ上げてきた。すると、意地の悪いことばがかれの口からもれた。

「あいや、露殿。そのご切腹、女性としてはおみごとじゃが、ちと刀のはいり方が浅い。それではなかなか死ねますまい」

「な、なんと仰せられます、有馬さま？」

露は、ほとぼり出る血潮の中に両手の刀を突き立てて、上半身をエビのように折り曲げていたが、そのとき顔を上げて主税のほうを見た。青白い顔に、まぶたのふちを紅く染め、せいっぱい苦痛をこらえた美しい瞳。清純で凄艶、男の胸を突き刺さずにはおかぬ妖しい光を放つ。

「この刀が浅いと——？」

「む、いかにも——」

露としては、わざわざ頼んだてまえ、傷が浅いとあってはこの上ない恥辱だ。このままでは死のうにも死ねない。

「で、では、このとおり——」

露は、震える両手に力をこめて、さらにぐっと深く刀を突き刺すと、美しい顔をひきつらせた。それを見ると、主税はむずがゆい、しびれるような快感に、からだじゅうをぞく

ぞくさせて、ただうなづく。

やがて、露は、琥珀色のへその真下一寸ぐらいのところまで刀を押し動かしてきたが、そこですっと刀を腹より引き抜くや、したたる血潮のまま三方にのせた。

口先ではいくら気強いこと言っても、どうせか弱い女の身、迫る激痛にたえかねて介錯を頼むのかと、主税が姿勢を正したとき、やおら彼女はみずみずしい上半身を起こして、「有馬さま、こ、これを——」

背にかかる長じゅばんの小袖をわななく左手に引き寄せて、わき腹にあふれる血潮をぬぐえば——

切りも切ったり、むざんや、まっ白い左あばらの下からへその真下へかけて、太い朱の色した総が一筋、赤く口を開いて、ちょうど、「L」という字を裏返しにした「I」の形に、ゆがまず、まっすぐ、えぐるように刻みこまれているではないか。露は、さきほどの主税の注意がよほど気にかかっていたものと見える。

瀕死の白鳥

（や、やったな——）

主税は、喜びのあまり恍惚の高潮に達し

た。いよいよ狂人のように目を釣り上げて、

「おう、あっぱれ、露殿」

露は、苦痛に身をよじらせながら、かすかに頬を赤らめて、

「露の切腹、最後まで、なお、そこにて、ご検分くださいませ」

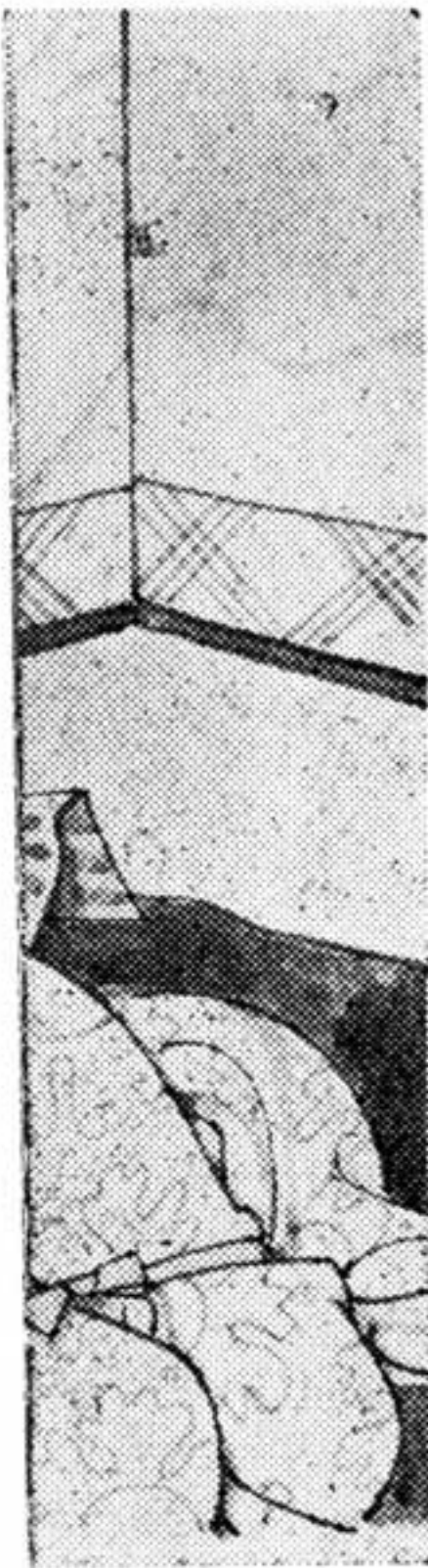
ふたたび三方の刀を右手に持つより早く、左手をへその真下のまっかな傷口にあてて、ぶしゅっと刀を突き立てた。美しい血煙が主税のはかまのそばに飛ぶ。露は左手を刀の右手に添えて、右肩から半身をおおった肌着とじゅばんとを右腕でおし開くようにしながら、

「う、う、うむ——」

かすかにうめいて、ゆるやかに刀を右方へ引き回す。ぐっと迫る凄艶な眉根、ゆがめたくちびるのなまめかしさ、悩ましき——。

前髪、高島田、鬘もいつか元結が切れて、ものすごいさんばら姿——。丈余の黒髪は束に乱れて、へびのように双の頬や肩から、抜けるように白上半身の裸体をすべって、ひざのあたりにうねる。

疼痛のなかにかつと



見開く切れ長の目、そこに輝く大きな瞳、二筋三筋白い顔に刻まれた縦じわ、かすかにひきつる頬、ふくよかな乳房、ひくひく動くあばら、みぞおち、脂肪に妖しく光るなめらかな腹のふくらみ、その雪の腹を両手の刀がじりじりとまっかに染める。

刻、一刻……露の命が消え細って行くのだ。悲しく、痛ましく、また妖、しい美の祭典——

「——」

とろんとした主税の目の前で、ようやく露は、右わき腹のはしまで刀を引き回してきた。いまや、露の長じゅばんと肌着はほんのわずかに右肩にかかり、全裸に近い上半身。それをややうしろへのけぞらせ、小さなおとがい突き出して天井仰げば、細長いえり首が抜け出るかと伸びて、双の乳房も揺れる。まっかに染まった白絹の腹が、主税の眼中一面に広がれば、

「う、う、うっ！ え、えっ！」

低く、うめきとも叫びともつかぬ露の声が主税の耳を打った。

このとき露は、最後の力をふり絞って、ぐりぐりと、わき腹をえぐる。じっとこらえるにはあまりに激しい苦痛に彼女は身も世もあらぬ思い、二、三度玉の裸身をくねらした。かみしめた歯は、いつかくちびるを破ってたらたらと血潮が左右の口もとからこぼれ落ちる。

ようやく彼女は鋭い切っ先を右あばらのほうへ向けかえると、左手に刀背押しつつ、がっと一気に上方へ切り上げる。ここに露はものみごとに、いわゆる腹十文字にかき切ったのだ。

露が震える手に血刀をぬぐって三方へもどせば、

(すわ、介錯！)

と、主税が刀を手にもめき立つのを露は片手に制し、苦しうにほっと片息ついて、

「し、しばらく——。有馬さま、よもやあなたは露の先刻の約束、お忘れではありませんまい。露のこと切れるおりには女性に返って、決してご迷惑かけぬと申したはずです」

「——」

虚をつかれて主税がひるむと、露は青ざめ

た顔に寂しく微笑を浮かべながら、

「いかに恥知らずの露でも、このしどけない姿では、死ねませぬ。

一応、服装整えて、女性に身に戻りますあいだ、いま、しばしがほど——」

いまや、露は倒れそうに動揺する上半身をかろうじて保ちながら、またひざの細帯を解いて自由にした。続いて左肩からはずれた肌着と、長じゅばんとをきちんと身につけ終わると、両手の血潮もきれいにふき取った。

さらに上着と下重ねも両肩にかけてそでを通す。

武士も及ばぬ、あざやかな切腹のあとに、露はあくまで女らしく、端然と死の容姿を整えようと努力しているのだ。瀕死の苦痛にあえぎながら、超人的努力を続ける彼女に、す



でに主税の悪魔的欲情は予想以上に満足させられた。

(男冥利につきる——)

主税は発作的に飛んで行って、ひしと彼女を抱き締めなくなったのを、その場にこらえ

ると、高潮した快感がずっと全身から引いていく。すると、不思議や、こんどは、いままでとは全く質の違った、妙な重苦しい挑発的な情感がしだいに頭をもたげてきた。それは、重苦しいなかになんともいえぬ、むずがゆい、甘美な刺激を伴って——。

情欲の不可思議

露は、主税のこの変化に気づくよしもなく、よろよろと血の泉から立ち上がった。間断なく襲ってくる苦痛に懸命に抗し、うせいく気力を引き立てながら、どうやら腰紐も帯も締め終わると、花のくずれるようにそこにすわった。ふたたびひざを縛り、そのうえに両手をのせて、

「有馬さま、身じたく整いました。いざ、ご紹介——」

と、言いも終わらぬうちに、早くも立ち上がった主税は、彼女に近づくと、三方をかたわらにずらして、そのひざの前にすわった。

「露殿、もう拙者は、しんぼうできぬ。じ、実は、拙者、かねてそなたに恋いこがれるあまり、ぜひとも妻に申しうけたいと思っています。だが、あえなくこの始末——」

「えっ、なんとしたことを有馬さま、この期

に及んで——」

主税の意外な告白に、露は苦痛のなかから、月の眉をひそめてかれを見た。

「あまりにとうとつゆえ、そなたには信じられぬかもしれぬが、これは拙者の真実じゃ。先刻より言おうか言うまいかと、とつおいつ思案したが、いまをはずしてお耳に入れるときははない。よって、こうして——」

「ま、有馬さま——」

露にとって主税は、もとより路傍の若者、好きでもないが、若い娘として、男に思いを寄せられるのはまんざら悪い気持ちでもない。一瞬、露が苦痛を忘れたとき、やにわに主税ははかまの紐を解いて双肌くつろげた。そして、三方にのせた露の血刀を右手ににして、

「拙者のことばが決してうそいつわりではない印に、拙者の血潮にかけてお誓い申す。さ、そなたの血潮のついたこの短刀で、拙者のここを突いてください」

と、おのが右わき腹を指さす。

「ま、有馬さま、それでは、露と相対死（心中）をなさるおつもりですか？」

驚いた露の、やや興ざめ顔を見ると、主税は強くかぶりを振って、

「ち、違う。ただ、拙者の血潮の誓いをお目につけたいのじゃ。そなたとともに死ぬのじやない。拙者が死んで、そなたのご介錯はできぬではないか」

「いや、有馬さま。そのことば、うれしく露は冥途へのみやげにいたしますが、もはやご介錯には及びませぬ。どうやら露の最期も迫りましたほどに」

苦しげに両手で帯の上をおさえると、主税はなおも首を振って、
「いけませぬ、露殿。拙者は御身の願ひ聞き届けたではないか。さすればそなたも——」
堪え難い苦痛に露がさかろう力もうせて力なく右手を差し出せば、それを主税は左手

絶賛 好評発売中!

開運の像 岩戸おかめ

★ 日の本とは

天の岩戸の昔より

女ならではの夜の明けぬ国

即時開運・商売繁昌・家内安全

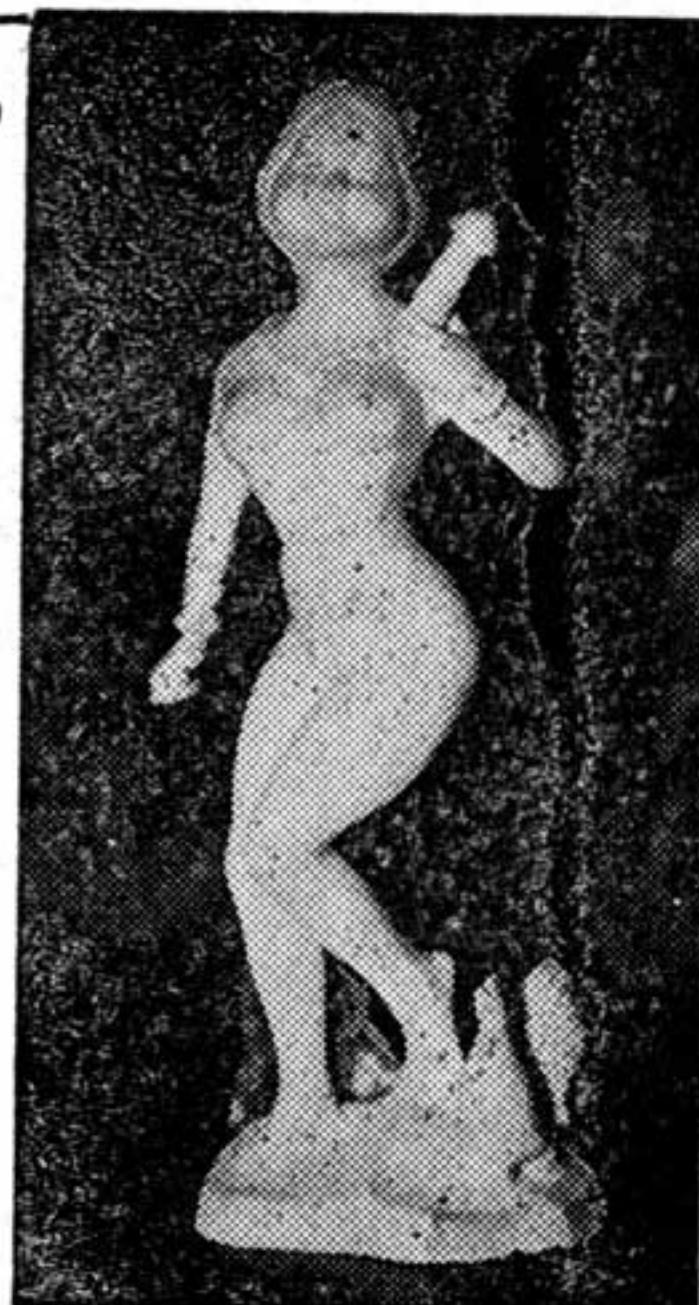
恋愛成就・願望なんでもOK也

乞御一報、カタログ無代進呈寿

進交研究所

東京都千代田区神田三崎町
2-20-4 電話 (332) 5687

特許意匠登録出願済
陶芸品・高さ29センチ
特別頒価1300円



につかんで、むりじいに右手の短刀を握らせる。彼女のやわらかな手の感触にかれは、しびれるほどの快感をおぼえた。

(しめた、うまく行くぞ！)

主税は内心ほっとした。いま、露の切腹に加虐的欲情を満喫すると、さらにそれとは異質の情感がしだいにこうしんしてくる。そこで小利口な主税は、恋の告白にかこつけて、ついでに新しい情欲をも満足させようと思ったのだ。だから、いまさら彼女と情死するつもりはみじんもない。

「そ、そこですか、有馬さま」

露が左手を主税の肩にかけ、前のめりにそろそろ短刀をかれのわき腹に近づけてくると、主税はもどかしげにせきたてる。

「ここじゃ、早くぐっと突いてくだされ」

主税が上半身をそらして目をつぶると、彼女の刀が浅く左わき腹を突く。

「――」

瞬間、キリで刺されるような痛みとともにむずがゆい甘美な快感が、主税の全身に広がる。ぬるぬると血潮がかれのはかまを染めた。

「さ、そこからずっと下へかけて――うん、あ、つ、つ、さ、刀を引き回して――」

露の刀が動くにつれて、いまこそ思いこが

れた、しかも瀕死の彼女に切ってもらっているのだと思えば、苦痛と快楽とがごっちゃになって主税を恍惚とさせる。露の切腹を見ているのとは違った趣の不思議な快い興奮だ。

刀がへそ下まできたとき、ついに露は黒髪を主税の肩にふれんばかりに近づけると。刀を引いてだらりと下げた。身を主税にあずけたまま、その耳もとできれぎれに、

「有馬さま、もういけません。露の手が動きません。目も、かすんで。あ、つ、つ……」

露のせつない断末魔のうめき声を聞くと、ますます主税の欲情はかきたてられてくる。

かれは左手で彼女の上半身を抱き締め、右手で彼女の短刀持った手を握ってぐっとふたたびへその下へ突き入れた。

「う、う、うーむ」

息もとまるような激痛のなかから、泉のようにながらがる快感は、すっかり主税の理性を盲目にした。はじめは浅く彼女に切らせて先刻とは逆に被虐的情感を味わうつもりだったのに、いつかそれでは満足できなくなった。そくそくと昂進する欲情は、いつか押えようにも押えられなくなったのだ。

主税は、右手にこめると、彼女の手にする刀を思いきり深く、おのが腹中に突き込みさ

ま、勢いよく右わき腹のはしまで引き回した。苦痛と快感に目の前が真っ暗になって、しだいに意識が薄れいく。ぼんやり目を閉じると、主税は上半身の中心を失って、彼女を抱きかかえたまま横倒しに倒れた。

「有馬さま、有馬さま――」

露のかすれ声に、おやと主税が目をあけると、彼女はいつかかれのかたわらから離れて前方に両手をつきながら、上半身をかううじてささえている。

続いて主税も起きようとしたが、苦痛のために自由がきかない。激しい欲情にまかせて、つい深く切りすぎたのだ。

と、そのとき、廊下にけたたましい足音がしたかと思うと、いきなり部屋の障子しよじが開いた。主君の吉保が、老女の藤野を従えて立っている。かれは主税をにらみつけさま、

「なんだ、そのさまは？ 藤野がなんだかおかしいというのできて見れば、案の定、この始末。言語同断、ふとどき千万なやつ、いで余が成敗してくれる」

吉保は大刀を抜いて肉薄する。それを倒れたまま、主税はうつろな目で見ている。露は毛氈の座に紅い花びらのように、うつ伏して動かない。

△ 女装者の告白手記 △

“ファイアンセ” 婚約者 との一日

江崎 恭子

洋服を新調して

この雑誌が「女装」に多くのページをさくようになってからというものの、数多くの告白が掲載され、私たち同好者を喜ばせてくれています。ただ残念なことには、昨年十二月号の平井由紀子さんの告白記をのぞくと、文章の裏づけとなるべき写真が添えられていないため、読者のなかのある人たちは、発表されたものはフィクションではなからうか、などと勘ぐっているというわさも耳にして、クラブのためにも気になっておりました。このたび、許婚者Sさんから上京をうながして来たのを機会に、あたしが初夏の東京で過ごし

たある一日の記録を、Sさんにとっていただいた写真を添えて発表させていただくことにいたしました。

(秋の挙式の前にぜひ一度上京してほしい) という手紙を受け取ったのは、あたしの故郷の山々の雪もすっかり消え、若葉のエメラルド・グリーンがひとときわあざやかさを増して



きた五月初旬のことでした。一年ほど前、「風俗奇譚」が縁結びの神と なって知り合ったSさんとおつきあいが進 んで婚約までしたものの、週二回ぐらいの割 合でかわす愛の手紙だけではもの足りなくも あり、不安にも思っていたやさきのことでしたので、喜んで上京することにいたしましたわけ なのです。

あたしの住んでいるのは、四方を山にかこ まれた長野県ですから、衣装やお化粧の流行 も、いくらマスコミの伝播力の強いこのごろ とはいえ、やはり、なんとなくおくれており ますので、上京すると決めてからの気のつか いかたは、ひとしおでした。東京の女の人た ちに負けたくない、Sさんにも、あたし自身 にも恥ずかしい思いはさせたくない、そんな 思いでいっぱいでした。

初夏のタウン・ウェア特集という題をつけ た最新の色とスタイルのコレクションを満載したモード雑誌をあれ やこれやとひっきりかえしたあげ く、薄茶に白のチェックのはいっ たアンサブルを一着、大いそぎで仕立てさせ、ハンドバッグとパ ンプスも、ドレスにマッチするク

クリーム色のを新しく買いととのえました。ネックレスは清純な感じのパールにし、洋髪のかつらも、ごく薄くではありますけれども茶色にブリーチしました。

それやこれやで手間どって、列車に乗りこんだのは五月十日の夜でした。

それはだれゆえ

どんな場合でも、Sさんの前にあたしの男姿は見せないこと、というかたい約束がとりかわしてあるのですから、上京したら、帰る

まで女として過

ごさねばなりま

せん。そのした

くをどこでしよ

うか、同好のU

さんのお宅にし

ようかしら、そ

れとも会長(富

貴クラブの)に

おすがりしよう

かしら、とつお

いつ思案したあげく、あたしは小いのさんのお家に行くことにしました。

小いのさんは、プロの男娼ですけれど、あ



木かげで憩う江崎恭子さん

たしとは姉妹^{きょうだい}みたい^{きょうだい}に親しくしている仲なので、もちろん、あたしは彼女とちがって街頭になど立ったこと

はありませんけれど……。

「よくきたわね。ゆっくり泊まっていらっし

やいな」



にこにこしながら迎えてくれた小いのさんにわけを話すと、「まあ、なんてロマンチックな話なんでしょう。あたしにも、あなたみたいな時代もあったけれど、もう遠い昔のことになっちゃったわ。けど、昼間からのランデブーはなかなか大変よ。よほど念入りにお化粧しないと、万一バレたらひどいショックを受けて、二度と外出する自信など持てなくなるから」

そう言いながらも彼女は、わがことのように喜んでくれました。

明けて十一日、わざわざ朝ぶろをたててくれた小いのさんは、双肌^{ふはだ}ぬぎでお化粧にとりかかったあたしのそばにつききりでてつだってくれます。

「アイ・シャドウがちょっと濃すぎるわよ」

「あら、そうかしら」

「そうよ、それともあなた、彼氏のことはあきらめて、あたしといっしょにお客さんをキヤッチする？」

「あら失礼ネ。これでもあたし、まじめな娘のつもりよ。このからだを魂をあげる人はた

ったひとりだけ。純潔は守るつもりよ」
「それもだれゆえ、ぬしさんゆえか。朝っぱらからごちそうさま」

こんな会話をかわしながら、二時間はたっぷりかけてしたくを済ませたあたしは、家を出ると、すぐタクシーを呼びとめ、外苑に急ぎました。

写真ではお互いに知っていても、初めてお会いするのに迷わないかしらと、ちょっと気がかりでしたが、案ずるより生むがやすしのコトワザどおり、Sさんは、すぐあたしをみつけたのでした。

忘れたT字帯

「ごめんなさい。おそくなってしまうて」

「いやいや、昼間出てくるのは気疲れがするでしょう。しかし、写真でみるより一段ときれいですね。ま、とにかくベンチにでも腰をおろしましう」

Sさんの半歩うしろにしたがって、あたしは、なるべくしとやかに心がけ

ながら歩をはこびます。

ところが、ベンチはどこもかしこも人でいっぱいでした。午前中だというのに、あたしたちのようなアベックも幾組かみられます。「どうもおちつかないなあ、絵画館の裏に行ってみましょうか」

Sさんが誘った場所は、ちょうど人影が絶えて、整然としきつめられた小砂利に初夏の強い日の光がおどっています。

あたしたちは満開のツツジの花の前にすわ

りました。Sさんは胸のハンカチを敷いてくださいました。そ

ひとときのくつろぎ
江崎 恭子さん

んな心づかいを受けると、(ああ、あたしは女なのだ)と身内がぞくぞくするほどうれしくなるのです。

Sさんは、周囲にちらりと目を走らせてから、あたしの額、まぶた、えり足と、次々に軽くくちびるをふれてゆきます。

あたしも次第に胸が高まってきて、かれのくちづけを受けようと目をとじた時、かれは手荒くスカートのジッパーをはずすと、パンティーの上から、いきなりあたしの男性のシンボルをぎゅっと握りしめ、怒ったような声で言いました。

「恭子さん、あなた、まだぼくの言いつけを百パーセント守っていないね」

あたしはハッと身をかたくしました。かれからの結婚申し込みのなかに(結婚後、妻となつてからは許すが、娘の間は、性の興奮状態を男のわたしに気づかれるようなはしたなさは認めない)と書かれてあったのを思い出したからです。

「ごめんなさい。お約束にそむいちゃって」

とわびますと、

「わかったらいいんだよ。あそこのトイレの中で、しまっていっちゃ



「い」と案外やさしい声で、握った手を放してくれました。あたしは、ハンドバッグの中から、小い、さんの家を出る時着け忘れたT字帯を、かれの目につかないようそっと取り出すと、示された木陰のトイレに身をかくしました。

千駄谷の旅館へ

トイレから出るとSさんはカメラをとり出して、あたしのポートレート^とを撮り出しました。紅や白のツツジをバックにしたもの、絵画館前の池のほとり、そして外苑の外側の公園アパートの前——フ

アインダーをのぞきながら、

「あなたも秋には、こうしてぼくのアパートから買い物に出かける若奥様になるんだね」とからかうような口調でいうかれに、あたしの胸はふたたびたかなります。

こうして一時間余りもぶらぶらした後、都電で六本木に出、Gベーカーリーでお昼の食事をとりました。

食後のお茶をのんでいるとき、Sさんはちよっと表情をひきしめて、
「恭子さん、あなたはきょうミスを一つやっ



たね。かねての約束どおりお仕置き^しをするから覚悟してほしいね」

と切り出しました。かれの要求を拒んだ時または言いつけを忘れたりした時は、どんなお仕置きを受けても苦情は言わないという約束がかわしてあるのです。

あたしは黙ってうなずきました。かれはあたしがT字帯をしめ忘れて、象徴が隆起したことを指しているのです。

六本木から車をひろうと、Sさんは千駄谷へと走らせます。あたしは、少しの不安と大

きな好奇心でいっぱいでした。今までで文通は重ねていても、会うのは初めてのこととて、お仕置きが何を意味するか、かいく見当がつきませんもの。

ふたりは、C荘というホテルの玄関にはいりました。不思議なことに、女中さんに正体を見破られはしないかという不安は全くおこらず、ただ女として、こうした場所に初めてきた羞恥心だけが心を占めていました。

はじめに浣腸を

入浴のしたくを済ませて女中さんが下がってしまふと、かれは、ショルダーバッグから手のひらにかくれるほど小さな物を取り出すと、

「トイレにはいり、パンティーをおろしてしやがむんだ」

と、今までとうってかわったおごそかな声で命令しました。いよいよお仕置きが始まるのです。

いわれるとおりにトイレにしゃがんだあたしの背後から、

「お仕置きの前に浣腸をしておこう。十分ほどがまんしなければいけない」

と言います。あたしは、おや、と思いました。あたしのような女が妻になると、夫が本当の女性器のかわりに、あたしのどの部分を代用にするかぐらいのことは、未婚の娘であるあたしでも知っていましたから。もしかしたら、気がかわってお仕置きを口実に、あたしの最後のものまで求めるのかしら、とも思えたからです。

しかし、かれのほうから、挙式前の純潔を守ろう、と言い出したのに、と思いかえした時、あたしの気持ちをみすかしたように、「きょう、あなたのからだをほしがってるのじゃあないんだよ。あくまでお仕置きなんだから、さあ、からだをもちあげて」

あたしは観念して、かれのいうままの姿勢をとりますと、細い棒のようなものが、あたしの肉体にはいってゆきます。それは、少しも痛くなく、かえって快い刺激が、あたしの性をよびおこします。

つづいて脱脂綿があてがわれ、「自分でおさえて、できるだけがまんするのだよ」

そしてかれは、とけいをみつめながら、一

分、二分とじらすように数えるのです。

体内をかけめぐる激しい便意に、ついにたまりかねて、五分ぐらいで手を放してしまいました。

「ダメだなあ、まあはじめてだからしかたがない。さあ、入浴してきれいに洗って出てい

らっしゃい」

おしろいから上がるといつ用意したものか、かれは、練りおしろいと紅筆を用意していました。

「裸のままでいいからそこに寝て、腰にまくらをあてがって、両足を思いきりひらくんだよ」

言われるままにあた

ニューフォトのセクシードレス

お待ちかねの新製品発表!

ビキニパンティと対のブラジャー4種、パタフライ
アミタイツ、コルセット、花ガーター等

(サービスとして1,000円以上お買上げの方に幸運のマスコットハンカチーフ進呈)

(例一) 左写真

No. 4 マンハント型

和服とチャイナ服との良さを
取り入れたデザイン。
ウェストまである裾割れから
パンティがのぞく。

生地…サテン花模様
ナイロンパンティ付

¥ 2,300 ㊦ 100

(例二) 右写真

ビキニ A

グットくるデザイン。前面三
角形にカットされたレース付
パンティと対のブラジャー。

生地…サテン赤水玉模様

¥ 1,000 ㊦ 60



(30円切手同封、雑誌名記入、申込みあれば直ちに各種ドレス、下着類のカラー写真入りカタログ送呈します)

東京都杉並区大宮前 6-412

ニューフォト社洋品部

しが、恥ずかしい姿勢をとると、かれは、板ハケと牡丹ハケをつかって、たくみに内股からアヌスのあたりまで真っ白に塗りあげ、そこからアヌスの周囲までを紅でいろどるのです。

「さあ、あなたは今からめんどりになるのだ」「めんどり?」

「そう、これを、キミは、自分の力で生みおとすわけさ」

かれは、小さな卵を二コ、あたしの目の前にさし出しました。

「本当の鶏卵じゃ痛いと思って、ウズラの卵にしたんだよ。きちょうと痛いかもしれないけれど、そこがお仕置きだし、初夜の練習にもなるんだから、がまんしなくちゃあ、ダメだよ」

あたしには、はじめて、かれの好みも、また、かれがはじめからこの計画をすすめていたことも、わかりました。もしあたしがT字帯をしめ忘れていなくとも、かれは別の口実をもうけて、この計画を実行したにちがいないりません。

でも、それは、今のあたしにとって、ひどくうれしいのが、自分でも不思議なくらいです。

古くから、日本女性の美德とされた忍従の精神が、あたしという仮の女の中にも生きているのでしょうか。

それにしても、小さな卵とはいえ、なかなか痛いものでした。

思わず下腹に力がこもると、せっかく肝心の卵が、押し出されてしまい、そのたびに、かれは、いやというほど、内股や横腹をつねるのです。

それでも、やっと二コの卵がおさまってしまふと、なんだか愛の結晶が宿ったような気持ちにすらなるのでした。

卵を生む痛さ

「さあ、今度はうつぶせになって、なきながら卵をうみおとしてごらん」

いいつけどおり、あたしはふとんに腹ばいになって、ココココと小さくなきながら、いっしょうけんめいに卵を産みおとそうとしました。

かれは、その光景を、あれこれカメラにおさめながら、

「すばらしいよ、キミのからだから、白い卵がのぞいたりひっこんだりするのは、ちょっとした性の神秘にみえる」

そういうかれの目は、興奮に輝いていました。

卵が無事産みおとされますと、Sさんは、いきなりあたしをしっかりと抱いて、

「かわいいボクのめんどりさん。いつまでも愛してるよ」

と言いながら、からだじゅうにキスの雨をふらせました。

その夜、あたしは、ぐったり疲れたからだを、ピンクのネグリジェに着かえて、小いさんの家のふとんに横たえていました。からだはまだ少し痛みはしましたが、あたしはすっかり満ち足りていました。

なぜって、かれとの結婚生活が、こうした異常な刺激を伴って、すばらしいものになることがわかってきたからです。

誌上でおめにかけるのは、そのおり外苑で写したものです。

この手記をよんでお友だちになってくださるおねえさまがた、どうかおたよりくださいませ。

あたしの住所は、クラブに登録してございますから、どしどしおたよりのほどおねがいします。

(筆者は富貴クラブ会員)

女装愛好 の部屋



★あたしの自慢話

先日、あたしどもの市の春祭りがありました。そのとき仮装行列をすることになり、あたしの職場からも出ることになりました。

“人の歩み”というテーマで、いろいろな職業を表わそうということになり、クジで決めた結果、あたしは幸運にも看護婦の役に当たりました。うれしくてなりません。

そこで、仮装行列を口実に、下着類なども堂々と買いそろえ夢にも願いつづけていた美容院にも白昼から出かけ、お化粧、かつら合わせと、なに一つ気が

ねなくやれました。そして、完成した女になったとき、あたしは喜びにふるえ、ほんとうに天にもものぼる心地でした。

今までは、いつも夜ばかり外出していたのですが、それとはまた気分も違い、白昼大ぜいの人に見られながら歩いた心地はまさに、地上最高の時、という思いでした。

職場の人や町の人たちが、この町に、こんな美しい看護婦がいたかしら、などと言ってくれましたが、そのことばの、なんと耳に快かったこと。

本当をいいますと、あたし自身でもほれぼれとしたくらいです。当然だったでしょう。

ホホホ、ごめんあそばせ。あたしのところは、別府に近いので、お姉さまがたで、別府温泉においでになる機会がおありでしたら、ご指導をうけ、かわいがっていただければと思います。

また、別府近郊の同好のお姉さまがた、おつきあいしてくださるかたはございませんでしょうか。

二カ月に一度ぐらいがいいのですが、どなたかよろしくお願いします。 八井上清子V

★坂東秀美様へ

坂東秀美様、あなたの体験記を読んで以来、あたしも全身におしろいを塗られ、縛られて、女の魂を入れられたいと、日夜願うようになりました。しかし、あなた様との連絡の方法もみづからぬままにあきらめておりました。七月号のこの欄であなたが青柳みどり様に呼びかけていらっしゃるのを知って、矢もたてもたまらず、このおたよりを書きました。

あたしも日本髪のかつら、その他いっさいの女装用品を持つ

ております。どうか、あたしを妹としておつきあいいただけたらと存じます。どんなおいいつけでも守って、女の魂を完全にいれていただきとうござい

す。 大田区大森一郵便局止、富貴クラブ内でおたよりくだされば、連絡つき次第必ず写真同封お返事申し上げます。

八園田節子V

★至急、朽木様へ

朽木ひろ子様、あなたのご主人（奥様のこと）に、あたしとあなたの交際を気づかれてしまし、連絡がきれるはめになってしまいました。どうか、クラブあてにおたよりくださるよう、心からお待ち申しております。 八平井由紀子V

★女装の手引きを

わたしは女装マニアで、とくに芸妓の日本髪スタイルが好きです。ですから、いろいろな雑誌にのっている、その種の写真や記事などを集めています。『風俗奇譚』五月号にのっている“ムチと皮紐の一夜”など、

読んでいますと、ほんとうに自分かという気さえます。

ですから、風俗資料刊行会でも、代理部で、緊縛ア・ラ・カルトなどという写真を発売しているくらいですから、日本髪姿の女装写真をぜひ発表してください。さるようお願いいたします。それを参考にして、着物や帯を作って楽しみたいと思います。

それも、着物や帯、長じゅばんや肌着まで、詳細に紹介して発表してくださいと、全国の女装マニアは、どんなにか喜ぶことでしょう。

また、『画報風俗奇譚』には、そういった女装の写真をたくさん掲載してくださいよう、お願いします。それも、着色ですと色や柄もよくわかるので、ぜひお考えください。たのしみにして、待っております。

△岐阜県のあるマニアV

★嫁ぎたし

嫁ぎたし、三十二歳、BG、女装用品和洋とも完備、月二、三回妻として奉仕したし。少々マゾ傾向あり、クラブあて返待

つ。

△K・A子V

★ご指導をお願いします

クラブのお姉さまがた、あたくしもお仲間に入れてくださいませ。

あたくしは現在、某ホテルのボーイをしております。十九歳のものです。まだ女装用品もほとんどなく、したがって、経験も貧弱ですが、お姉さまがたのご指導で、一人まえの女性になれる日を一日も早く、心から待ちのぞんでおります。

△村瀬かおるV

★女装したいのですが

突然のおたよりを、なにとぞおゆるしくださいます。だいぶ前ですが、『風俗奇譚』誌上で、『富貴クラブ』なる貴会のあることを知り、うれしく思いました。

あたくしも、女装にあこがれをもつひとりですが、あたくしは、まだ一度も女装したことがありません。一度でもよいから女装してみ、写真をとりたいと思います。

しかし、あたくしは、女装す

るとしても、秘密にしなければなりません。なぜなれば、あたくしの周囲には、これを理解してくれる友も、家族もないのです。

それにあたくしの職業は、労働組合を結成することのできない公務員といえ、おわかりでしょう。しかも、この職業で、人に幹部と言われるがゆえに、女装をしたいとすら人に言うことのできないやみをもっております。

「富貴クラブ」のなかには、あたくしと同じような悩みをおもちのかたもおられるので、意を強くしたような次第ですが、あたくしはすでに四十歳、妻も子供もあると言え、バカなやつとお笑いになるでしょうが、「富貴クラブ」の諸姉のなかで、どなたか、あたくしに女装さしてくれませんか。そして、ともにその気持ちを語りたいと思います。

それから、あたくしのような者でも、「富貴クラブ」の会員にしたいだけますかしら。もしもしていただけたならば、会費と会則をお知らせくださるな

らば幸いです。

△野村真代子V

★座談会を開きます

女装希望者の座談会開催につ

いて

富貴クラブ会員(W型のみ)と、新規入会希望者(W型に限る)の座談会を開催いたします。と思いますので、きたる七月二十日まで、「大森一郵便局止富貴クラブあて」お申し越しください。

なお、諸氏の秘密保持のためトク名で出席ください。ただし、席上で会長が、新旧会員のご紹介をいたしますので、会長の手もとにだけは、本名、年齢、職業、住所などを明記してお知らせください。

また、当日は、女装用具ご持参のうえ、それぞれの技術を披露してください。初心者には、平井氏その他がご指導いたします。

申し込みは、返信用の切手同封で願います。

集合場所、日時などは、おって、極秘な方法でご連絡いたします。

小 連
説 載

悦虐の彷徨

④

髪責めの部屋

青 山 三 枝 吉

田 上 恵 子 ・ え

うしろ手に縛った女をイスにかけさせてくくりつけると、乱れた髪を一束にして、ナイロン靴下でゆわき、その一端をイスの背に結んだ。うわ向きになった彼女の唇にむりやり押しこんだ水差しが、たちまち腹部をふくれあがらせる。



1

私の生活は一変した。私はサラリーマンになっていた。

ミューズ毛織という織物会社の宣伝課勤務である。

西条という若い宣伝課長が、私とは遠い親せきにあたり、大学での先輩でもあった。西条は私より五歳年上で、少年時代には家が近いせいもあって、いっしょによく遊んだ。成人してから、妙にウマがあって、年に二、三度は酒を飲みながら人生を語りあったりした。

私は西条に手紙を書き、現在の窮境をめんめんと訴えた。返事はすぐに来た。西条はこころよく、私を救ってくれた。私は彼の下で働くことになった。

ミューズ毛織の本社は、東海地方の中都市にある。会社の規模としては、戦後派の二流どころだった。

私は怠惰な浮き草ぐらしから、きっぱりと足を洗って、その都市に赴任した。自分でも不思議に思うくらいに、素直にこの新しい環境に

とけこむことができたのだった。

もっとも、宣伝課という仕事には、それまでの私の生活と、たぶんに共通的な性格があった。

西条は文学青年的な風貌をいまだに保ち、俗に屈せず新しいセンスの持ち主で、重役たちからの信任も厚い、気鋭の課長だった。私はこの課長の下でよく働いた。

地方都市といっても、近く地下鉄工事も着工しようという近代都市で、将来性のある中企業が多く、町には活気があふれている。

私の仕事は、問屋小売店に配布するカタログと、一般消費者相手の雑誌の編集だった。きらいな仕事ではなく、私は積極的に編集という技術を身につけた。

旅の一座の娘形のあやめや、紅也や、女漫才師のさくらやたんぽぼたちの、安おしろいにただれた体臭も、急速に記憶からうすれ、充実した健康な日々が過ぎた。

そしてこのころ、私の前に新しい女性があらわれた。三沢京美という、ファッションモデルだった。

前号までのあらすじ

私(松平)は、大学を出てもサラリーマンになることがいやだった。といって芸術を志すほどの才能もない。そこで、偶然目にふれた三行広告を見て、花村駒代一座という旅まわりの女剣劇一座の雑用係に雇われた。

娘形の花村あやめは、座長の駒代の実の妹だが、私は、あやめの身内にマゾヒズムがひそんでいることに気づいた。舞台でも縛られる役をやるときなど、もつと強く縛ってくれとせがむくらいだ。

秋田県のある小都市で興行をうったとき、駒代が興行師によばれて一夜明けたとき、あやめは、ある旅館へ私を誘った。そして、用意してきた縄を取り出して縛ってくれと言いつ出した。緊縛の中であやめは、陶醉し、愉悅して、私と結ばれた。

そんなところへ阪東紅也という十七歳の少年が新しく入座した。座長の駒代の旧友の息子だということだが、踊りがうまかった。

ある日、私は、芝居がハネて旅館へ帰ってから忘れ物に気づいて楽屋に戻った。

た。そしてそこで、駒代が紅也を責めている姿を見てしまった。私のうしろにあやめもいた。

それが刺激となって、私は、紅也連れ出し、女装の彼を縛りあげ、鞭でさいなんだ。あとをつけてきたあやめが、その場にとび出して、嫉妬の刃を私の顔にふるった。

花村一座にいにくくなった私は、東京へ舞い戻って、千葉県に近い場末の芸人アパート共楽荘にころがりこむ。

その女漫才春風さくら、たんぽぽに拾われて、さくらの若い「ツバメ」になったのだ。

その隣室に浪曲家東家不二丸が住んでいたが、彼は夜ごと女房を縛って楽しむサド趣味の人物だった。

私は、その「奇妙な情事」をのぞき見していたのだが、ある日、同じアパートに住む少女歌手南条マキを縛りあげてさいなむ現場を目撃した。しかも、マキが海老責めにされて尻を叩かれる光景が、私の嗜虐性を堪能させた。

だが、やがて、芸人たちは地方の夏祭りに買われて行き、私はまた雇い主を失う結果となった。

ルクラブへ電話をかけた。

三沢京美はモデルとしては小柄で、大きな瞳のエキゾチックなふんい気をもつ娘だった。

ところが、その日本人ばなれした容貌が地方都市のスポンサーからはかえって敬遠されていて、ミューズ毛織の重役たちも、彼女を使うことをよろこばなかった。事実、セーターのモデルとしても、彼女はあまりよくなかった。髪が長すぎるのだ。ロングヘアは、スポーティなセーターには似合わない。

七月のある土曜日、私は津村というカメラマンといっしょに、京美をつれて、市から郊外電車で一時間ほどの海岸へ出張した。秋ものセーターの宣伝写真をとるためだった。

京美ではなく、ほかのモデルを使いたかったのだが、あいにくカメラ会社主催の撮影会の先約があって、マシなのはみんなそっちのほうへ取られていたのだった。

2

撮影は順調に終わった。海や砂丘や松林をバックに、私たちはカラーフィルムを数本費やした。

「涼しいわねえ。ここにこうしていると、もうあんなほこりっぽい町へかえるの、いやになるわ」

三沢京美が目をはそめていった。

私と京美は、海岸を見おろす旅館の二階のテラスにむかいあっていた。潮風が彼女の長い髪の毛をなびかせていた。

「ほんとだ。もうめんどくさい撮影もすませちゃったしな。せめて

織物会社の宣伝課だから、モデルたちとの接触は多い。ミューズ毛織がつくる各種メリヤス製品のなかで、ニューデザインのセーターには、とくに力をいれていた。

新製品の試作品をモデルにさせて写真をとり、それが宣伝の基調になる。流行ものは柄と色とデザインが勝負なので、これは重要な仕事だった。

宣伝課直属のカメラマンはいるが、モデルはそのつど、社外のモデ

二、三日、こんな静かな場所でのんびりしたいな」

私はなにげなく、あいつちをうった。

カメラマンの津村は、こんどは仕事を離れて風景だけをうつすんだ
 といって、外に出ていた。

「きょう、土曜日ね」

海をながめながら、京美がつぶやいた。鼻すじのどがった、彫りの
 ふかい横顔を私に見せている。ひどく個性的で、新鮮な美しさだっ
 た。私は、ふと見惚れた。

それまで京美は、私の目に商品の一部だった。いまはひとりの女性
 にもどっている。

「ああ、あしたは日曜だね」

私はこたえた。

「あしたの夕方まで、ここにいたいわ、あたくし」

海を見つめたまま、表情をうごかさずに京美はいった。

そのことばの、意外なひびきに気づき、私はうろたえた。うろたえ
 はすぐに軽い胸のときめきに変わった。これは誘惑だな、と感じたの
 だ。

私は沈黙した。冗談だったらば恥をかく。

京美の横顔は、白くつめたく澄んでいた。よくブラッシングされた
 黒い髪が、馬のたてがみのように風になびいている。その表情のわざ
 とらしいつめたさに、私の直感、かえって京美の誘惑が本心のもの
 であることをさとした。

モデルに「手をつける」ことは、私の立場としてあまりほめられな
 い。

だが、私は多感だった。多感などというよりも若かった。ためらい

と自省^{じせい}とが、寸時のあいだ交錯した。が、けっきょく、この美貌を征
 服したい、という欲望に負けた。

私と京美は、狡猾^{うそ}なしばいをうって、カメラマンを先に帰した。
 私は彼女とふたりだけの夜をすごしたのだった。

京美のからだは新しい魚のようにぴっちり肉がしまり、職業が
 ら、香水でみがかれたように洗練されていた。

これまで私の接した女たちは「旅の垢^{あか}」といったようなよこれを身
 につけていた。安^{やす}おしろいのおいが肌^{はだ}にしみついた女ばかりだっ
 た。

私は京美のからだを、高級なおもちゃのように扱った。

そのことのさいちゅうに、

「ねえ……」京美は私の耳にささやいた。

「あたくし、おたくの会社で、もっと使っていただきたいの」
 あまさをよそおっていたが、打算を秘めた冷静な声音^{こゝろ}だった。

「ああ」

私はうなずき、やっぱりそうかと思った。

京美はもっと仕事が欲しいのだ。今夜はそのための犠牲^{ゆづり}だったの
 だ。私は苦笑した。予期しないことではなかった。どうせそんなこ
 ろだろうとは思っていた。

しかし、この美貌を武器に生きる女は、おれは優越^{ゆうえつ}の位置にあるの
 だ、と認識したとき、私は逆に愛情めいたものを京美に抱いた。

かわいそうに、それほどまでに仕事、つまり金が欲しいのか。と
 いうあわれみの情だった。この感情は、一種のサディズム心理につな
 がるものかも知れなかった。

私はこの夜、新しい自分の嗜好^{しこう}を発見した。それは京美のロングヘ

アだった。

私の胸に女の顔が寄せられ、私の手が自然に女の頭部を抱いたとき、みどりの黒髪、という大時代な形容を思わず私は胸につぶやいた。

人工的なウェーブを全然ほどこしていない、すなおなしっとりした艶としめりけをおびた豊かな量の毛髪だった。

私はその黒髪を愛撫しながら、異様な快感を味わったのだ。両手でぎゅっと握りしめたとき、京美は痛いというめき、私はあきらかに加虐性の興奮をおぼえた。この種の興奮から、私はしばらく遠ざかっていたのだった。

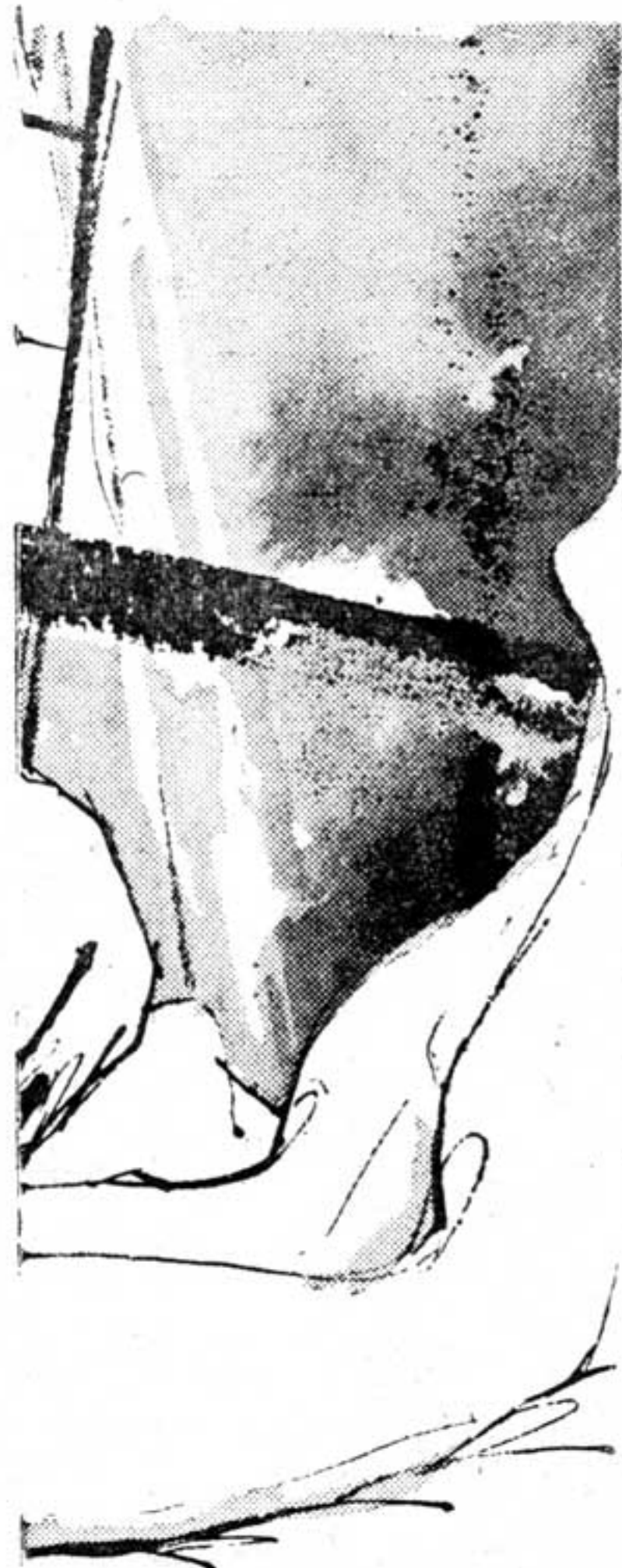
この女を縛りたい！

私は特異な願望をよみがえらせた。

この髪をいじめたい！

魔物のうごめきに似て、黒くしっとり息づく髪に、私はあらたな刺激をうけた。

しかし、京美にはマゾヒズムの性はなかった。私にはそれがすぐわ



かる。マゾヒズムをもたない女を、はじめから縛るわけにはいかない。うっぽつとわきあがる欲求を、私は苦しく耐えた。

3

その後、私は仕事のうえで、次第に多く京美を使いだした。

彼女との約束を守った、というだけではなく、彼女の個性的な美しさを、会社の重役たちがようやく認めだしたからであった。

私もまた、セーターをうまく着こなすテクニックを、彼女といっしょになって熱心に研究した。

ふたりだけの夜は、それから数度つづけられた。

京美は市内のアパートにひとり住んでいた。私は会社の社員アパートにいたので、彼女の来訪は絶対にまずかった。つまり、私たちの関係は極秘だった。

私の場合は「モデルに手をつけた」といううしろめたさがあり、このことが知れると、上役たちから妙な目でみられるおそれがあった。

彼女の場合は、その職業がら、特定の男の存在はなにかと不利益なものだった。私たちは賢明にずるがしこく計算し、行動した。京美は利口な女だった。

市内の旅館は、かえってその玄関をくぐるまでに人目につく危険がある。東京のようにめちゃくちゃにだだっぴろく、猥雑な迷彩が氾濫する町とはちがうのだ。

けっきょく、もっとも安全なのは、彼女のアパートだった。せまいながらも、いかにもモデルの部屋らしい、しゃれた家具と装飾と、なまめかしい脂粉に満ちた洋室である。

私が京美を縛ったのは、七度めの夜だったか、それとも八度めだったか。
マゾヒズムのない女を縛るには、まず女を自分に惚れさせることで



ある。惚れた男になら、女はなにをされてもいいとわない。私はこんなジゴロめいた信条を、いつのまにか習得していた。
「へんなことをするのね。なんだかこわいわ」

京美はかすかな動揺と抵抗をみせた。

私はラジオのスイッチを押し、軽快なジャズにダイヤルを合わせた。

めんどろな説明や弁解はせずに、びしびしと思いどおりに行動をつづけた。私にはこの女に「縄の味」を教えこむ自信があった。縄は私が用意したものだった。

うしろ手に縛りあげると、抱きあげてベッドの上に横たえた。ブラジャーとブリーフだけをのこし、あとはすべて脱ぎさった京美の肌は、縄をまとった瞬間から、艶然と光沢を増した。むろん、それは私だけの目にみえた現象だったろう。

漆黒の髪も、濡れ羽色の光を増してうねった。抵抗を失った女の肉体は、こうもみごとに変貌するものだろうか。

やわ肌の白と、髪の色と、その中間を緊縛する縄の色のあやしい調和の美に、私は息をのみ茫然となった。

むごたらしさのなかに、美を感じるとは、なんという不思議な性癖なのか。

うしろ手に縛られ、その不自由に苦しんだ肉体をうごめかす京美の姿態を前に、私はなんの手だしもせず、かつてない新鮮な恍惚境に没入していた。

すばらしい！

この新鮮な魅力は、マゾヒズムを知らない女の無意識な反応から、にじみでくるものであった。

私はうなり、感動した。

ラジオのジャズは、あかるい無邪気な演奏をつづけていた。私の耳は、はるか遠くにそれをきいていた。

音楽をたのしむゆとりなどなかった。私の肉体のどこかに、次第に血液が凝結し、熱くはげしくふくらんでいく。

巨大な白いはだか虫のような京美のもだえ。私は、むさぼるように觀賞をつづけた。

4

「痛いわ。縄のあとが肌にのこるわ。どうしてくれるの、困るわあたし」

京美は不安と怒りのこもった声があげた。

モデルにとって、それはたしかに困ることだ。縄はなんの容赦もなく、時間の経過と同時に、じわじわと素肌^{すはだ}にくいこんでいくのだった。

「風呂^{ふろ}にはいってマッサージすれば、すぐ消えるよ」

「もう、ほどいてよ、苦しいわ」

私はその返事も惜しく、縄に責めつけられた京美を飽かずにながめる。ベッドに横臥したまま、京美の白い肩や胴や腰がさらに大きくくねりはじめた。

からだのくねりとともに、髪の毛も黒い波のようにうごめく。

私は耐えきれなくなつて、ベッドのわきにひざまずいた。

「京美！」

私は女の豊富な髪のかなかに、狂おしく顔を埋めた。口をあけ、髪

数本をフツフツと齒にかんだ。あまずつぱい芳香が私の鼻孔をひたし、私は陶醉した。

私は唾液^{だえき}をもらし、女の髪をぬらした。ぐちゃぐちゃにしてからだ。

「京美、京美！」

私はうめいた。女はもがいた。私の愛撫からのがれようとけんめいに首をふり、肩をゆすった。だが逃げられるはずはない。

「やめて、髪がよごれるわ」

京美は泣き声をあげた。その声のなかには私への嫌悪^{けんお}があった。私は、カッとなった。

「髪がよごれる」そのひと言が私を傷つけ、髪に対する私のフェチシズムを逆転させた。

執着の愛撫から、加虐の愛撫に激変したのだ。

私は右手の五本の指をひろげ、豊かな髪の波を強くつかんだ。

「痛い」

京美は悲鳴をあげた。私はなおも、ねじるようにして指に力をこめた。京美の眉^{まゆ}と目が、髪にひっぱられて吊りあがった。私に快感が襲った。

片手で髪をつかんだまま、京美のからだを抱き起こした。

ベッドからおろして、こんどはイスに縛りつけることを考えついたのだった。女だけを寝かせておくなんて不公平である。

あまり上等ではない普通の木のイスが一脚あった。

京美の尻をそこへすわらせた。イスの背へ両腕をねじまわして、しっかりと縛りつける。乳ぶさのふくらみを避けて、肩と腹に縄をかけた。

部屋の片すみに脱ぎすてた女のナイロン靴下が、私の目にはいった。私はその長い靴下の一方の端で、女の乱れた髪を一束にくくりつけた。そして、もう一方の端を、イスの背に結びつけた。ナイロンの編み目は強靱でよくのびる。

つまり、よごれた靴下で神聖な美しい髪のを縛ったのだ。サディズムの効果がここにあった。「髪責め」だった。

縛られた髪を背後にひっぱられて、京美の顔はうわむきになった。赤い唇がひきつる。

「もう、やめて」

突きだした顎をふるわせて、京美はあえいだ。のどぼとけの白いまゐるみが、なにかの小動物のように愛らしい。イスを背にぎりぎりといましめられた裸身は、あわれにも愛らしいのだ。

「イス責め」という、どこかできいたことばを私はふと思いました。私は京美の両足首をひらかせてイスの脚にくくりつけた。

「恥ずかしいわ」

京美は胸をはずませた。だが、私のこんな行動に、彼女がキラリと好奇の表情をみせたのを、私はみのがさなかった。

「ブラジャーもブリーフも、こうしてきちんとつけているのに、なにが恥ずかしいんだい。第一、きみとぼくとはそんな間柄でもないだらう」

ゆっくりと微笑をうかべていった。いい終わると同時に、そのブラジャーに手をかけ、さっと取りのぞいた。

「ひゃあ。いやよ！」

黄色い悲鳴は、ジャズに消された。身をかがめて胸をかくそうとしたが、それはむろんムダなことだった。

京美は異常なほど乳ぶさをたいせつにしているのである。私の手にも触れさせなかった。商売モノ、という以上に堅く守っていた。このチャンスに、私はもったいぶった乳ぶさを、ぞんぶんになぶってやろうと思った。

「ああ」

私はしかし、まず感嘆の息を吐いた。神秘的なほどに、美しい色とまるみをもった乳ぶさだった。一点のシミも傷もなく、たるみもなく、こんもりと盛りあがったふくらみは、すぐれた芸術品を思わせた。透きとおるような白さで、青い静脈が浮いてみえる。

うす紅色の乳首が、その形よい丘陵の頂点に、ぼちちりとがっていった。

私は、ふいに京美を憎んだ。

京美は、口では私を好きだといい、すべてを投げだしてしまったという。

しかし私はこの女の半分も知ってはいないのだった。私はこの利口な女に、ほんろうされていたのではないか。

くそ！

私はこの美しい乳ぶさをつねり、ねじりまわし、かみついて、女の唇が醜くゆがむほどの苦痛を与えたい衝動にかられた。

よし、徹底的な屈辱を与え、羞恥に泣きわめかせてやろう。

私は残忍な決心をした。

だが、モデルにとって、からだは唯一の資本である。肌を傷つけることはできない。鞭打ちなんて、とんでもないことである。私は考えた。

「暑いわ、のどがかわいたわ。お水ちょうだい」

京美がそういったとき、私はやっとひとつの方法を思いついた。そして、ひそかにほくそえんだ。

「お水ちょうだいよ、ねえ」

京美はあまったれた声をだした。

5

私は室内の一隅にこじんまりとついているキッチンへいき、ガラスの水差しに、水をいっぱい入れた。

その水差しの口を、京美の鼻さきへもっていった。

「さあ、飲めよ」

「いやよ、コップについてちょうだい」

京美は顔をそむけた。

「これで飲むんだ」

私は水差しの口を、むりやり京美の唇へさしこんだ。かまわずに水をそそぎこんだ。

こぼれるのをふせぐために、彼女はあわてて水を飲みはじめた。

すぐに、もういいというように首をふる。だが私は手を止めずに、

女の口へ水をそそぎこんだ。

「ぐぐぐッ」

京美はむせんだ。唇からあふれた水が白い頸からのどへとつたわり、胸まで濡らす。

「も、もういいわ」

「もっと飲め」

「いいわよ」



「もっと飲むんだ」

私は女の鼻をつまみ、強引に唇をひらかせた。執拗に水を流しこむ。イスに縛りつけられた京美は、半歩も逃げることはできないのだ。ごぼごぼという音をたてて、白いのどぼとけが上下する。

半分は口の外にこぼれたが、半分量はたしかに京美の胃のなかにはいった。

「いじわる。まるでキチガイだわ。なんのマネなの」

眉のあいだに苦しげな皺を寄せて、京美はにくにくしげに私をにらんだ。それまでは彼女にもまだ遊戯の気分であった。ジャズは鳴っているし、私の動作もあらくはなかったはずである。

だが、水責めの苦しさに彼女の目は私への怒りと抗議をあらわしていた。私は微笑のまま、無言で水差しを棚にもどした。京美のなめらかな腹部は、せわしげに呼吸し、いくらかの膨張を示していた。

「一時間、いや三十分の休憩だ」

私はベッドにひっくりかえった。まくらもとの週刊誌をとって、あおむけのままページをひらいた。

顔を横にするとちょうど水平の位置に、京美の腹部があえいでいる。私はやがて到来する場面を空想し目は週刊誌のマンガに泳がせた。

三十分もたたないうちに、せつなげなうめきが、京美の唇からこぼれはじめた。女は、もよおしてくると我慢ができないのだ。

「ああ、ね、縄を、解いて」

もじもじと下半身をうごかした。

「どうした」

私は、にやりしてといった。

「もう、ゆるして。縄を解いてよ」

「この遊戯をもうすこしつづけようじゃないか」

「ダメ。あたくし疲れたの。もうやめて」

唇から白い歯がでた。つらそうだ。

「そうしているうちにね、きみにもその縄の味がわかってくるんだ」

私は期待に胸をふくらませた。

「おねがい、ね、あの、トイレにいかせて」
とうとう京美はいった。

私はベッドに寝ころんだまま、もう黙っ

て京美のもだえをながめた。

「ひどいわ」

京美の表情に怒りが走った。

私は、ゆっくりと起きあがり、ベッドに腰かけた。すると、イスに縛りつけられた京美とむかいあう。私と京美との間は、わずか一メートルほだった。



「ぼくはね、きみの喜怒哀楽、すべての感情を見たいのだ。きみは美しいから、いつもとりすましている。いつでもだ。どんな時にもなにかの打算で笑顔や泣き顔をつくっているように思えてならない。だから、今夜はきみの本当の泣き顔を見たいのさ」

わざとゆっくり冷笑しながら、私はじろじろと軽蔑の視線で京美のからだじゅうをなめまわすのだ。

「やめてよ、もうこんないたずらは」

忍耐の限界が、次第に近づいてきているのだ。私にはそれが自分のことのようによくわかる。

白い下腹が、悲しげな緊張に光っていた。

「やめてとは、なにをやめるんだい。ぼくはきみに指一本触れてやしないよ」

私はせせら笑った。

京美は目をとじた。まぶたの皮膚がけいれんした。靴下で束ねられた髪の毛は、すこしずれたが、あいかわらずイスの背にくくりつけられている。

みじめな姿だ。これが町なかをきどって歩き、娘たちにあこがれの視線を浴びせられるファッションモデルだ。

6

「おねがいよ、トイレにいかせて」

かすかな歯ぎしりのような声だった。もうエキゾチックな美貌なものもなかった。

血の気を失い、蒼白な顔になっていた。

「かってにいきなよ」

残忍な快感に、私はひたっていた。

「悪趣味だわ、下劣だわ、最低よ、あなた、異常だわ。そんな人とは思わなかったわ!」

京美はののしり、憎悪の目が私に突きささった。

その罵声もまた、私には快感だった。

「大きな声をだすと、おなかによけいな力があるよ」

性

永年の経験と専門的研究

勃起力の不足・とても早い男性器が小さい方々
一、百円送金者に「性の悩み解消」「粹人に」の小冊子
子コンドーム二個その他性の参考刷りもの
一、五百円では、早漏者の福音クリム定価五〇〇円
「性愛技巧」の書冊一部その他性の参考刷りもの
一、千円では、勃起力を強める器具と永持する秘薬組合せと性の参考刷りもの

性器短少に真空プラスン器 クリム付

(こっそり使える) 一、五五〇円

代金着金次第送品・代理店希望者書面請う

個人名で密送・東京葛飾区本田中原町三五六

白水荘優性相談室・私書函葛飾局十九号

私は親切に忠告した。

期待の瞬間は、それからまもなくきた。

「ああ!」

京美の顎が、がくんとのけぞった。両肩の筋肉が、電気ショックをうけたように、ぴりりとけいれんした。

同時に、ほそくはげしい音色が漏れはじめた。

京美の唇はひらいたままこわばり、白い歯と、赤い舌のおののきが見えた。微笑を誘う音色だった。

イスがぬれはじめた。液体は腿から脛へとつたわり流れた。あとからあとから、したたり流れた。私は身をのりだし、いじわるく凝視した。

のどの奥から、京美はうめいた。

「ひどいわ、ひどい……」

京美は羞恥にまみれ、私は勝利に酔った。

ほそくはげしい音色は、次第に衰え、やがて静かに消えた。

「はは、あははは」

私は声をあげて笑った。

京美の顔面も、首すじも、胸までも屈辱のために赤く染まっていた。彼女はうなだれ、乳ぶさのさきをこきざみにふるわせていた。

「だいぶよごしたな。あとしまつをしなけりゃいかな」

私のなぶり責めは、まだ終わったわけではない。私は髪を縛ったナイロン靴下を解いた。

それから、京美のからだをイスから解きはなした。だが、うしろ手の縄目はそのままである。

「早くほめてよ」

すべては終了したと思った京美は、かすれた泣き声でさいそくした。

「まだだよ。粗相のあとしまつがのこっているよ」

よろよるとイスから立ちあがった京美の足を、私は背後から肩をおさえて床の上にひさまずかせた。

京美の目の前には、ぬれた溜りがあった。自分の放出した液体である。ほんのりとかおりをはなっていた。京美は唇をかみ、顔をそむけた。

「そら」

私は片手で女の首根っ子をおさえ、片手で髪の毛をつかんだ。

「あっ、なにするの！」

「こうするのさ」

私は京美の胸を床の上にねじ伏せ、その豊富な髪の毛で、濡れた溜

りをふきはじめた。

「ああ、ああ！」

悲痛な声をあげてもがいた。私は手をゆるめない。

これが私の、今夜最後の髪責めだった。肌に傷をつけず、女の自尊心を屈辱の地獄へ突き落とす責めだった。

少量のアンモニア分で髪の毛がいたむことはあるまい。女の黒髪をぞうきんがわりにして、私はふきそうじを終えた。

そして、ようやく長い間縛った縄を解いてやった。

両腕の自由を得た彼女は、こぶしを固めて、私になぐりかかった。

「早く濡れたやつをはきかえろよ」

「ばか！」

「腹がひえるぜ」

「いや！」

愛らしいげんこを、私は笑いながら胸にうけた。

わっと泣きだして、京美は床の上に身を投げた。裸の背中をゆすりあげて泣く。

「憎くっていいじめたんじゃないんだ。わかるかい。かわいいからさ。

これがぼくのほんとうの愛撫なんだ。今夜のきみは、まったくすばらしかったよ」

私はまるい肩に手をのせ、やさしくいたわった。

「いじわる」

京美は顔をあげ、私の胸のなかにとびこんできた。子供のように泣きじゃくるのだ。そんな京美を、私ははじめて、いとしいと思った。

濡れた髪の毛の異臭が、私の鼻さきにおった。

かけっぱなしのラジオは、深夜放送になっていた。

読者サロン



かびや先生に

毎号「風俗奇譚」を楽しく拝見しております。とくに最近「男責めの」写真が多いのはたいへん喜ばしい。

そこで少々、小生の希望を述べます。希望というより、疑問です。よろしく。

アメリカの宇宙テスト・パイロットは、厳重なホモ傾向の有無を調査されるそうですが、その訳を、かびや先生にでもお聞きしたい。

昨年の新聞に、イギリス軍隊で男色が増加している、という記事をみましたが、詳細を載せられたし。

ジョン・ガンサーの『アフリカの内幕』に、アラビア人に男色が多い旨ありますが、「アラ

ビア人とホモ」について、かびや先生のお話を読ませてほしい。某日本船長の航海記にも、スエズで乗ったアラビア人に若い船員が追いかける……の随筆記事がありました。ジイドもアフリカへ行って、少年と飲

を共にしたはずで、アラビアでは男色は死刑のほうですが。旧日本海軍で男色は多かったか少なかったかを知りたいと思

っています。その意味で、海軍のホモ小説もたまには載せてください。なんとか足穂氏ではありませんが、体格のいい白服の水兵や、そのおしりには、ちょっと魅力があったものです。

△大阪・一愛読者V

乗馬女性の写真を

谷貫太氏の「マゾヒストの手

紙」を毎号興味深く読んでいます。とくに7月号掲載の「柏井君の手記」は読みごたえのあるりっぱなものでした。「ジュリイと柏井君」的な内容のグラビアや口絵がほしいと思います。またサロンにあった馬化ファンのご意見には大賛成。ぜひ、乗馬女性の写真をとっていただきたいと思います。ただ、そのさいには、騎手の服装にはじゅうぶん注意し、高雅なものにしてください。

△東京・朝尾安志V

僕の禪雑感

先日、偶然に店頭で貴誌を発見し、禪一本の男性姿に感激しました。さっそくバックナンバ

ーをそろえました。どれを見てもみごとに禪姿と男責めばかりで、マニアとしてはこれ以上の喜びはありません。

また、貴誌で多くの同士を知り、僕のほかにこんな禪マニアの人がいるかと思うと、うれしくてたまりません。

僕は23歳の私鉄職員ですが、高校二年のとき、水泳の合宿ではじめて六尺禪をしめてから、いっぺんで禪マニアになり、も

う5年間も欠かしたことなく愛用しています。

股間を吊り、尻にくいこんでくる六尺禪の魅力は、本当に日本男子だけが味わえる最高の感激です。いくらパンツがはばをきかせる世の中でも、六尺禪の伝統は消えるものではありません。

僕は水泳用には赤禪を愛用していますが、日常はさらしの六尺禪を愛用、四六時ちゅう緊禪一番を忘れません。職場の風呂でも、町の銭湯でも、堂々と禪姿をみせびらかし、大鏡の前でゆうゆうと禪をしめかえますが禪一本の姿は、いつみても男らしくて、われながらほれぼれするようないい気持ちです。

僕は夏の間、家では禪一本でいるし、プールや海など人目の多いところで禪姿を見せびらかし、尻に禪のあとがはっきりと残るまで、からだを日に焼かせるのが好きです。自分でもなぜこんなにフンドシが好きなのかわかりませんが、禪と聞くだけで心がおどります。

今後またたくましい禪美フォトと禪縛りのグラビア、ならびに読み物をどしどし掲載してくだ

さい。△品川・六尺禪男V

サルマタ礼賛

茨城のY・T様、本誌5月号で、あなたのおっしゃっていたサルマタについては、小生も大賛成です。あのはき心地は、実に爽快で、弾力のあるフクラミも魅力的です。

しかし、あれは現在当地方では市販されておらず、入手が困難です。売っている店がありません。せひお知らせ願えませんか。小生もここ数年捜しておりますが、いまだに買うことができません。残念に思っています。△名古屋・Y・M生V

女に女を責めさせて

「風奇」「画報」を毎号愛読させていただいておりますが、希望やらお願いを申し上げます。毎号、同じような縛り方の写真ではマンネリ化する危険があります。そこで、サド・マゾのふたりの女性のプレイ、また、ふたりをいっしょに縛るなどの企画を、もっとたくさんおこなってください。願わくば、サド専門の女性に島崎ユカ、村上ユキ、西条さくら、水上涼子諸嬢のボ

リュームある肉体の顔、乳房、下腹部を思いきり痛めつけてもらいたいです。

また、ふたりの女性で、ひとりの女性を責めるのもよいと思います。

今までデュエットで縛る写真がありました。縛り方がゆるく不満です。もっとピッタリ密着させて、ギューギュー縛ってください。

これらの希望がかなえられたのは、画報第8集の「嗜虐二人のプレイ」でした。これは本当に私の希望にピッタリでした。今後ともこのような企画を切望しています。△横浜・無名氏V

禪こそ男の表徴

緊禪一番とは男が発奮した時のことばだが、きりりと締めた六尺禪は、それだけに男の姿として一番りっぱだといえないだろうか。股間をグイと締めあげりゅうりゅうと男のしるしを誇示し、盛りあがった尻にくい込む六尺禪の魅力こそ、男だけに許された独自の世界なのだ。禪は、この意味で、男を象徴づけるたったひとつの衣装であり、男の裸を飾る鮮烈な証拠であ

もあろう。切りたての六尺禪が浅黒い肌に映えてまぶしく輝いた時、男の四肢には力感があふれ、どんな困難にもぶつかって行く英気がからだじゅうから生まれてくるのだ。

日本男児だけが味わえる男の誇り——六尺禪を愛用する同志よ！ともに禪の歴史と伝統を守り、緊禪の誓いを結ぼうではないか！

△東京・六尺禪愛用生V

五十三歳の禪ファン

私は明治四十年生まれの老人（満五十三歳）ですが、皆様と同様、禪ファンのひとりです。昭和二年の徴兵検査以来、片時も六尺をはなしたことはありません。私は、泳ぎはできませんが、夏の房州の海水浴場を、六尺姿を求めてさまよい歩く始末です。

貴誌のお骨折りで、ぜひ六尺愛好会の集まりを開いてください。何をかいても出席します。これから中年男の六尺禪姿をたくさん載せてくださ

い、心から待っております。

す。△東京日本橋・G・N生V

芦立氏へお願い

毎号の芦立氏の連載、すばらしいと思います。息もつかせぬ責めの連続にのたうつ風早中尉の逞しい姿を思い浮かべて、早くも次号が待ち遠しいのです。さし絵では、風早中尉が、手をくぐられて、両足を棒しぼりにされた、後ろ姿のあの引き締まったからだの柔らかなような臀部が、すごく印象的です。

その他では、仰臥した姿が目に入りましたが、もっとからだの線を逞しく描いていただけたらと感じています。

それから、芦立氏にお願いし

二人だけが楽しむ大人の絵本？

秘められた名画と

禁じられた場面集

この場面をマネしないで下さい！

夜のムードにマッチした新形式の秘芸画入 千共 五〇〇円

▼カタログ切手30円封入申込の方に急送す

東京都世田谷局二十一号口 福寿会

ます。あの中の少佐のような壮年の人格も逞しきも、すべてその域に達した男の責め場にも、ぜひ誌面をさいてください。

女の味もすべて知りつくした壮年の男性が、女によって人もなげな凌辱を受ける場面をぜひお願いします。

一般に男の責めというと、少年か童貞の若い青年とかに決まっています。が、ぜひ、壮年の四十代の男性も多くおのせてくださるよう、お願いします。

グラビアなどでも、今まで一枚もそういうのは見当たりませんでした。が、ぜひ扱ってください。

△青森・竹川V

読者サロンをふやして

貴誌は全くすばらしい。画報とともに月二回の発刊に、読者は追いまくられる思いである。他誌が何年でも同じような女体被虐を繰り返しているなかに、断然貴誌が男責めを取り上げて月々に充実してゆく。もっとも女責めならK誌をはじめ他にいくらでもあるから、いまさら貴誌がそのあとを追ってもしかたなかろう。男責めに着眼された貴誌は全く賢明である。男責め

のフォトは他誌には全然ないし、記事もほとんどおどなりだから、貴誌のひとり舞台で、思い切って活躍してほしい。

幸いに、児玉氏をはじめよいモデルを多数擁しておられるから、モデルの体力のあらん限り、あらゆる被虐を見せてほしい。われわれ読者の衷心からの願いである。

それについて一つ望みたいのは、読者欄を拡張してもらいたいことである。二ページや四ページでなく、十ページでも二十ページでも、投書のある限り載せられたい。創作物と違って、読者の叫びには真実があり、情熱があり、読者の感情をゆるがすものがある。同じような記事でも、その人その人で訴える感情が違ふ、じょうずへたは別にして、公刊できる範囲なら、絵でも写真でもなんでも掲載してほしい。

われわれがいまだにK誌を捨て切れないうちは、読者通信欄の豊富さにひかれていたことである。どうか貴誌も読者の声をじゅうぶんに発表していただきたい。

△鎌倉・O・T生V

夏川絹子さんへ

サロンへ投稿したあなたの文を拝見しました。そして、今までの相手を交通事故でなくされたこと、ほんとうに寂しいことでしょう。お察しします。

僕も流腸には興味を抱いて、目下勉強中です。現在、30、50、100のガラス製、500、2千のイルリガートル、それに、自分で作った口のとろろが大好きな500ccのガラス製を持っております。

あなたは神奈川県、僕は東京です。から、そう離れているわけ

男性の悩みは マグキンで

☆性欲減少に！ 一回の御使用で心身ともに爽快
☆早漏防止に！ 取外す迄は完全保持目的を達す
☆インボに！ 使用後興奮状態になり満足を得

マグキンは磁力放射線を合法応用化した製品で性的不満は即時解消します。取付は簡単副作用なくそのまま歩行、入浴が出来る事は本器の特徴です

磁力即効回春器

パンフレット 送 0円
説明書 密 30円
要 30円

東京都中野区野方町二の一四九七の三
信光社 マグキン本舗

振替東京五一七二八番
電話東京(385)六五〇六番

八〇〇円(送料共)

代理店・取次店
募集中

女禪狂の夢

阿部様、あなたも私と同じようなご趣味を持っておられると知り、うれしくなりました。女相撲に関する記事は、このごろほうぼうで見うけられますが、

ふんどし一つの裸の女たちが刃をふるって血みどろになって命を的に争う様を描いたものはあまりみかけません。ひとつ、御誌の手で、ふんどし一つの裸女の血闘図絵の組み絵を企画してください。私の望むところは、次のような場面を組んで一連のものにしてほしいものです。

一、庭園（屋内でも可）の芝ふの上で白刃を抜き放って相対するふたりの裸女、ひとり髪を島田に結い娘風、白鉢巻きをしめて、緋のふんどしをしめ、一方は、髪は櫛巻きの姐御風で、やはり白鉢巻き、ふんどしは白いさらし木綿。

二、チョウチョウハッシと斬り合うふたり、ともに髪は乱れ、肌は二筋三筋、血の糸がみられる。双方とも必死のつばせり合い。

三、肩に一太刀浴びせられよろめく島田まげの娘、表情は無念そう。姐御の顔に、してやったりとの表情が浮かぶ。

四、地上に倒れた娘は半身を起こして白刃を突き出して必死の抵抗の状、肩の傷のほか、わき腹にも深傷をうけて苦悶の状それにさらに勝ち誇ったように

白刃をかざして斬りかかる裸の姐御。

五、ついに組みしかれ、今やトドメの刃を受けんとする赤ふんどしの娘、馬乗りになった姐御の顔に残忍な笑いが浮かんで、白刃を逆手に構えてトドメを刺さんとするところ。

六、トドメを刺して、無念な死体となり果てた娘のからだに片足をかけてみえを切る白ふんどしの姐御。返り血が所々に飛び、ふんどしや白鉢巻きにも点点とついている。髪は乱れて長く下に垂れている妖艶なふんどし姐御の姿態。

と、こういったものです。サド・マゾ・ホモなどの分野のみでなく、われわれのように無残絵狂の分野も、ぜひぜひ開拓してください。

ハ女禪狂・阿部野晴明V

一緒にプレイしたい

僕は29歳の男性です。

「風奇」を読み、「画風奇」を見て、同好の人の多いのに大いに気を強くしています。とくに禪と男性緊縛に異常なほどの興味をもち、女性には全然興味がありません。

僕も「愛禪会」をぜひ結成したいと思っています。賛成のかた（近くのかたでグループでもよい）がおられれば、明日からでも結成したい意志を持っています。

そして、プレイをしたり、撮影をしたりして、お互いの親しさを、ますますはかりたいものです。

僕はS・MのどちらでもOKです。

かえって、どちらかの一方的な傾向の持ち主より、相互にプレイできるほうが好きです。

そういう趣向のかたがいまいたら、ぜひお便りください。

この欄に住所、氏名をのせることは勇気がいりますが、僕はその勇気をふるい、同士と結び、グループ結成したさに、思いきって明記しました。

なお、僕をモデルにして写真をとりたいというかたがありましたが、ご一報ください。お便りは必ず封書で、責任と誠意のあるものを希望しています。また、S・Mの同性で、僕と同居したい方がありましたら、お互いに働くことを条件にご連絡ください。

くわしくは、おたよりいただいてからお返事させていただきます。ハ兵庫県宝塚市川面栄町八の十三・南 裕二V

同好の士よお便りを

はじめてお便りします。創刊号以来の読者で、猛烈な六尺禪愛好者です。十六歳のとき六尺に魅せられ以来、一日もかしたことがありません。もちろん銭湯へ行くにも堂々としていきます。また、冬でも素肌で六尺一つで寝ます。これが一番暖かく、健康にもよいように思えます。

日本男子に生まれて、六尺の締めぐあいを知らないひとは、最大の不幸です。

本誌でも最近では六尺愛好者がふえつつあるのを知って、心強く思い、禪会の結成が一日も早くらんことを願っています。

なお、茨木のY・T様、ご愛好のサルマタ、小生もぜひ入手したいと思っています。お世話いただけたい品です。お最後に、同好のかたがたにお手紙ください。左記のところにハ鎌倉市小町八三、新生書房内・安達二郎V



風俗奇譚

△在庫のお知らせ▽

既刊号のご注文は、現金書留、振替
為替が確実で、ご便利でございます。

△36年度V七月号(一五〇円)

多色口絵II赤いハイヒール……
グラビヤII縛悦の姿態・魅虐の
世界・池畔哀愁・庭前の被縛・
足取りの姿勢・柱に結かれて・
とらわれの小鳥・足責めのポ
ーズ・背中の羞恥・受縛の白
い人魚・女学生サディスチン・
うしろ方形縛り・木馬上の六
尺姿・ポイント白禪……
特集II責めさいなまれる女と男
お銀母娘しぼり……
乗馬服を着てのプレイ……
夫のお仕置きがうれしい……
艶麗緊縛さし絵集……
女体を責める……
アブチックな世界のプライパ
シー……
サロン・マソキスチカ……
悦虐の果てに……
ホモの窓……
わがいとしき友に……
ほも禁秘帖⑨都会の生態……
マゾヒストの手紙から⑫……

浣腸ふたりプレイの記……
ノーマルとアブノーマルは紙一
重……
私の好きな被虐の見せ物……
ハイヒールのワンダ……
女装愛好の部屋……
女装講座・女の肌をつくる……
続・ある完全女装……
イギリス近着フオート……
犬を連れた若奥さん……
白と黒の交感……
小説・炎帝廟③玄武章……
連載・虐殺指令……
小説・悦虐の彷徨③……

六月号(一五〇円)

多色口絵II美しきいけにえ……
グラビヤII妍を競う艶縛姿態集
しごきで縛られて・寝乱れ縛
姿・全裸に縄が・腰かけしば
り・開脚の姿勢・障子の前で・
タイルは冷たい・縄の悶悦・
縛られたボリユーム・男の縛
りプレイ・踏んづけ海老責め・
六尺と縄の魅惑……

特集II女装に陶醉する男たち

ああ女装の夜はふけて……
男性の心の底に眠る女装願望
女装する男たち……
女装のあたしを誘惑した男……
女装花ひらくとき……
限らない女装へのあこがれ……
私の女装のお師匠さん……
私はこんな人が欲しい！……
女装愛好の部屋……
ある完全女装……
マゾヒストの手紙から⑪……
ふたりのマゾヒストの女……
サロン・マソキスチカ……
ホモの窓……
ホモ禁秘帳⑧……
フアンタジック・ショート
夜行動物……
女性の残虐なる責め場集……
怪奇人形館の秘密と恐怖……
浣湯のある風景……
豊満な白い尻の魅力……
女体に加えるウナギ責め……
小説・虐殺指令……
小説・炎帝廟②……
小説・悦虐の彷徨②背徳の夜……
五月号(一五〇円)
多色口絵IIムチをふるう女
グラビヤIIふたり縛り・制服は
嘆く・狼籍の一瞬前・荒縄が
肌を噛む・どうされるのかし
ら？・悦虐の時が来る・羞恥
のなかから・首輪につながら
て・稲藁のかげで・恥ずかし

くて・縛られた男・ムチ打つ

特集II鞭に憑かれた男と女

鞭よ、愛しておくれ……
鞭打の魅惑……
鞭は生きている……
だれでも持っている鞭打への
関心……
ムチと女と男……
ムチで鍛えられた女……
あたしの鞭打の獲物……
ムチと皮紐の一夜……
ふくよかな処女の尻に……
愛と復讐と鞭と……
6人の受難の女……
灼熱地獄・冷水地獄・生きて
いる的・ふたりさらし……
ほも禁秘帳⑦狂崇の対象……
同性マゾヒストとの会話……
ヌートリクス画廊……
乗馬マニア9人の女たち……
ヌートリクス・コーナー……
女騎手強制調教所……
サロン・マソキスチカ……
ホモの窓……
女装愛好の部屋……
あたしは肉体まで女になった……
猫責め地獄……
小説・炎帝廟①白虎章……
小説・悦虐の彷徨①被虐の女……
四月号(一四〇円)
多色口絵II赤い靴のドミナ……
グラビヤII太鼓しぼり・木にく
くられて・荒小屋を背に・石

の階段は冷たい・古雅な中庭
で・緊縛悶姿・早く叩いて・
冷蔵庫の上に・シャツも破れ
て・ひじ曲げの拘束・棒背負
い・双丘の魅惑……
特集・東西古今刑罰残酷物語……
刑罰にひそむサディズム……
世界残酷刑罰の生態……
刑罰と拷問のいろいろ……
江戸封建社会の刑罰……
昔の刑罰は残酷だった……
花井お梅の獄中日記……
申城残酷記……
マダレナ殉教秘史……
尻打ちの世界泰西名画集……
責められる女の姿態……
晴雨流女のしほり方・伊藤晴雨
マゾヒストの手紙から⑩……
鼻の穴がピコピコうごく……
ほも禁秘帳⑥……
Hの中のSの形態……
サロン・マソキスチカ……
ホモの窓・女装愛好の部屋……
私がマニヤになったのは……
私のいけにえになった処女……
鞭打尻腸小説・鞭魔ロベール……
三月号 (一四〇円)
多色口絵・雪の露台・村上ユキ
グラビア・雪の女・雪にころが
されて・妖艶切腹の図・制服
椅子責め・裸身ながながと……
特集・マゾヒストの世界……
マゾ小説・でんすけ地獄……
赤禪斬り込み隊……

絵物語・毛皮を着たヴィナス
K氏自虐帳(告白小説)……
妖異の世界……
乳房・尻・頭髮フェチズム
サディストの使用したムチ……
職業サディストの女……
女体責め絵集……
グラインダー地獄・また裂き
変型責め・車責め・納屋の首
吊り・あやつり責め……
江馬美久・田上恵子の傑作画集
ほも禁秘帳⑤妖美なる野郎たち
私の女装告白体験記……
私の女装半生記……
二月号 (一四〇円)
多色口絵・縛愁・囚花・制服は
悲しからずや・乳房をかむ縄
ハリツケ縛り・緊縛・拘束の
写真と責め絵特集……
妖美なる女体責め絵集……
三人のソドミア……
鞭打尻腸小説傑作特選集……
一月号 (一四〇円)
多色口絵・血を好む大公妃
責め絵集・空中緊縛ほか……
色刷写真・ふたりプレイ・オン
パレード・レザー・フェチシ
ズムほか……
グラビア・妖美吊り艶姿・ころ
がし責め・ハリツケとさか立
ち・閨怨のポーズほか……
特集・ソドミアとレスボス……
ハ35年V度十二月号(一四〇円)
特集・伊藤晴雨責面写真自選集

多色口絵・野ざらし……
責め絵スケッチ集……
晴雨女体緊縛写真集……
伊藤晴雨さんのプロフィール……
晴雨さんの雪責め……
グラビア・石段の緊縛裸女・め
しい鳥・石垣の前で・長じゅ
ばんも乱れて……
十一月号 (一四〇円)
多色口絵・水地獄……土井啓子
女体責め絵・丸太小屋の惨・岩
場ハリツケ・竹しほり責め・
射撃のマト・ほか……
グラビア・艶麗無残・はなやか
な足吊り・犬の首輪のブラジ
ヤー・吊るし責め他……
特集・戦争残酷の記録……
十月号 (一四〇円)
多色口絵・女体知恵の輪……
色刷写真・美しき囚虜・あかり
も淡くほか……
グラビア・白衣の佳人・長椅子
と女・白衣も乱れて……
特集・サディストの群れ……
九月号 (一四〇円)

多色口絵・空中鞭打……
原色写真・徹頭の裸女・つるさ
れた白魚……
グラビア・落花の景・裸女無残
二人しほり……
特集・女装する男たち……
八月号 (一四〇円)
多色口絵・受縛二重奏……
口絵・荒れ小屋の残酷……
特集・レスビアンとの生感……
七月号 (一四〇円)
多色口絵・落花図……
グラビア・恋慕受縛・姐上の白
魚・肌もあちわに……
特集・食人症……
六月号 (一三〇円)
多色口絵・痛ましき祭壇……
グラビア・樹間のニンフ・密室
の呪縛・足づり裸女……
特集・フェチズム(淫物症)……
夏の臨時増刊号(一四〇円)
法悦の特集五月号(一四〇円)
悦の特集四月号(一四〇円)
春の特集三月号(一四〇円)
艶妖の特集二月号(一四〇円)
創刊臨時特集号(売り切れ)

風俗奇譚 (B5版)

5月臨時増刊号

定価 二八〇円

大判の魅力をフルに生かし、マゾヒ
ストの天国、同性愛の法悦境を特集
した超豪華本!





画報風俗奇譚

〈在庫のお知らせ〉

各号とも在庫が少なくなつてまいりました。お申し込みは、お早めに、現金書留か振替が確実です。

△36年分△

画報風俗奇譚・第14集

七月号 (一八〇円)

表紙Ⅱローマンバス………
 色彩写真Ⅱ岩上の縛女・波につ
 けられてハモデル・なぎさ純
 子・真咲みどり▽
 色刷口絵Ⅱ墓場の線香責めハ田
 上恵子・え▽
 グラビア①Ⅱ(男性悦虐ポーズ
 集)鎖しぼり・つんのめった
 禪男・はだかのポーズ・ふた
 りしぼり・木馬責めのあとで
 ・首と足と一緒に・どんとこ
 い・腰かけるハモデル・霧島
 茂樹・児玉幹也・御堂紀久・
 市川正二▽
 グラビア②Ⅱ(悦虐の肌くらべ)
 縄のデュエット・悦悶のポ
 ーズ・寝巻き乱れて・タヌキし

画報風俗奇譚

4月臨時増刊号

伊藤晴雨追悼特集号として放つ
 迫真の緊縛フォト一五〇ポーズ
 と東西古今秘画の豪華集大成!

定価 二八〇円

ばり・首をひっぱる・ある陶
 酔の境・岩の上で・魅縛3態・
 手ひもしぼり・木馬は痛い・
 野の縛姿・静かなる仕置き・
 裸身恥ずかし・女のレスリン
 グ・T字型に………
 画集Ⅱ男の世界ハビル・ヤック
 レーンほか▽
 緊縛写真が生んだ幻想 女を責
 める画集Ⅱしぶき責め・海に
 つける・木馬責め・エイヤコ
 ラ・追いつめられて・階段の
 責め・野原の杭に………

画報風俗奇譚・第13集

六月号 (一八〇円)

ルイス・アピラとその作品………
 処刑無頼………
 美少年はオレがいたたくぜ………
 緊縛協会の奇妙なフアッション
 ショウ………
 ムチをふるう売春婦………
 諸国責めばなし④………
 江戸城大奥の無残地獄………
 ニートリクス・フォト・ギャラ
 リー………
 表紙Ⅱ快楽の果てに………
 色彩写真Ⅱ首を責める………ハモ
 デル▽高月まゆみ・児玉幹也
 色刷口絵Ⅱ乳房突き・ハシゴ責
 めハ田上恵子・え▽
 グラビアⅡ木馬責めの少女・入
 り組んだポーズ・おびえてい
 る・艶美なる切腹・細い紐の
 模様・受縛の置き物・つい立
 て責め・ハシゴしぼり・長々
 と縛られて・艶縛のひと・恥
 ずかしい姿態・緊縛の背面・
 緊縛の正面・木馬に乗る女①
 木馬に乗る女②・ころがされ
 て・半裸のゴム紐縛り・白い
 縛魚・青い愁いびと・縛悦の

画報風俗奇譚・第12集

五月号 (一八〇円)

時間・縄が呼ぶ陶酔・次は水
 責め………
 ルイス・アピラシリーズⅡ鞭を
 もつ女・縛られた女3態………
 男性緊縛悦虐のポーズ集ハグラ
 ビア▽Ⅱのしかかる・あたし
 の犬・縄と足の加虐・二つの
 性向・我はマゾヒスト・男の
 魅力・縛られ男・足引きの責
 め………
 凄艶責め絵4人集Ⅱクサリをま
 とってハ田上恵子▽・谷川づ
 け・カマ抱きハ古正英生▽・美
 しき人間椅子・人魚責めハ江
 馬美久▽・背中を焼くローソ
 クハ小田利美▽………
 妖美な展覧会Ⅱ便器のそばの少
 女・うがいする男・女の夢ほか
 サド女性に縛られた女装男………
 諸国責めばなし③………
 復讐される女たち………
 お仕置きされる美少女………
 表紙Ⅱバイロス秘画………
 色彩写真Ⅱ自己陶醉・ふたり愉
 悦・ひとり燃えてハモデル・
 真咲みどり・なぎさ純子▽………
 グラビアⅡ緊縛二重奏・セーラ

服乱れて・制服落花・長火鉢
の側で・草はらで・スタンド
の上に・魅縛の白魚・碁盤い
じめ……………ほか
妖美の花園に咲く姿態Ⅱ縄の妖
美・柱しほり2態・柵に置か
れて・靴のまま……………ほか
女装紳士録②……………ほか
ヌートリクス画廊……………ほか

特選絵物語Ⅱ驕れる美少女ドラ
グ・黒眼鏡の野獣……………ほか
グエンドリンの降服と冒険……………ほか
諸国責めばなし②……………ほか
パラダイス・イン・スペインキング
風交わりな展覧会Ⅱ秘密の申し
込み・レスボスの花園・奴隷
市場・ムチを持つ女・男たち
を支配する女・サディストの
夢・淫楽殺人ハアルベエル・
モロオ・藤田嗣治、ルネ・サン
メルシ、ジョン・ウイリー、
F・セケス、K・ヴァンゲン、
デックマンV……………ほか

画報風俗奇譚・第11集

四月号（一八〇円）

表紙Ⅱパイロス秘画……………ほか
色彩写真Ⅱ林の中で・祠の前で・
崖の上で・稲叢の前でハモデ
ル・島崎ユカ・村上ユキ・牧



アンナ・ほかV……………ほか
グラビヤⅡ石どうろう縛り・静
かなる受縛・縛られた寝姿・
格子に縛られて・エビまがい・
機械の側ではか……………ほか
ヌートリクス画廊……………ほか
アゾンの会の男性征服……………ほか
諸国責めばなし……………ほか
もう一つの世界……………ほか

画報風俗奇譚・第10集

三月号（一八〇円）

表紙Ⅱハレムのサルタン……………ほか
色彩写真Ⅱ艶縛クワルテット……………ほか
グラビヤⅡコタツに乗せる・雪
中縛女・戸外は雪と氷……………ほか
尻打ち天国・男の尻打ちに興ず
る女・ボクサーと女トレナー
Ⅰ・スペインキング……………ほか

画報風俗奇譚・第9集

二月号（一八〇円）

表紙Ⅱボタン止めの長靴の女……………ほか
色彩口絵Ⅱ肌もあらわに、ほか
グラビヤⅡなまめかしき縛女・
全裸のいけにえ……………ほか
女性刑罰史絵巻・海老責め無残
かきなわとりしめ……………ほか

画報風俗奇譚・第8集

一月号（一八〇円）

表紙Ⅱモルヒネ……………ほか
ステファン
グラビヤⅡ盛装無残・妖美のベ
ッド・古風な花・腹切り悶悦

35年分

画報風俗奇譚・第7集

十二月号（売れ切れ）

表紙Ⅱステンドグラス……………ほか

画報風俗奇譚・第6集

十一月号（一八〇円）

多色口絵Ⅱ石橋の上にほか……………ほか

画報風俗奇譚

1月臨時増刊号

アブチック名画を特集とし、ほ
か読者垂涎の女性緊縛写真多数
をグラビヤに収載する迫力版

定価 二八〇円

第1グラビヤⅡ壁上の呪縛ほか
第2グラビヤⅡはなやかな縛虐
第3グラビヤⅡ華麗なりハリツ
ケ・受縛の表裏ほか……………ほか
責め絵集Ⅱ吊ってくすぐる・ア
リ責め・丸太流し……………ほか

画報風俗奇譚・第5集

十月号（一八〇円）

多色写真とグラビヤフォト多数
奇妙な絵画展覧会……………ほか

画報風俗奇譚・第4集

九月号（売れ切れ）

画報風俗奇譚・秘蔵版

（二〇〇円）

多色刷り写真と多色刷り口絵……………ほか
責め絵画集と緊縛写真集……………ほか

画報風俗奇譚・第2集

（一八〇円）

多色口絵写真と口絵写真集……………ほか
グラビヤ鮮烈緊縛写真集……………ほか



代理部のご案内

コレクション用の格調ある緊縛フォトを分譲しております
新発表もございますから、どしどしお申し込みください。

ご注文は現金書留か振替が替が便利です、確実にございます。
東京都千代田区神田神保町一ノ三五
文献資料刊行会代理部あて ご注文ください。

好評モデルの

緊縛ア・ラ・カルト



村上ユキ特選フォト

非情な責め苦と哀艶の抒情譜
☆全裸うしろ手縛り(略M1)
三枚一組 三〇〇円

☆お灸灼熱地獄
三枚一組 (略M2) 三〇〇円

☆本格縛り責め三態(略M3)
三枚一組 三〇〇円

☆豊麗切腹
三枚一組 (略M5) 三〇〇円

☆閨房股間縛り
三枚一組 (略M6) 三〇〇円

☆凄絶雪責め
三枚一組 (略M7) 三〇〇円

西牧えり子悦虐縛り

全裸にむかれた可憐な乙女!

☆乙女の祈り 三枚一組 三〇〇円 (略N3)

☆全裸いたぶり 三枚一組 (略N5) 三〇〇円

☆鼻責め嗜虐 三枚一組 (略N6) 三〇〇円

☆哀花受難 三枚一組 (略N7) 三〇〇円

☆制服の少女虐め 三枚一組 (略N8) 三〇〇円

☆悦虐の園の女 三枚一組 (略N9) 三〇〇円

西条さくら豊艶緊縛

はちきれんばかりの狂宴地獄
☆乳房地獄責め 三枚一組 (略S1) 三〇〇円

☆腹部への嗜虐 三枚一組 (略S2) 三〇〇円

☆悶姿の祭壇 三枚一組 (略S3) 三〇〇円

風早由美子妖美緊縛

大型グラママーの本格責め苦!
☆樹間のニンフ 三枚一組 (略H1) 三〇〇円

☆嘆きのセーラー服(略H2)

舟木喜代子BG緊縛

可憐なBGスタイルのプレイ
☆大の字縛り 三枚一組 (略F5) 三〇〇円

☆ハダカ男馬のり 三枚一組 (略F6) 三〇〇円

☆豊艶乳房しばり 三枚一組 (略F7) 三〇〇円

高月まゆみ野外緊縛

荒涼たる砂浜に転がる姿態!
☆砂浜荒縄しばり 三枚一組 (略T5) 三〇〇円

☆あばらやの恋縄 三枚一組 (略T6) 三〇〇円

☆碁盤責め三態 三枚一組 (略T7) 三〇〇円

☆野外十字架縛り 三枚一組 (略T8) 三〇〇円

☆犬になった女 三枚一組 (略T9) 三〇〇円

☆車中の拘束 三枚一組 (略T10) 三〇〇円

妍を競う三人艶縛集

けんらんと競う艶縛の姿態!
☆肌くらべ全裸縛り(略Q1)

本誌独占! 男性緊縛の魅惑!



☆禪姿二人プレイ 三枚一組 (略B18) 三〇〇円

☆禪男一人プレイ 三枚一組 (略B19) 三〇〇円

☆禪姿ふたりプレイ 三枚一組 (略B20) 三〇〇円

☆全裸男性美決定版 三枚一組 (略B21) 三〇〇円

☆禪姿一人緊縛 三枚一組 (略B22) 三〇〇円

☆青竹十文字背負い 三枚一組 (略B23) 三〇〇円

☆禪股間ポーズ3態 三枚一組 (略B24) 三〇〇円

☆変形縛り責め 三枚一組 (略B25) 三〇〇円

☆純白の禪姿 三枚一組 (略B26) 三〇〇円

浅黒い肌に映えた六尺姿!

☆中国服悦虐フोट(略N1)
三枚一組 三〇〇円
☆いたぶられる姑娘(略N2)

☆女囚緊縛ポーズ(略A6)
三枚一組 三〇〇円

江戸時代の刑罰資料をもとに
女囚縛りを再現した哀歎の譜
☆野外縛り(略A7)
三枚一組 三〇〇円

森閑とした雑木林の中にくり
ひろげられた羞恥の緊縛女性
☆妻絶切腹六態(略A8)
六枚一組 八〇〇円

豊満な腹部への嗜虐、噴出す
る鮮血、女体悶絶の凄惨集！
☆全裸緊縛ポーズ(略A9)
三枚一組 三〇〇円

はじめて公開した全裸凄絶の
女の妖しき悦虐姿態の決定版
☆臀部責め(略A10)
三枚一組 三〇〇円

豊満な臀部への加虐のムチが
とび悶える肉を針が突き刺す
☆水責め・湯責め(略A11)
三枚一組 三〇〇円

全裸女性をあくことなくバス
ルームに、古池に漬ける責める
☆本格鞭打プレイ(略A12)
三枚一組 三〇〇円

人間本能の嗜虐の極致！本誌
のみがなし得た恐怖の迫真感
☆豊満なる緊縛女体(略C6)
三枚一組 三〇〇円

三枚一組 三〇〇円
☆死のベルトの誘い(略H3)
三枚一組 三〇〇円

超グラママーのはちきれんばか
りの肉体に食い込む縄の陶酔
☆海老責め地獄(略C7)
三枚一組 三〇〇円

死の寸前のエビ責めに絶叫す
る決定的瞬間の緊縛ポーズ！
☆眼帯の女(略C8)
三枚一組 三〇〇円

不完全の美、片目をふさがれ
た女の魅惑、眼帯のもつ妖美
迫真の緊縛悦虐フोट



☆さるぐつわ艶姿(略C9)
三枚一組 三〇〇円

無残にも呼吸をせきとめられ
た責め苦の中の妖艶の美女！
☆制服の乙女縛り(略C10)
三枚一組 三〇〇円

むしりとられたセーラー服の
乙女が悶える緊縛の青春譜！
☆裸女棒しばり(略C11)
三枚一組 三〇〇円

三枚一組 三〇〇円
☆花ひらく受縛天国(XQ2)
三枚一組 三〇〇円

荒れけずりの棒が縄の痛さを
増し、白肌に鮮血がにじむ！
☆密室の呪縛(略D6)
三枚一組 三〇〇円

呪われた女の宿命、のたうつ
裸女にせまる悪魔の鋭い牙！
☆全裸変形地獄図(略D7)
三枚一組 三〇〇円

うごめく女体を密室で責め抜
くサド・マニアの無残絵巻！
☆無残二人しばり(略D8)
三枚一組 三〇〇円

背中合わせの美女ふたり、縛
られ投げ出された陶酔の極致
☆浣腸悦虐フोट(略D10)
三枚一組 三〇〇円

もだえにもだえる浣腸の嗜虐
は浣腸マニア待望の決定版！
☆力つきた処女(略P1)
三枚一組 三〇〇円

縛られ責められ、ついに力つ
きた哀れなユカのおですがた
☆蛇が白肌を(略P2)
三枚一組 三〇〇円

やわ肌を無気味に締めつける
蛇の感触が怪しい陶酔を誘う
☆迫るローソクの炎(略P3)
三枚一組 三〇〇円

とらわれて、縛られた女体に
せまるローソク責めの恐怖！

☆しいたげられる禪男(略B27)
三枚一組 三〇〇円
禪一本の強烈な嗜虐の花！

羞恥にもだえ、責めにうめく
妖艶全裸の美女の地獄図絵！
☆晴れ着もあらわに(略P5)
三枚一組 三〇〇円

無残に踏みつけられた花のあ
ですがた、凄艶姿態の決定版
☆股裂き三人選(略P6)
三枚一組 三〇〇円

あられもない格好に股を裂か
れて、責められる美女三人！
☆血みどりのリンチ(略X8)
五枚一組 五〇〇円

縛られ、吊り下げられ、あげ
くの果てに鋭利な白刃の餌食
☆悦虐の表情(略X9)
三枚一組 三〇〇円

悦虐の極致をそのまま表情に
とらえた無上の陶酔の美しさ
☆本格吊るし責め(略X10)
三枚一組 三〇〇円

妖艶艶麗、まさに晴雨翁えが
く本格的吊り責め絵をしのぐ
☆女王さまとしもべ(略W1)
三枚一組 三〇〇円

女王さまのお気持のまに
奉仕するのが、下僕の役目！
☆ドミナのムチ(略W2)
三枚一組 三〇〇円

ピシリッ、ドミナのムチが男
に容赦なく打ち下ろされる！

今月の新作発表写真



★好評の代理部分売の写真に、こんど左のような新作をつくりました。

▼**浣腸陶酔ポーズ** 略D 11V
風呂場で全裸の女性が浣腸されてもだえのたうつ姿態 (三枚一組) 三〇〇〇円

▼**古風な緊縛** 略M 8V
妖艶な長じゅばん姿で緊縛される村上ユキの悶姿 (三枚一組) 三〇〇〇円

▼**椅子の上の無残** 略M 9V
あわれ結かれた身を椅子の上でくねらせる村上ユキ (三枚一組) 三〇〇〇円

▼**棒責め立ち姿** 略N 10V
ハリツケの姿勢で棒でえぐられる無残なり西牧えり (三枚一組) 三〇〇〇円

▼**棒責めの伏姿** 略N 11V
エビ型に縛られた西牧えり (三枚一組) 三〇〇〇円

▼**ゴムひもの責め** 略S 4V
豊満な肢体にからむゴムひものに苦悩するは西条さくら (三枚一組) 三〇〇〇円

▼**裸身は嘆く** 略U 1V
島崎ユカの全裸の肢体に縄が巻きついていたい (三枚一組) 三〇〇〇円

▼**窓ぎわの残虐** 略I 1V
はちきれんばかりのボリウムを責められる井神せい子 (三枚一組) 三〇〇〇円

☆新作男性責め写真

▼**三角木馬責め** 略B 28V
(三枚一組) 三〇〇〇円

▼**竹を背負って** 略B 29V
(三枚一組) 三〇〇〇円

▼**禪姿開脚の図** 略B 30V
(三枚一組) 三〇〇〇円

▼**全裸の男** 略B 31V
(三枚一組) 三〇〇〇円

▼**変わり海老責め** 略B 32V
(三枚一組) 三〇〇〇円

▼**緊縛悦虐境** 略B 33V
(三枚一組) 三〇〇〇円

▼**踏んづけられて** 略B 34V
(三枚一組) 三〇〇〇円

▼**男を責める男** 略B 35V
(三枚一組) 三〇〇〇円

▼**おれのエモノ** 略B 36V
(三枚一組) 三〇〇〇円

■編集室より
今度、たいへん珍しい写真を手に入れた。中世のドイツの拷問刑罰の器具と、ハンブルグの変態娼家の内幕である。ともに入手したのはハンブルグで、ある知人の厄介になったものである。だが、これは、他の類誌のゼッタイ手のつけられないものと自負している。また、それだけに、貴重なものといいたい。
本誌の編集について、いろいろな注文が読者諸氏から寄せられてくる。それぞれもつともなことばかりだ。たとえば、マゾの特集をしるとか、男責めを主にしろとかいったたぐいなのだが、やはり、どうしても個人の好みに偏していることが多い。愛読者はサドを好む人もいれば、マゾの傾向の人もいる。ホモもあれば、禪マニアもいる。そういった面を様に満足させるということは、どんなにしても不可能なことである。それをどの程度で、まんべんなくなでいくかというところに編集のポイントをおいているつもりである。この点ご了承いただきたい。

■月ぎめご購読の方法

風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (一冊) 一五〇円

三カ月 (三冊) 四五〇円

六カ月 (六冊) 九〇〇円

一カ年 (十二冊) 一八〇〇円

画報・風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (一冊) 一八〇円

三カ月 (三冊) 五四〇円

六カ月 (六冊) 一〇八〇円

一カ年 (十二冊) 二一六〇円

★本社に直接ご注文の場合は、現金書留か振替が確実で、ご便利です。ただし、振替は日時がかりますゆえ、あらかじめご了承ください。

風俗奇譚 八月号

定価一五〇円

昭和三十六年七月二十日印刷
昭和三十六年八月一日発行

編集人 高倉 一
印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一ノ三五
発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番
電話東京(291)二四三〇番